出雲市の文化財報告32

県道出雲三刀屋線上塩冶工区道路改良工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書１

上塩冶横穴墓群　第40支群

2016年9月

島根県出雲県土整備事務所
出 雲 市 教 育 委 員 会

出雲市の文化財報告 32

上塩冶横穴墓群　第40支群

二〇一六年九月
島根県出雲県土整備事務所
出雲市教育委員会

出雲市の文化財報告32

県道出雲三刀屋線上塩冶工区道路改良工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書１

上塩冶横穴墓群　第40支群

2016年9月

島根県出雲県土整備事務所
出 雲 市 教 育 委 員 会

上塩冶横穴墓群第40支群全景（西より）

序

本書は，島根県出雲県土整備事務所から依頼を受けて，平成24～26年（2012～2014）度に実施した県道出雲三刀屋線上塩冶工区道路改良工事予定地内に所在する上塩冶横穴墓群の発掘調査の成果を記録したものです。

遺跡の所在する出雲市上塩冶町は，市内でも有数の文化財の集中地域であり，数多くの歴史的文化遺産が眠っています。中でも，上塩冶横穴墓群は総数230基を超える山陰地域最大級の横穴墓群であり，その文化財的な価値は非常に高いものです。

今回の調査では，上塩冶横穴墓群において新たに発見された第40支群を対象とし，上塩冶横穴墓群内の支群において過去最大数となる36基の横穴墓を確認しました。刳抜式家形石棺をはじめとする多様な埋葬施設，装身具・武具・馬具・土器等多くの副葬品も発見されており，貴重な成果を得ることができました。

本書が地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査と報告書作成にあたりご協力いただきました地元住民の皆様や，関係者の皆様に厚く御礼申しあげます。

平成28年（2016）9月

出雲市教育委員会

教育長　槇　野　信　幸

例　　言

1. 本書は，平成24年（2012）度から平成26年（2014）度にかけて出雲市教育委員会が実施した，県道出雲三刀屋線上塩冶工区道路改良工事に伴う上塩冶横穴墓群（島根県遺跡番号 W138，出雲市遺跡番号 F20），の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査は下記の体制，期間で実施した。

調査地及び調査面積　島根県出雲市上塩冶町2985-1外　約1,650㎡（対象事業地約2,650㎡）

調査期間　平成24年8月1日～平成26年5月30日

調査体制　＜平成24年度＞　現地調査

事務局　花谷　浩（出雲市文化環境部学芸調整官）
福間　浩（同　文化財課課長）

調査員　宍道年弘（同　課長補佐兼埋蔵文化財1係係長）
原　賢二（同　主任・調査担当者）

調査補助員　伊藤貴夫（同　臨時職員）

発掘作業員　奥田利晃，柳楽　晃，金森光雄，花田増男，川上晴夫，星野篤史，今岡勇二，勝部成美，今若健一，和田佳昭，永井瑞枝，原　洋美

調査指導　今岡一三（島根県教育庁文化財課企画幹）

＜平成25年度＞　現地調査

事務局　花谷　浩（出雲市文化環境部学芸調整官）
玉木良夫（同　文化財課課長）
宍道年弘（同　課長補佐兼埋蔵文化財1係係長）

調査員　曽田辰雄（同　主任・調査担当者）
須賀照隆（同　主任）

調査補助員　伊藤貴夫，水町亮平，黒目利江（同　臨時職員）

整理作業員　荒木恵理子，吹野初子，山田明智子

発掘作業員　奥田利晃，柳楽　晃，金森光雄，花田増男，川上晴夫，星野篤史，今岡勇二，永井瑞枝，原　洋美，伊藤　伸，岡田光司，勝部育朗，大輝正人，前島利輝，多久野明雄，阿部智子，原　章一，高橋　悟，和田安夫，手銭　勝，岩田　剛，松井笙吾，高根常代，板垣サチ子，日野幹朗，川下秀憲，高根　豊

発掘調査支援　株式会社トーワエンジニアリング（発掘作業員雇用等を業務委託）

調査指導　角田徳幸（島根県教育庁文化財課企画幹）

＜平成26年度＞　現地調査・報告書作成

事務局　花谷　浩（出雲市文化環境部学芸調整官）
玉木良夫（同　文化財課課長）

宍道年弘（同　課長補佐兼埋蔵文化財1係係長）

調査員　須賀照隆（同　主任・調査担当者）

調査補助員　伊藤貴夫，水町亮平，黒目利江，小松原智明，今若豊実（同　臨時職員）

整理作業員　荒木恵理子，吹野初子，飯國陽子，吉村香織，鵜口令子

調査指導　深田　浩（島根県教育庁文化財課企画幹）

＜平成27年度＞　報告書作成

事務局　花谷　浩（出雲市市民文化部学芸調整官）

玉木良夫（同　文化財課課長）※～6月

佐藤隆夫（同　文化財課課長）※7月～

宍道年弘（同　課長補佐兼埋蔵文化財1係係長）

調査員　須賀照隆（同　主任・調査担当者）

調査補助員　伊藤貴夫，今若豊実，足立敏郎（同　臨時職員）

整理作業員　荒木恵理子，飯國陽子，鵜口令子

＜平成28年度＞　報告書作成

事務局　花谷　浩（出雲市市民文化部学芸調整官）

佐藤隆夫（同　文化財課課長）

宍道年弘（同　課長補佐兼埋蔵文化財1係係長）

調査員　須賀照隆（同　主任・調査担当者）

調査補助員　伊藤貴夫，今若豊実，足立敏郎（同　臨時職員）

整理作業員　荒木恵理子，飯國陽子，鵜口令子

3. 本書の編集･執筆は職員の協力を得て，須賀が行ったが，第6章については田村朋美（奈良文化財研究所）様，株式会社吉田生物研究所より玉稿を賜った。

4. 本書に掲載した遺物及び実測図，写真は出雲市文化財課が保管している。

5. 出土品の内，金属製品は株式会社吉田生物研究所に保存処理・分析を委託し，ガラス製品は奈良文化財研究所に分析を依頼した。

6. 本書における須恵器編年は下記の文献による。

大谷晃二　1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　島根考古学会

大谷晃二　2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市埋蔵文化財調査報告書第8集　平田市教育委員会

7. 調査・整理にあたっては，以下の方々から指導，助言を得た。記して感謝申しあげます（敬称略）。

大谷晃二（島根県立松江北高等学校），中村唯史（島根県立三瓶自然館），西尾克己（大田市教育委員会石見銀山課），原田敏照（島根県教育庁文化財課），宮代栄一（朝日新聞社），桃崎祐輔（福岡大学）

8. 本書で使用した方位は，座標北を示す。座標は，世界測地系第Ⅲ系に基づくものである。標高は海抜高を示す。

9. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

SX －不明遺構，ST －横穴墓以外の墓，SK －土坑，SD －溝

10. 上塩冶横穴墓群第40支群の遺構名称を調査概報時点から以下のとおり変更した。

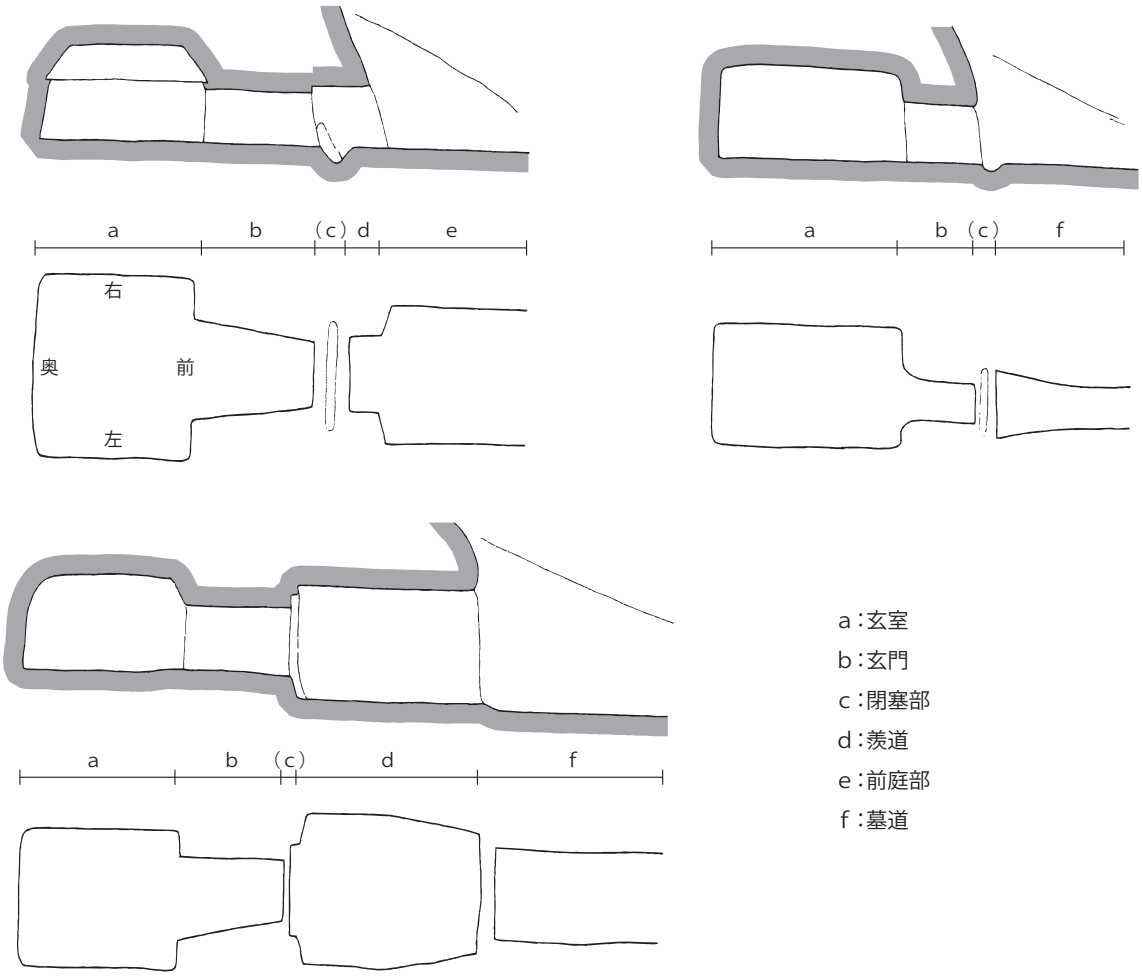
横穴墓番号：１～７（変更なし），34→8，８～15→9～16，17（変更なし），16→18，
18～33→19～34号横穴墓

その他遺構番号：H24：SX1，02→ST1・2　H25・26：SK01～05→ST3～7・SK8，
SD01→SD9，SX01→SX10

11. 以下は，本書で使用する横穴墓の遺構内名称，形態名称である。

当該横穴墓群の横穴墓における各部位の名称は，下図のとおりである。

天井形態については，奥壁と側壁の境界が明瞭で奥壁が垂直ぎみに立ち上がり，横断面が半円形を呈するものをアーチ形天井とする。玄室壁面に軒線があり，天井部を平坦に近いかまぼこ形に加工したものを平形天井とする。玄室壁面に軒線があり，天井部を家形に加工するものを家形天井とする。なお，今回の調査においては天井部の大部分が崩壊したものであったため，寄棟，切妻，平入，妻入の区分はしていない。



横穴墓各部名称

本文目次

第１章　調査に至る経緯と経過 …… 1

第１節　調査に至る経緯 …… 1

第２節　経　過 …… 1

第２章　遺跡の位置と環境 …… 3

第１節　地理的環境 …… 3

第２節　歴史的環境 …… 3

第３章　過去の調査 …… 7

第４章　調査の概要 …… 11

第５章　遺構と遺物 …… 15

第１節　横穴墓群 …… 15

第２節　その他の遺構 …… 124

第３節　遺構外出土遺物 …… 130

第６章　自然科学分析 …… 134

第１節　上塩冶横穴墓群第40支群出土ガラス小玉の調査 …… 134

第２節　上塩冶横穴墓群第40支群出土金属製品 …… 146

第７章　総　括 …… 151

第１節　形態と時期 …… 151

第２節　埋葬施設 …… 153

第３節　小支群の動向 …… 157

第８章　結　語 …… 160

遺物観察表 …… 161

挿図目次

第１図　県道出雲三刀屋線上塩冶工区に係る調査地位置図（1:400000・1:7500）……２
第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1:100000）……４
第３図　上塩冶横穴墓群と周辺の後期古墳分布図（1:7500）……９
第４図　調査区周辺図（1:1000）……11
第５図　遺構配置図（1:200）……12
第６図　遺構配置図（1:250）……14
第７図　横穴墓配置図（1:400）……15
第８図　１号横穴墓遺構図（1:40・1:20）……16
第９図　１号横穴墓土層図（1:40）……17
第10図　１号横穴墓遺物実測図１（1:3）……17
第11図　１号横穴墓遺物実測図２（1:4・1:2）……18
第12図　２号横穴墓遺構図（1:40）……20
第13図　２号横穴墓土層図（1:40）……21
第14図　２号横穴墓遺物実測図（1:3）……21
第15図　３号横穴墓遺構図・土層図（1:40）……22
第16図　３号横穴墓遺物実測図（1:3）……22
第17図　４号横穴墓遺構図・土層図（1:40）……24
第18図　４号横穴墓遺物実測図（1:3）……25
第19図　５号横穴墓遺構図（1:40）……26
第20図　５号横穴墓玄室横断面写真……27
第21図　５号横穴墓土層図（1:40）……27
第22図　５号横穴墓遺物実測図（1:3・1:2）……27
第23図　６号横穴墓遺構図１（1:40）……30
第24図　６号横穴墓遺構図２・土層図（1:40）……31
第25図　６号横穴墓遺物実測図（1:3・1:2）……32
第26図　７号横穴墓遺構図１（1:40）……33
第27図　７号横穴墓遺構図２・土層図（1:40）……34
第28図　７号横穴墓玄室内遺物出土状況（1:20）……34
第29図　７号横穴墓遺物実測図（1:3・1:2）……35
第30図　８号横穴墓遺構図・土層図（1:40）……37
第31図　８号横穴墓玄室横断面写真……38
第32図　８号横穴墓遺物実測図（1:3）……38
第33図　９号横穴墓遺構図（1:40）……39
第34図　９号横穴墓土層図（1:40）……40
第35図　９号横穴墓遺物実測図（1:3）……41
第36図　10号横穴墓遺構図１（1:40）……42
第37図　10号横穴墓遺構図２・土層図（1:40）……43
第38図　10号横穴墓遺物実測図（1:3・1:2）……44
第39図　11～13号横穴墓配置図（1:80）……45
第40図　11号横穴墓遺構図１（1:40）……46
第41図　11号横穴墓遺構図２・土層図（1:40）……47
第42図　11号横穴墓遺物実測図（1:3）……47
第43図　12号横穴墓遺構図（1:40）……48
第44図　12号横穴墓土層図（1:40）……49
第45図　12号横穴墓遺物実測図１（1:3）……49
第46図　12号横穴墓遺物実測図２（1:4）……50
第47図　13号横穴墓遺構図１（1:40）……52
第48図　13号横穴墓遺構図２・土層図（1:40）……53
第49図　13号横穴墓遺物実測図（1:3・1:2）……54
第50図　14号横穴墓遺構図（1:40）……55
第51図　14・15号横穴墓土層図（1:40）……56
第52図　15号横穴墓遺構図（1:40）……58
第53図　15号横穴墓遺物実測図（1:3）……59
第54図　16号横穴墓遺構図１（1:40）……60
第55図　16号横穴墓遺構図２・土層図（1:40）……61
第56図　16号横穴墓遺物実測図（1:3）……62
第57図　17号横穴墓遺構図・土層図（1:40）……63
第58図　18号横穴墓遺構図・土層図（1:40）……64
第59図　18号横穴墓遺物実測図（1:3）……64
第60図　35・36号横穴墓検出状況（1:40）……66
第61図　19号横穴墓遺構図・土層図（1:40）……67
第62図　20号横穴墓遺構図１（1:40・1:20）……68
第63図　20号横穴墓遺構図２・土層図（1:40）……69
第64図　20号横穴墓遺物実測図１（1:3・1:4）……70
第65図　20号横穴墓遺物実測図２（1:2）……71
第66図　21号横穴墓遺構図・土層図（1:40・1:20）……72
第67図　21号横穴墓遺物実測図（1:2）……73
第68図　22号横穴墓遺構図（1:40）……75
第69図　22号横穴墓土層図（1:40）……76
第70図　22号横穴墓遺物実測図（1:3）……77
第71図　23号横穴墓遺構図・土層図（1:40）……78
第72図　23号横穴墓遺物実測図（1:3・1:2）……79
第73図　24号横穴墓遺構図（1:40）……80
第74図　24号横穴墓土層図（1:40）……81
第75図　24号横穴墓遺物実測図（1:3・1:2）……82
第76図　25号横穴墓遺構図（1:40・1:20）……83
第77図　25号横穴墓土層図（1:40）……84
第78図　25号横穴墓遺物実測図（1:3・1:4）……85
第79図　26号横穴墓遺構図１（1:40）……86
第80図　26号横穴墓遺構図２・土層図（1:40）……87

第81図　26号横穴墓遺物実測図１（1:3）……89
第82図　26号横穴墓遺物実測図２（1:3）……90
第83図　26号横穴墓遺物実測図３（1:6）……91
第84図　26号横穴墓遺物実測図４（1:2・1:4）……92
第85図　26号横穴墓遺物実測図５（1:1・1:2）……93
第86図　27号横穴墓遺構図１（1:40）……94
第87図　27号横穴墓遺構図２・土層図（1:40）……95
第88図　27号横穴墓石棺復元図（1:20）……96
第89図　27号横穴墓遺物実測図（1:3・1:2）……97
第90図　28号横穴墓遺構図（1:40）……98
第91図　28号横穴墓土層図（1:40）……99
第92図　28号横穴墓遺物実測図１（1:3・1:4）…… 100
第93図　28号横穴墓遺物実測図２（1:2・1:1）…… 101
第94図　29号横穴墓遺構図（1:40）…… 103
第95図　29号横穴墓土層図（1:40）…… 104
第96図　29号横穴墓埋葬施設復元図（1:40）…… 104
第97図　29号横穴墓遺物実測図（1:3・1:2）…… 105
第98図　30号横穴墓遺構図（1:40）…… 107
第99図　30号横穴墓土層図（1:40）…… 108
第100図　30号横穴墓遺物実測図（1:3）…… 109
第101図　31号横穴墓遺構図（1:40）…… 110
第102図　31号横穴墓土層図（1:40）…… 111
第103図　31号横穴墓遺物実測図（1:3）…… 111
第104図　32号横穴墓遺構図・土層図（1:40）…… 113
第105図　32号横穴墓遺物実測図（1:3・1:2）…… 114
第106図　33号横穴墓遺構図１（1:40）…… 115
第107図　33号横穴墓遺構図２・土層図（1:40）…… 116
第108図　33号横穴墓石棺実測図（1:20）…… 117
第109図　33号横穴墓遺物実測図１（1:3・1:2）…… 118
第110図　33号横穴墓遺物実測図２（1:6）…… 119
第111図　33号横穴墓遺物実測図３（1:6）…… 120
第112図　34号横穴墓遺構図（1:40）…… 121
第113図　34号横穴墓土層図（1:40）…… 122
第114図　34号横穴墓遺物実測図（1:3）…… 122
第115図　ピット群周辺遺構配置図（1:100）…… 124
第116図　ST1～7遺構図・土層図（1:40）…… 125
第117図　SK ８，SD ９遺構図（1:40）…… 126
第118図　ST １・５遺物実測図（1:1・1:2）…… 126
第119図　SX10遺構図・土層図（1:40）…… 127
第120図　SX10遺物実測図（1:4・1:2）…… 128
第121図　遺構外出土遺物実測図１（1:3）…… 130
第122図　遺構外出土遺物実測図２（1:3）…… 131
第123図　遺構外出土遺物実測図３（1:3・1:2・1:1）…… 132
第124図　上塩冶横穴墓群第40支群出土の
ガラス小玉（倍率不同）…… 135
第125図　各種製作技法（左：引き伸ばし法 No207，中：巻き付け法 No.354，右：鋳型法 No.220）…… 139
第126図　ガラス小玉の CR 画像 …… 139
第127図　ガラス小玉の AR 画像 …… 139
第128図　カリガラスグループの CaO-Al_2O_3含有量
による細分 …… 140
第129図　ソーダガラスグループの細分
（上：MgO-K_2O，下：CaO-Al_2O_3）…… 142
第130図　No.225の拡大 CR 画像 …… 142
第131図　No.35耳環…… 147
第132図　No.192耳環 …… 148
第133図　No.94耳環…… 148
第134図　No.196歩揺 …… 149
第135図　番外金薄片 …… 149
第136図　横穴墓配置図（1:400）…… 151
第137図　横穴墓変遷図（1:120）…… 154
第138図　埋葬施設模式図 …… 156

挿 表 目 次

表１　上塩冶横穴墓群支群一覧……8
表２　蛍光 X 線分析結果 …… 136
表３　資料表…… 146
表４　出土遺物成分分析結果一覧…… 147
表５　横穴墓主要要素一覧表…… 152
表６　上塩冶横穴墓群第40支群横穴墓一覧…… 159
表７　出土土器観察表…… 162
表８　出土玉類観察表…… 172
表９　出土金属器観察表…… 173

図版目次

巻頭カラー　上塩冶横穴墓群第40支群全景（西より）

カラー図版１　33号横穴墓
カラー図版２　20号横穴墓
26号横穴墓
カラー図版３　27号横穴墓
28号横穴墓
カラー図版４　横穴墓出土大刀
26号横穴墓出土歩揺
カラー図版５　横穴墓出土耳環ほか
カラー図版６　出土玉類（ガラス玉類撮影：奈良文化財研究所）
カラー図版７　26号横穴墓出土須恵器

図版１　調査前全景（南西より）
調査前全景（調査地丘陵尾根より西を望む）
図版２　７～34号横穴墓（南西より）
１～６号横穴墓（南より）
図版３　１号横穴墓
１号横穴墓玄室内遺物出土状況
１号横穴墓玄室
図版４　２号横穴墓
３号横穴墓
４号横穴墓
５号横穴墓
図版５　６号横穴墓
６号横穴墓閉塞状況
６号横穴墓玄室
図版６　７～21号横穴墓（南より）
図版７　７号横穴墓
７号横穴墓閉塞状況
７号横穴墓玄室
図版８　８号横穴墓
８号横穴墓玄室内遺物出土状況
８号横穴墓玄室
図版９　９号横穴墓
９号横穴墓墓道遺物出土状況・閉塞状況
９号横穴墓玄室
図版10　10号横穴墓
10号横穴墓閉塞状況
10号横穴墓玄室
図版11　11号横穴墓
11号横穴墓墓道遺物出土状況・閉塞状況
11号横穴墓玄室
図版12　12号横穴墓
12号横穴墓玄室
図版13　13号横穴墓
13号横穴墓前庭遺物出土状況・閉塞状況
13号横穴墓玄室（左が奥壁）
図版14　14・15号横穴墓
15号横穴墓閉塞石検出状況
15号横穴墓玄室
図版15　16号横穴墓
16号横穴墓閉塞石検出状況
16号横穴墓玄室
図版16　17号横穴墓
18号横穴墓玄室
19号横穴墓
図版17　20号横穴墓
20号横穴墓閉塞状況
20号横穴墓玄室
図版18　21号横穴墓
21号横穴墓玄室
22～34号横穴墓（西より）
図版19　22号横穴墓
22号横穴墓墓道遺物出土状況
22号横穴墓玄室
図版20　23号横穴墓
23号横穴墓玄室
24号横穴墓
24号横穴墓玄室
図版21　25号横穴墓
25号横穴墓玄室（左上が奥壁）
図版22　26号横穴墓
26号横穴墓閉塞状況
26号横穴墓玄室
図版23　26号横穴墓閉塞石最下段
26号横穴墓墓道遺物出土状況
26号横穴墓墓道上遺物出土状況
図版24　27号横穴墓
27号横穴墓閉塞状況
27号横穴墓玄室
図版25　28号横穴墓

28号横穴墓閉塞石検出状況
28号横穴墓玄室
図版26　29号横穴墓
29号横穴墓閉塞石検出状況
29号横穴墓玄室
図版27　30号横穴墓（玄門右壁崩落）
30号横穴墓墓道遺物出土状況・閉塞石検出状況
30号横穴墓玄室・玄門閉塞石
30号横穴墓玄室内遺物出土状況
図版28　31号横穴墓
31号横穴墓墓道遺物出土状況（上方が玄門）
31号横穴墓玄室
図版29　32号横穴墓
33号横穴墓
図版30　33号横穴墓閉塞状況－１
33号横穴墓閉塞状況－２
33号横穴墓玄室
図版31　33号横穴墓石棺－１
33号横穴墓石棺－２
図版32　33号横穴墓石棺背面遺物出土状況
33号横穴墓玄室内土層堆積状況
図版33　34号横穴墓
34号横穴墓玄室
35(奥)・36(手前）号横穴墓検出状況（東より）
35(手前)・36(奥）号横穴墓検出状況（西より）
図版34　ピット群（西より）
ＳＴ１（東より）
ＳＴ２（左)・３（右）土層堆積状況（西より）
ＳＴ４（南より）
ＳＴ５（左)・６（右）（南より）
ＳＴ７（南西より）
ＳＫ８（南西より）
ＳＤ９（西より）
図版35　ＳＸ10（南西より）
ＳＸ10溝内遺物出土状況
ＳＸ10溝内土層堆積状況
図版36　１号横穴墓出土土器
２号横穴墓出土土器
３号横穴墓出土土器
４号横穴墓出土土器
図版37　５号横穴墓出土土器
６号横穴墓出土土器
７号横穴墓出土土器－１
図版38　７号横穴墓出土土器－２
８号横穴墓出土土器
９号横穴墓出土土器－１
図版39　９号横穴墓出土土器－２
10号横穴墓出土土器
11号横穴墓出土土器
図版40　12・13号横穴墓出土土器（98のみ12号横穴墓）
図版41　15号横穴墓出土土器
16号横穴墓出土土器
18号横穴墓出土土器
図版42　20号横穴墓出土土器
22号横穴墓出土土器－１
図版43　22号横穴墓出土土器－２
23号横穴墓出土土器
24号横穴墓出土土器
図版44　25号横穴墓出土土器
26号横穴墓出土土器－１
図版45　26号横穴墓出土土器－２
図版46　26号横穴墓出土土器－３
27号横穴墓出土土器
図版47　28号横穴墓出土土器
29号横穴墓出土土器－１
図版48　29号横穴墓出土土器－２
30号横穴墓出土土器
図版49　31号横穴墓出土土器
32号横穴墓出土土器
図版50　33号横穴墓出土土器－１
図版51　33号横穴墓出土土器－２
34号横穴墓出土土器
図版52　遺構外出土土器－１
図版53　遺構外出土土器－２
図版54　出土金属器－１
図版55　出土金属器－２
図版56　出土金属器―３
出土金属器―４
図版57　出土金属器―５
出土金属器―６
図版58　金属器Ｘ線写真－１
図版59　金属器Ｘ線写真－２

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯（第１図）

県道出雲三刀屋線は出雲市と雲南市を結ぶ主要地方道であり，同上塩冶工区道路改良工事は，島根県出雲県土整備事務所により計画されたものである。その事業地が，周知の埋蔵文化財包蔵地「上塩冶横穴墓群」の範囲内に及ぶことから，事業主体である島根県出雲県土整備事務所と出雲市文化財課で協議を重ね，平成24年（2012）8月より本発掘調査を実施することが決定した。

調査は開発事業の進捗にあわせ，事業地の西方より断続的に実施することとなり，平成24～ 26年度にかけては約2,650㎡の事業地を対象に第40支群の発掘調査を，平成27・28年度には約1,900㎡の事業地を対象に第３支群の発掘調査を実施している。本報告書は，この平成24～ 26年（2012～ 2014）度に実施された上塩冶横穴墓群第40支群の発掘調査成果をまとめたものである。

第２節　経　過

上塩冶横穴墓群第40支群は，平成24年5月に実施した試掘確認調査により新たに発見された支群である。本発掘調査は，平成24年８月１日～平成25年１月24日，平成25年５月23日～平成26年５月30日の２期に分けて実施した。

また，調査期間中の平成24年12月22日と平成25年10月26日には発掘調査現地説明会を実施し，それぞれ約110名，約160名の一般参加者に調査成果を公開している。

調査後に島根県教育委員会との協議を行った結果，調査の原因となった主要地方道出雲三刀屋線上塩冶工区道路改良工事は公共性が高く計画変更も困難であることから，遺跡を記録保存に留めることはやむを得ないとの判断に至った。

調査に関連する主な文化財保護法上の文書（平成24年～ 26年）

平成24年（2012）

４月１日　「埋蔵文化財発掘の通知について」事業者より市教委経由で県教委へ
７月24日　「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委より県教委へ
７月30日　「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」県教委より市教委経由で事業者へ

平成25年（2013）

１月25日　「主要地方道出雲三刀屋線上塩冶工区社会資本整備事業総合交付金（改良）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委より県教委へ
「遺跡の取り扱いについて（回答）」県教委より市教委へ
５月16日　「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委より県教委へ

平成26年（2014）

４月１日　「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委より県教委へ

５月30日　「埋蔵物発見届」市教委より出雲警察署へ

５月30日　「埋蔵文化財保管証」市教委より県教委へ

５月30日　「主要地方道出雲三刀屋線上塩冶工区社会資本整備事業総合交付金（改良）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（Ⅰ区－２，Ⅱ区ほか）に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委より県教委へ

６月３日　「遺跡の取り扱いについて（回答）」県教委より市教委へ

９月26日　「埋蔵物の文化財認定及び帰属について」県教委より市教委へ

第１図　県道出雲三刀屋線上塩冶工区に係る調査地位置図（1:400000・1:7500）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

上塩冶横穴墓群は出雲市上塩冶町地内に所在する。ＪＲ出雲市駅の南南東約２㎞の丘陵上に位置し，東西約１km，南北約1.5kmの範囲に約230穴の横穴墓が確認されている。

出雲平野は，南を中国山地と北を島根半島に挟まれた，日本海から宍道湖西岸まで東西約20kmにわたる県内最大の沖積平野である。出雲平野西側の日本海沿岸部には砂丘が南北に伸びている。平野を形成した二大河川，斐伊川と神戸川がそれぞれ中国山地から宍道湖と日本海に注いでいる。遺跡の位置は，神戸川が中国山地から出雲平野へ流れ込む出口の右岸をなす丘陵地にあたる。

上塩冶横穴墓群が築かれた古墳時代後期から終末期頃の出雲平野は，斐伊川の本流と神戸川は共に西流して『出雲国風土記』に記す「神門水海」に注ぎ，宍道湖の西岸は現在より更に西にあって，湖面は大きく広がっていた。現在のように斐伊川本流が東流し，神戸川が直接日本海に注ぐようになったのは江戸時代以降のことである。

第２節　歴史的環境（第２図）

１　縄文・弥生時代

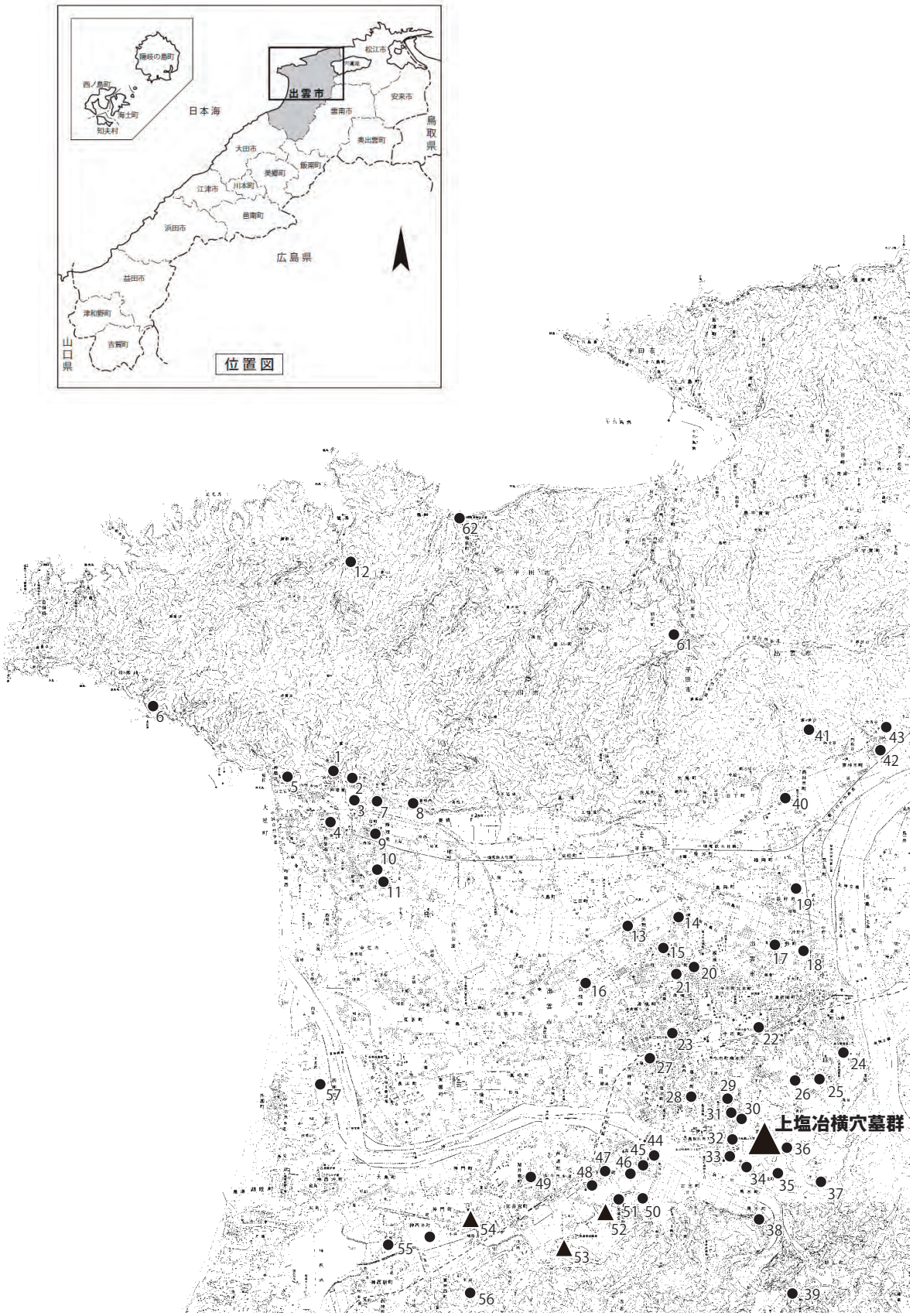
出雲平野における遺跡の初現は縄文時代早期である。平野北西端の山麓に所在する菱根遺跡（8）や平野西端の砂丘下に所在する上長浜貝塚（57）などが知られている。後期から晩期になると，三田谷Ⅰ遺跡（34）や後谷遺跡（66）など，平野南部の丘陵下でも多くの遺跡が営まれ，平野中央部の矢野遺跡（13）などでも遺物が確認されるようになる。

弥生時代には，前期に平野部の拠点集落となる矢野遺跡（13）が成立し，中期から後期にかけて平野部の集落が急速に発達する。また，特に注目される遺跡として，中期に大量の青銅器が出土した荒神谷遺跡（70）や加茂岩倉遺跡（73）が，後期に「王墓」とされる大規模な四隅突出型墳丘墓が築かれた西谷墳墓群（24）がある。

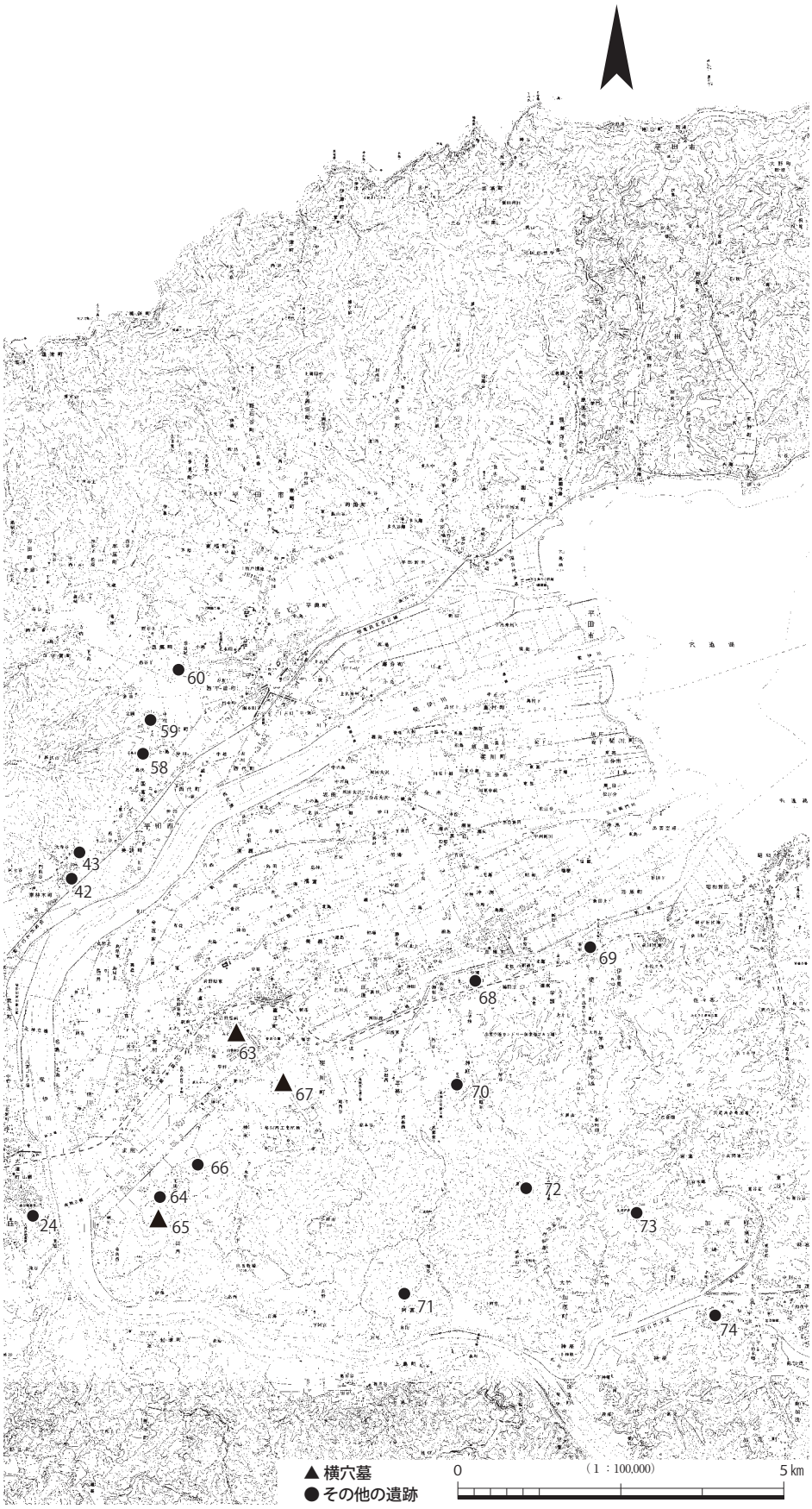
２　古墳時代

古墳時代に入ると，出雲平野の集落は神戸川流域の古志本郷遺跡（44）や下古志遺跡（47）などで集落の廃絶，縮小化が顕著となり，平野全体を見ても集落数の減少傾向が見られる。その後，中・後期には再び営まれる集落のほか，新たに集落が形成されるものも出現するが，弥生時代のような拠点的な集落の存在は明確でない。

古墳については，前期に西谷７号墳（24），大寺１号墳（43），山地古墳（55）などが，中期から後期初頭には北光寺古墳（56），神庭岩船山古墳（68）などが知られるが，北光寺古墳を除き大型古墳は確認されていない。後期後半になると古墳の数が激増する。特に，神門川両岸の有力古墳群はその中



第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1:100000）



1　出雲大社境内遺跡
2　真名井銅戈出土地
3　五反配遺跡
4　鹿蔵山遺跡
5　奉納山経塚
6　ひろげ遺跡
7　修理免本郷遺跡
8　菱根遺跡
9　原山遺跡
10　南原遺跡
11　中分貝塚
12　鷺銅山
13　矢野遺跡
14　大塚遺跡
15　小山遺跡
16　白枝荒神遺跡
17　中野美保遺跡
18　中野清水遺跡
19　荻杼古墓
20　姫原西遺跡
21　蔵小路西遺跡
22　今市大念寺古墳
23　海上遺跡
24　西谷墳墓群
25　長者原廃寺
26　菅沢古墓
27　天神遺跡
28　神門寺境内廃寺
29　角田遺跡・宮松遺跡
30　築山遺跡・築山古墳群
31　上塩冶築山古墳
32　上塩冶地蔵山古墳
33　半分古墳
34　三田谷I遺跡・三田谷古墳群
35　光明寺古墳群
36　大井谷古墳
37　大井谷II遺跡
38　小坂古墳・刈山古墳群
39　朝山古墓
40　山持遺跡
41　鳶ケ巣城跡
42　青木遺跡
43　大寺1号墳
44　古志本郷遺跡
45　大梶古墳
46　田畑遺跡
47　下古志遺跡
48　宝塚古墳
49　知井宮多聞院遺跡
50　放レ山古墳
51　妙蓮寺山古墳
52　地蔵堂横穴墓群
53　深田谷横穴墓
54　神門横穴墓群
55　山地古墳
56　北光寺古墳
57　上長浜貝塚
58　上島古墳
59　国富中村古墳
60　西西郷廃寺
61　鰐淵寺
62　猪目洞窟遺跡
63　平野横穴墓群
64　出西小丸古墳
65　山ノ奥横穴墓群
66　後谷遺跡
67　杉沢横穴墓群
68　神庭岩船山古墳
69　軍原古墳
70　荒神谷遺跡
71　天寺平廃寺
72　高瀬城跡
73　加茂岩倉遺跡
74　神原神社古墳

でも際立つものである。神戸川右岸では今市大念寺古墳（22），上塩冶築山古墳（31），上塩冶地蔵山古墳（32）といった県内屈指の首長墳が継続して築かれ，神戸川左岸でも宝塚古墳（48），放レ山古墳（50），妙蓮寺山古墳（51）など，それらに次ぐ位置づけの古墳が築かれるようになった。

横穴墓については，後期後半以降に盛んに造られるようになり，出雲平野周辺の横穴墓群の数は，平野縁辺部を中心に50遺跡を超える。出雲平野東部の代表的な横穴墓群としては，斐伊川右岸の平野横穴墓群（63），山ノ奥横穴墓群（65）など，20基以上の横穴墓からなる横穴墓群がある。出雲平野西部の代表的な横穴墓群としては，神戸川右岸の上塩冶横穴墓群のほか，神戸川左岸の神門横穴墓群（54）がある。神門横穴墓群は，123基以上の横穴墓からなる上塩冶横穴墓に次ぐ規模の大横穴墓群である。出雲平野周辺の横穴墓群は，数基～30基程度の小規模な群をなすものがほとんどであり，100基を超える横穴墓からなる上塩冶横穴墓群と神門横穴墓群は，その中でも傑出した規模の２大横穴墓群となっている。

また，上塩冶横穴墓群が造営されはじめた後期後半以降，遺跡の立地する丘陵上及びその隣接地では，前述の上塩冶築山古墳，上塩冶地蔵山古墳といった傑出した首長墓のほか，築山古墳群（30）や三田谷古墳群（34）など，中小古墳も数多く築造されており，大型古墳，中小古墳，横穴墓が一体的に存在する広域な墓域を形成している点で注目される。

３　奈良時代

奈良時代の遺跡としては，特に『出雲国風土記』記載の官衙や寺院などとの関連遺跡が注目される。官衙としては出雲郡家との関連が指摘されている後谷遺跡（66），神門郡家との関連が指摘されている古志本郷遺跡（44）などが知られる。寺院としては，朝山新造院の可能性が指摘される神門寺境内廃寺（28），河内郷新造院の可能性が指摘される天寺平廃寺（71），沼田郷新造院と考えられている西西郷廃寺（60）などがある。また，注目される墳墓として光明寺３号墓（35），小坂古墳（38），菅沢古墓（26），朝山古墓（39）といった火葬骨を納める石製骨蔵器を持つ墳墓があげられ，神戸川両岸の丘陵地を中心に分布している。

以上のように，出雲平野周辺地域には縄文時代以降数多くの遺跡が築かれており，その中でも神戸川両岸には古墳時代後期以降，地域を代表する古墳，官衙跡，仏教関連遺跡など重要な遺跡が集中している。上塩冶横穴墓群も神戸川右岸の丘陵地上に立地する遺跡であり，この地域最大規模の横穴墓群として歴史的に大きく位置づけられるものである。

〔参考文献〕

出雲市教育委員会　1995『小浜山横穴墓群（神門横穴墓群第10支群）』十間川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

出雲市教育委員会　1997『遺跡が語る古代の出雲』

出雲市教育委員会ほか　2009『築山遺跡Ⅳ』県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　出雲市の文化財報告６

山陰横穴墓研究会　1997『第7回山陰横穴墓調査検討会　出雲の横穴墓―その型式・変遷・地域性―』

第３章　過去の調査

上塩冶横穴墓群における最初の調査は昭和28～30年（1953～1955）に門脇俊彦氏や池田満雄氏によって実施された分布調査である。遺跡が公に知られるようになったのは昭和31年（1956）のことである。門脇俊彦氏が『私たちの考古学』第８号にこれらの成果を「大井谷横穴群」（第２・４～６・８・10・12・17支群），「アオゴシ横穴群」（第３支群），「膳ヶ谷横穴群」（第19支群）として紹介され（門脇1956），同年池田満雄氏が『出雲市の文化財』第１集にその概要を記された（池田1956）。また，昭和30年（1955）には美多実氏によるエーゲ横穴群（現在の第６支群）の発掘調査も実施されている（門脇1980）。この時点では10カ所（支群）約30基が確認されていたのみである。

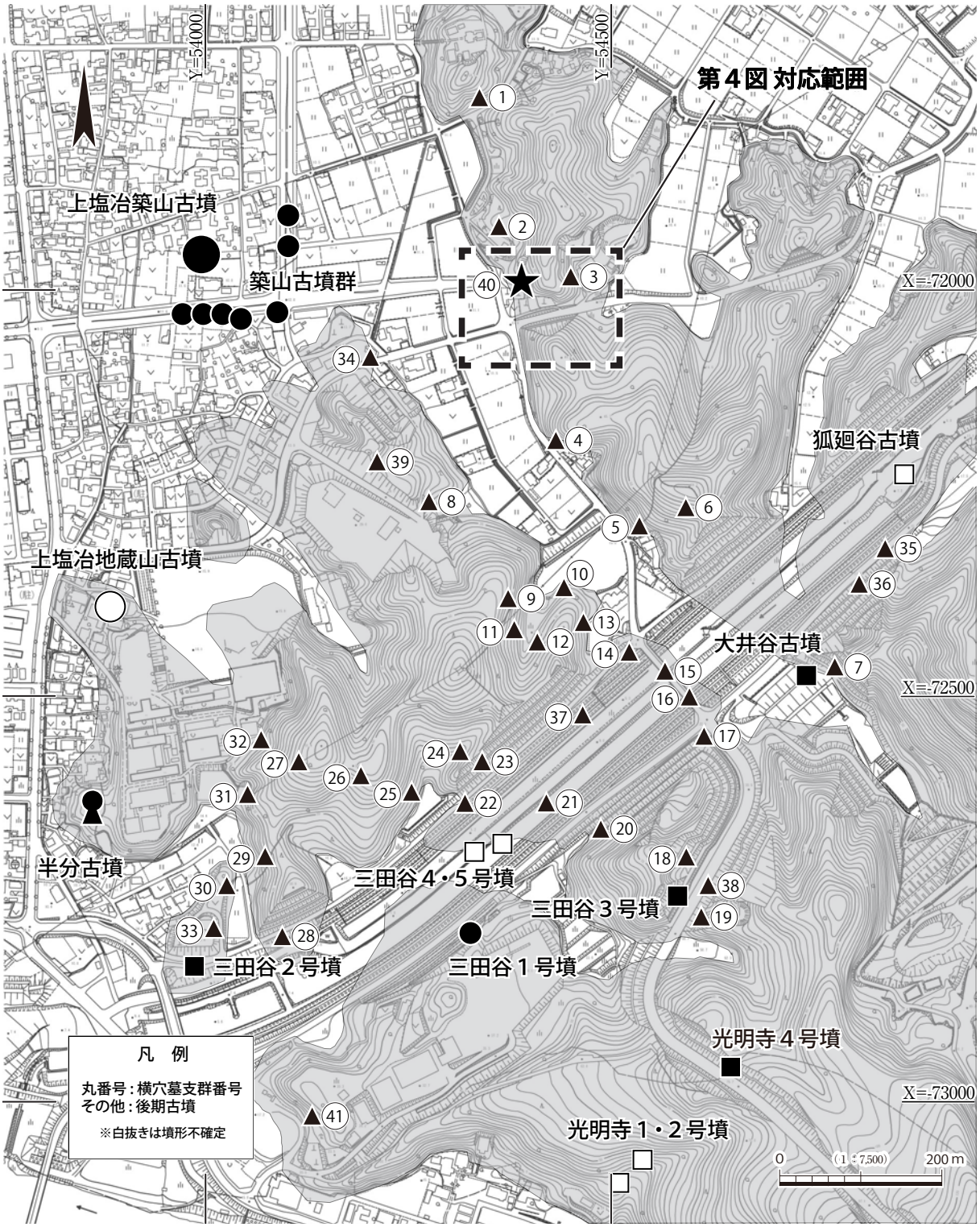
以後，昭和37年（1962）に近藤正氏による工業高校裏支群（第32支群），昭和53年（1978）に島根県教育委員会による岸宅裏支群（第17支群），昭和54年（1979）に同教育委員会による第22支群，同年に出雲市教育委員会による半分城跡横穴群（第27支群）の発掘調査が実施された（門脇1980，島根県教育委員会1986，出雲市教育委員会1979）。その他，この間に行われた県立出雲商業高校社会部の生徒，島根大学の学生らによる分布調査，昭和47年（1972）頃から島根県教育委員会が数度にわたって実施した分布調査，試掘調査等によって，昭和55年（1980）までには丘陵地一帯に32カ所107穴が知られるようになった。昭和55年（1980），これらの調査成果の概要が島根県教育委員会によって『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財報告』に「上塩冶横穴墓群」として紹介されたことにより，以後，現在の呼称が使用されることとなる（門脇1980）。

その後，斐伊川放水路建設を初めとする各種開発事業に伴い平成２年（1990）以降，平成16年（2004）までの10年余りの期間に島根県教育委員会と出雲市教育委員会によって第７・８・12・14～23・28・30・33・35～39支群の発掘調査が実施されてきた（島根県教育委員会ほか1995・1997・1998・1999，出雲市教育委員会ほか2000，出雲市教育委員会1998・2003・2004・2005）。この時点で39カ所188基の横穴墓が確認され，神戸川左岸に12カ所123基が確認されている神門横穴墓群（出雲市教育委員会1995）の規模を大きく超えることとなった。また，馬具，金銅装大刀，金糸，金製の環等，優品も副葬品として出土しており，副葬品から見た階層性の上からも神門横穴墓群の上位に位置づけられることが明らかとなった。その他，横穴墓群の同一丘陵や隣接地より多くの後期古墳が確認されており，その関係性も注目されるところである。

今回の調査で発見された第40支群の横穴墓36基のほか，その後平成27・28年度に同事業に伴い実施した第３支群の発掘調査，その他の開発事業に伴う試掘調査でも新たな横穴墓が確認されており，上塩冶横穴墓群は現在41カ所230基を超える横穴墓数となっている（表１，第３図）。

表１　上塩冶横穴墓群支群一覧

支群番号	横穴墓数	確認される玄室形態	主な埋葬施設	主な出土品	主な文献等
1	1	整正家形妻入			③
2	2				③
3	19？	アーチ形・アーチ系家形？	組合式石棺（蓋無） 須恵器床	大刀・鏃・耳環・須恵器ほか	③ 平成27・28年度 発掘調査地
4	2				③
5	2	家形妻入		耳環・須恵器	③
6	5	ドーム形・家形		大刀・鏃・須恵器ほか	③
7	4			宝珠状銅製品・須恵器	③⑭
8	7	ドーム形またはアーチ	簡易な石床	銀装大刀・耳環・須恵器ほか	⑦
9	1	整正家形妻入			③
10	5	平天井？・アーチ系家形？			③
11	2				③
12	11	アーチ形・ドーム形		須恵器	③⑭
13	4				③
14	10	アーチ形・家形妻入		大刀・耳環・玉類・須恵器ほか	③⑬
15	4	アーチ形・家形妻入・箱形？		ヘラ描き土器「各」・鉄製品片ほか	③⑬
16	3	家形妻入		須恵器	③⑬
17	14	整正家形妻入・整正家形平入・アーチ系家形		大刀・耳環・異形銅製品・須恵器ほか	③⑩
18	2	家形妻入・平天井？		玉類・須恵器	③⑩
19	4	アーチ形・アーチ系家形・整正家形妻入		須恵器・銅製品・鉄製品	③⑩
20	5	整正家形妻入・整正家形平入		大刀・須恵器ほか	③⑫
21	10	整正家形妻入		大刀・鏃・金糸・須恵器ほか	③⑫
22	21	整正家形妻入・整正家形平入・アーチ系家形・アーチ形・ドーム形	有縁石床	金銅装大刀・銀装大刀・馬具・金製環・金糸・玉類ほか	③⑪
23	7	アーチ形・アーチ系家形		銀装大刀・鏃・馬具・耳環・銅碗・玉類ほか	③⑭
24	1	整正家形妻入			③
25	2				③
26	1	整正家形妻入			③
27	4	アーチ形・アーチ系家形		耳環・須恵器	③④
28	2	整正家形妻入		刀子・鉄釘・須恵器	③⑮
29	2	整正家形妻入			③
30	1				③
31	2	家形妻入	組合式家形石棺		③
32	12	アーチ形・アーチ系家形・整正家形妻入	組合式家形石棺 有縁石床	銀装大刀？	③
33	8	アーチ形・アーチ系家形・整正家形妻入	組合式家形石棺 異形家形石棺	金銅装大刀・鉄鏃・耳環・玉類ほか	⑧⑭
34	6	アーチ形	柱状石材 礫床	耳環・鉄鎌・須恵器	⑥
35	1	整正家形妻入		耳環・玉類・須恵器・土師器ほか	⑭
36	3	整正家形平入・ドーム形		金銅装大刀・馬具・鉄鏃・耳環ほか	⑭
37	1	アーチ形		鉄釘ほか	⑭
38	3	整正家形妻入		須恵器・銅製品・鉄製品土師器	⑩
39	3	アーチ形		須恵器・大刀	⑨
40	36	アーチ形・家形・平天井	刳抜式小型家形石棺 組合式石棺（蓋無） 柱状石材 石製棺台 礫床 須恵器床	大刀・馬具・耳環・玉類・金銅製歩揺ほか	本書
41	2？			須恵器	平成26年度 市試掘調査



第３図　上塩冶横穴墓群と周辺の後期古墳分布図（1:7500）

〔参考文献〕

①池田満雄　1956「上塩冶地区の横穴」『出雲市文化財調査報告』第１集　出雲市教育委員会

②門脇俊彦　1956「出雲国大井谷横穴群」『私たちの考古学』第８号　考古学研究会

③門脇俊彦　1980「上塩冶横穴墓群」『上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』島根県教育委員会ほか

④出雲市教育委員会　1979『中国電力高圧送電線鉄塔工事に伴う半分城跡横穴墓群発掘調査報告』

⑤出雲市教育委員会　1995『小浜山横穴墓群（神門横穴墓群第10支群）』十間川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
⑥出雲市教育委員会　1998『上塩冶横穴墓群第34支群発掘調査報告書』
⑦出雲市教育委員会　2003『上塩冶横穴墓群第８支群』出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書第13集
⑧出雲市教育委員会　2004『上塩冶横穴墓群第33支群』出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書第14集
⑨出雲市教育委員会　2005『中野美保遺跡 上塩冶横穴墓群第39支群 保知石遺跡』出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集
⑩出雲市教育委員会ほか　2000『上塩冶横穴墓群第17・18・19・38支群 大井谷Ⅲ遺跡 石切場跡１・２ 三田谷３号墳』斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書Ⅰ
⑪島根県教育委員会　1986『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅻ集
⑫島根県教育委員会ほか　1995『上塩冶横穴墓群第20・21支群』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ
⑬島根県教育委員会ほか　1997『大井谷石切場跡 上塩冶横穴墓群第14支群 上塩冶横穴墓群第15支群 上塩冶横穴墓群第16支群』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ
⑭島根県教育委員会ほか　1998『上沢Ⅱ遺跡 狐廻谷古墳 大井谷城跡 上塩冶横穴墓群（第７・12・23・33・35・36・37支群）』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ
⑮島根県教育委員会ほか　1999『上塩冶横穴墓群第28支群』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ

調査風景１

調査風景２

第１回現地説明会

第２回現地説明会

第４章　調査の概要

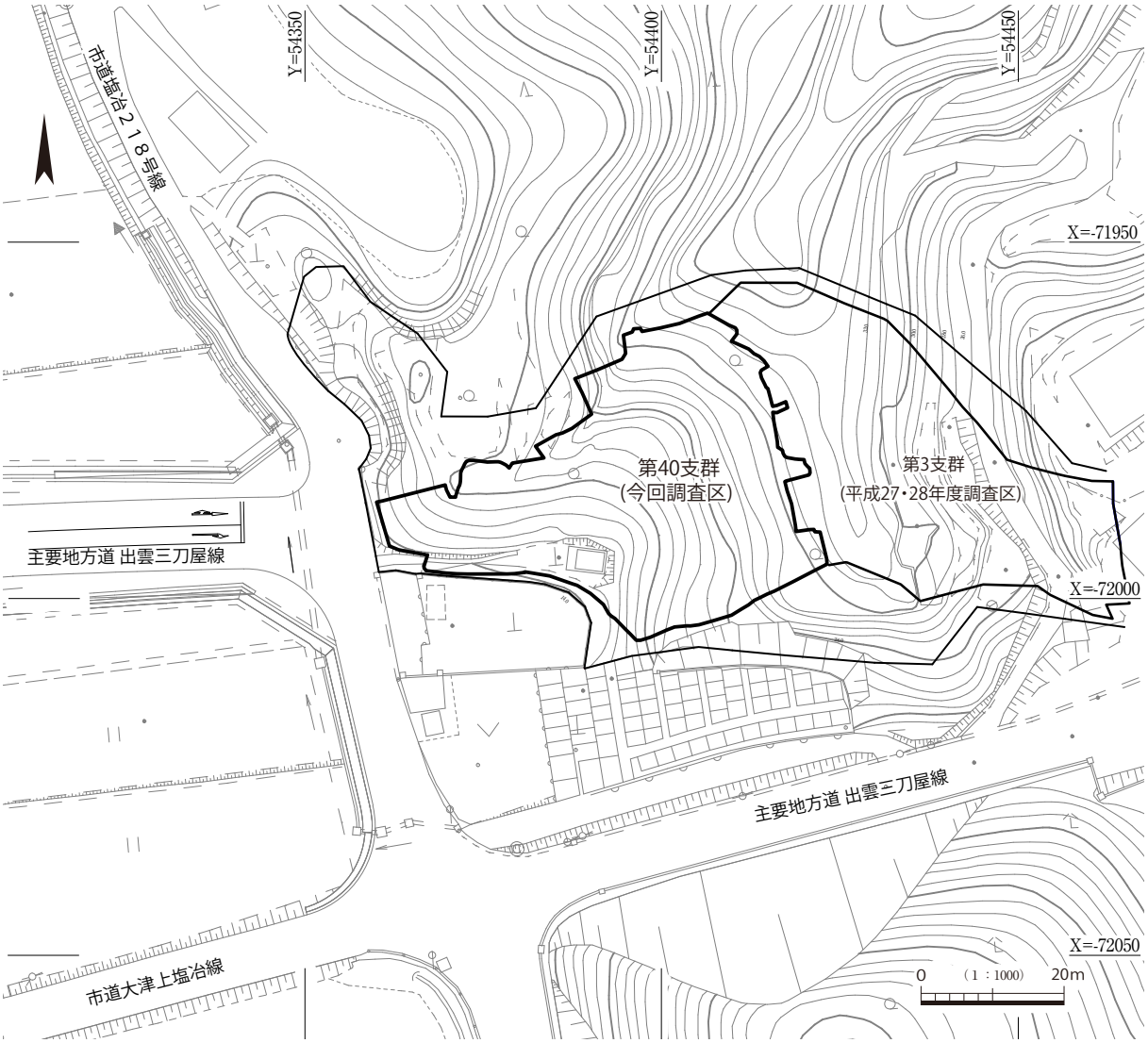
１　調査方法の概要（第４図）

調査地は，砂岩系の布志名層を基盤層とする丘陵地である。事業地の北西部と南部は，調査時点で既に本来の地形が大きく破壊されていたため，地形の残存していた範囲約1,650㎡を全面調査の対象としている。横穴墓は，小さな谷を形成する南東向き斜面と西向き斜面に確認された。

調査は，基本的に重機と人力の併用による表土掘削を行い，その後は人力による遺構，遺物の確認を行って調査を進めた。特に，横穴墓玄室内下層の土砂については極力水洗浄を行い，微細遺物の採集に努めた。

２　遺構の概要（第５・６図）

調査によって横穴墓36基（１～36号横穴墓），近世墓８基（ST1～7），土坑１基（SK8），溝１基（SD9），ピット群，性格不明遺構１（溝及び小穴群・SX10）が確認された。この内，35・36号横穴墓に



第４図　調査区周辺図（1:1000）

第５図　遺構配置図（1:200）

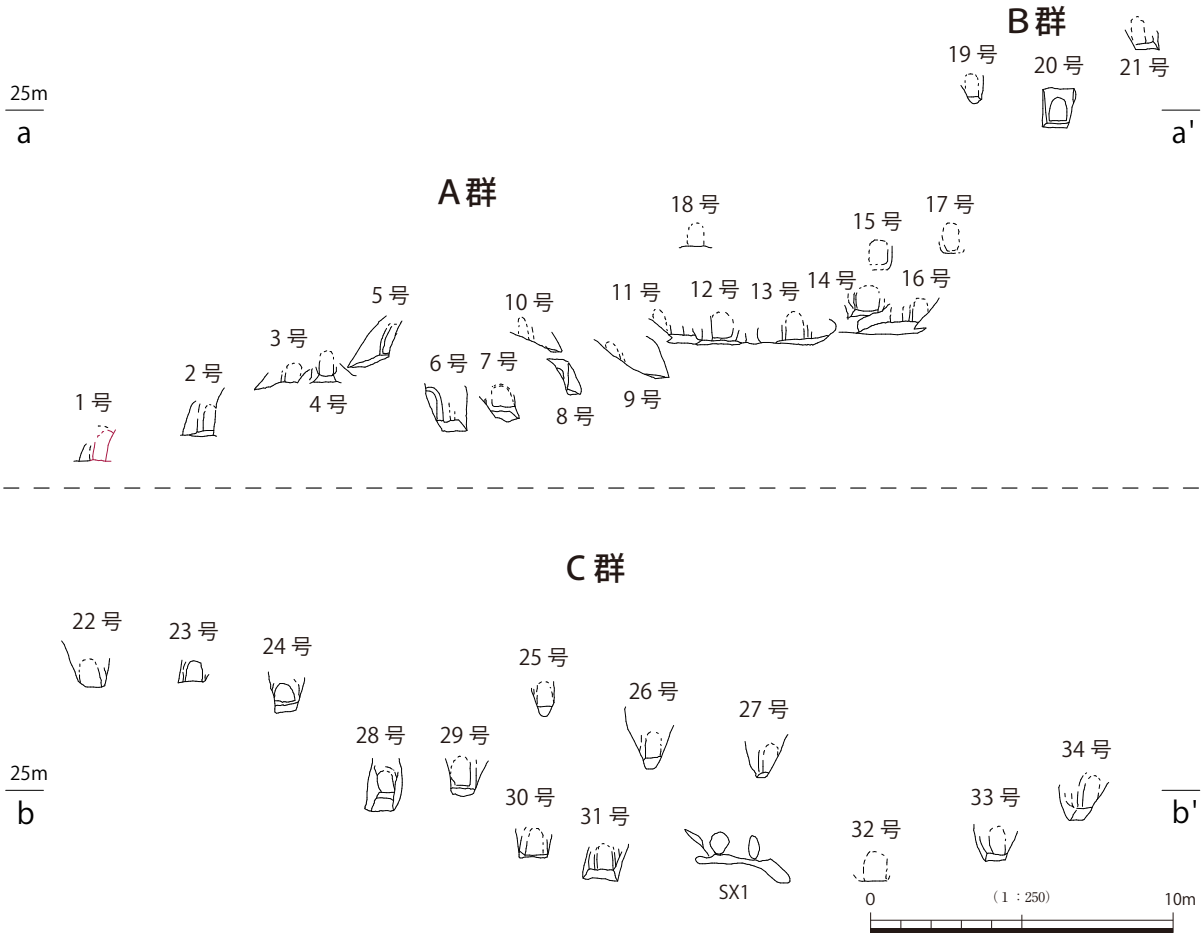
Y=54400
Y=54410
Y=54420
X=-71960
X=-71970
X=-71980
X=-71990
X=-72000
32.0
30.0
28.0
26.0
24.0
22.0
20.0
18.0
16.0
14.0
34.0
22 号
23 号
24 号
21 号
20 号
19 号
17 号
16 号
28 号
29 号
25 号
30 号
26 号
31 号
27 号
SX10
32 号
33 号
34 号
SD9
SK8
a
a'
b
b'
（第6図中間ライン）
0
（1：200）
10m

ついては，現状で調査を進めることに危険が伴うため調査を一時中断しており，今回の調査においては完掘していない。今後工事の進捗にあわせ別途調査を実施する予定である。

今回の調査で確認された横穴墓の総数は36基であり，上塩冶横穴墓群の中で１つの支群から発見された横穴墓の数としては過去最大数となった。また，横穴墓内の特筆すべき埋葬施設として33号穴で発見された刳抜式小型家形石棺があげられる。

3　遺物の概要

各横穴墓からは須恵器をはじめとして土師器，武具，馬具，工具，装身具等多くの副葬品が出土している。中でも特筆すべき資料としては，26号横穴墓玄室内から出土した金銅製歩揺がある。また，遺構外遺物として，弥生土器，古墳時代の須恵器，土師器，円筒埴輪の他，近世の土師器，金属器等幅広い時期の遺物が確認されている。このうち横穴墓群に伴う遺物は古墳時代の資料であるが，円筒埴輪については調査区の広範囲から小片として出土しており，周囲の丘陵上に後背墳丘もしくは古墳が存在した可能性がある。



第６図 遺構配置図（1:250）

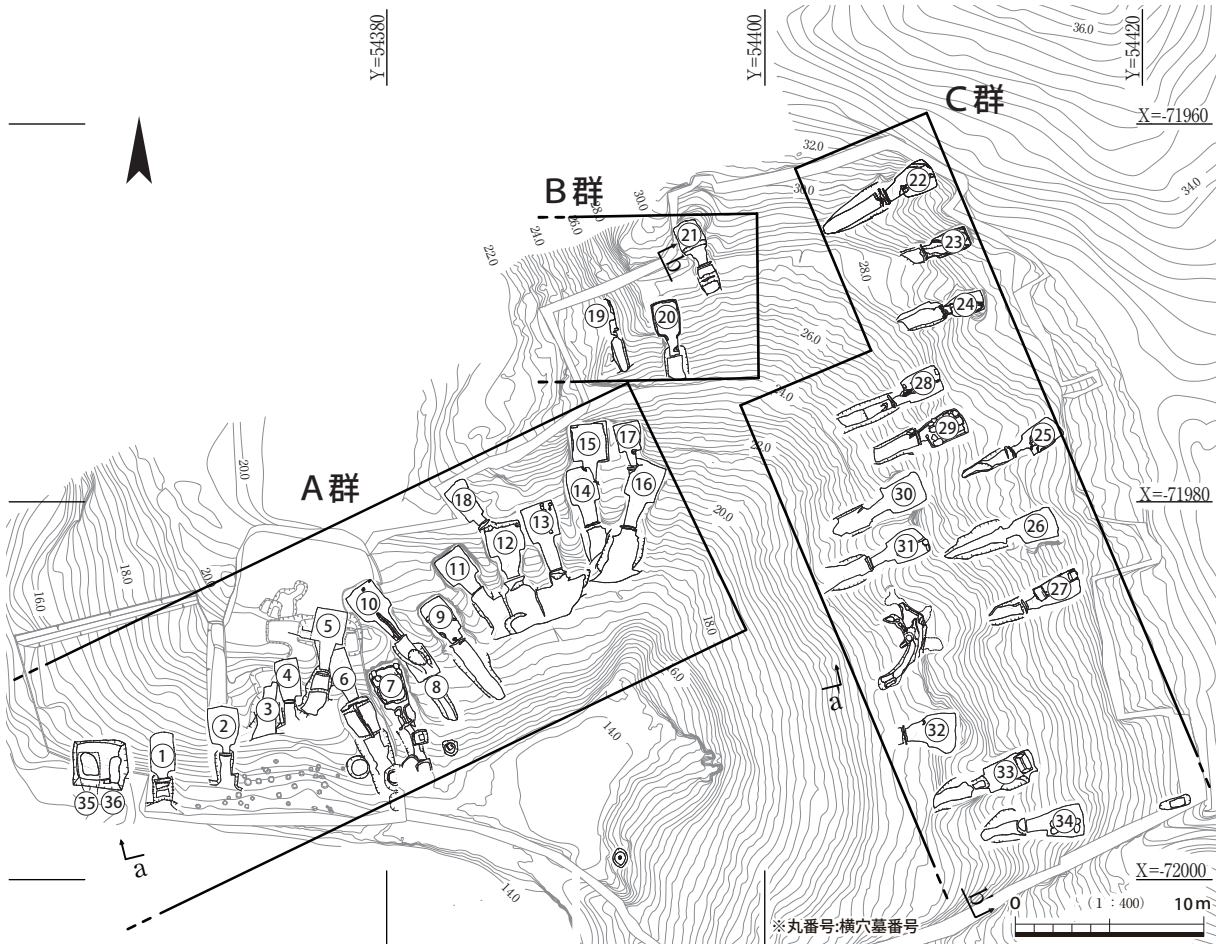
第５章　遺構と遺物

第１節　横穴墓群

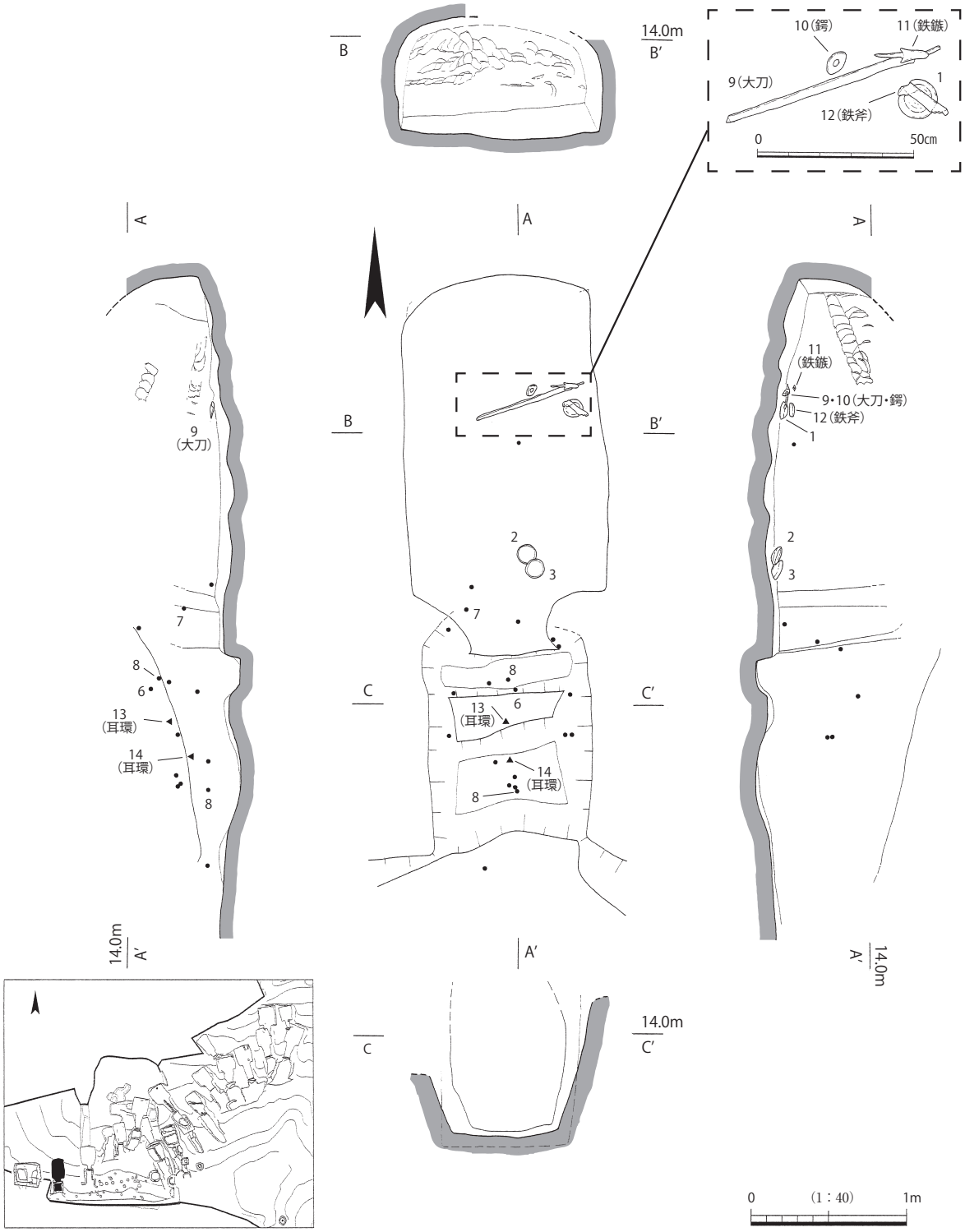
横穴墓は南向き斜面に23基，西向き斜面に13基，総数36基が確認されており，内34基を今回の発掘調査によって完掘した。横穴墓が掘削された基盤層は，「布志名層」と呼ばれる海成堆積の細粒砂岩・シルト岩を主体とした地層である（鹿野・竹内1991）。

調査した横穴墓の多くは天井部が崩落していたが，残存部の状況からアーチ形を中心として家形，平形天井の玄室形態も確認された。また，蓋石のない組合式石棺や刳抜式小型家形石棺など，多様性に富んだ埋葬施設を有していることが判明した。横穴墓の時期については，追葬を除くと，須恵器編年大谷４期を中心として大谷３期から５期までの遺物が確認されている。上塩冶横穴墓群の中でも最古段階から築造され，比較的早期にその築造を終えた支群であったようである。

また，横穴墓群は，１つの谷に築造されていても更に数穴ごとの小支群から構成されることが多い。上塩冶横穴墓群第40支群においても，その立地状況から少なくとも３つの小支群に分けることが可能である。本書では，南向き斜面標高21m以下に築かれた１～18・35・36号横穴墓，南向き斜面標高

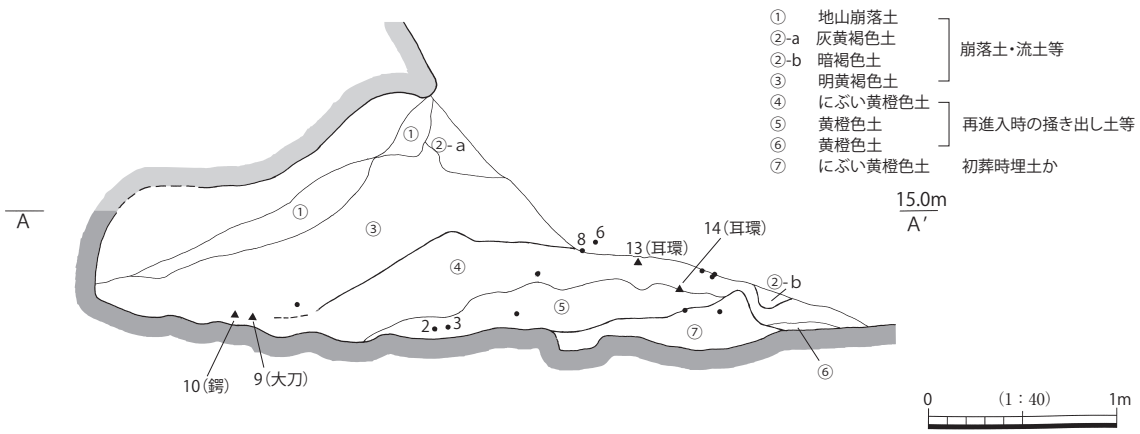


第７図　横穴墓配置図（1:400）

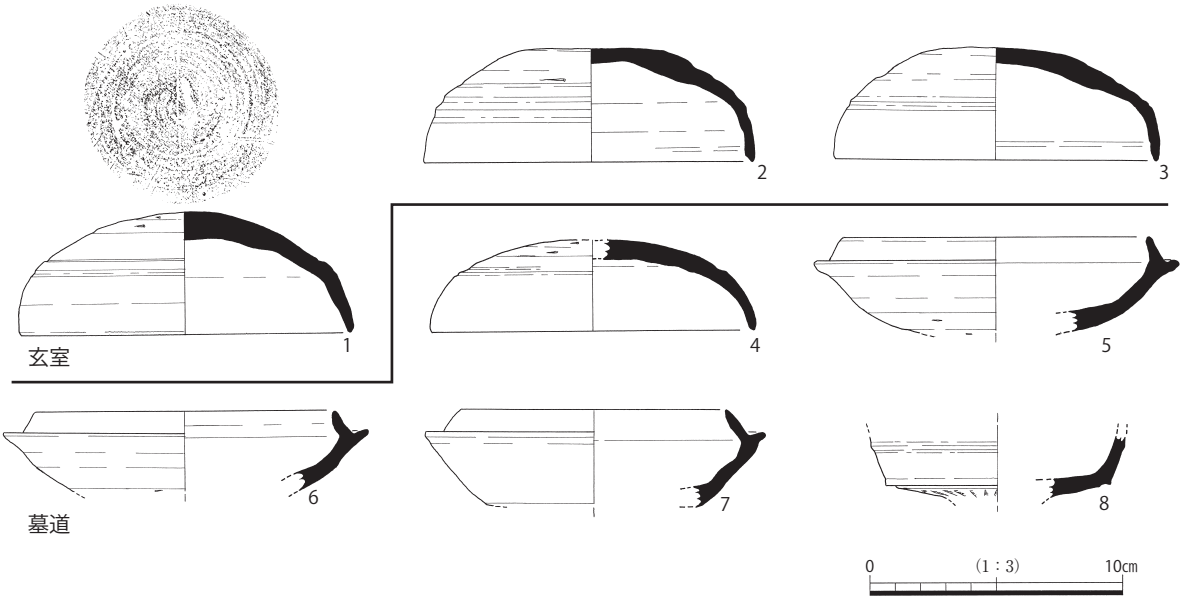


第８図　１号横穴墓遺構図（1:40･1:20，●は土器▲は金属製品）

24m以上に築かれた19～21号横穴墓，谷部から西向き斜面にまとまって築かれた22～34号横穴墓の大きな３つのまとまりをそれぞれA，B，C群として取扱う（第７図）。なお，Ａ群の西方は既存の道路と墓地によって埋まり，Ｂ群の西方とＣ群の南方は地形の破壊を受けている。各小群は本来更に多くの横穴墓から構成されていたものと思われる。以下に個々の横穴墓についての詳細を述べる。



第９図　１号横穴墓土層図（1:40，●は土器▲は金属製品）



第10図　1号横穴墓遺物実測図１（1:3）

第１項　横穴墓群Ａ群

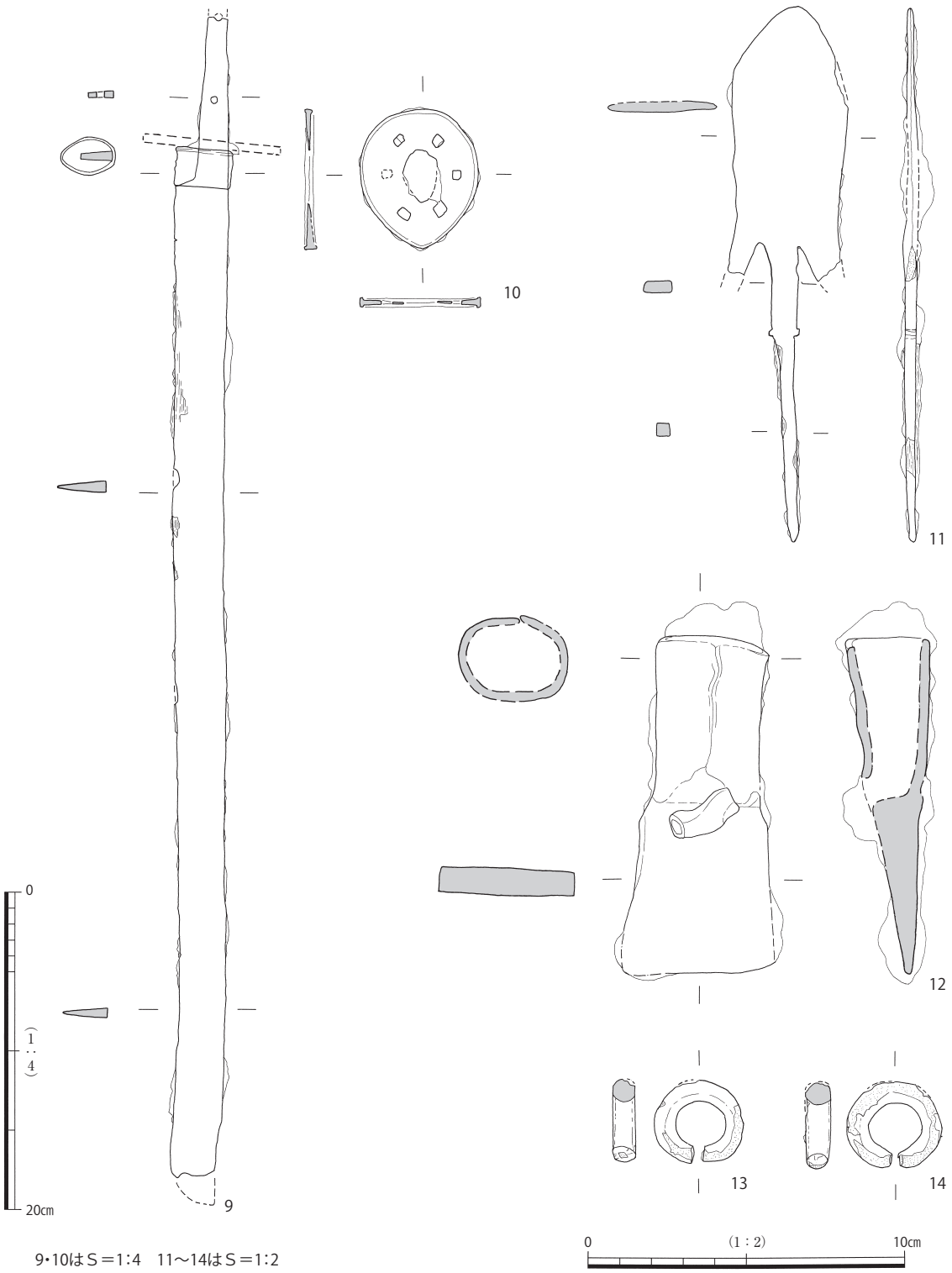
南向き斜面標高21m以下に築かれた20基の横穴墓から成る一群である。谷入口側のほぼ真南に向く斜面に築かれた１～５・35・36号横穴墓と谷奥側のやや南東に向く斜面に築かれた６～18号横穴墓など，更に小支群も想定可能だが，本章においては一括して取り扱う。

①　１号横穴墓（第８～11図，図版３）

立　地　標高約13.5m（玄門を基準とする。以下同じ。）の南方に向く丘陵斜面に位置し，今回の発掘調査区の西端付近にあたる。

墓道・閉塞部（第８図）　Ｓ－１°－Ｗ方向に開口し，床面幅0.6～0.8m，残存長1.4mを測る。閉塞部より約45cm前方の地点に幅70cm，深さ８cm前後の溝が，閉塞部にも幅25cm，深さ10cm前後の溝が主軸方向に直交して掘り込まれている。閉塞石は無かった。

玄　門（第８図）　床面幅0.5m，長さ0.4m，残存高0.6mを測る。天井部は残存していない。



第11図　1号横穴墓遺物実測図２（1:4・1:2）

玄　室（第８図）　平面形は幅1.2～ 1.3m，奥行2.05mの長方形である。墓道から玄室までの残存長は3.85mとなる。天井部の多くは残存していないが，残存部の状況から高さ0.8m程度のアーチ形の断面形だったものと考えられる。また，玄室奥壁と側壁奥部には加工痕が明瞭に残っており，側壁で前から奥方向，奥壁で下から上方向に削った丸刃削痕（山陰横穴墓研究会　1995）が観察できる。

土層堆積状況（第９図）　①～③層は崩落土，流土等である。④～⑥層は玄室内への再進入に伴う掻き出し土等である。④⑤層を中心に須恵器小片，銀環が散在して出土している。⑦層は再進入前の堆積土で，その上面において再進入が行われたものと思われる。初葬時の埋土であろうか。以上の状況から，初葬後，最低１回の追葬もしくは盗掘に伴う玄室内への進入があったものと考えられる。

遺物出土状況（第８・９図）　墓道～玄門付近からは堆積土④・⑤層を中心に須恵器小片が約30点（４～８，その他は大部分蓋杯小片，一部カキメの観察できる小片），④層より銀環２点（13・14）が出土している。いずれも散在した状態で出土しており，再進入に伴い玄室内から掻き出されたものと思われる。

玄室内からは，中央右寄りに集中して大刀１振（9），大刀から外された鍔１点（10），鉄斧１点（12），鉄鏃１点（11），須恵器杯蓋１点（１），甕片２点が乱雑な配置で出土した。また，玄門付近では須恵器杯蓋２点（２・３）が口縁を上に向けて並んで出土した。須恵器甕片以外はほぼ完形を保つ遺存状態良好な資料である。須恵器甕片は④層上面付近から③層，その他は④層中から④層上面付近の出土で，床面に接する資料は存在しない。玄室内中央右寄りの一群については，上下に重なる鉄鏃（11）と大刀（9），鉄斧１点（12）と須恵器杯蓋（１）の間にも土砂を挟んでいること，鍔（10）が斜めに浮き上がっていることから，再進入時に土砂とともに集積されたものと思われる。玄室内玄門付近の須恵器杯蓋２点（２・３）についても副葬時の配置を保つものかは不明である。

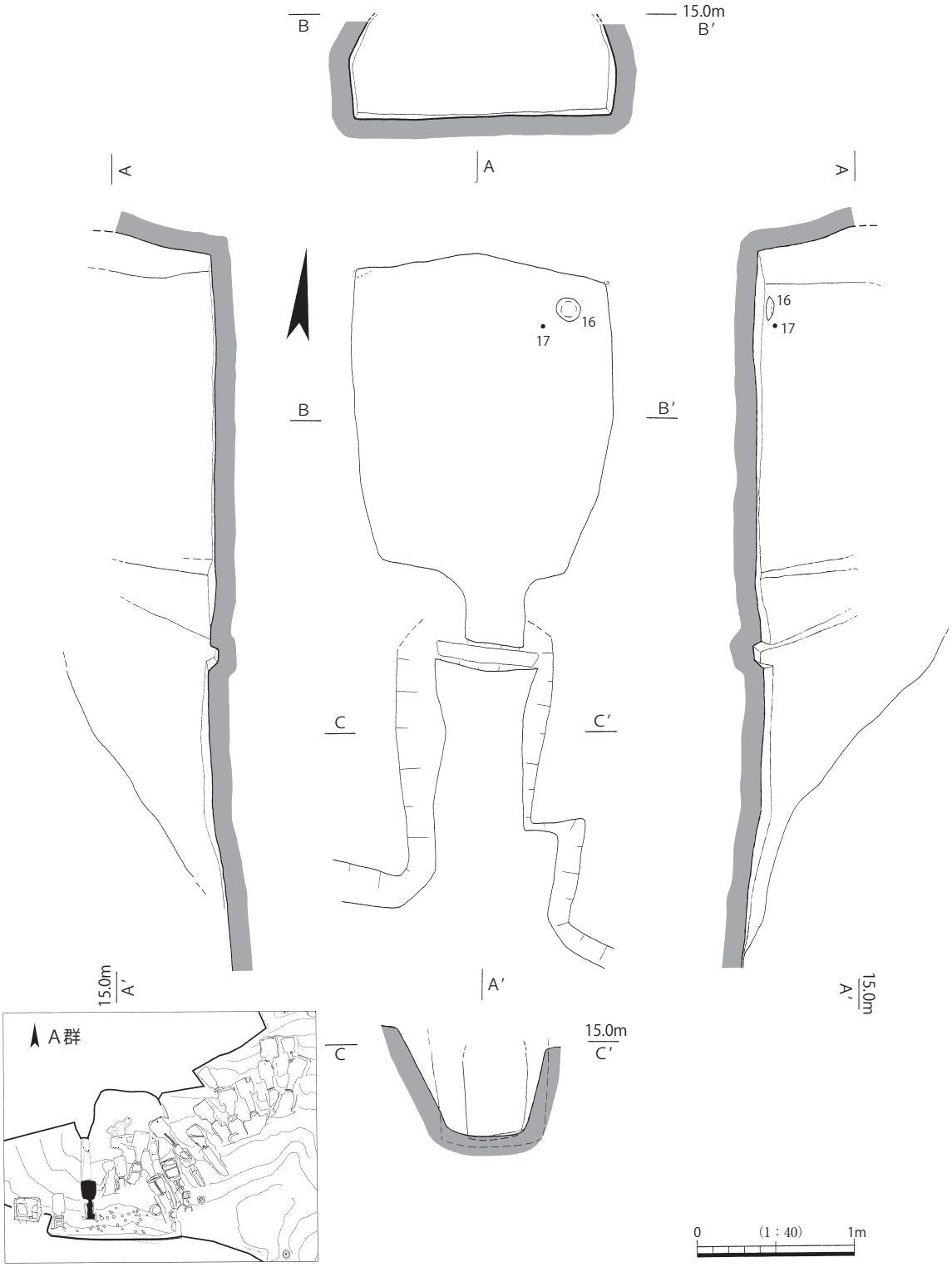
出土遺物（第10・11図，カラー図版４・５，図版36・54・56）１～３は玄室内出土の須恵器杯蓋である。１・２には天井部外面に粗雑なヘラケズリが，３は周辺ヘラケズリ（天井部周辺のみを削り，中心部を削り残すもの。以下同じ。）後にナデが施されている。この内，１の天井部外面にはヘラ記号「｜」が確認できる。

４～８は玄門付近から墓道上④・⑤層出土の須恵器で，いずれも残存率１/４以下の破片である。４は杯蓋で，天井部に粗雑なヘラケズリを施す。５～７は杯身である。８は無蓋高杯で，口縁部と脚部を欠く。杯部底の外面に刺突文が施される。

９～12は玄室内出土の金属製品である。９は片関の大刀で，刃部端と茎部端をわずかに欠く。刃部残存長62.3㎝，茎部残存長10.7㎝，全残存長73㎝を測る。鉄製の鎺が残存しているほか，目釘穴２孔，鞘木の一部が確認できる。10はこの大刀に伴う鉄製の六窓鍔である。倒卵形で，端部を断面T字状に肥厚させる。11は腸抉柳葉鏃で，鏃身部の一部を欠く。全長16.8㎝を測る大型品である。12は有肩袋状鉄斧である。別個体の鉄製品小片が融着しているが，小片のため詳細は不明である。

13・14は墓道上④層出土の銅芯銀板貼の銀環である。断面形は円形に近く，開き部端に銀板を折り込んだシワが残る。

時　期　玄室内出土須恵器はいずれも大谷４期のものであり，玄門～墓道④⑤層より出土した須恵器も，図化していない小片資料を含め大谷４期の範疇で捉えられる。よって，横穴墓の築造，埋葬も大谷４期の中で終了しているものと考えられる。

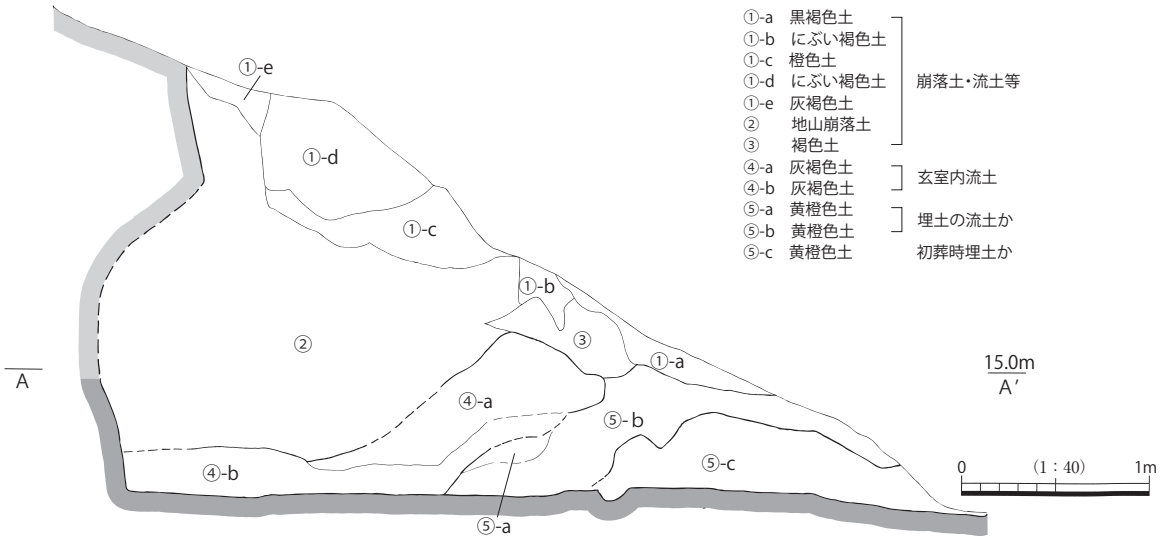


第12図　2号横穴墓遺構図（1:40，●は土器）

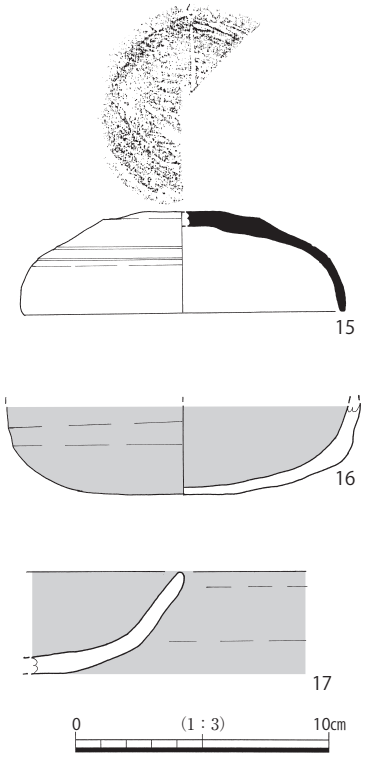
②　２号横穴墓（第12～ 14図，図版４）

立　地　１号横穴墓の東約3.5mに存在し，標高約14.5mと１号横穴墓よりやや高い。

墓道・閉塞部（第12図）　Ｅ－86°－Ｓ方向に開口し，床面幅0.5～ 0.65m，残存長1.5mを測る。閉塞部には幅20㎝，深さ６㎝前後の溝が主軸方向に直交して掘り込まれている。閉塞石は無かった。



第13図　2号横穴墓土層図（1:40）



第14図　2号横穴墓遺物実測図（1:3）

玄　門（第12図）　床面幅0.35～ 0.4m，長さ0.4m，残存高0.5mを測る。　天井部は残存していない。

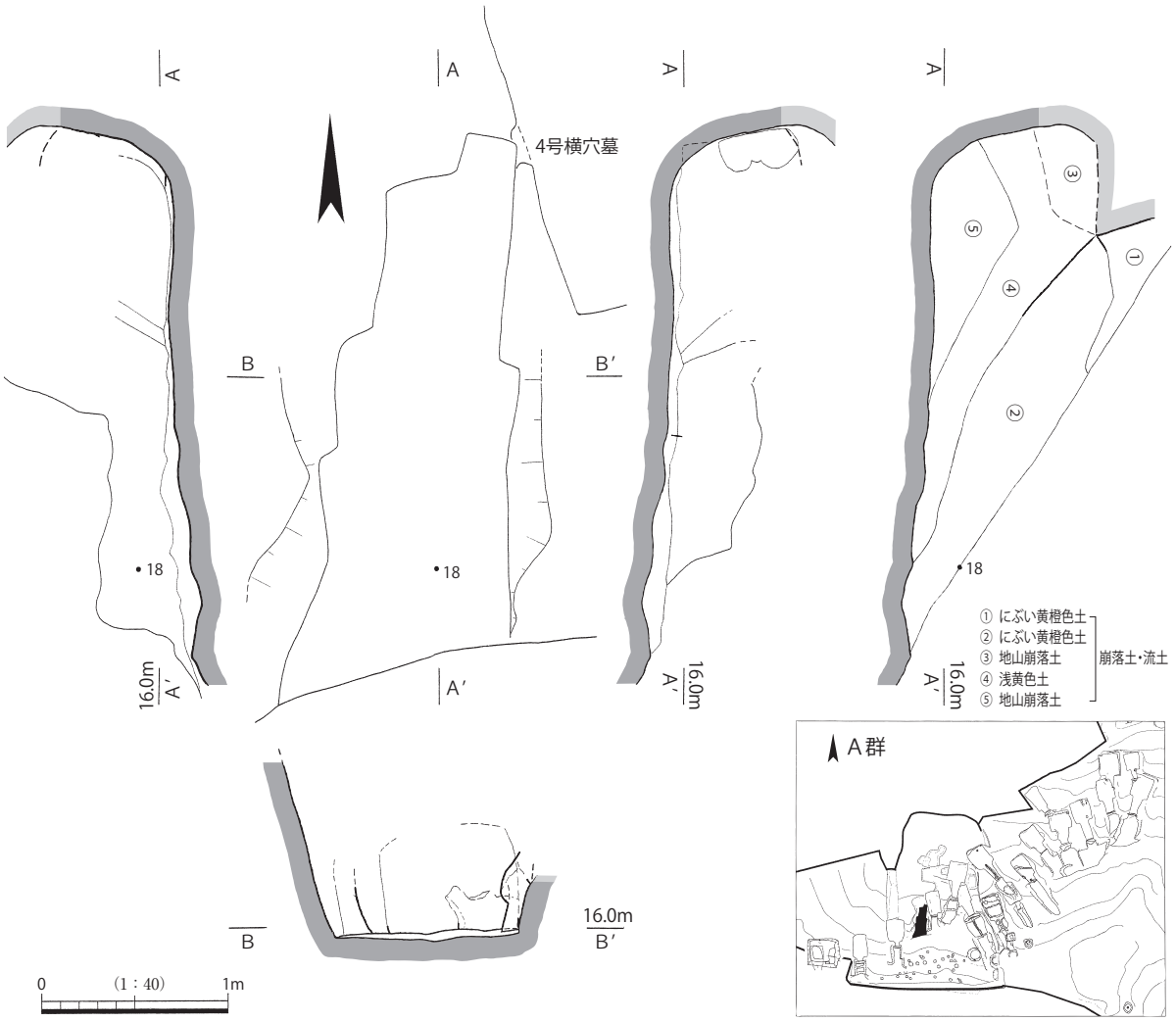
玄　室（第12図）　平面形は幅1.2～ 1.6m，奥行2.05mの奥が広がる台形である。墓道から玄室までの残存長は3.95mとなる。また，前壁側の右袖約0.25m，左袖約0.55mを測り，右袖が狭く，左袖が広い。天井部の多くは残存していないが，残存部の状況からアーチ形の断面だったと考えられる。残存高0.65m。

土層堆積状況（第13図）　①～③層は地山崩落土，流土等である。④層は玄室内への流土，⑤層は埋土及びその流土の可能性がある。その上面において再進入が行われたものと思われる。以上の状況から，初葬後，最低１回の追葬もしくは盗掘に伴う玄室内への再進入があったものと考えられる。

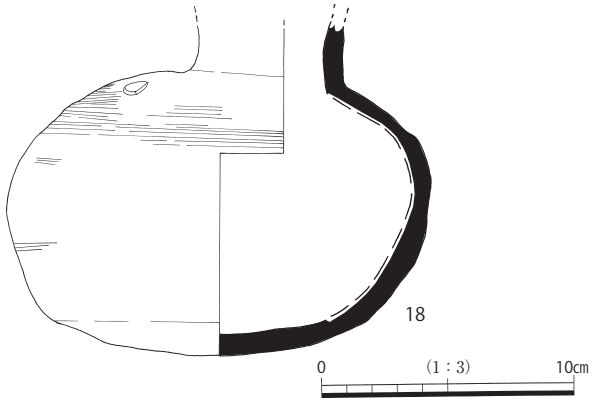
遺物出土状況（第12・13図）　玄室内右奥の床面付近より若干浮いた状態で土師器杯が1点（16）出土した。その他，玄室内右奥より土師器杯片１点（17），試掘調査時に墓道上⑤－ｃ層に相当する土層より須恵器杯蓋１点（15）が確認されている。16の土師器杯は口縁を下に伏せた状態で出土しており，17とともに土器枕として使用された可能性もあるが，詳細不明である。

出土遺物（第14図，図版36）　16・17は玄室内出土の土師器杯である。16は口縁部端を除きほぼ完形，17は口縁部の小片である。いずれも内外面に赤色塗彩を施している。

15は墓道上出土の須恵器杯蓋で，残存率約１/２，天井部外面にヘラケズリ後ナデが施されている。ほか，ヘラ記号「｜」が確認できる。



第15図　3号横穴墓遺構図・土層図（1:40，●は土器）



第16図　3号横穴墓遺物実測図（1:3）

時　期　玄室内出土遺物は土師器杯のみであり，欠損部も多く詳細な時期判断は困難であるが，墓道上出土の須恵器杯蓋は大谷４期の特徴を示す。横穴墓の築造，埋葬もこれに近い時期であろう。

③　３号横穴墓（第15・16図，図版４）

立　地　２号横穴墓の北東約３ｍに存在し，標高約16mと２号横穴墓よりやや高い。

墓　道（第15図）　Ｓ－１°－Ｗ方向に開口し，床面幅１ｍ前後，残存長1.9mを測る。

玄門・玄室（第15図）　平面形は幅0.7m，奥行１ｍの長方形である。天井部は残存せず，残存高0.6mを測る。墓道から玄室までの残存長は2.9mとなる。築造途中の横穴墓と考えられ，玄門・玄室の区

画はない。奥壁右下に一部20㎝程度奥へ掘り込んだ箇所が認められる。また，右側壁の奥で隣接の４号横穴墓と接する小穴があり，造墓中に４号横穴墓と結合したことで造墓を中断したものと思われる。埋葬に使用された形跡もない。

土層堆積状況（第15図）　確認された土層は全て崩落土，流土と考えられる。

遺物出土状況（第15図）　遺物は墓道上の流土①②層から須恵器平瓶１点（18），その他須恵器甕小片が数点確認されている。

出土遺物（第16図，図版36）　18は須恵器平瓶である。体部外面にカキメを施した後，肩部にボタン状の粘土を一対張り付けている。

時　期　須恵器平瓶は大谷５～６a期の特徴を示すが，流土中の出土であり，３号横穴墓に伴うかは不明である。４号横穴墓との結合により造墓を中断していると考えられることから，４号横穴墓完成以降の掘削である可能性が高い。

④　４号横穴墓（第17・18図，図版４）

立　地　３号横穴墓の東に隣接し，前述のように壁面の一部が３号横穴墓と繋がっている。標高も３号横穴墓とほぼ同一である。

墓道・閉塞部（第17図）　Ｅ－89°－Ｓ方向に開口し，床面幅0.5～0.6m，残存長1.3mを測る。閉塞部には幅20㎝，深さ５㎝前後の溝が主軸方向に直交して掘り込まれている。閉塞石は無かった。

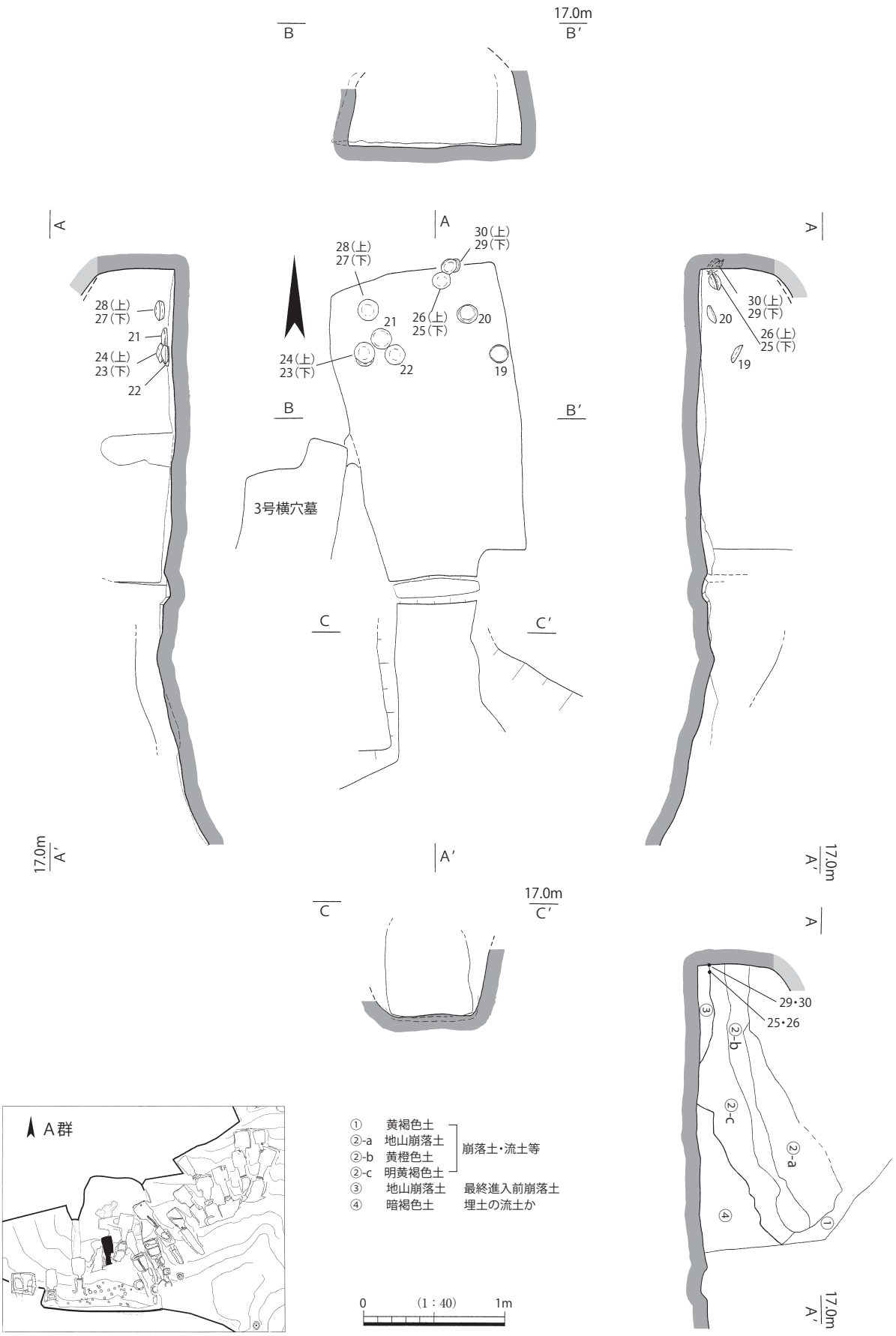
玄　門（第17図）　床面幅0.65～0.7m，長さ0.2m，残存高0.65mを測る。天井部は残存していない。

玄　室（第17図）　Ｅ－82°－Ｓ方向に開口し，墓道とはやや軸を異にする。平面形は幅１～1.2m，奥行2.05mの長方形である。墓道から玄室までの残存長は3.55mとなる。右袖のみの片袖式である。天井部の多くは残存していないが，残存部の状況からアーチ形の断面形だったと考えられる。左側壁に隣接の３号横穴墓と接する小穴がある。残存高0.6m。

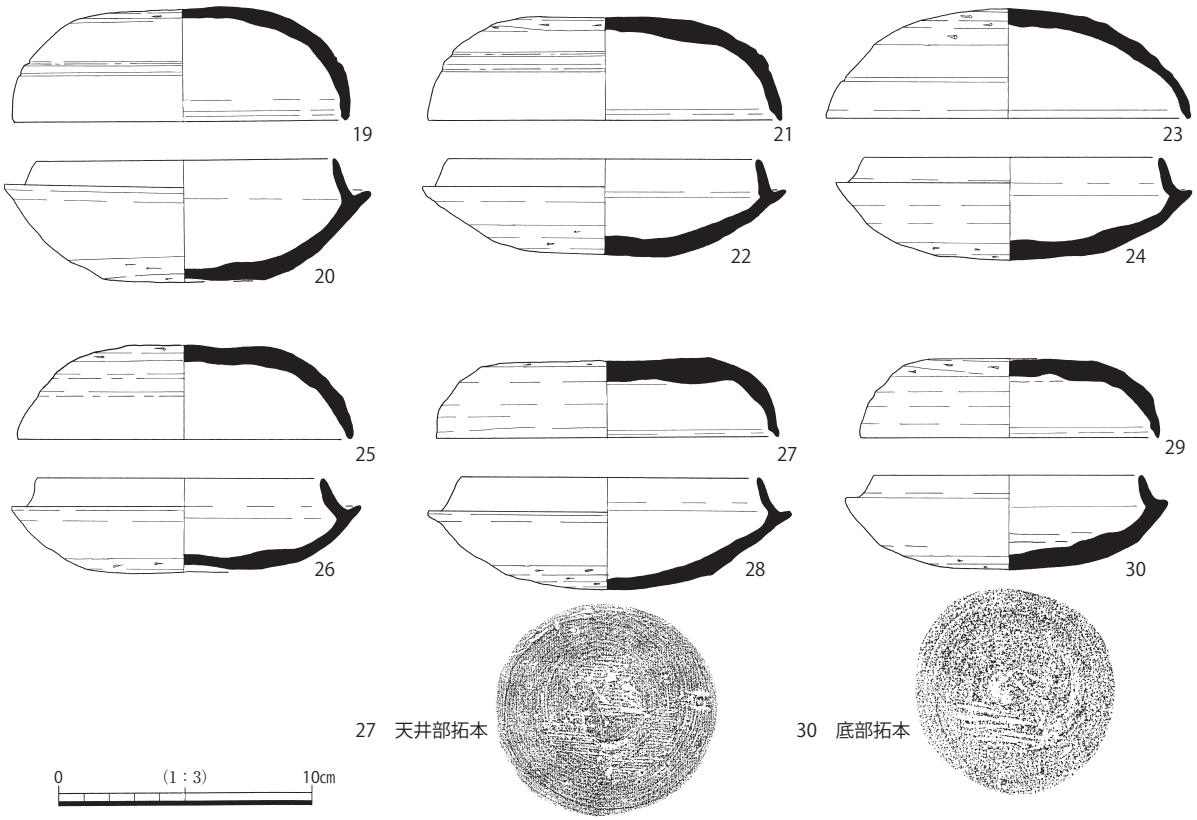
土層堆積状況（第17図）　墓道部分の土層は不明であるが，①②層が崩落土，流土等である。③層が最終進入前の地山崩落土である。④層が埋土の流土，または堆積土であろう。

初葬後の進入の痕跡は土層からは明確でないが，出土遺物の多くは初期の崩落土と考えられる③層上面に乗り，床面から大きく浮いた遺物（19）も確認される。少なくとも１回の再進入はあったであろう。床面上面，④層上面が再進入面である可能性がある。以上の状況から，初葬後，最低１回の追葬等に伴う玄室内への再進入があったものと考えられる。

遺物出土状況（第17図）　床面直上からの出土遺物は存在せず，玄室内奥の③層上面を中心に須恵器蓋杯が６セット出土している。その内，最奥にある３セット（25と26，27と28，29と30）は蓋を下に，身を上にして組みあった状態で配置され，左側壁側手前の２セット（21と22，23と24）は蓋を下，身を上にいずれも口縁部を下に伏せて重ねた状態で配置されたものと考えられる。22の杯身は21の杯蓋上に乗っていたものがずれ落ちたものと推定した。以上５セットは副葬時の配置をある程度留めているものであろう。左側壁側手前の２セット（21と22，23と24）は土器枕として使用されたものかもしれない。右側壁側手前の１セット（19と20）については，蓋が床面からかなり浮いた状態で出土するなど，原



第17図　4号横穴墓遺構図・土層図（1:40，●は土器）



第18図　4号横穴墓遺物実測図（1:3）

位置から移動しているようである。その他，玄室内手前の①②層中より甕小片１点が確認された。

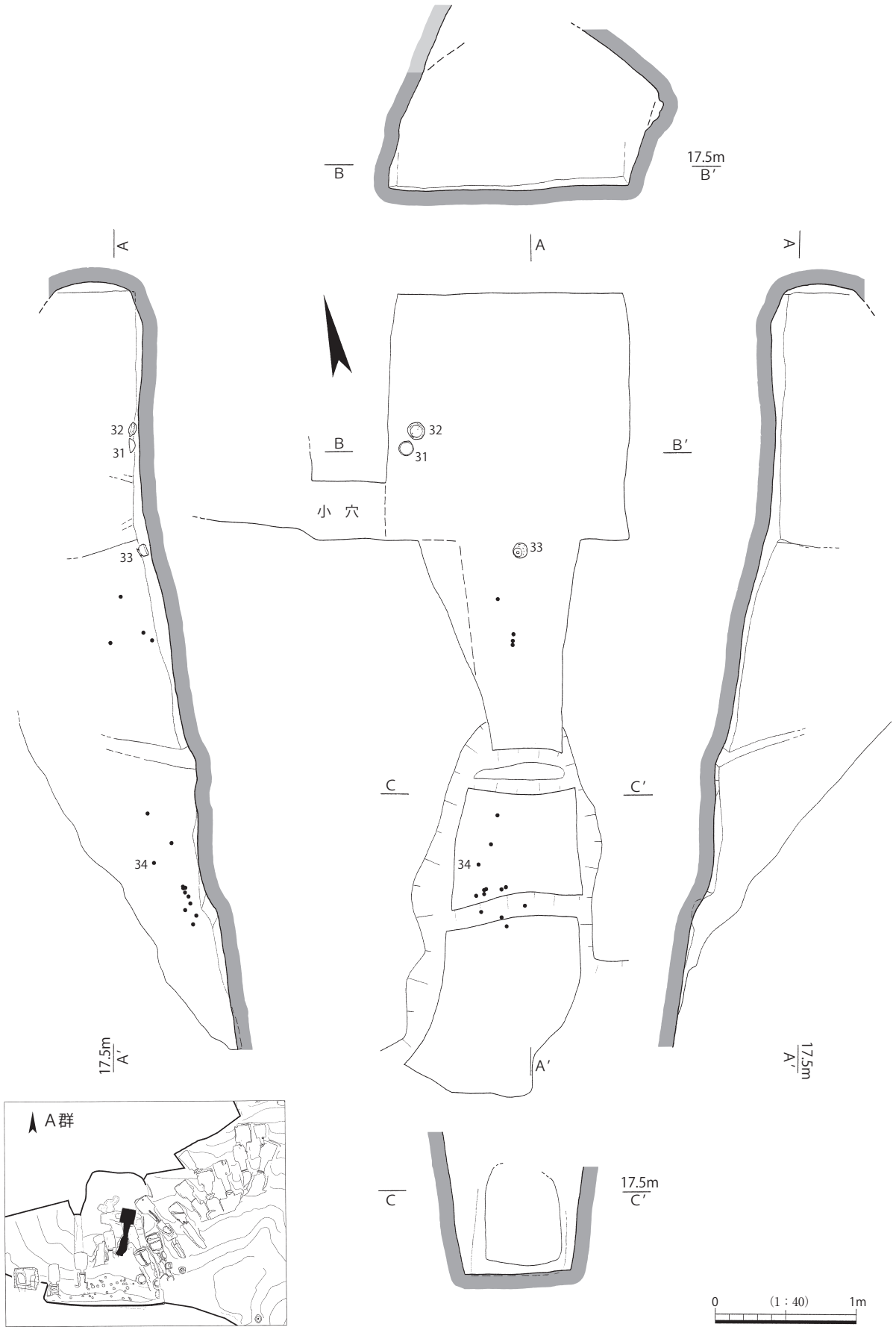
出土遺物（第18図，図版36）　19～ 30は玄室内出土の須恵器蓋杯である。杯蓋は天井部外面に25でやや粗雑なヘラケズリが，それ以外は丁寧なヘラケズリが施されるものである。27・29・30については蓋天井部と杯底部が扁平な「石見型須恵器」（島根県立八雲立つ風土記の丘1998，榊原2008）で，27と30については平坦部外面の板状圧痕も顕著に残る。また，23・25の杯蓋についても，口縁径の大きさに比して肩部の区画がやや不明瞭なもので，石見地方の須恵器に似た特徴を示す。

時　期　玄室内出土須恵器は出雲地方通有の杯蓋（19・25）で大谷３期の特徴を，石見地方の特徴を持つ杯蓋（23・25・27・29）で石見３～４期（大谷３～４期併行）の特徴を示す（島根県立八雲立つ風土記の丘1998，榊原2008）。よって，横穴墓の築造，埋葬は大谷３期に始まり，遅くとも大谷４期の古い段階の中では終了しているものと考えたい。

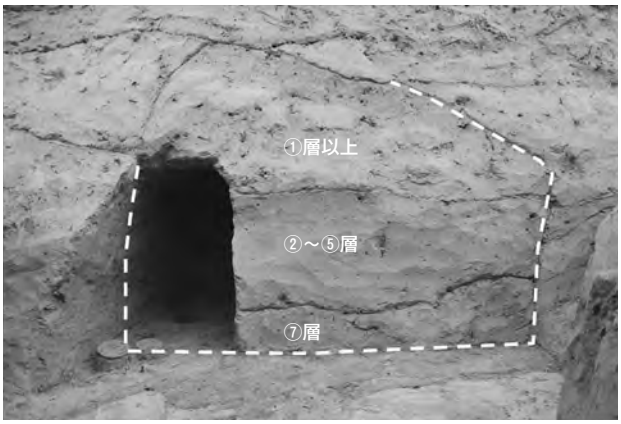
⑤　５号横穴墓（第19～ 22図，図版４）

立　地　４号横穴墓の北東に隣接して存在し，標高約17mと４号横穴墓よりやや高い。

墓道・閉塞部（19図）　Ｓ－10°－Ｗ方向に開口し，床面幅0.8～ 0.95m，残存長2.5mを測る。閉塞部より約１mの地点で高低差10cm前後の段を設け，玄門側を高くしている。閉塞部には幅35cm，深さ４cm前後の溝が主軸方向に直交して掘り込まれている。閉塞石は無かった。



第19図　5号横穴墓遺構図（1:40，●は土器）

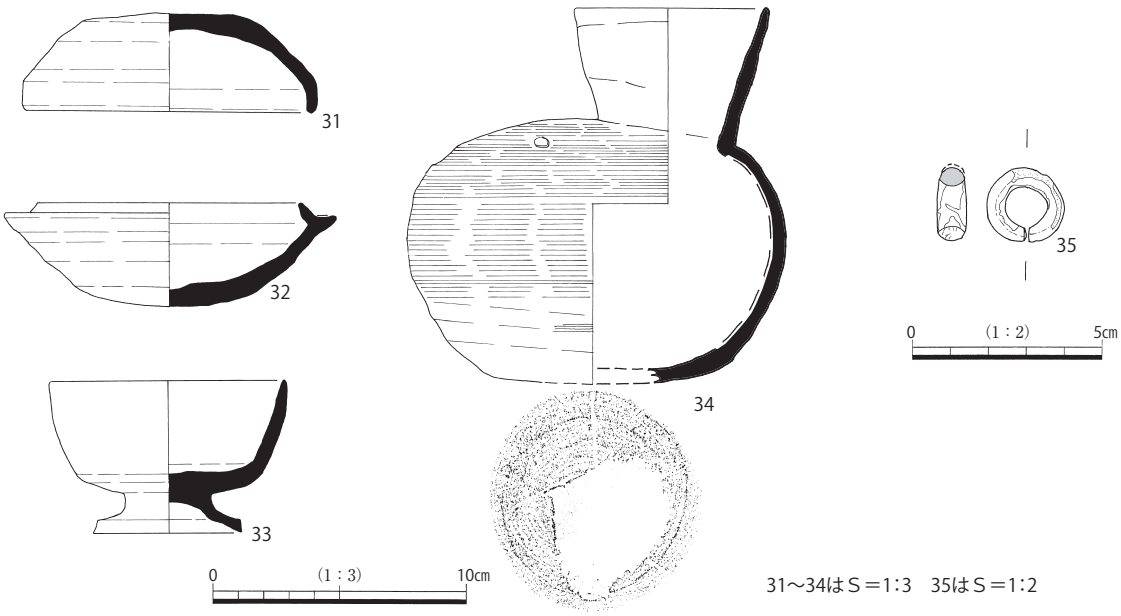


第20図　5号横穴墓玄室横断面写真

玄　門（第19図）　床面復元幅0.5～ 0.85m，長さ1.45m，残存高0.7mを測り，玄室側が幅広になると推定される。天井部は残存していないが，残存部の形状から復元高0.75m程度のアーチ形の断面形になると推定される。

玄　室（第19・20図）　平面形は幅1.6～ 1.7m，奥行1.75mのほぼ正方形である。墓道から玄室までの残存長は5.7mとなる。天井部の多くは残存していないが，残存部の状況から高さ1.1

第21図　5号横穴墓土層図（1:40）



第22図　5号横穴墓遺物実測図（1:3･1:2）

～ 1.2m程度の家形の断面形だったものと考えられる。家形の天井形態については横断面で確認したのみであり（第20図），軒部の詳細な加工等は不明である。また，左側壁袖付近に床面から掘り込まれた幅0.4m，奥行1.3m以上の小穴が確認された。左壁の小穴については詳細不明であるが，側壁から約0.5mの位置からさらに幅が広がるようである。

土層堆積状況（第21図）　玄室内奥の土層は不明であるが，④層以上が崩落土，流土等，⑤⑥層が遺物細片を多く含む再進入に伴う掻き出し土で，⑤層と⑥層の境界付近ではほぼ完形の平瓶も出土している。⑦層は床面直上の完形遺物を被覆する再進入前の流入土と考えられる。その上面が再進入面と思われる。初葬時の埋土がほとんど残っておらず，初葬後，最低１回の追葬もしくは盗掘に伴う玄室内への再進入があったものと考えられる。

遺物出土状況（第19・21図）　墓道⑤⑥層境界付近で須恵器平瓶が1点（34），玄門と玄室の境界付近地山直上で須恵器脚付椀が伏せられた状態で1点（33），玄室内中ほどの左側壁際で蓋杯がいずれも口縁側を上に向けた状態で１セット（31・32）出土している。その他，玄室内流入土中（⑦層か）より金環が１点，掻き出し土⑤⑥層で須恵器蓋杯，甕の小片が多く確認された。

出土遺物（第22図，カラー図版５，図版37）　31～ 33は玄室内出土須恵器で，31・32が蓋杯，33が脚付椀である。34は墓道上から出土した須恵器平瓶である。体部外面にカキメを施した後，肩部にはボタン状の粘土を1対張り付けている。底部には穿孔が確認されるほか，ヘラ記号「｜」と思われる痕跡が確認できる。35は玄室内出土の銅芯銀板貼鍍金の金環（第６章参照）である。断面形は楕円形で，開き部端に不明瞭なシワが残る。

時　期　玄室内床面直上出土の須恵器蓋杯は大谷５期の特徴を示し，墓道出土の須恵器平瓶も大谷５期～６a期の特徴を示す。⑤⑥層より出土した図化していない須恵器小片資料含め同様の時期の範疇で捉えられる。よって，横穴墓の築造，埋葬は大谷５期に始まり，遅くとも６a期の内には終了しているものと考えられる。

⑥　６号横穴墓（第23～ 25図，図版５）

立　地　丘陵奥の南東向き斜面，標高約15mに位置し，５号横穴墓までの一群とは丘陵斜面の傾斜方向をやや異にする。６号横穴墓玄室の一部は５号横穴墓の墓道～玄門の直下となり，上下に重なるように築造されている。

墓　道（第23・24図）　Ｅ－66°－Ｓ方向に開口し，床面幅0.65～ 0.9m，残存長2.2mを測る。羨道との境界部においては高低差５㎝前後の段を設け，羨道側を高くしている。

羨道・閉塞部（第23・24図）　床面幅1.25～ 1.6m，長さ２ｍを測り，玄室側が幅広となる。墓道よりやや幅広に形成されており，やや特殊な形状である。床面には，閉塞部より10～ 20㎝程度手前より，墓道に向けて深さ５～ 10㎝程度のT字状の排水溝を設ける。羨道の天井部は残存していない。残存高さ1.1m。閉塞部においては床面幅約１ｍ，奥行６～８㎝程度，玄門外縁幅15～ 20㎝程度の刳り込みを設けている。また，閉塞部刳り込みに対応して高低差約20㎝の段を設け，玄門側を高くしている。

玄　門（第23・24図）　床面幅0.6～ 0.9m，長さ1.2mを測り，玄室側が幅広となる。天井部の大部分は調査中に崩落したが，玄門検出時の形状から約0.7mのアーチ形の断面形になると推定される。

玄　室（第23・24図）　平面形は幅1.35m，奥行1.8mの長方形である。墓道から玄室までの残存長は7.2mとなる。天井部の大部分は残存していないが，残存部の形状からアーチ形の断面形になると推定される。残存高１m。

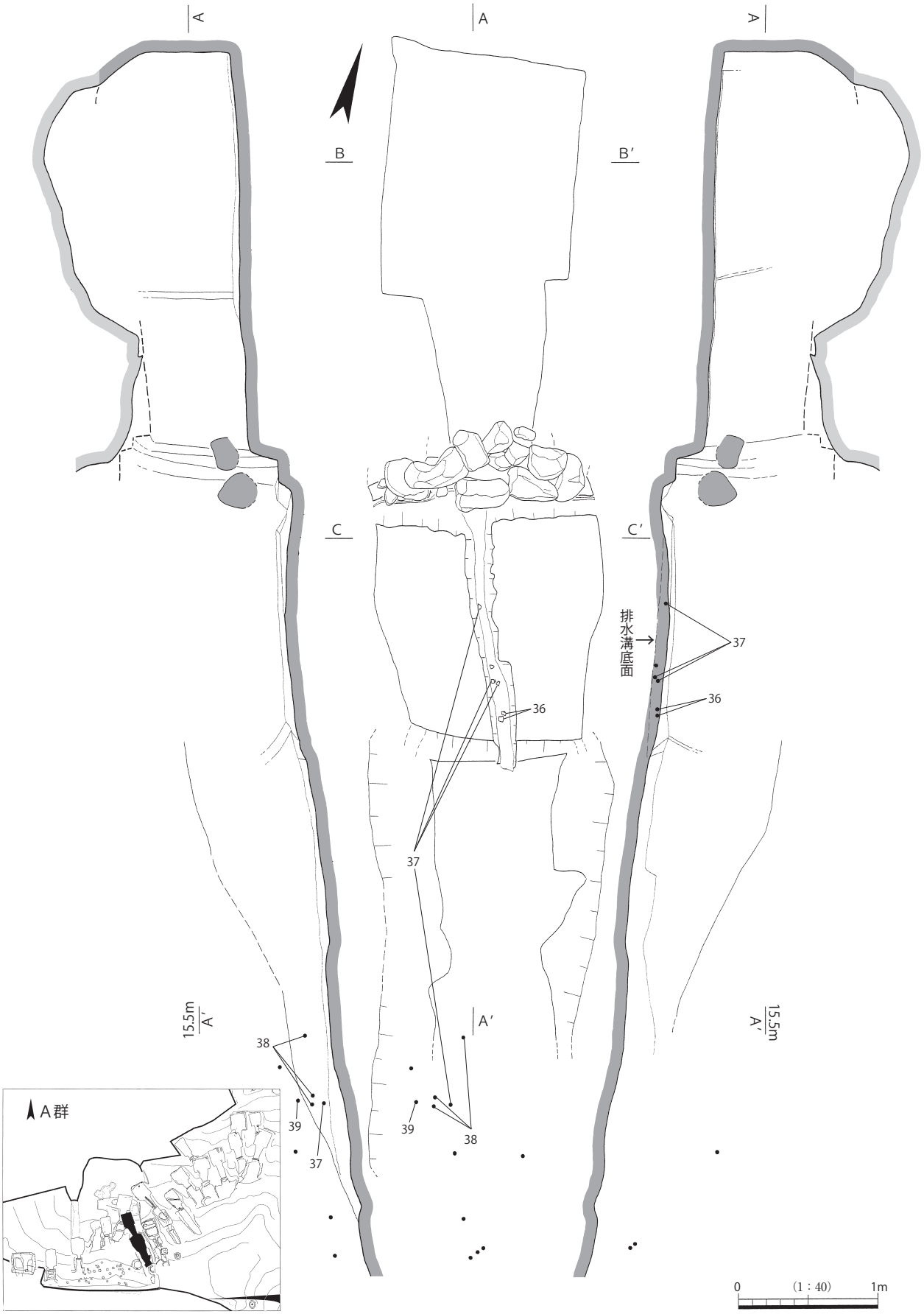
閉塞石（第23・24図）　割石・自然石が羨道閉塞部において10点以上出土しているが，玄門を覆うほどの量はない。また，小礫は閉塞部床面付近からも出土したが，大部分の石は床面から浮いた面より置かれている。これらは追葬時に外された石が再度設置されたものであろう。追葬による閉塞石設置後も再度掘削を受けた可能性があり，本来の石の量は不明だが，付近に撤去した閉塞石とみられる石もほとんど無く，刳り込み部分に設置した閉塞板を押さえる程度の量であったと推測される。

土層堆積状況（第24図）　堆積土は①層が攪乱土，②層が玄室内への最終進入後の流土，③～⑥層が再進入前の土，堆積土等である。③④層上面が最終進入と思われるが，⑤層上面においても進入があった可能性がある。⑦⑧層は須恵器小片を含んでおり，初葬後の流土等を再進入時に掻き出したものと推定した。床面までの攪乱を伴う再進入があったと思われる。⑦層の上面で閉塞石を積み直している。以上の状況から，初葬後，２回以上の再進入が行われ，その内，少なくとも１回は追葬に伴う進入であると思われる。

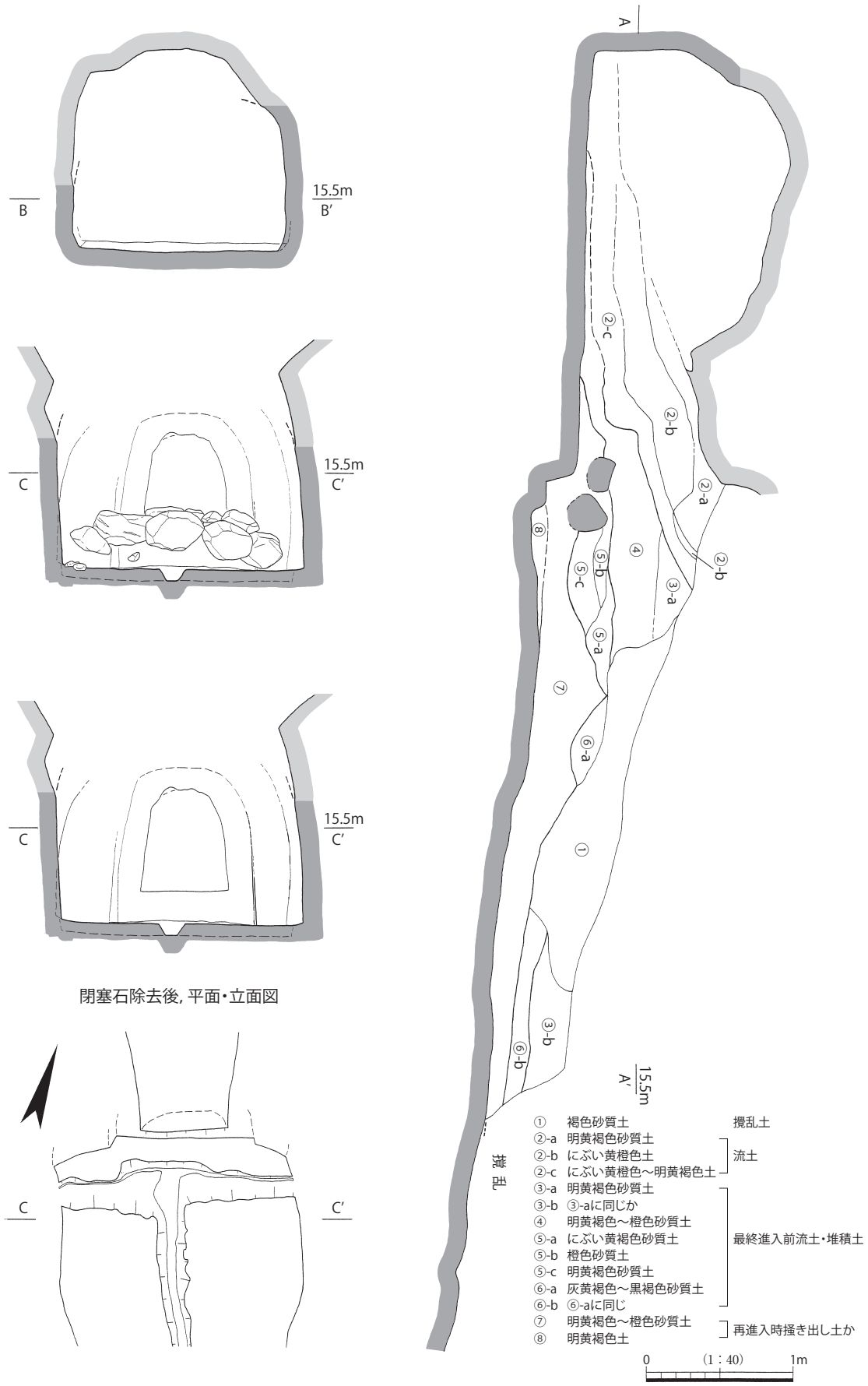
遺物出土状況（第23・24図）　羨道排水溝内⑧層中において須恵器蓋杯片（36・37ほか数片）が出土している。排水溝内出土の杯身（37）は排水溝内，⑦層内，攪乱土層内の小片５点が接合したものであり，再進入時に掻き出した⑦⑧層内に小片となった初葬時の須恵器が散乱したものと思われる。また，墓道上の攪乱土中及び⑥～⑧層中において須恵器蓋杯片数個体分（38ほか小片多数），平瓶１点（39），甕片１点が散在していた。この内，横穴墓に確実に伴う資料としては，⑥⑦層中と攪乱土中の資料５片が接合した須恵器杯身（38）がある。平瓶（39）は完形に近い状態で出土したが，墓道前方の攪乱土中からの出土であり，他横穴墓からの混入品である可能性も残る。その他，玄室内④層中より耳環の銅芯部が１点確認された。玄室内からの遺物はこの耳環１点のみであり，土器等は全く確認されていない。いずれかの再進入時に玄室内遺物は取り出されたものと思われる。

出土遺物（第25図，カラー図版５，図版37）　36・37は羨道排水溝から出土した須恵器蓋杯，38は墓道上出土須恵器杯身である。いずれも残存率１/２以下の破片で，外面のヘラケズリを省略している。39は墓道上攪乱土中出土の須恵器平瓶で，体部外面にカキメを施した後，肩部にボタン状の粘土を一対貼り付けている。40は玄室内出土の耳環で，銅芯部分のみが残存している。詳細不明であるが，本来長径2.5～３㎝程度の耳環であったと思われる。

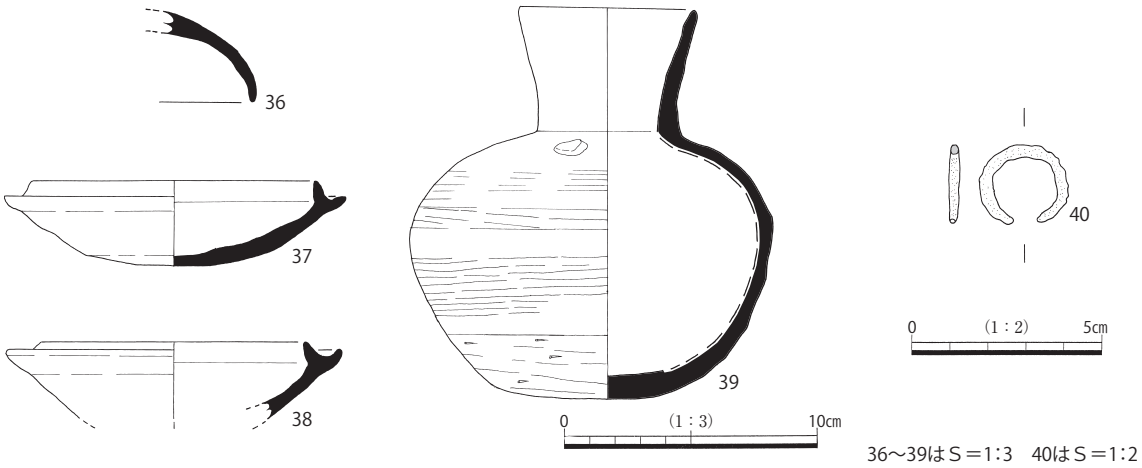
時　期　初葬に伴うと思われる排水溝内出土の須恵器は大谷５期の特徴を示し，墓道上出土の須恵器杯身も同様の特徴を示す。また，６号横穴墓に伴う資料か断定はできないが，平瓶も大谷５期～６a期の特徴を示す。よって，横穴墓の築造，埋葬は大谷５期に始まり，遅くとも６a期の内には終了しているものと考えられる。



第23図　6号横穴墓遺構図１（1:40，●は土器）



第24図　6号横穴墓遺構図２・土層図（1:40）



第25図　6号横穴墓遺物実測図（1:3・1:2）

⑦　７号横穴墓（第26～ 29図，図版７）

立　地　６号横穴墓の東に隣接して存在し，標高も６号横穴墓とほぼ同一である。

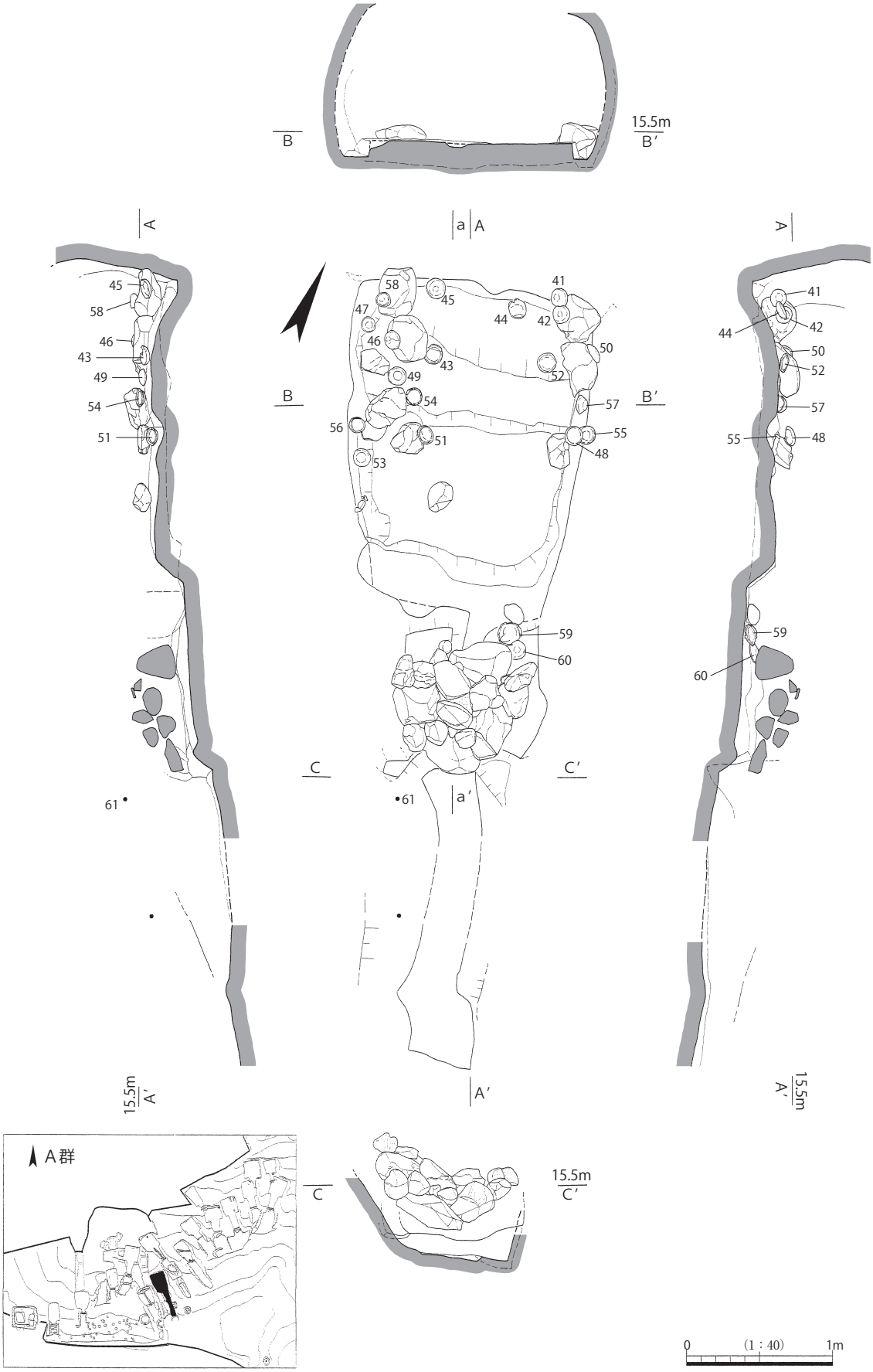
墓道・閉塞部（第26・27図）　主軸は歪んでいるが，中間値でＥ－64°－Ｓ方向に開口し，床面幅0.3m前後，残存長2.1mを測る。玄門との境界部には高低差15㎝前後の段を設け，玄門側を高くしている。

玄　門（第26・27図）　床面幅0.8～ 0.9m，長さ１m，残存高0.2mを測る。主軸方向中央に幅約30㎝，深さ５㎝前後の玄室へ続く排水溝を設ける。側壁の大部分と天井部は残存していない。墓道より玄門の床面幅が広くなる特異な形状となっている。

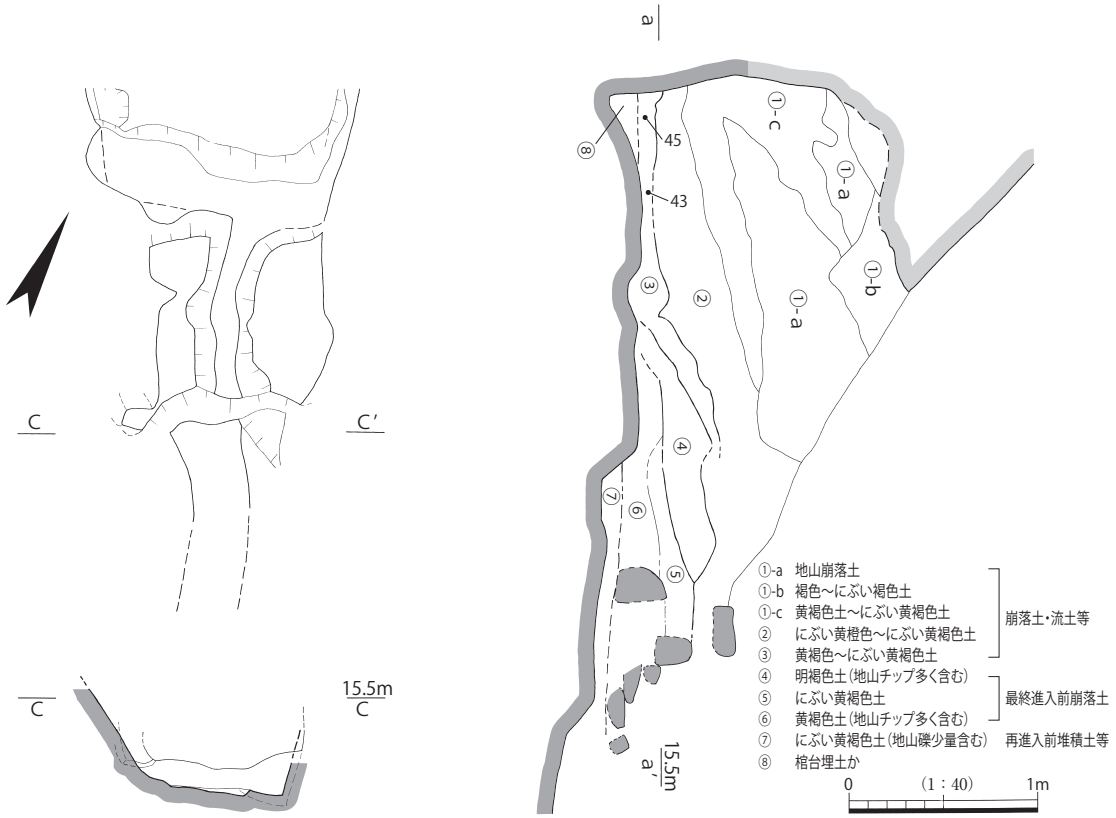
玄　室（第26図）　平面形は幅1.2～ 1.6m，奥行2.2mの奥が広がる台形であり，玄門から連続する深さ0.15m前後の排水溝が壁沿いに廻る。左袖のみの片袖式である。墓道から玄室までの残存長は5.3mとなる。天井部は残存していないが，残存部の状況からアーチ形の断面形だったものと考えられる。残存高0.9m。玄室内からは数点の割石・自然石が出土しているが，この内，奥壁沿いに配置された４点の石は棺台として配置されたものと考えられる。その他は閉塞石の転石である可能性が高い。石の棺台は床面直上より設置される。また，玄室の床面に凹凸が見られるが，再進入時の掘削に伴う可能性もあり，意図的なものかどうかは判断できない。

閉塞石（第26図）　割石・自然石が玄門部床面よりやや浮いた面から15点以上積まれていた。玄門床面から0.6m程度まで残存し，上部は追葬面で外されているものと考えられる。玄室内にも数点の転石が確認される。

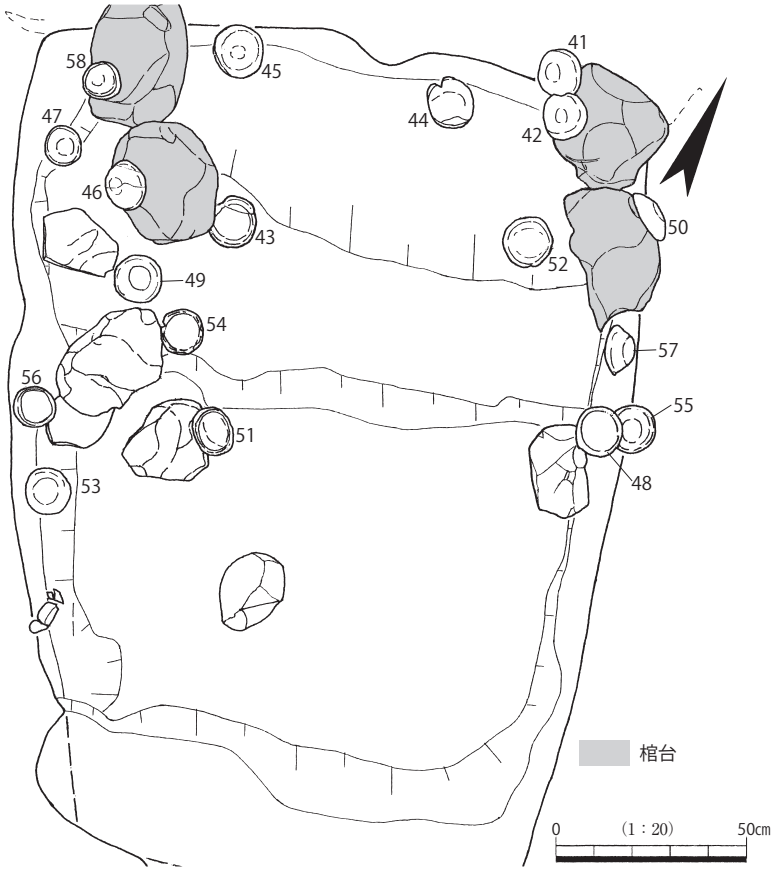
土層堆積状況（第27図）　①～③層は崩落土・流土で，③層に被覆されて多くの遺物が良好な状態で遺存している。④～⑥層は最終進入前の流土で，その上面が最終進入面となると思われる。⑤⑥層上面も進入面と思われ，玄室内の転石はこの面に乗るものが確認できる。⑦層は排水溝内及び玄門床面直上の堆積土で，その上面で閉塞石が積み直されているようであり，追葬に伴う再進入があったと考えられる。その他，土層観察上は明確に分層できなかったが，出土遺物のレベルから見て，玄室奥壁沿いの排水溝内にも１層土層が存在したものと思われ，これを⑧層として示す。⑧層中には全く出土



第26図　7号横穴墓遺構図１（1:40，●は土器）



第27図　7号横穴墓遺構図２・土層図（1:40，●は土器）

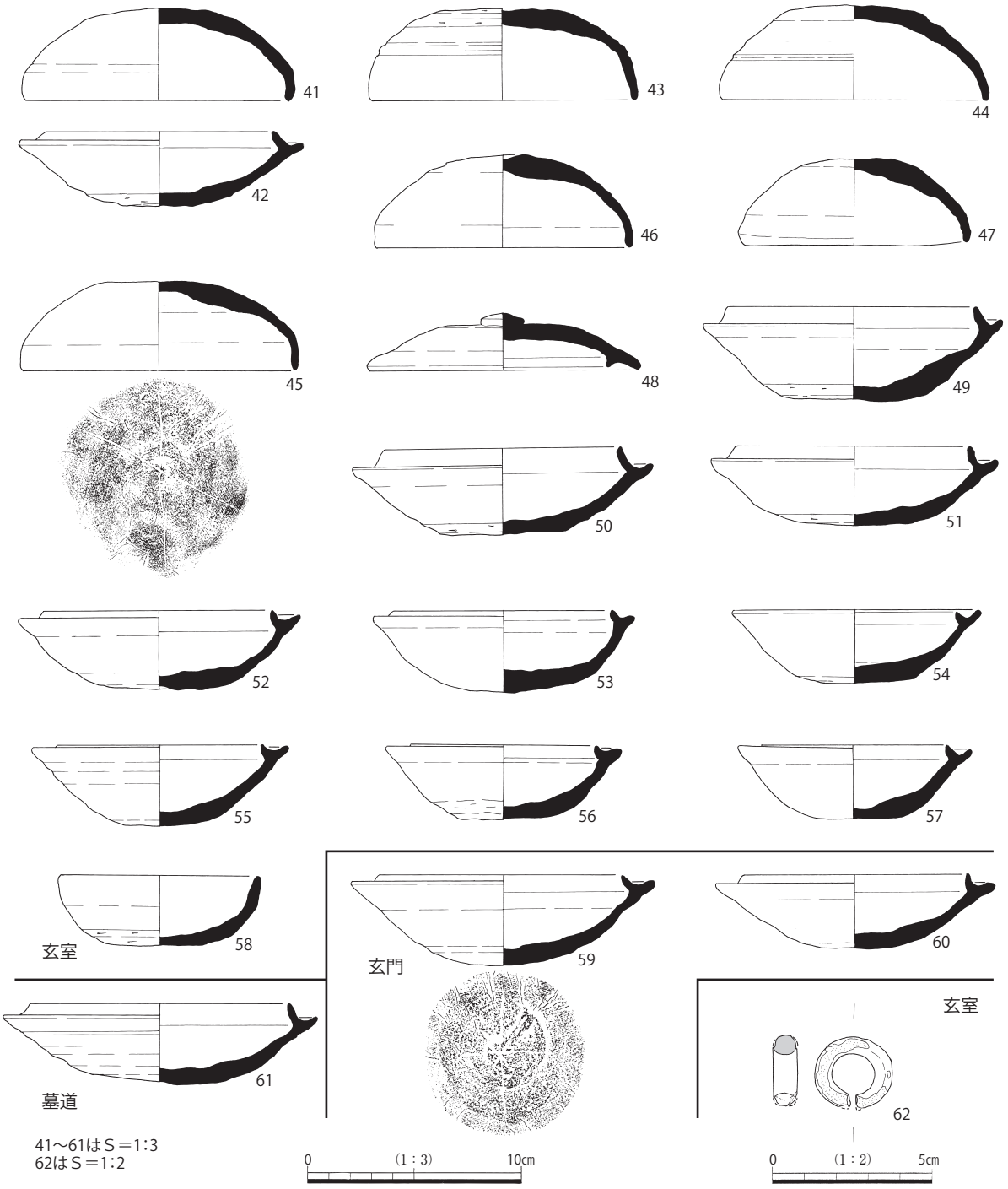


第28図　7号横穴墓玄室内遺物出土状況（1:20）

遺物が確認されず，初葬時から玄室奥壁沿いの排水溝と石の棺台の下半を埋めていたものであろう。以上の状況から，初葬後３回以上の再進入が行われ，その内，少なくとも１回は追葬にともなうものであったと考えられる。

遺物出土状況（第26～ 28図）

玄室内床面直上～③層中より須恵器蓋杯19点（41～ 58），銀環１点（62），銅製品細片１点，その他須恵器杯，甕の小片が数点出土している。須恵器蓋杯については，41と42の蓋杯が石の棺台右奥の石に立てかけるように並べて配置されており，セッ



第29図　7号横穴墓遺物実測図（1:3･1:2）

トになるものと思われる。土器枕として使用されたものであろうか。その他の須恵器蓋杯は基本的に床面直上付近と⑧層上面付近，石の直上で出土したものが大半であるが，新しい様相を示す48の杯蓋と58の杯身は転石の上面より高い位置での出土となっている。土器枕と推定した41と42の蓋杯を除き，規則的な配置を見ることはできず，その多くが再進入時に移動されているものと思われる。最終進入が追葬以外の目的であった可能性も想定しておきたい。銀環は玄室内中央奥③層より，銅製品細片は玄室内右奥③層より確認されたものであるが，正確な出土位置は不明である。

また，玄門と玄室の境界付近の床面よりやや高い位置から須恵器杯身２点（59・60）が，墓道上の②層上面付近で須恵器杯身１点（61），須恵器小片１点が出土している。

出土遺物（第29図，カラー図版５，図版37・38）　41～58は玄室内より出土した須恵器で，いずれもほぼ完形の蓋杯である。杯蓋43には天井部外面に粗雑なヘラケズリが，杯蓋44にはヘラケズリ後ナデが，杯身42，49～51には底部外面に周辺ヘラケズリが，杯身58には粗雑なヘラケズリが施されている。45の天井部内面にはヘラ記号「×」が確認できる。この内，48は返りと宝珠つまみが付き比較的口径の広い杯蓋で，今回調査した横穴墓出土品の中でも最も新しい様相を示す。

59・60は玄門と玄室の境界付近から出土した須恵器杯身，61は墓道②層下面付近から出土した須恵器杯身である。59には底部外面にヘラ記号「×」が確認できる。

62は玄室内③層から出土した銅芯銀板貼の銀環である。断面形は円形に近い。開き部端の造りは不明瞭であるが，銀板を折り込んでいるものと思われる。その他，図示していない資料に玄室内３層出土銅製品細片１点があるが，62の銀環と対となる耳環の銅芯部と思われる。

時　期　出土遺物の須恵器は大谷４～６ｄ期のまでの各時期の特徴を示し，明らかに複数時期の資料が混在する。横穴墓の築造，埋葬は大谷４期に始まり，６d期まで追葬が行われたものと考えられる。

⑧　８号横穴墓（第30～32図，図版８）

立　地　７号横穴墓の北東に隣接して存在し，標高は約16mと７号横穴墓よりやや高い。また，８号横穴墓玄室位置は，後述する10号横穴墓の墓道直下となっており，上下に重なるように築造されている。

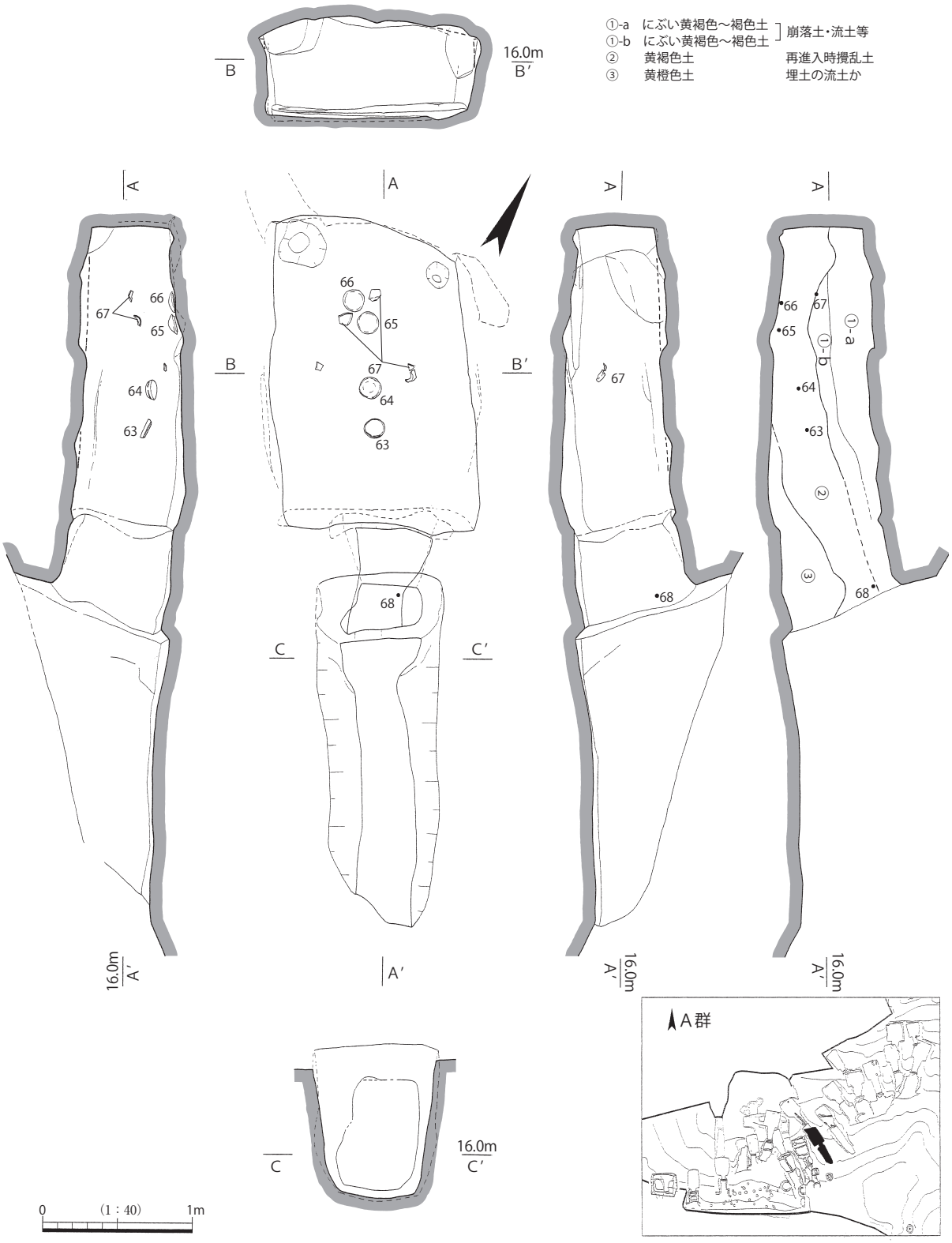
墓道・閉塞部（第30図）　Ｅ－64°－Ｓ方向に開口し，床面幅0.28～0.4m，残存長2mを測る。床面は玄門より0.6m付近から閉塞部に向けて，ゆるやかに低く傾斜する。閉塞部には高低差10㎝前後の段を設けて玄門側を高くする。また，閉塞部側壁を削り込んで床面幅0.55mまで広げる。閉塞石は無かった。

玄　門（第30図）　床面幅0.32～0.5m，長さ0.65m，高さ0.75mを測り，玄室側がやや幅広になる。天井部は平形で，長方形状の断面形である。また，床面は玄室に向けてゆるやかに低く傾斜する。

玄　室（第30・31図）　平面形は幅1.25～1.35m，奥行2.05mのややいびつな長方形である。墓道から玄室までの残存長は4.7mとなる。玄門との境界部で若干３㎝程度の段を設け，玄室側を低くしている。天井部は現状で高さ0.55～0.75mのやや丸みを帯びた平形天井であるが，玄室上に存在する10号横穴墓道床面が陥没しており，８号横穴墓の天井部も若干下がっている可能性がある。側壁・天井境界部は床面からの高さ0.5～0.6mで，浅い軒を加工している。また，床面に小さな窪みが２カ所，壁面に小穴が２カ所見られるが，人為的なものではないと思われる。

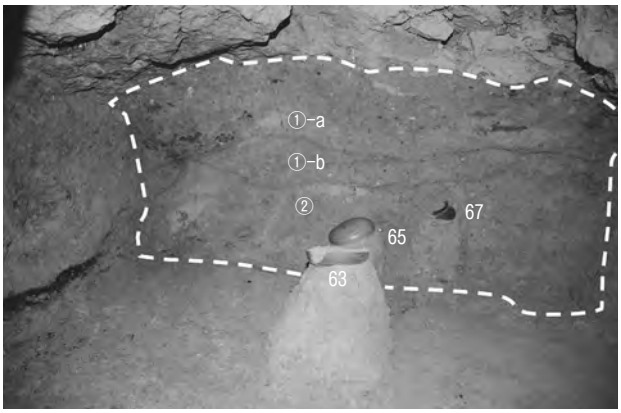
８号横穴墓の玄室形態は今回の調査で唯一の平形天井となる特徴的な形態である。玄門～玄室間の段，極端に低い天井も上塩冶横穴墓群における他の横穴墓にはほとんど見られない特徴である。

土層堆積状況（第30図）　①層は崩落土及び流土，②層は再進入時の攪乱土等と思われる。②層中には小片を含む須恵器が散在している。③層は初葬時埋土の流土であろうか。以上の状況から，初葬後，



第30図　8号横穴墓遺構図・土層図（1:40，●は土器）

最低１回の追葬もしくは盗掘に伴う玄室内への再進入があったものと考えられる。また，堆積土は天井部まで隙間なく堆積しており，奥壁左端の小穴からも土砂が流入したこと，天井が陥没により本来の高さより若干下がっていることなどが想定される。

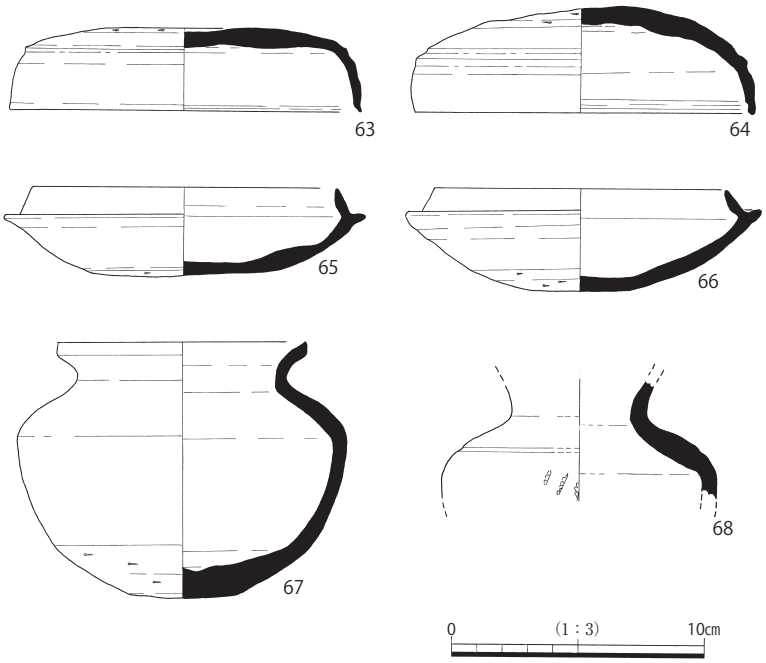


第31図　8号横穴墓玄室横断面写真

遺物出土状況（第30図）　玄室内中央付近を中心に，堆積土②層中より須恵器蓋杯４点（63～66），壺片（67），甕片数点が，玄門内堆積土①②層中より瑕片１点（68）が確認された。基本的には②層中に浮いた状態で確認されるが，玄室内出土の須恵器杯身２点（65, 66）は床面直上付近からの出土であり，いずれも口縁を下に伏せて並ぶ。

出土遺物（第32図，図版38）　63～67は玄室内出土の須恵器で，63～66が蓋杯，67が短頸壺である。蓋杯は杯蓋杯身ともに丁寧なヘラケズリが施される。68は玄門内出土の須恵器瑕小片である。

時　期　玄室内出土の須恵器蓋杯はいずれも大谷３期の特徴を示す。よって，横穴墓の築造，埋葬も大谷３期の中で終了しているものと考えられる。



第32図　8号横穴墓遺物実測図（1:3）

⑨　９号横穴墓

（第33～35図，図版９）

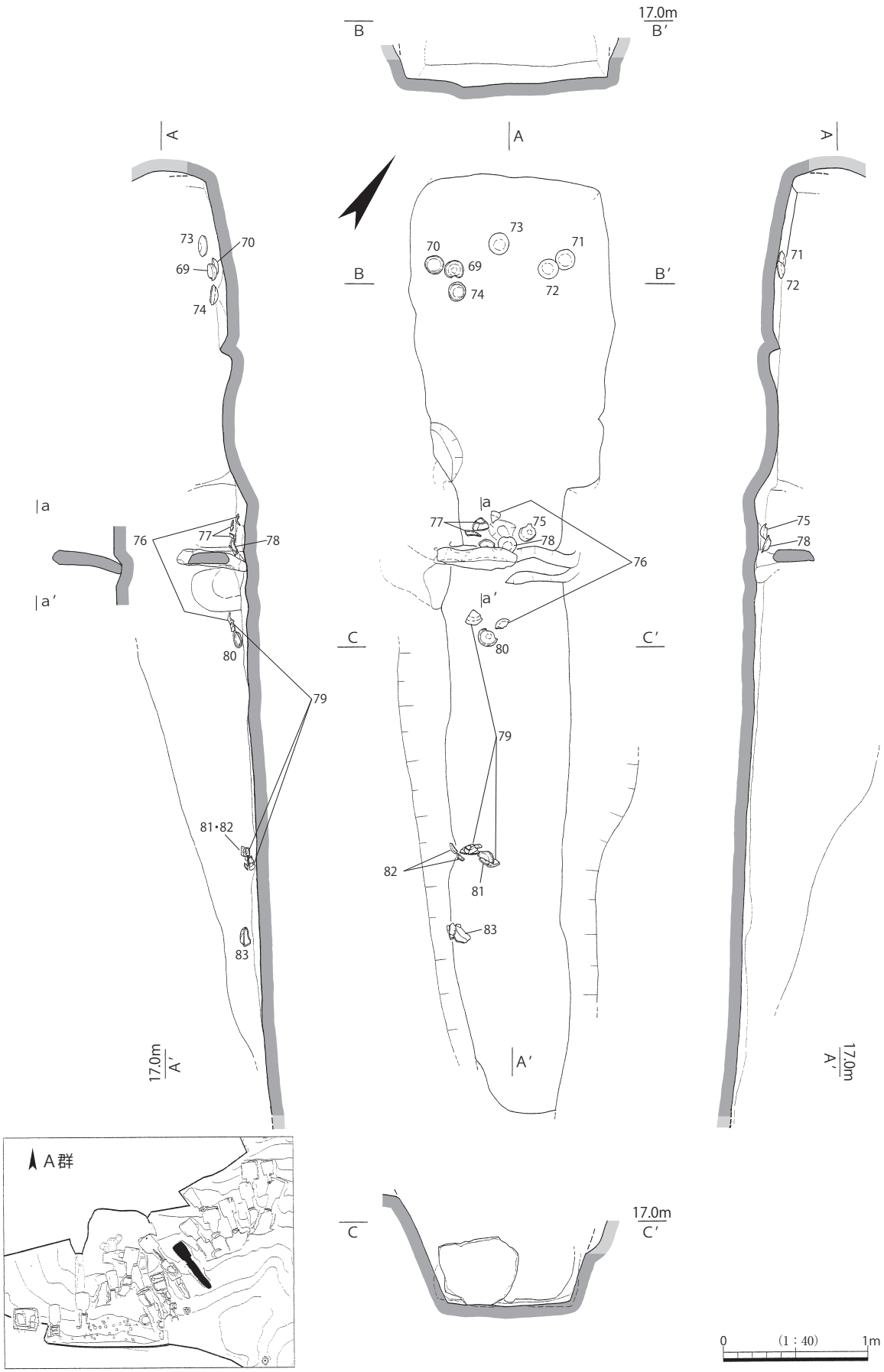
立　地　８号横穴墓の北東約2.5mに存在し，標高は16.5mと８号横穴墓よりやや高い。

墓道・閉塞部（第33図）　Ｅ－54°－Ｓ方向に開口し，床面幅0.7～0.85m，残存長3.9mを測る。また，左側壁玄門部付近に床面から掘り込まれた幅30㎝，高さ35㎝，奥行50㎝以上の小穴が確認される。閉塞部には幅20㎝，深さ５㎝程度の溝が主軸方向に直交してわずかに残存し，溝と連続して閉塞部側壁も若干削り込まれている。

玄　門（第33図）　床面幅0.7～0.8m，長さ0.45mを測る。側壁の大部分と天井部は残存していない。

玄　室（第33図）　平面形は幅1.15～1.35m，奥行2.1mの長方形である。墓道から玄室までの残存長は6.45mとなる。左袖はわずかに稜線を残す程度で，片袖状の形状となる。残存高は0.5m程度で，側壁と天井部の大部分が残存しておらず，断面形は不明である。床面は凹凸が見られるが，地山の土質境界に沿うもので，意図的な加工ではない。

閉塞石（第33図）　割石の板状砂岩１点が閉塞部溝に差し込むように立てられていた。板石の大きさ



第33図　9号横穴墓遺構図（1:40）

第34図　9号横穴墓土層図（1:40，●は土器）

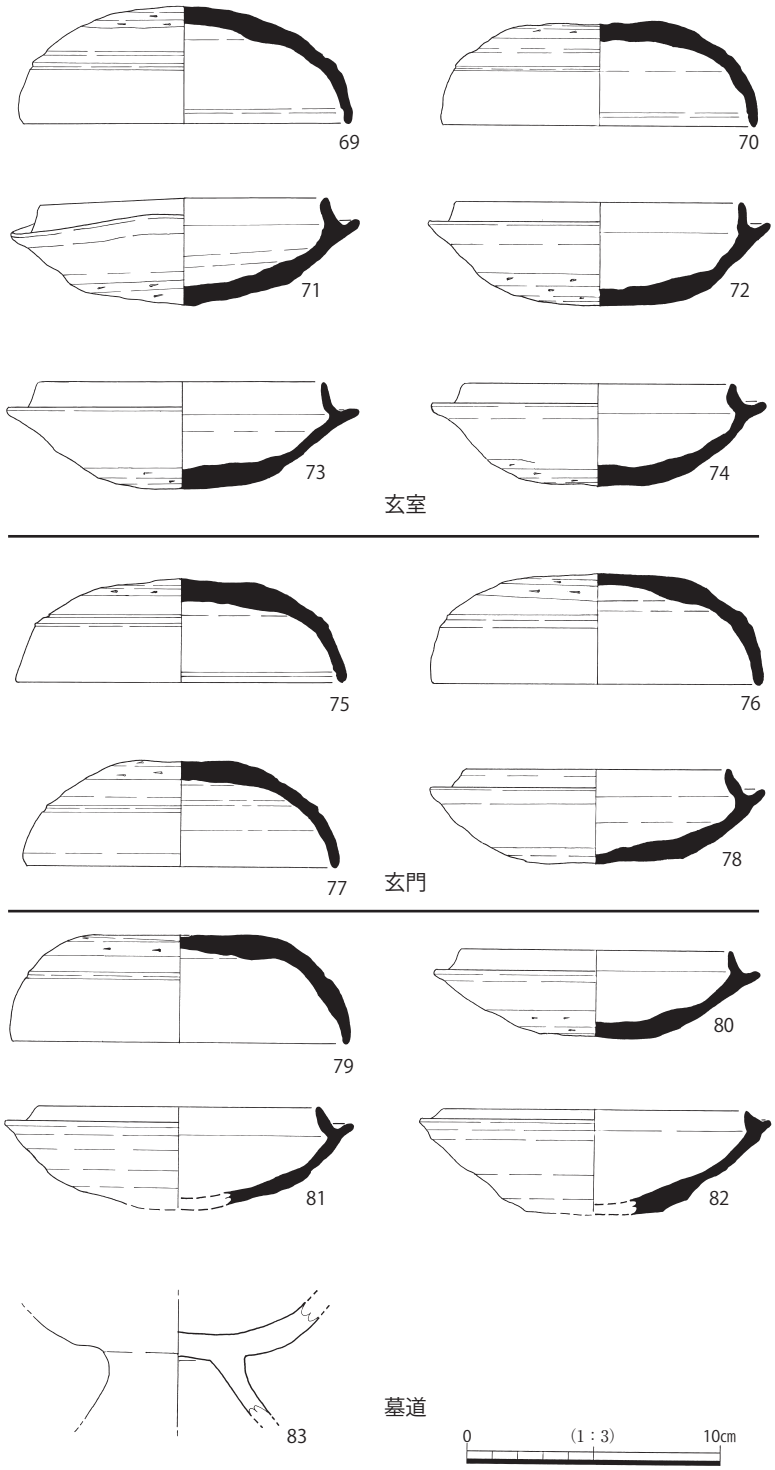
は幅55㎝，高さ47㎝を測り，閉塞部左側下半を覆う程度のものである。本来他にも閉塞石が存在したとみられるが，残存しない。

土層堆積状況（第34図）　①②層は崩落土及び流土，③④層は攪乱土である。⑤⑥層は最終進入前の流土等で，その上面が最終進入面と考えられる。⑦～⑩層は再進入時の掻き出し土と思われ，土層中からは須恵器，土師器が大部分破片の状態で確認される。初葬後に床面まで掘削を受ける再進入があったものであろう。以上の状況から，初葬後最低２回の追葬もしくは盗掘に伴う玄室内への再進入があったものと考えられる。

遺物出土状況（第33・34図）　玄室内からは，奥壁寄りの床面直上及び床面からやや浮いた地点でほぼ完形の須恵器蓋杯が６点（69～74）出土している。この内，杯身（71・72）は床面直上出土資料で，いずれも口縁を下に伏せた状態で並んで出土した。多少の移動はあるだろうが，副葬時の配置をある程度保っているものと思われる。本来土器枕であった可能性も考えられよう。その他は⑤層上面～⑤層中に浮いた状態で出土しており，再進入時に移動しているものと思われる。

玄門部では閉塞石背面の玄門床面付近より須恵器杯身のほぼ完形が１点（78），杯蓋破片３個体分（75～77），壺甕小片１点が乱雑に出土している。再進入時掻き出し土⑩層内からの出土であり，76については墓道の破片資料とも接合する。

墓道上の床面付近からは須恵器片，土師器片が数点散在して出土している。玄門出土資料に接合したものを除くと，須恵器杯蓋１点（79），杯身３点（80～82），土師器高杯１点（83）に接合できた。いずれも再進入時掻き



第35図　9号横穴墓遺物実測図（1:3）

出し土⑦～⑩層中の出土である。

出土遺物（第35図，図版38・39）

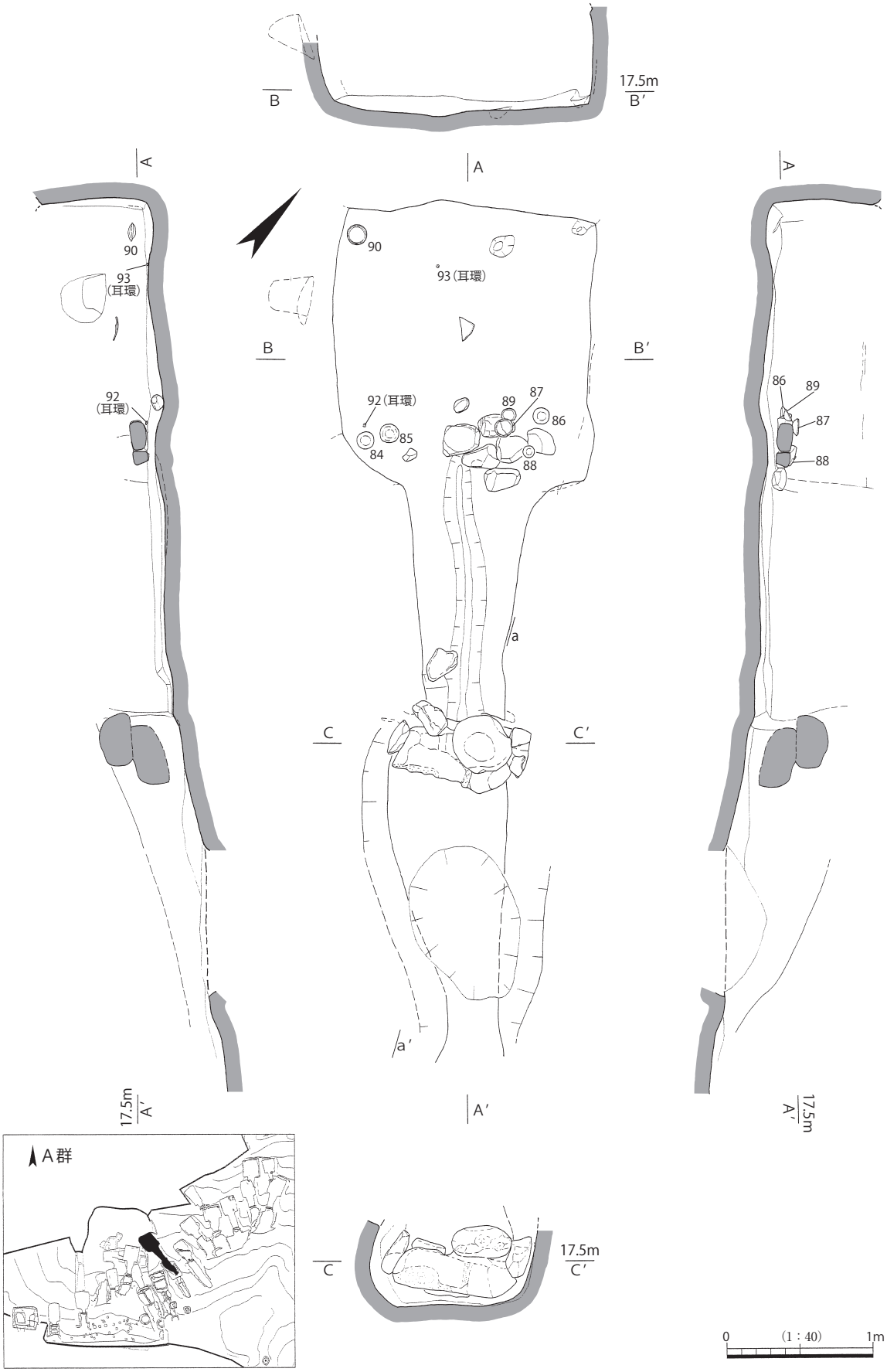
69～74は玄室内出土の須恵器蓋杯で，杯蓋の天井部外面には69で粗雑なヘラケズリが，70で周辺ヘラケズリが施される。

75～78は玄門出土の須恵器蓋杯である。78の杯身はほぼ完形であるが，それ以外は残存率１/２以下の破片資料である。杯蓋の天井部外面にはいずれも粗雑なヘラケズリが施される。

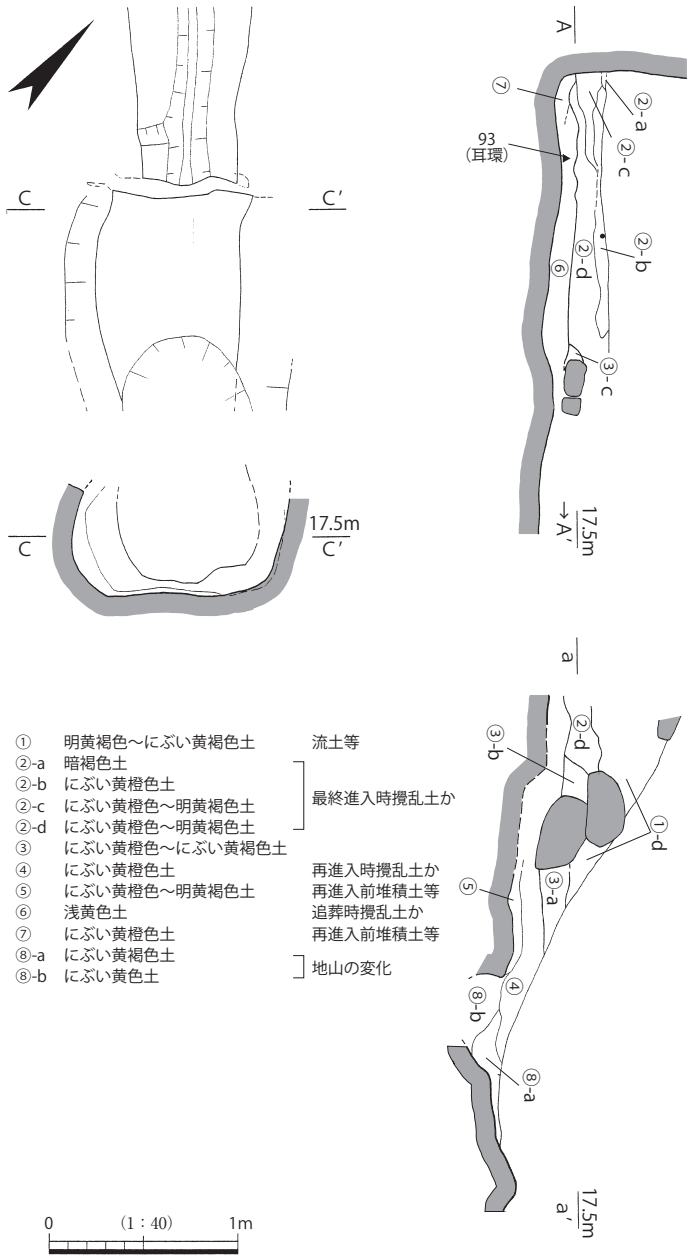
79～82は墓道出土の須恵器蓋杯である。79，80はほぼ完形であるが，81，82は残存率１/２以下の破片資料である。79の杯蓋は天井部外面に丁寧なヘラケズリが施すもので，他の須恵器よりやや古い特徴を示す。82の杯身は底部外面のヘラケズリを省略し，返りが低いもので，他の須恵器より新しい特徴を示す。

83は墓道出土の土師器高杯片である。杯部と脚部の接合部のみが残存する。

時　期　玄室内出土須恵器はその大部分が大谷４期のものであり，墓道～玄門部より出土した須恵器もおおむね大谷４期の範疇で捉えられるが，墓道出土の杯蓋79は大谷３期に近い特徴を示し，杯身82は大谷５期に近い特徴を示す。ただし，79についてはヘラケズリ以外に新しい要素が見られ，82については口径に古い要素を残しており，典型的な３期，５期の資料ではない。よって，横穴墓の築造，埋葬は大谷４期初頭頃に始まり，大谷５期初頭頃までには終了したものと考えたい。



第36図　10号横穴墓遺構図１（1:40）



第37図　10号横穴墓遺構図２・土層図（1:40，●は土器▲は金属製品）

⑩　10号横穴墓

（第36～38図，図版10）

立　地　８号横穴墓の北西に存在し，標高は17.5mと８号横穴墓の上段に位置する。８号横穴墓の玄室が10号横穴墓墓道直下となっており，一部は８号横穴墓の玄室へ向けて陥没している。

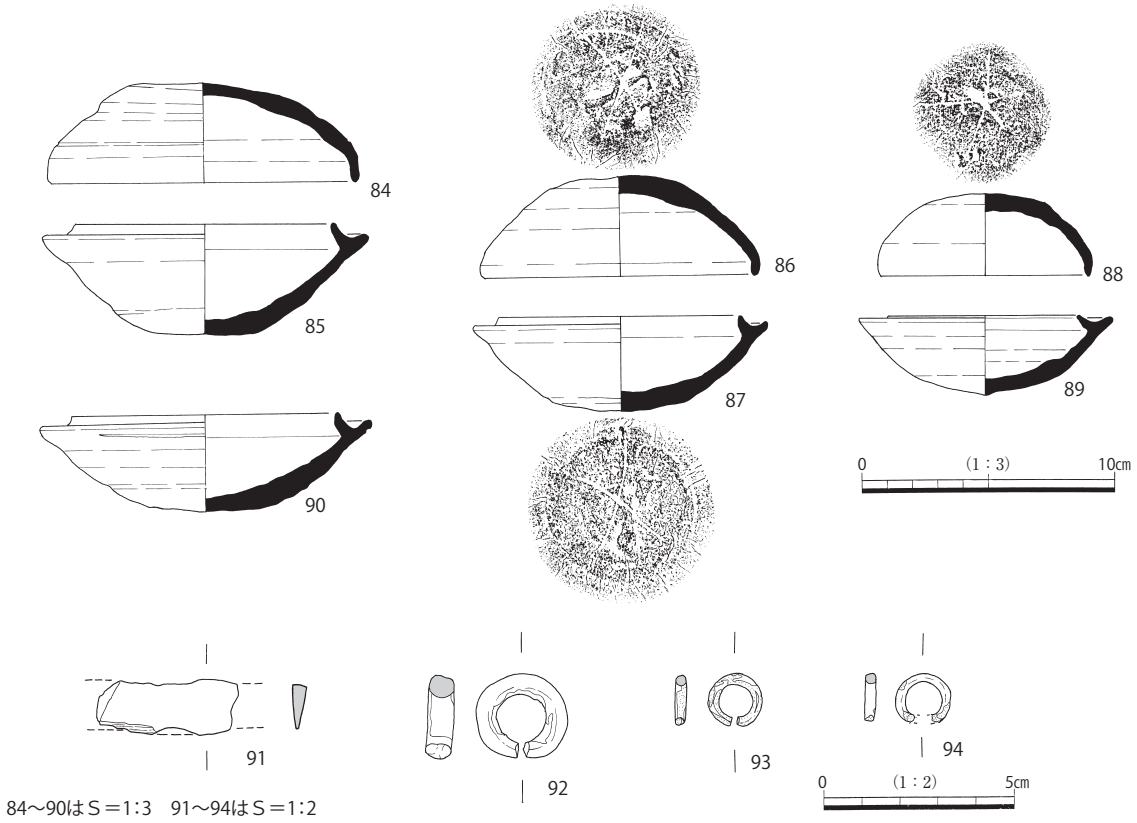
羨道・閉塞部（第36・37図）　主軸は歪んでいるが，歪みの少ない右壁側の床面でＥ－48°－Ｓ方向に開口軸を取り，床面幅0.35～0.8m，残存長2.3mを測る。床面の一部は下方に築造された８号横穴墓に向けて陥没している。玄門との境界部には高低差10㎝前後の段を設け，玄門側を高くしている。

玄　門（第36・37図）　床面幅0.55～１m，長さ1.6m，残存高0.55mを測り，玄室側が幅広になる。主軸方向中央に幅約20㎝，深さ５㎝前後の排水溝を設ける。天井部は残存していない。

玄　室（第36図）　平面形は幅1.7m，奥行1.9mの正方形に近い形状である。墓道から玄室までの残存長は5.8mとなる。天井部は残存せず，壁面の残存状況も悪いが，右側壁の床から0.65mの位置にわずかに軒線が残る。残存高0.75m。本来家形の断面形だったものであろう。左側壁に幅30㎝，高さ30㎝，奥行30㎝程度の小穴が確認される。

閉塞石（第36図）　割石・自然石が閉塞部床面よりやや浮いた④層上面から５点積まれていた。追葬に伴い積み直されたものであろう。最下部には長さ80㎝，幅35㎝，高さ25㎝の大形の石を使用している。閉塞部床面から0.55m程度まで残存し，上部は再進入面で外されているものと考えられる。玄門，玄室内にも数点の転石が確認される。

土層堆積状況（第37図）　①層は流土等，②層は玄室内への最終進入時攪乱土である。②層下面（③⑥層上面）が最終進入面と思われる。③～⑦層は最終進入前の攪乱土，堆積土等で，④⑥層が再進入に伴う攪乱土，③が再進入後の堆積土，⑤⑦が再進入前の堆積土と思われる。床面まで攪乱を受ける



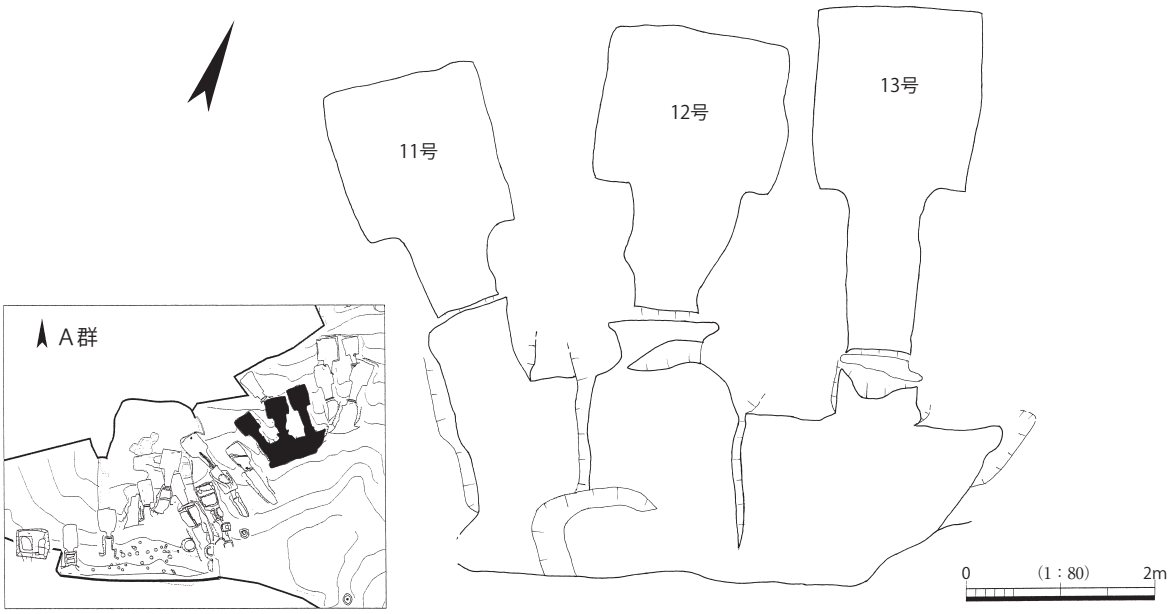
第38図　10号横穴墓遺物実測図（1:3･1:2）

再進入を行った後，閉塞石を④層上面から積み直したものであろう。追葬に伴う進入と考えられる。⑧層は墓道床面陥没に伴うものである。以上の状況から，初葬後，２回以上の追葬もしくは盗掘に伴う玄室内への再進入が行われ，その内少なくとも１回は追葬に伴う進入であると考えられる。

遺物出土状況（第36・37図）　玄室内②層中より甕片１点，②層下面（③⑥層上面）付近より須恵器蓋杯７点（84～ 90），⑥層中より金環３点（92～ 94），出土層位不明（②⑥層中）の刀子片１点（91）が出土した。②層下面付近出土須恵器蓋杯の内，杯身87，杯蓋88は閉塞石転石に乗った状態で出土しており，隣接してこれらとセットになると思われる杯蓋86（87とセット），89（88とセット）も出土する。本来転石上に２セット組み合って配置されたものであろうか。また，左袖部付近にセットになると思われる杯蓋（84）と杯身（85）がいずれも口縁を下にして並んで出土している。これらは10号横穴墓出土須恵器で最も古い様相を示すが，追葬時の攪乱土と思われる⑥層上面からの出土である。再進入時に再配置されたものであろうか。金環については，左袖付近より１点（92），奥壁寄り中央部より１点（93），奥壁寄り右半部より１点（94※正確な位置不明）が出土しているが，追葬時の攪乱土と思われる⑥層中からの出土であり，本来の位置は不明である。

出土遺物（第38図，カラー図版５，図版39・57）　84～ 90は玄室内出土の須恵器蓋杯である。84と85，86と87，88と89がそれぞれセットになると考えられる。いずれもヘラケズリを省略するものである。86の天井部，87の底部外面，88の天井部外面にヘラ記号「×」が確認される。

91～ 94は玄室内出土の金属製品である。91は刀子小片で，一部鞘の木質が残る。92～ 94は銅芯銀



第39図　11～13号横穴墓配置図（1:80）

貼鍍金（第６章参照）の金環で，その内93・94は直径1.5㎝程度の小型品である。断面形はいずれも円形に近い。開き部端部の状況は92のみ確認可能で，銀板を折り込んだシワがわずかに確認できる。

時　期　玄室内出土須恵器は大谷５～６a期の特徴を示す。よって，横穴墓の築造，埋葬は大谷５期に始まり，大谷６a期まで追葬が行われたものと考えられる。

⑪　11号横穴墓（第39～42図，図版11）

立　地（第39図）　９号横穴墓の北東約2.5mに存在し，標高は約18mと９号横穴墓よりも高い場所に位置する。11号横穴墓の東方には，ほぼ同様の標高に12・13号横穴墓が隣接して築造されており，各横穴墓の前庭部が重なり合う形となっている。

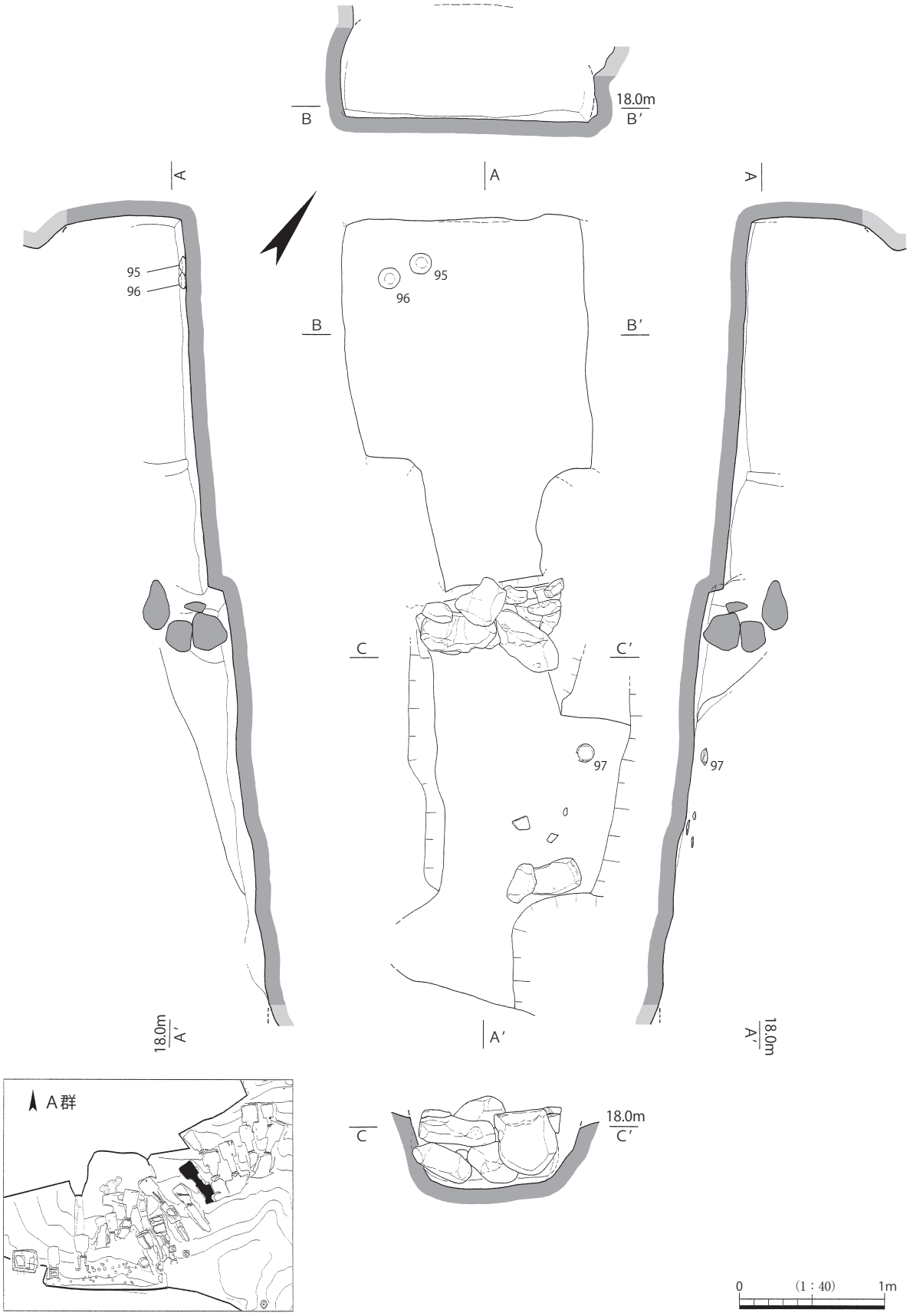
前　庭（第40図）　Ｅ－55°－Ｓ方向に開口し，床面幅1.3m以上，残存長２mを測る。左側壁は羨道に連続し，右側壁側のみが広がる変則的な形状である。また，右側壁も12号横穴墓の前庭部との重なりで失われ，本来の形状は不明である。13号横穴墓の前庭部と連続する平坦面であった可能性もある。

羨道・閉塞部（第40・41図）　床面幅0.8m前後，長さ0.9m，残存高0.5mを測る。天井部は残存していない。閉塞部には高低差10㎝前後の段を設けて玄門側を高くし，閉塞部側壁も若干削り込まれている。

玄　門（第40図）　床面幅0.65～１m，長さ0.8m，残存高0.3mを測り，玄室側が幅広になる。天井部は残存していない。

玄　室（第40図）　平面形は幅1.55～1.7m，奥行1.7mの正方形に近い形状である。前庭から玄室までの残存長は5.4mとなる。天井部は残存していないが，残存部の状況からアーチ形の断面形だったものと考えられる。残存高0.8m。

閉塞石（第40図）　割石・自然石が閉塞部に地山直上よりわずかに浮いた位置から十数点積まれていた。



第40図　11号横穴墓遺構図１（1:40）

閉塞部床面から0.55m程度まで残存し，最上部の閉塞石は最終進入時に動かされていると考えられる。その他，閉塞部から２m弱離れた墓道上にも数点の転石が確認される。

土層堆積状況（第41図）　①層は崩落土及び流土，②層は玄室内への最終進入後の玄室内流土である。②層下面（③層上面）が最終進入面であろう。③④層は閉塞石設置後の流土または埋土，⑤～⑦層は閉塞石設置前の堆積土等で，⑤層上面で閉塞石が積み直されている可能性もあるが，判然としない。以上の状況から，初葬後，少なくとも１回の追葬もしくは盗掘に伴う玄室内への再進入が行われたものと思われる。

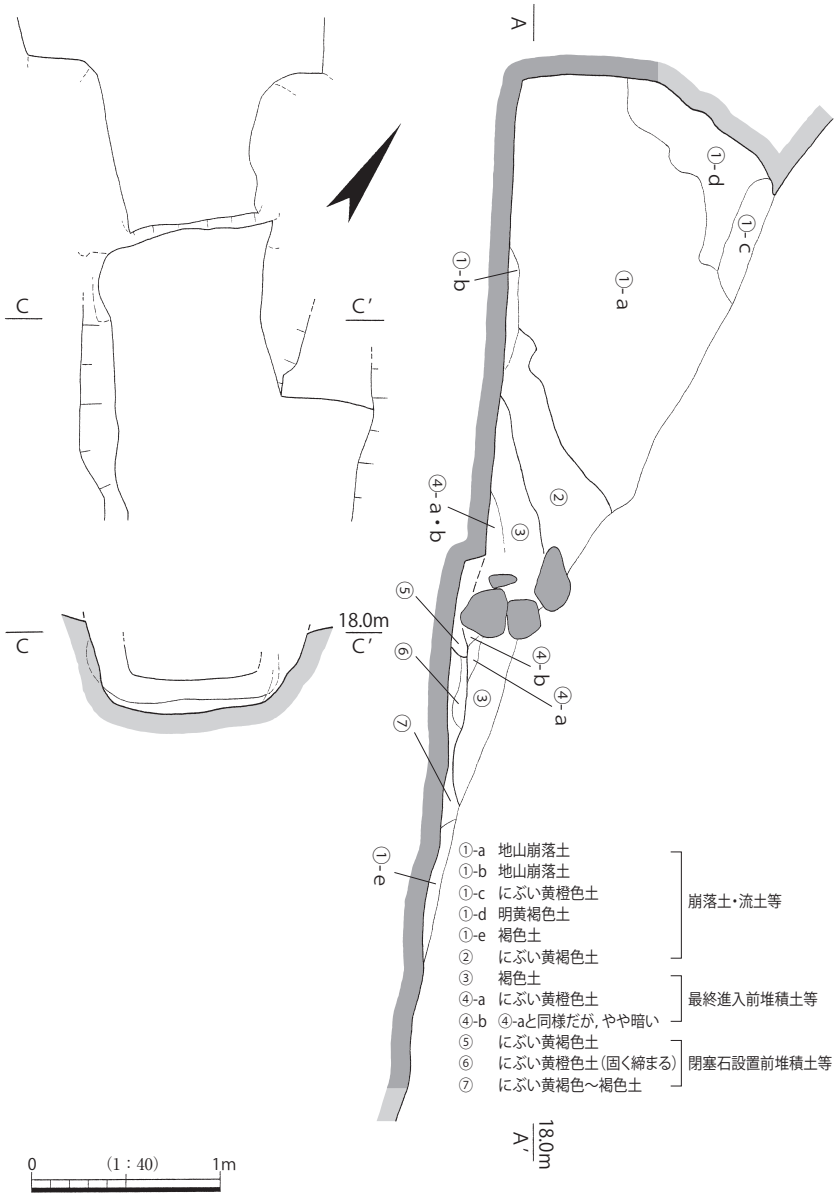
遺物出土状況（第40・41図）

玄室内床面直上より須恵器杯身２点（95・96），前庭部③層中より須恵器杯身１点（97），土師器小片数点が出土した。玄室内出土の須恵器杯身２点は玄室左奥で口縁部を伏せた状態で並んで出土しており，土器枕の可能性がある。

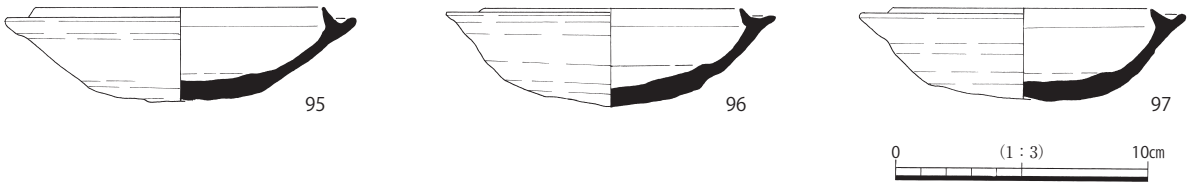
出土遺物（第42図，図版39）

95～97は須恵器杯身で，95・96が玄室内から，97が前庭部より出土したものである。いずれも底部外面のヘラケズリを省略している。

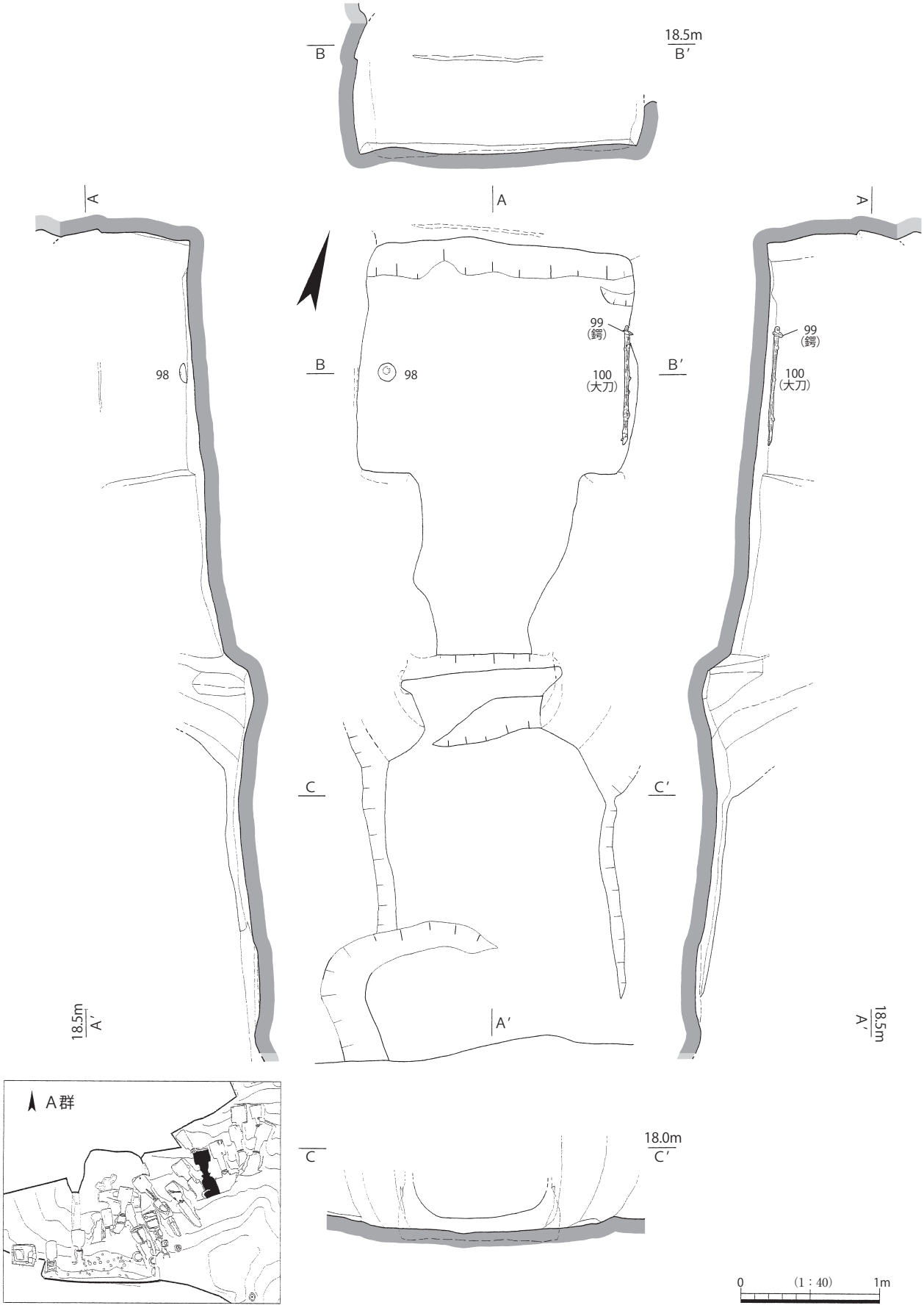
時　期　出土須恵器はいずれも大谷５期の特徴を示す。よって，横穴墓の築造，埋葬も大谷５期を中心とした時期と考えられる。



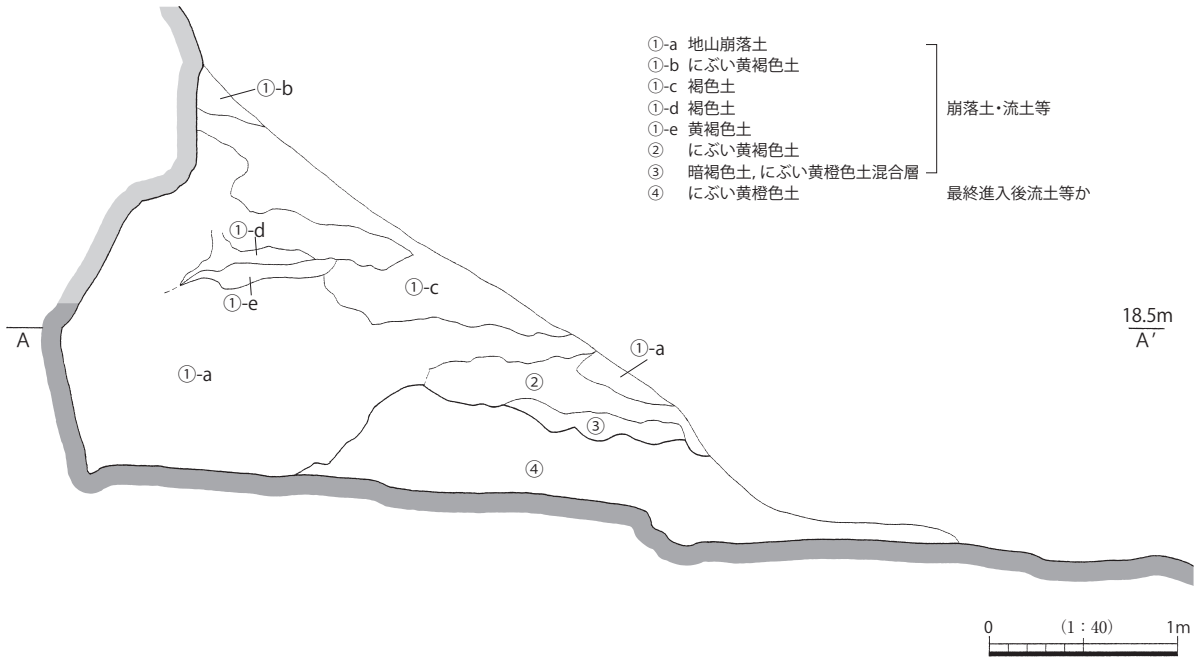
第41図　11号横穴墓遺構図２・土層図（1:40）



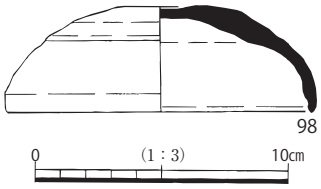
第42図　11号横穴墓遺物実測図（1:3）



第43図　12号横穴墓遺構図（1:40）



第44 図　12号横穴墓土層図（1:40）



第45図　12号横穴墓遺物実測図1（1:3）

⑫　12号横穴墓（第39・43～ 46図，図版12）

立　地（第39図）　10号横穴墓の東に隣接し，標高17.5mと10号横穴墓より若干低い。上方に築造された18号横穴墓の墓道より前方が12号横穴墓玄室上に重なっており，その部分の床面が12号玄室内へ崩落している。

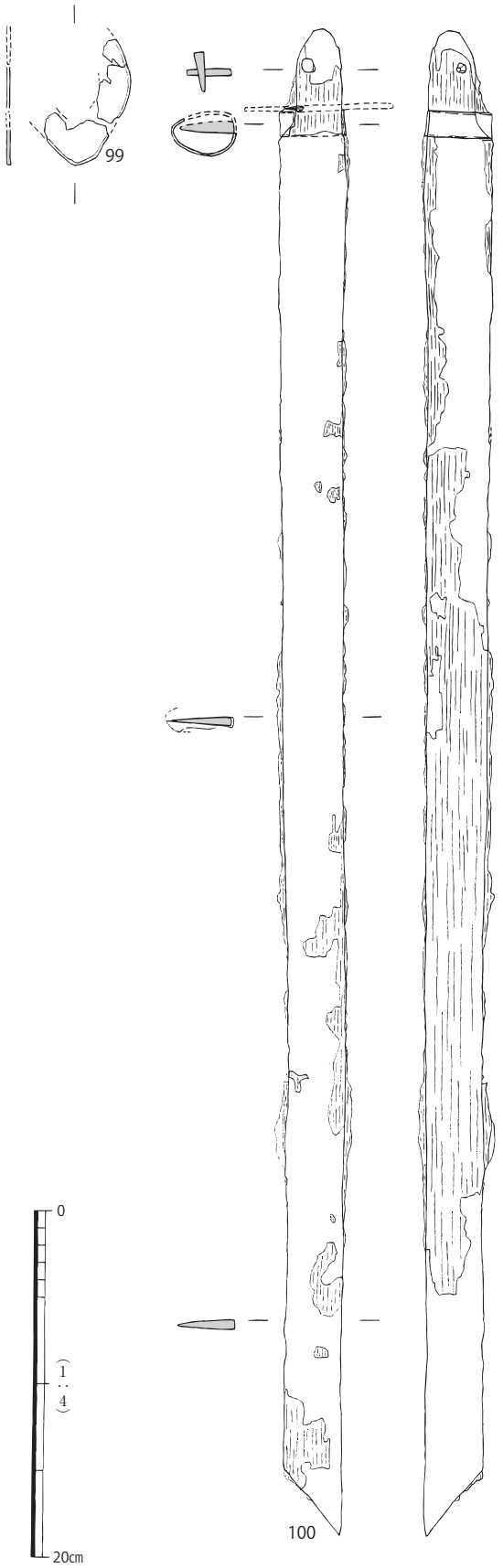
前　庭（第43図）　E－78°－S方向に開口し，床面幅1.4～ 1.55m前後，残存長2.2mを測る。

羨道・閉塞部（第43図）　主軸方向は前庭とほぼ同一方向で，床面幅0.9～ 1.2m，長さ0.5m，残存高0.5mを測り，玄室側が幅広になる。天井部は残存していない。羨道の床面全体を前庭側から約10㎝，玄門側から約20㎝低く溝状に成形しているほか，閉塞部側壁も若干削り込まれている。閉塞石は無かった。

玄　門（第43図）　床面幅0.7～ 1.2m，長さ1.2m，残存高0.5mを測り，玄室側が幅広になる。天井部は残存していない。

玄　室（第43図）　平面形は幅1.9～ 2 m，奥行1.7mの正方形に近い形状である。前庭から玄室までの残存長は5.6mとなる。奥壁沿いの床面は深さ10㎝程度に掘り込み，溝状となる。天井部は残存高0.95mを測り，左側壁と奥壁で床から0.65m前後の位置に軒線が残る。本来家形の断面形だったであろう。

土層堆積状況（第44図）　①～③層は崩落土及び流土である。④層は最終進入後堆積土であろうか。副葬品が玄室内縁辺部にしか残存していないことから④層堆積以前に盗掘等を受けている可能性があ



第46図　12号横穴墓遺物実測図２（1:4）

るが，土層からは確認できない。

遺物出土状況（第43・44図）　玄室内床面直上より須恵器杯蓋１点（98），鍔を装着した大刀１振（99・100）が出土した。須恵器杯蓋は口縁を下に向け左側壁寄りに，大刀は先端を入口側に向け，右側壁沿いに置かれていた。玄室内に残存する遺物は両側壁寄りのみであり，大部分は床面まで盗掘等を受けている可能性が考えられる。そのほか，流土②層以上で土師器片が数点確認されているが，横穴墓に伴うものかは不明である。

出土遺物

（第45・46図，カラー図版４，図版40・54）

98～100は玄室内出土品である。98は須恵器杯蓋で天井部外面のヘラケズリを省略する。99は無窓の鉄製鍔で，100の大刀に装着されていたものである。約１/２が残存している。倒卵形で，端部を断面L字状に刃部に向けて肥厚させる。100は片関の大刀で，刀身部はほぼ完形である。刃部長79.9㎝，茎部長6.5㎝で，全長86.4㎝を測る。切先はカマス切先である。鉄製の鏃，目釘が残存しているほか，鞘木，柄木の一部も残存している。

時　期　出土須恵器は１点のみであるが，大谷５期の特徴を示す。横穴墓の築造，埋葬も大谷５期を中心とした時期のものであろう。

⑬　13号横穴墓

（第39・47～49図，図版13）

立　地（第39図）　11・12号横穴墓の東に隣接し，標高も11号横穴墓とほぼ同様である。

前　庭（第47図）　Ｅ－74°－Ｓ方向に開口し，床面幅2.7ｍ以上，残存長1.8ｍを測る。左側

壁は12号横穴墓によって掘削されており，本来の形状は不明である。

羨道・閉塞部（第47・48図）　床面幅0.8m前後，長さ0.75m，残存高0.5mを測る。天井部は残存していない。閉塞部には幅40cm前後，深さ10cm前後の溝が主軸方向に直交して掘り込まれ，溝と連続して閉塞部側壁も削り込まれている。

玄　門（第47図）　床面幅0.7～ 0.8m，長さ1.7m，残存高0.6mを測る。天井部は残存していない。

玄　室（第47図）　平面形は幅1.5～ 1.75m，奥行1.9mの正方形に近い形状である。前庭から玄室までの残存長は6.15mとなる。天井部は残存していないが，右側壁で床から0.6m前後の位置に軒線が残る。本来家形の断面形だったものであろう。残存高0.8m。玄室内には右側壁寄りに数点の石が確認されているが，これらは閉塞に使用された石より小さく，脆いもので，棺台として使用された可能性もある。

閉塞石（第47図）　割石・自然石が閉塞部溝手前に，地山直上から５点置かれていた。一部の閉塞石は崩落土によって動いていると考えられるが，基本的に閉塞部溝手前に床面から1～２段積みで置かれたものであろう。溝部分に設置された閉塞板を押さえるための石であったと考えられる。

土層堆積状況（第48図）　①層は崩落土及び流土である。②③層は埋土の流土であろうか。玄室内床面直上で厚く地山崩落土が堆積しており，初葬後比較的早い時期に崩落によって埋没したものと考えられる。

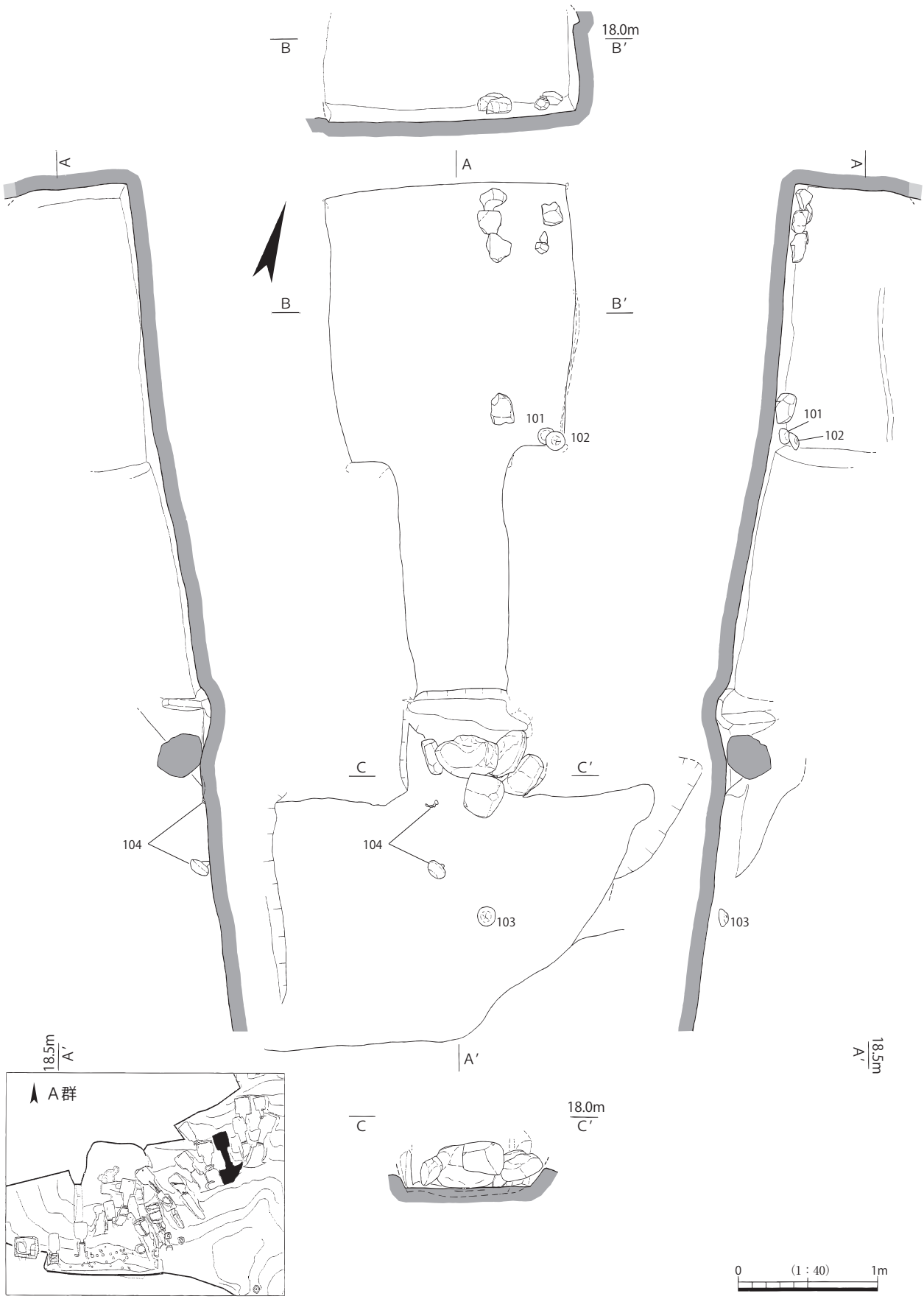
遺物出土状況（第47・48図）　玄室内床面直上より須恵器蓋杯１セット（101・102），玄室内床面付近より不明鉄製品1点（114※出土位置不明）が出土している。玄室内の蓋杯は，玄室右前隅にいずれも口縁部を下に向け，杯蓋を下に，杯身を上に重ねた状態で出土しており，原位置を留めていると思われる。前庭部では，床面から若干浮いた地点より須恵器杯身１点（103），前庭部床面直上より平瓶１点（104）が，出土している。前庭部出土遺物は原位置を留めていないようである。

その他，須恵器蓋杯（105・106），有蓋高杯（107～ 110），無蓋高杯（111・112），提瓶（113），銀環（115）が表土掘削中及び①層上層中より出土しているが，当該横穴墓の時期と異なる時期のものが多く，他横穴墓からの混入品を含むと考えられる。混入資料はその位置関係，時期から後述の18号横穴墓等，上方の横穴墓より流入した可能性が高い。

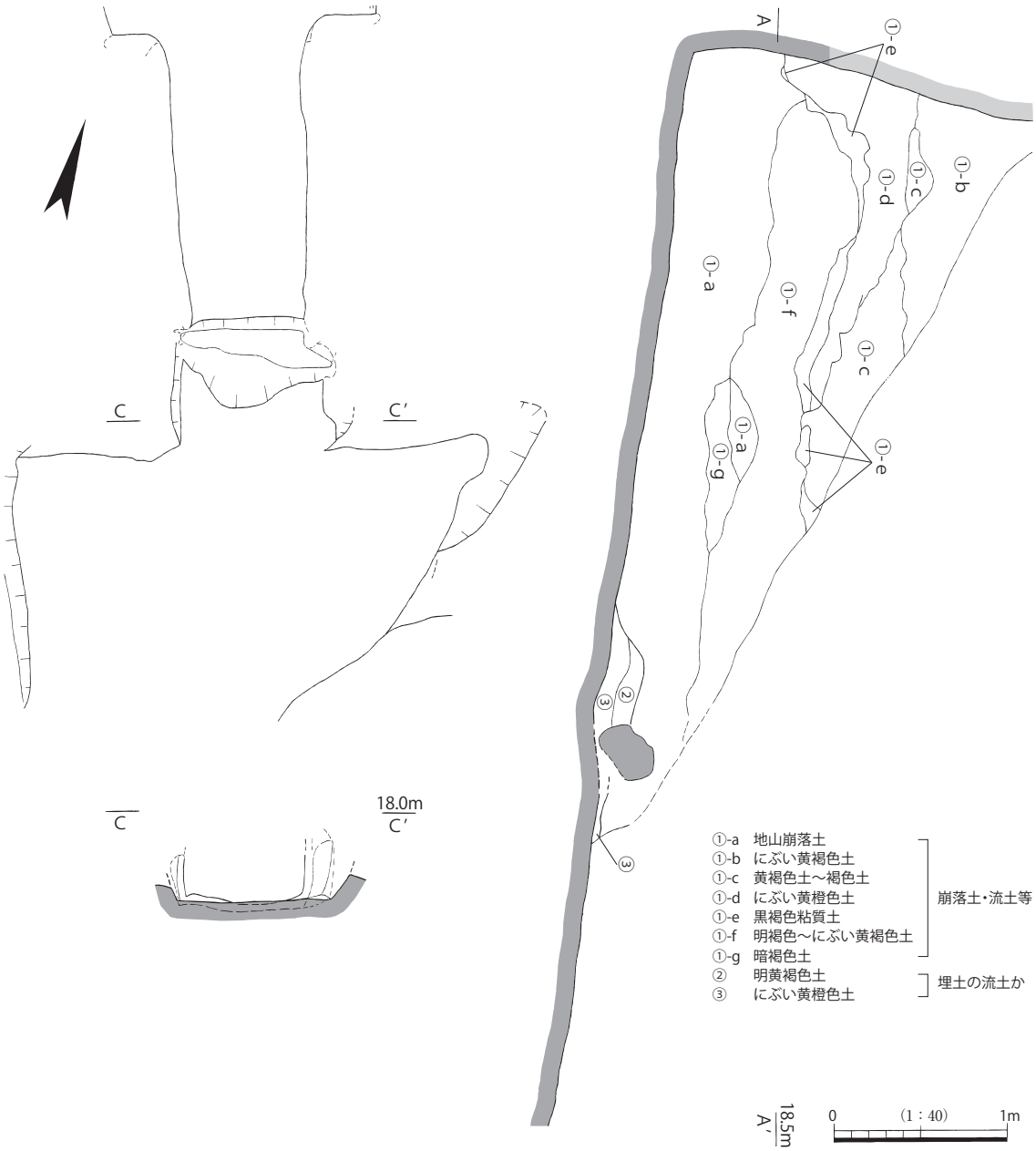
出土遺物（第49図，カラー図版５，図版40）　101・102は玄室内から出土した杯蓋と杯身で，セットになるものと考えられる。いずれもヘラケズリを省略し，102の底部外面にはヘラ記号「×」が確認できる。114は玄室内床面付近から出土した用途不明の鉄製品で，両端の尖った２本の鉤状製品に一部木質が付着している。

103・104は前庭部から出土した須恵器で，103が杯身，104が平瓶である。杯身はヘラケズリを省略した底部外面にヘラ記号「×」が記されている。104の平瓶は体部外面にカキメを施した後，肩部に竹管文を1対施している。

105～ 113は表土掘削中及び①層上層中出土の須恵器で，105・106が蓋杯，107が３方スカシの有蓋高杯，108～ 110が２方スカシの有蓋高杯，111・112が２方スカシの無蓋高杯，113が提瓶である。115は①層上層中から出土した銅芯銀板貼の銀環である。105～ 113，115は他横穴墓からの混入品と



第47図　13号横穴墓遺構図１（1:40）



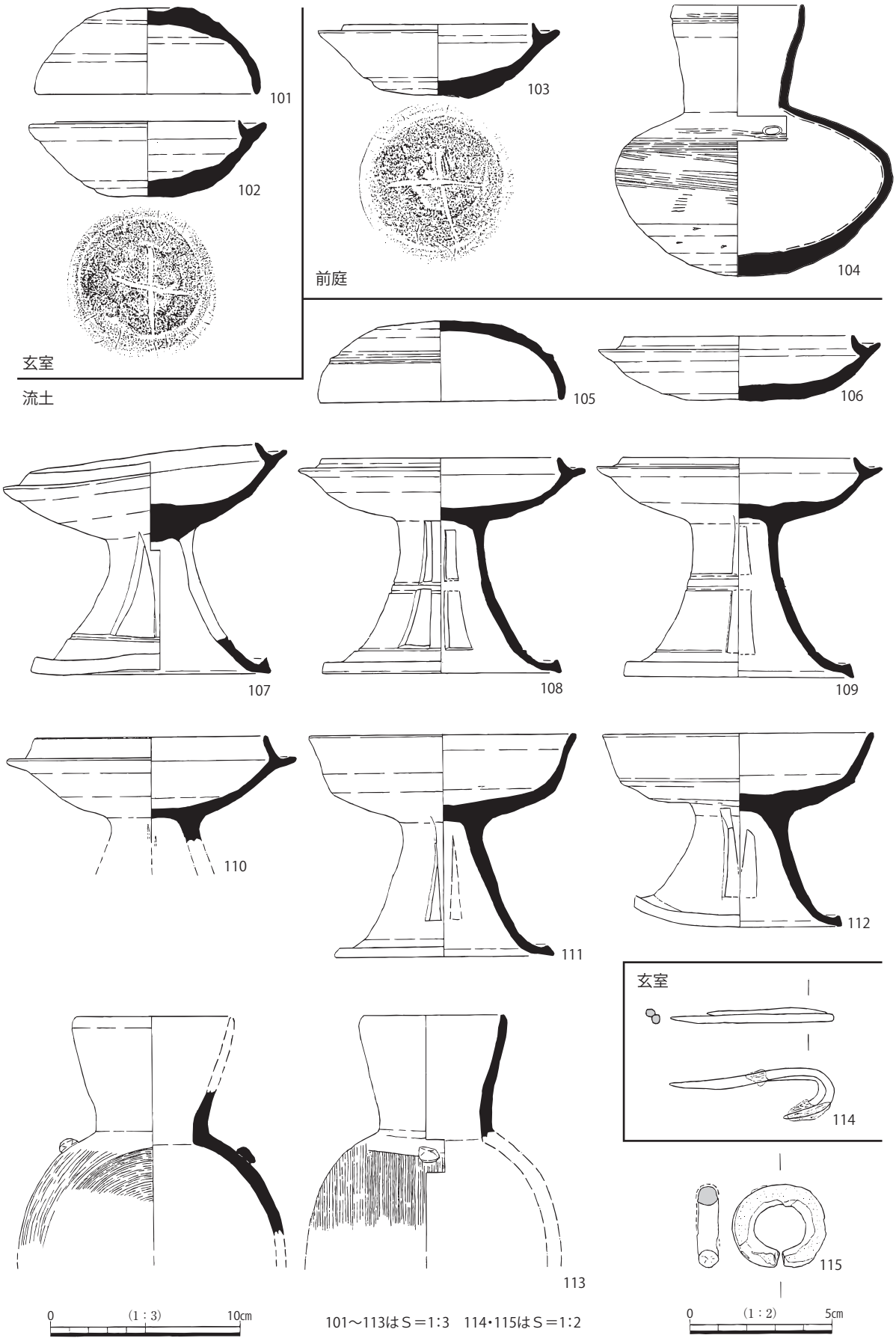
第48図　13号横穴墓遺構図２・土層図（1:40）

思われる。

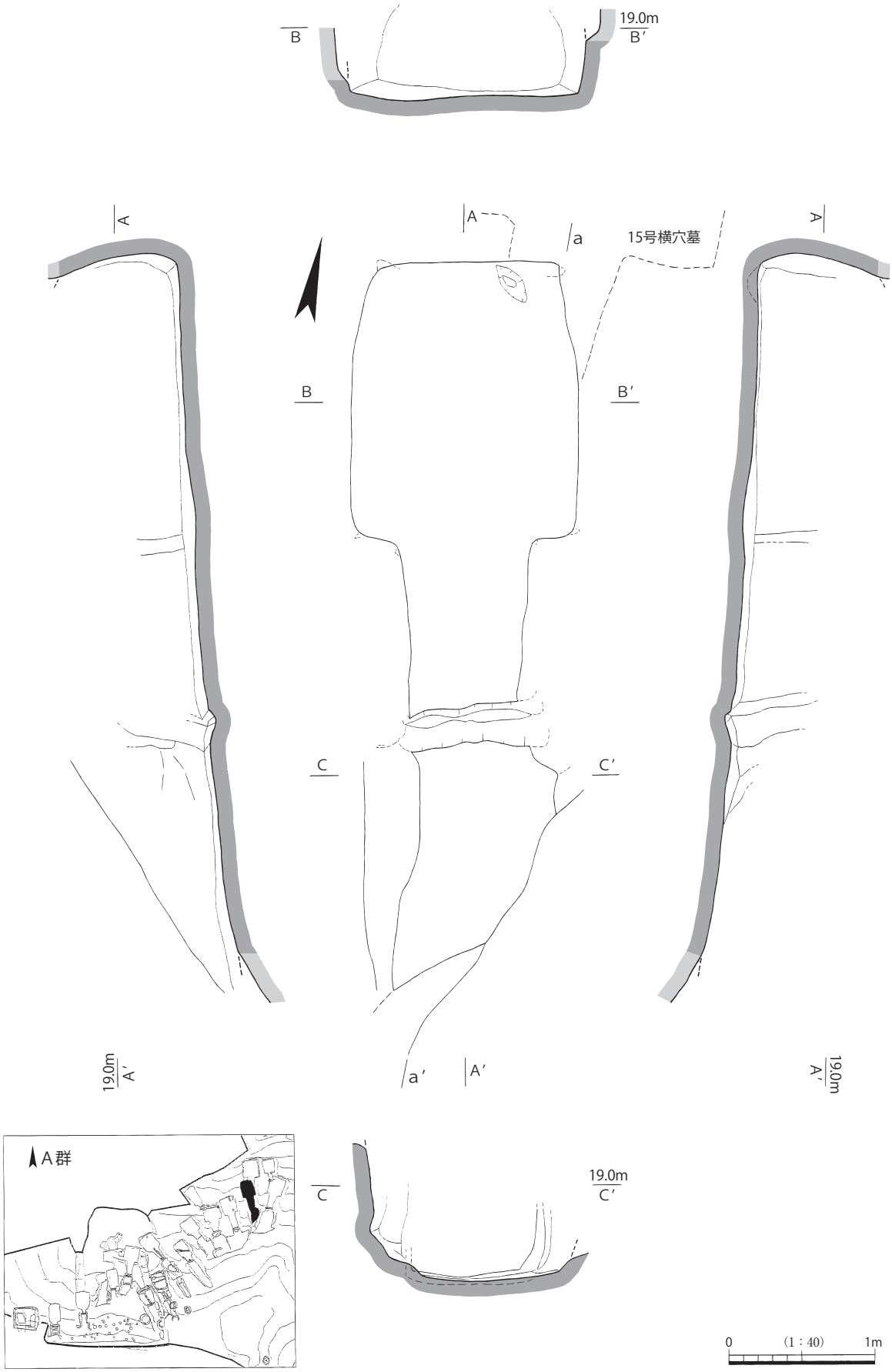
時　期　玄室内の須恵器蓋杯はいずれも大谷５期の特徴を示し，前庭出土の須恵器杯身と平瓶も大谷５期～６a期の特徴を示す。初葬後間もなく天井が崩落したと考えられるので，横穴墓の築造，埋葬も大谷５期として良いであろう。

⑭　14号横穴墓（第50・51図，図版14）

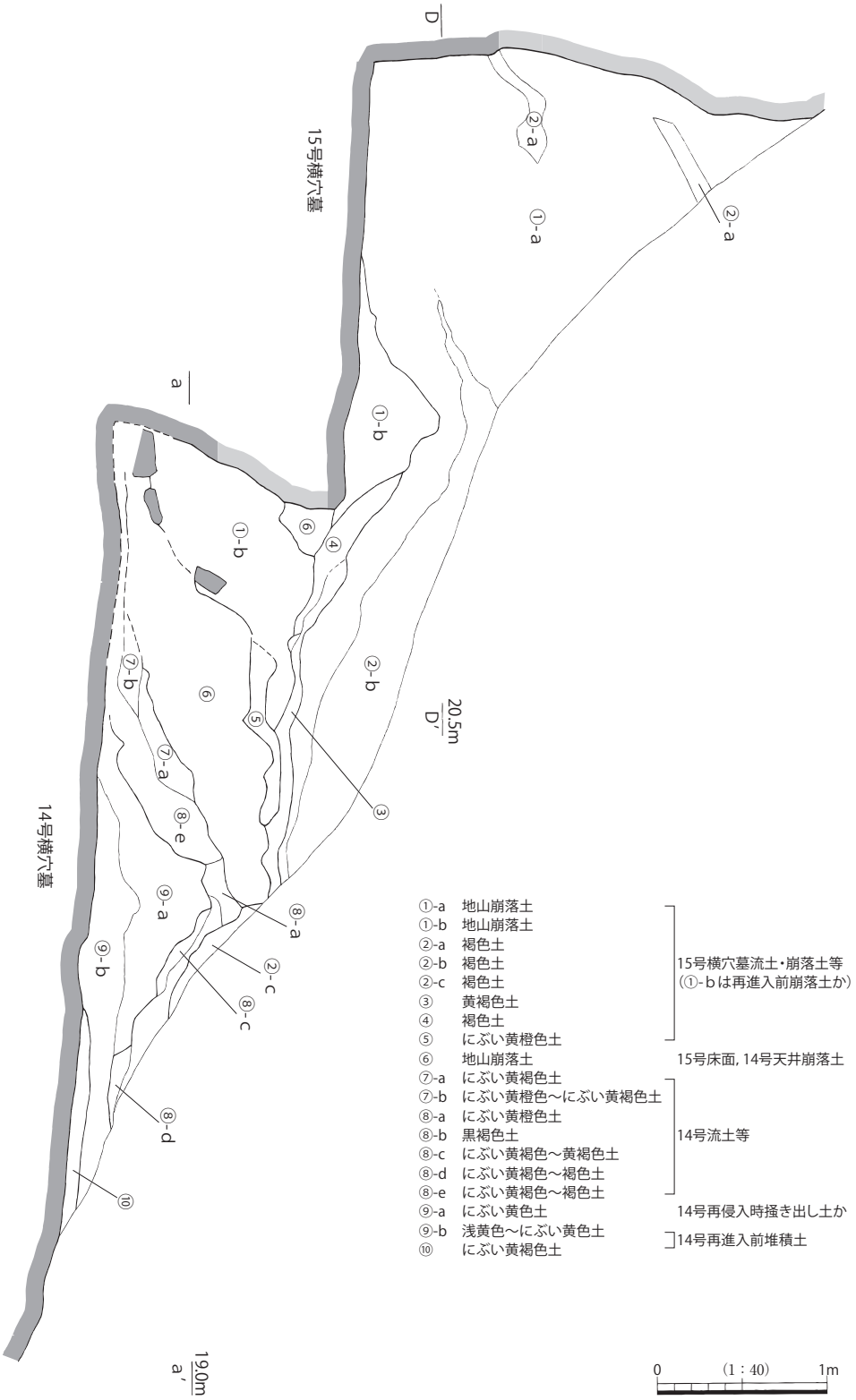
立　地　13号横穴墓の北東約３ｍに存在し，標高は18.5mと13号横穴墓よりやや高い。上方に築造された15号横穴墓の玄門部より前方が14号横穴墓玄室上に重なっており，その部分の床面が14号玄室内へ崩落している。



第49図　13号横穴墓遺物実測図（1:3・1:2）



第50図　14号横穴墓遺構図（1:40）



第51図　14・15号横穴墓土層図（1:40）

墓道・閉塞部（第50図）　Ｅ－74°－Ｓ方向に開口し，床面幅0.9m前後，残存長1.9mを測る。玄門より0.2～ 0.3m付近まで側壁がやや狭くなっており，その前面に面を持つ。閉塞部には幅20～ 30㎝，深さ５㎝程度の溝が主軸方向に直交して掘り込まれ，溝と連続して閉塞部側壁も若干削り込まれている。

閉塞石は無かった。

玄　門（第50図）　床面幅0.75～ 0.9m，長さ1.2m，残存高0.5mを測る。天井部は残存していない。

玄　室（第50図）　平面形は幅1.25～ 1.55m，奥行1.9mの前が広がる台形である。墓道から玄室までの残存長は5.0mとなる。天井部の多くは残存していないが，残存部の状況からアーチ形の断面形と考えられる。残存高0.8m。

土層堆積状況（第51図）　第51図は上方が15号横穴墓，下方が14号横穴墓の土層堆積状況図で，⑤層以上は15号横穴墓の堆積土及び床面の崩落土等である。15号横穴墓の閉塞石が落ち込んでいる。⑥層は15号横穴墓の床面及び14号横穴墓の天井崩落土，⑦層以下が14号横穴墓に伴う堆積土である。⑦層は流土等，⑧層は褐色土を主体とする自然堆積土等である。⑨層は再進入に伴う掻き出し土等であろうか。⑩層は再進入前の堆積土である。埋葬直後の閉塞埋土や堆積土はほとんど残存しておらず，遺物も存在しない。⑩層上面における再進入時に盗掘を受けているものと思われる。

出土遺物　14号横穴墓に伴う土層と考えられる⑦層以下では遺物は全く出土していない。

時　期　出土遺物が存在せず，時期についても不明である。

⑮　15号横穴墓（第51～ 53図，図版14）

立　地　14号横穴墓の北に上下に重なるように存在し，標高は20.0mと13号横穴墓の上段に位置する。墓道と玄門の大部分は14号横穴墓へ向けて崩落している。

閉塞部（第52図）　ほとんど残存していないが，高低差５㎝前後の段を設け，玄門側を高くしているほか，床面幅も玄門よりやや広くしている。あるいは溝状になるものかもしれない。

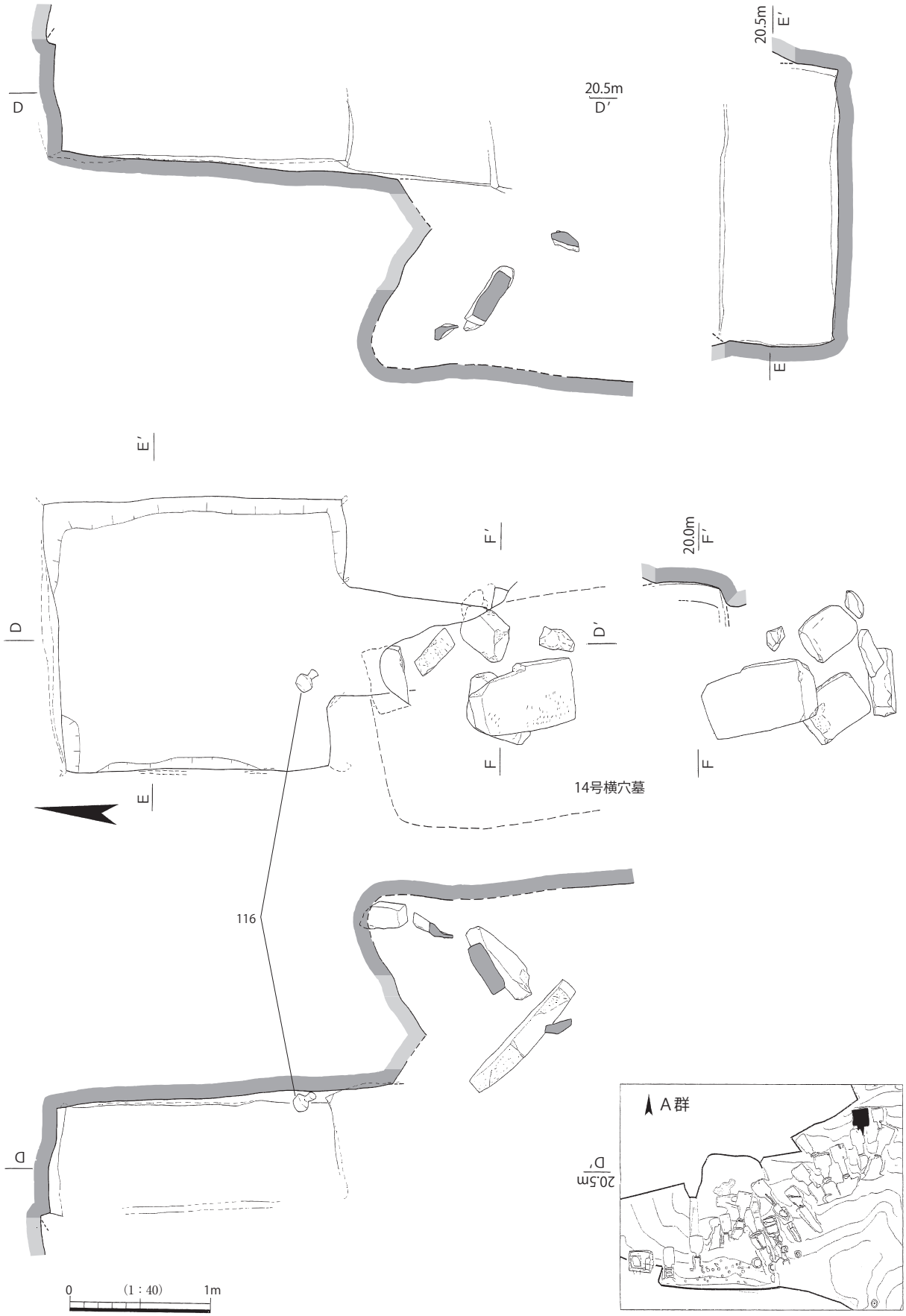
玄　門（第52図）　Ｅ－87°－Ｓ方向に開口し，残存部で床面幅0.8m，長さ1.1m，残存高0.5mを測る。天井部は残存していない。

玄　室（第52図）　平面形は幅1.9m，奥行2.0mの正方形に近い形状である。閉塞部から玄室までの残存長は3.2mとなる。壁沿いの床面は浅く掘り込み，溝状となる。天井部は残存していないが，奥壁と左側壁で床から0.85m前後の位置に軒線が残る。本来家形の断面形だったものであろう。残存高0.9m。

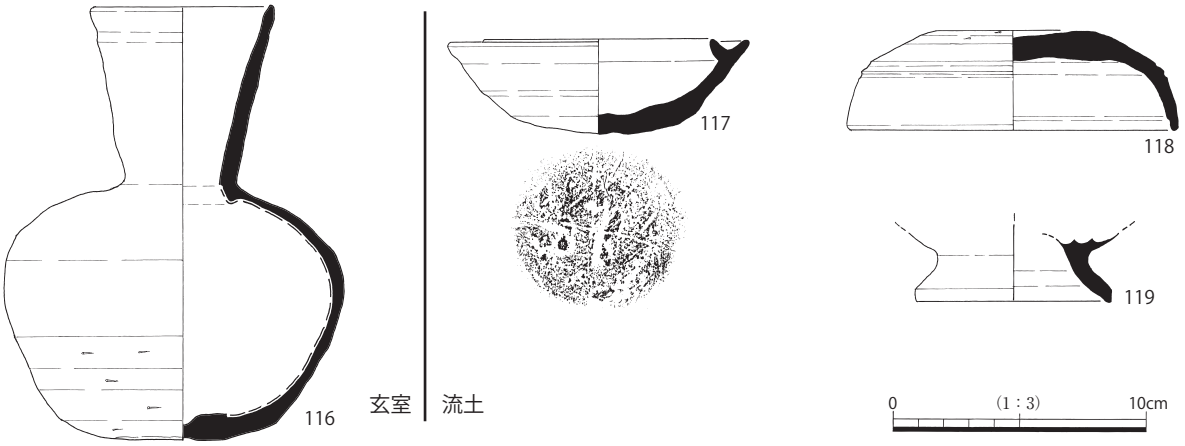
閉塞石（第52図）　板石状に加工された凝灰岩が下方の14号横穴墓に落ち込んだ状態で出土している。調査時には割れて7点の石材として確認されているが，本来はそれぞれ92×47×12㎝，47×30×15㎝，45×26×17㎝，53×35×12㎝程度の４枚の板石が閉塞部に設置されていたようである。

土層堆積状況（第51図）　15号横穴墓に伴う堆積土は⑥層以上である。⑥層が本来床面を形成していた基盤層地山で，⑥層上面に崩落した閉塞石がほぼ接している。⑤層以上の堆積土も基本的に全て崩落土と流土を主体とするが，地山崩落土①-ｂ層はその上面で盗掘等の再掘削を受けている可能性がある。また，①-ｂ層と床面直上に挟まれた状態で須恵器完形品が出土しており，埋葬後ほとんど間を置かず天井部の崩落が始まっていたものと思われる。

遺物出土状況（第51・52図）　玄室内入口付近床面直上より須恵器長頸壺１点（116）が出土している。玄室内からは，他の遺物は全く確認されない。①-ｂ層上面に想定される再進入時に盗掘を受けてい



第52図　15号横穴墓遺構図（1:40）



第53図　15号横穴墓遺物実測図（1:3）

ものと思われる。

その他，堆積土③層より須恵器杯身1点（117），その他②層以上より須恵器数点（118・119ほか）が確認されている。③層出土遺物盗掘後の堆積土であり，混入品の可能性も残る。②層以上から確認される資料は基本的に混入品と考えられる。

出土遺物（第53図，図版41）　116は玄室内床面直上から出土した須恵器長頸壺である。肩の張らない体部で脚も付属しない。117は③層より出土した杯身で，底部外面に「×」のヘラ記号が確認される。118，119は流土上層から出土した須恵器杯身と壺等の低脚部で，いずれも混入品と思われる。

時　期　玄室内床面出土の須恵器長頸壺は大谷５期前後の特徴を示し，③層出土の杯身は大谷６a期の特徴を示す。横穴墓の築造，埋葬は大谷５期を中心とした時期と考えられ，遅くとも大谷６a期の間には終了しているものと思われる。

⑯　16号横穴墓（第54～56図，図版15）

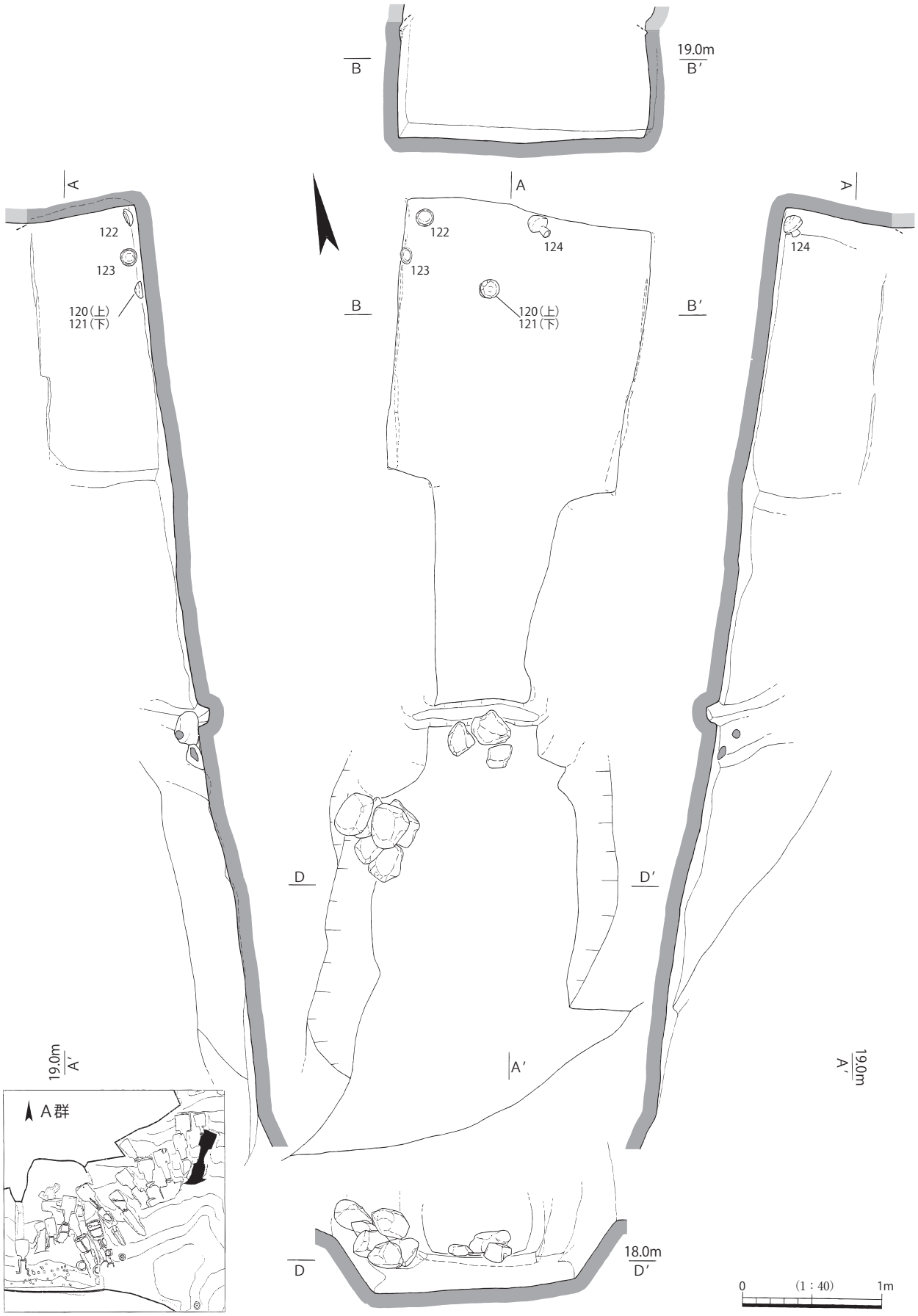
立　地　14号横穴墓の東に隣接し，標高は18.0mと14号横穴墓よりやや低い。上方に築造された17号横穴墓の閉塞部より前方が16号横穴墓玄室上に重なっており，その部分の床面が16号玄室内へ崩落している。A群の東端にあたる横穴墓である。

前　庭（第54図）　S－13°－W方向に開口し，周辺の横穴墓の中で唯一南西向きの開口方向となっている。床面幅1.4m前後，残存長2.1mを測る。前庭前方にも平坦面が広がるようである。

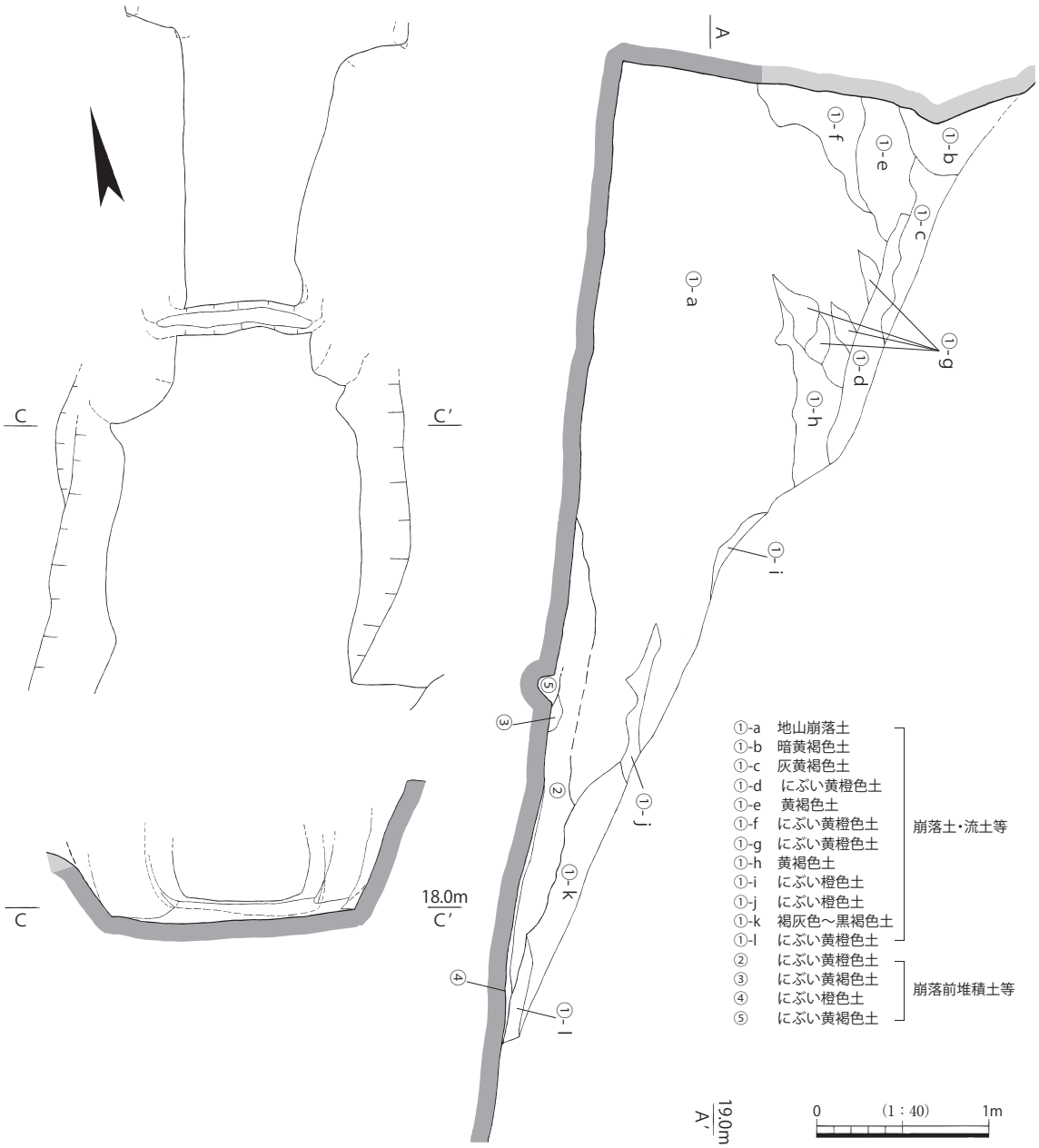
羨道・閉塞部（第54・55図）　床面幅0.8m，長さ0.4m，残存高0.5mを測る。天井部は残存していない。閉塞部には幅15～20㎝，深さ15㎝前後の溝が主軸方向に直交して掘り込まれ，溝と連続して閉塞部側壁も若干削り込まれている。

玄　門（第54図）　S－18°－W方向に開口し，前庭～閉塞部とはやや軸を異にする。床面幅0.7～1.2m，長さ1.5m，残存高0.6mを測り，玄室側が幅広になる。天井部は残存していない。

玄　室（第54図）　主軸は玄門とほぼ同一方向で，平面形は幅1.7～1.85m，奥行２mの正方形に近い形状である。前庭から玄室までの残存長は6.0mとなる。天井部は残存していないが，左右側壁で床



第54図　16号横穴墓遺構図１（1:40）

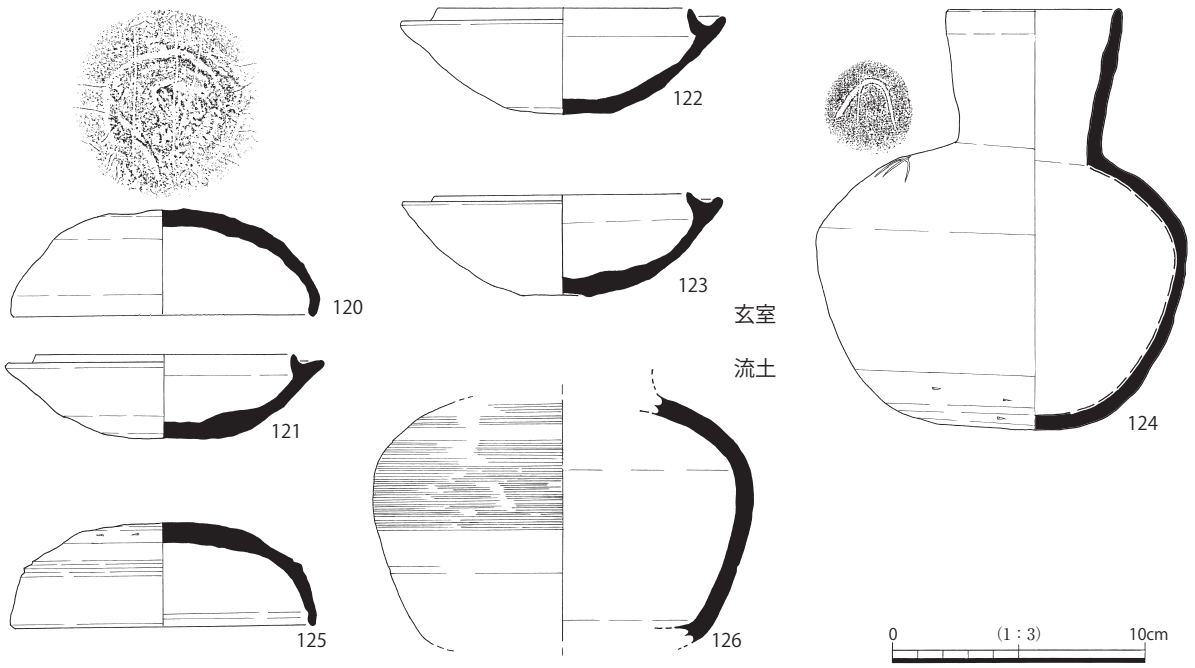


第55図　16号横穴墓遺構図２・土層図（1:40）

から0.8m前後の位置に軒線が残る。本来家形の断面形だったものであろう。残存高0.9m。

閉塞石（第54図）　割石・自然石が閉塞部溝手前に３点，前庭左側壁際に６点置かれていた。その他，墓道中央付近に地山礫塊が１点確認されたが，閉塞石ではないと判断した。前庭左側壁際に置かれていた６点の石は，再進入時に閉塞石を外して重ねたものと思われるが，羨道溝手前に置かれた３点は若干浮いているものの，床面付近から出土しており，原位置をある程度留めているものと考えられる。溝との位置関係から，溝部分に設置された閉塞板を押さえるための石であったと推定される。

土層堆積状況（第55図）　基本的にほとんどの土層は崩落土と流土で，床面付近に残る②～⑤層のみが崩落前の堆積土と思われる。羨道溝手前の閉塞石はほぼ地山直上に乗るものと思われる。閉塞石の



第56図　16号横穴墓遺物実測図（1:3）

移動状況から，初葬後，最低１回の追葬もしくは盗掘による再進入があったことが推察されるが，土層の観察からは詳細不明である。

遺物出土状況（第54・55図）　玄室内奥寄り床面直上より須恵器杯蓋１点（120），杯身３点（121～123），平瓶１点（124）が出土している。この内，蓋杯120と121はセットになるものと考えられ，杯身を下に，杯蓋を上に，双方口縁を下にして重ねられた状態で確認された。その他の玄室内出土遺物は再進入時に移動している可能性がある。

また，堆積土上層より須恵器数点（125・126ほか小片）が確認されているが，16号横穴墓上方の後述17号横穴墓からの混入品である可能性が高い。

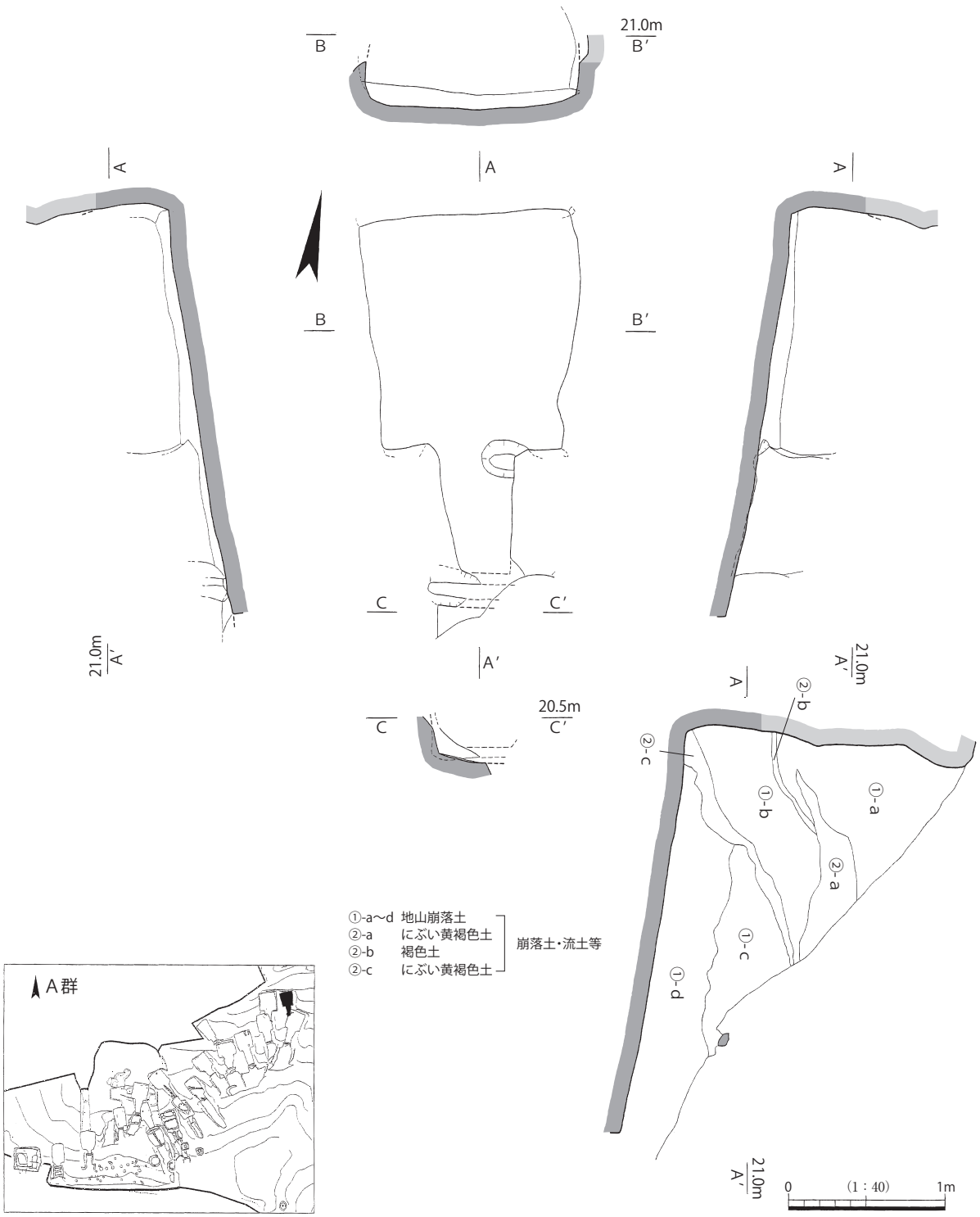
出土遺物（第56図，図版41）　120～124は玄室内出土須恵器で，120～123は蓋杯，124は平瓶である。蓋杯はいずれもヘラケズリを省略するものである。この内，120の杯蓋は121の杯身とセットとなるもので，天井部外面には３本線のヘラ記号が刻まれている。124の平瓶は肩部にヘラ記号「∋」が刻まれている。125・126は堆積土上層から出土した杯蓋と壺体部片で，17号横穴墓からの混入品である可能性が高い。

時　期　玄室内出土須恵器はいずれも大谷５期の特徴を示す。よって，横穴墓の築造，埋葬も大谷５期を中心とした時期の中で終了しているものと考えられる。

⑰　17号横穴墓（第57図，図版16）

立　地　15号横穴墓の東に隣接し，16号横穴墓の北に上下に重なるように存在する。標高は20.5ｍと16号横穴墓の上段に位置する。閉塞部より前方は大部分が15号横穴墓へ向けて崩落している。

墓道・閉塞部（第57図）　残存長0.45ｍを測る。残存状況が悪く詳細不明であるが，閉塞部には幅25㎝，

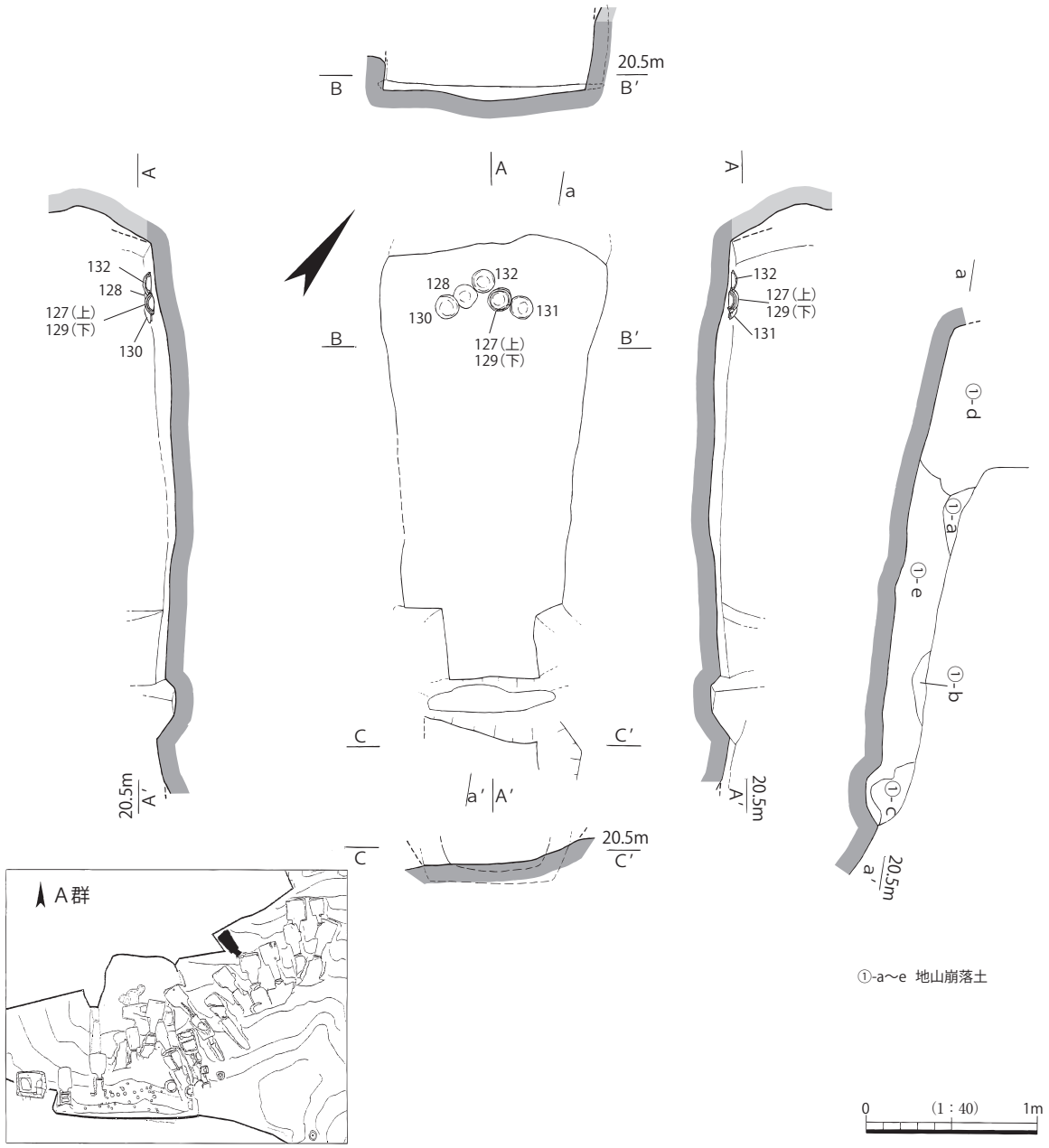


第57図　17号横穴墓遺構図・土層図（1:40）

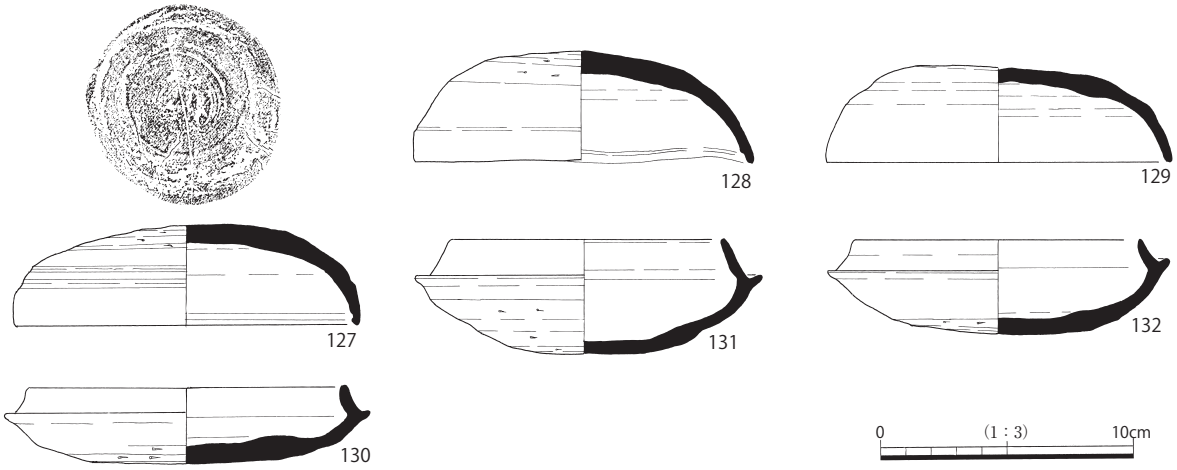
深さ５㎝程度の溝が主軸方向に直交して掘り込まれ，溝と連続して閉塞部側壁も若干削り込まれている。閉塞石の有無も不明である。

玄　門（第57図）　Ｅ－78°－Ｓ方向に開口し，床面幅0.3～ 0.5m，長さ0.8m，残存高0.45mを測り，玄室側が幅広になる。天井部は残存していない。

玄　室（第57図）　平面形は幅1.15～ 1.4m，奥行1.5mの奥が広がる台形である。墓道から玄室までの



第58図　18号横穴墓遺構図・土層図（1:40）



第59図　18号横穴墓遺物実測図（1:3）

残存長は2.75mとなる。天井部の多くは残存していないが，残存部の状況からアーチ形の断面形だったものと考えられる。残存高0.5m。

土層堆積状況（第57図）　確認された土層は全て崩落土と流土で，床面直上より地山崩落土が厚く堆積している。遺物が全く出土しないことから，盗掘等の再進入を受けているものと思われるが，土層にその痕跡は観察できない。

出土遺物　遺物は出土していない。

時　期　遺物は出土していないが，16号横穴墓の報告において指摘した17号横穴墓より混入した可能性のある須恵器群（第56図125・126）については大谷４期のものが確認できる。横穴墓の築造，埋葬もこの頃のものであろうか。

⑱　18号横穴墓（第58・59図，図版16）

立　地　12号横穴墓の北北西に上下に重なるように存在し，標高は20.5mと12号横穴墓の上段に位置する。墓道の大部分は12号横穴墓へ向けて崩落している。

墓道・閉塞部（第58図）　残存長0.6mを測る。残存状況が悪く，詳細不明であるが，閉塞部には幅0.25～0.4m，深さ10㎝程度の溝が主軸方向に直交して掘り込まれている。閉塞石の有無も不明である。

玄　門（第58図）　Ｅ－52°－Ｓ方向に開口し，床面幅0.55m，長さ0.4m，残存高0.15mを測る。側壁の大部分と天井部は残存していない。

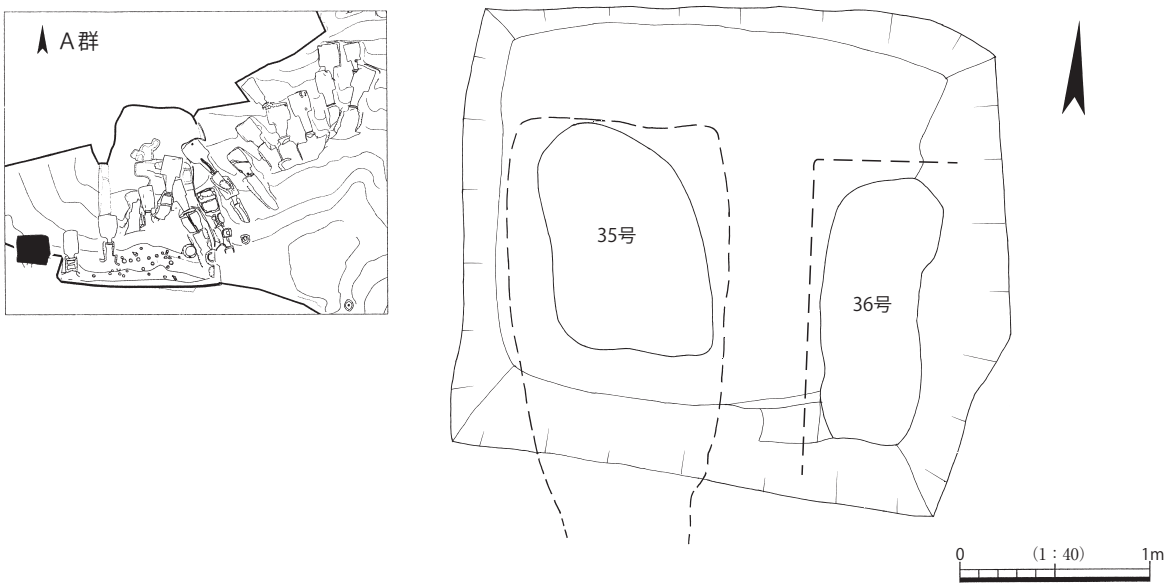
玄　室（第58図）　平面形は幅0.95～1.3m，奥行2.1mの奥が広がる台形である。墓道から玄室までの残存長は3.1mとなる。天井部はほとんど残存せず，立面形は不明である。残存高0.55m。

土層堆積状況（第58図）　確認された土層は全て崩落土で，埋葬後間もなく天井部が崩落したものと考えられる。

遺物出土状況（第58図）　玄室内奥壁側床面付近より須恵器杯蓋３点（127～129），杯身３点（130～132）が逆Ｖ字状に並べられ，全て口縁を下に向けて伏せた状態で出土している。その内，杯蓋２点（127・129）は前者を後者に被せるように入れ子状となっており，平面上は５点に見える。床面より若干浮いているが，本来の配置を留めているものと考えられる。変則的な配置ではあるが，土器枕となるものであろう。

出土遺物（第59図，図版41）　127～132は玄室内より出土した須恵器蓋杯で，127～129は杯蓋，130～132は杯身である。杯蓋127・128は天井部外面にやや粗雑なヘラケズリが，杯蓋129にはヘラケズリ後ナデが施されている。また，127の天井部外面にはヘラ記号「｜」が刻まれている。杯身130・132は杯底部が扁平な「石見型須恵器」（島根県立八雲立つ風土記の丘1998，榊原2008）で，底部外面には板状圧痕も残る。128・129の杯蓋についても，口縁径の大きさに比して肩部の区画がやや不明瞭なもので，石見地方の須恵器（島根県立八雲立つ風土記の丘1998，榊原2008）に似た特徴を示す。

時　期　玄室内出土須恵器は出雲地方通有の蓋杯（127・131）は大谷３期の特徴を示すが，127のヘラケズリにやや新しい様相も見られる。石見地方の特徴を持つ杯蓋（128～130, 132）は石見３～４期（大谷３～４期併行）の特徴を示す（島根県立八雲立つ風土記の丘1998，榊原2008）。一括資料とするならば大



第60図　35・36号横穴墓検出状況（1:40）

谷３期～４期のいずれかの時期となろう。また，13号横穴墓の報告において指摘した18号横穴墓周辺から混入した可能性のある須恵器群（第49図105～113）についても，大谷３期～４期を中心とする時期のものであり，時期判定と矛盾しない。よって，横穴墓の築造・埋葬は大谷３期の新しい段階～４期の古い段階のいずれかの時期として良いであろう。

⑲　35・36号横穴墓（第60図，図版33）

調査区西端，1号横穴墓の西方より横穴墓２基が確認されている。現地表面，隣接道路面より低い標高12.5m以下に築造されており，現状で調査を進めることに危険が伴うと判断されたため一時調査を中断した。平成26年度までの調査では完掘していないが，別途調査・報告を行うこととする。

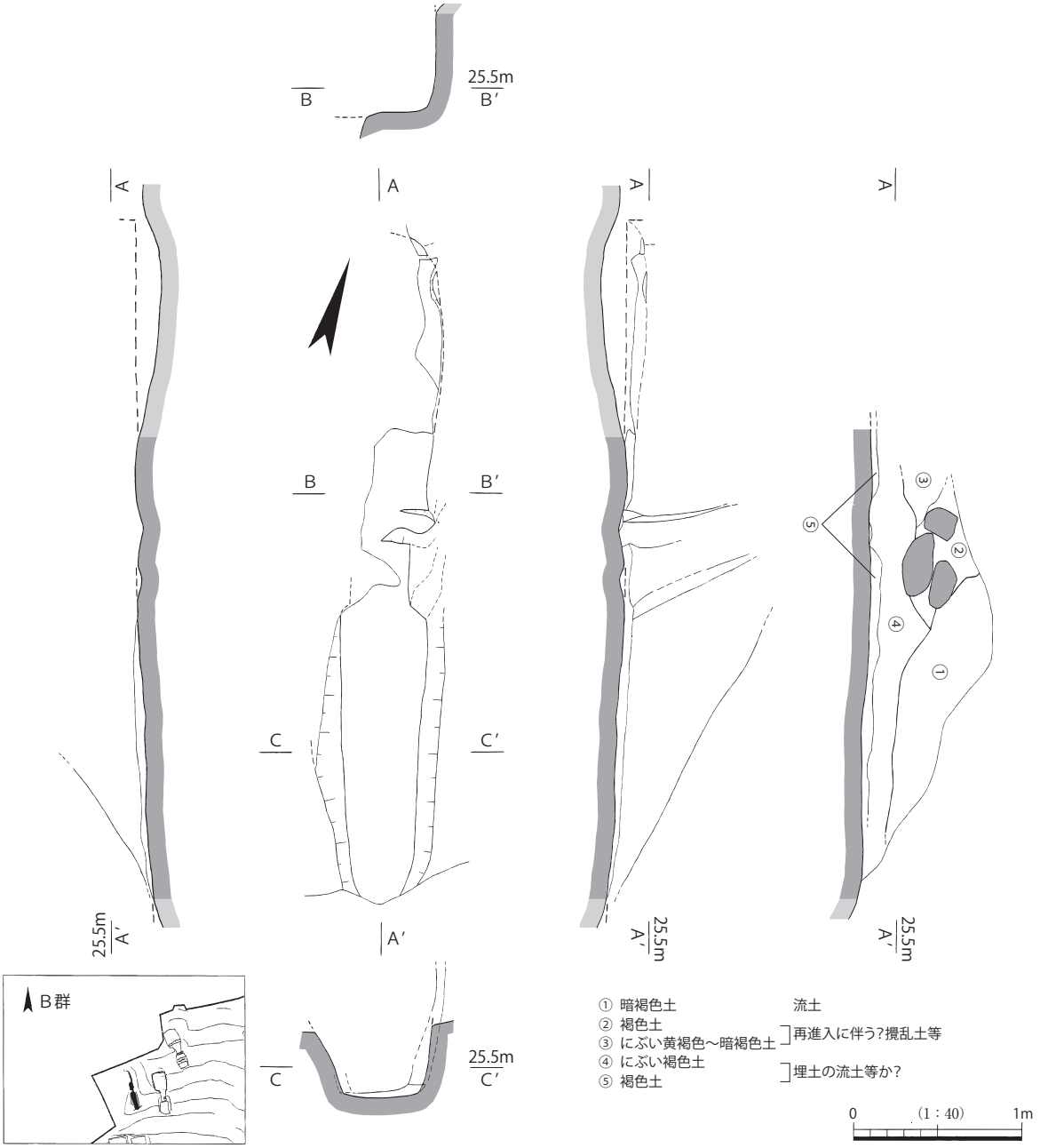
第２項　横穴墓群Ｂ群

南向き斜面標高24m以上に築かれた19～21号横穴墓から成る一群である。Ｂ群の西方は大きく地形が破壊されているため，確認した横穴墓は３基のみであるが，本来Ａ群の上方に広がる小支群であったと思われる。

①　19号横穴墓（第61図，図版16）

立　地　標高約25.5mの南に向く丘陵斜面，15・17号横穴墓の北方約５m，上方約５mに位置する。残存するB群の西端にあたる横穴墓である。

墓道・閉塞部（第61図）　Ｅ－72°－Ｓ方向に開口し，床面幅0.5m前後，残存長1.6mを測る。墓道と玄門境界部の床面はフラットになっている。



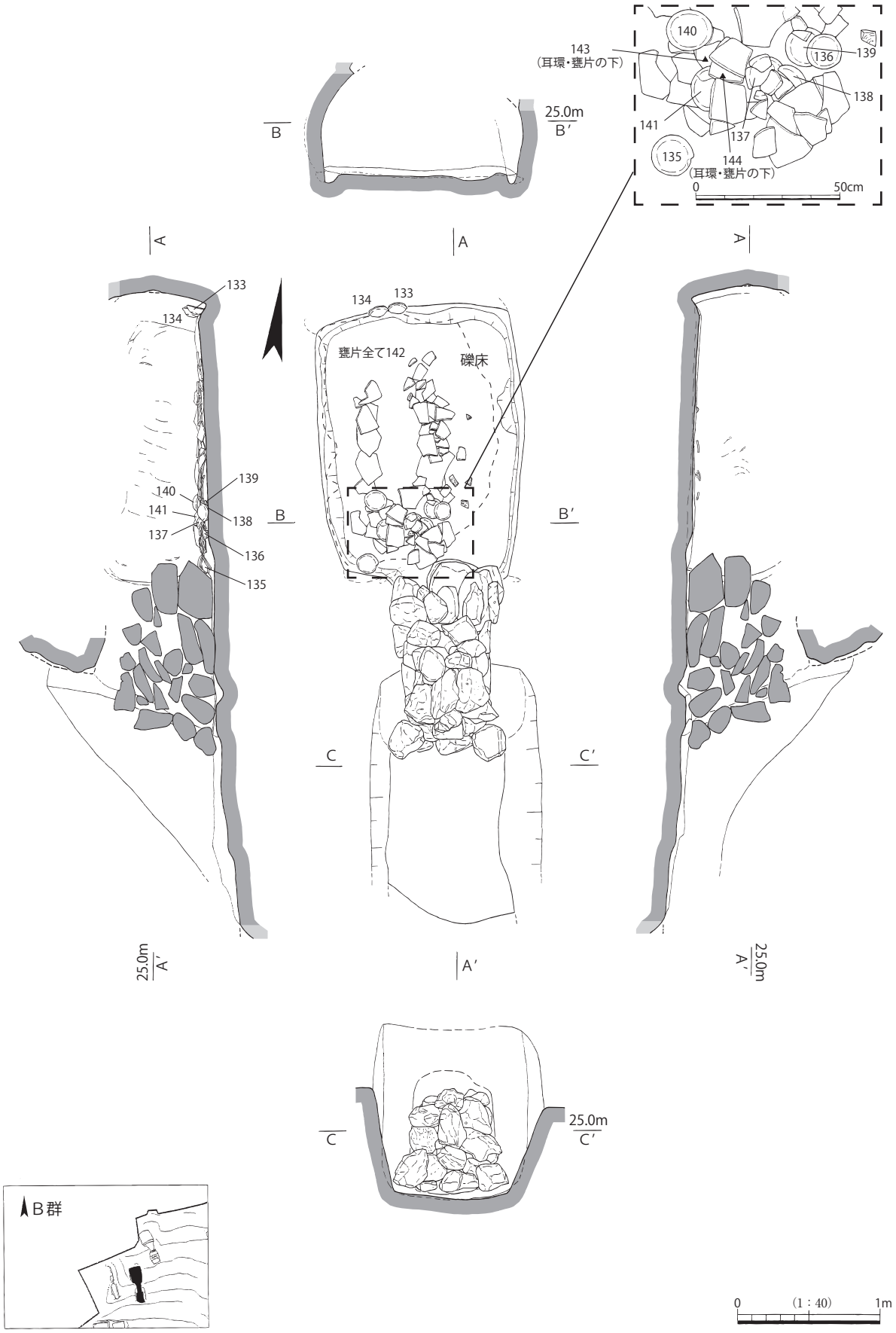
第61図　19号横穴墓遺構図・土層図（1:40）

玄　門（第61図）　床面幅0.35m，長さ0.35m，残存高0.75mを測る。天井部は残存していない。

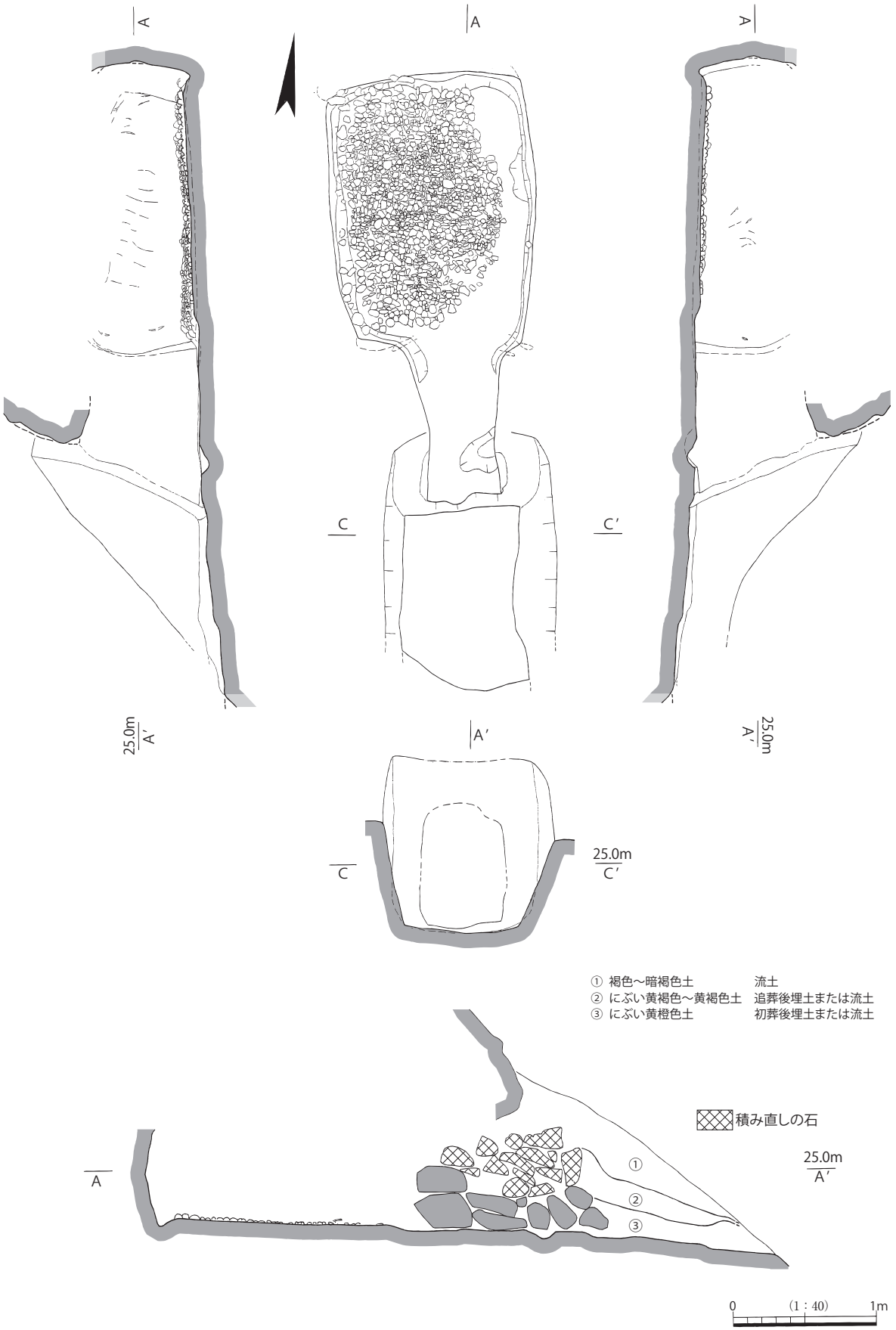
玄　室（第61図）　大部分が崩壊しているが，奥行1.9m程度，右側壁の一部で残存高0.5m程度を測る。墓道から玄室までの残存長は3.85mとなる。右袖前壁は非常に狭い。玄門と玄室の境界部床面には一部溝状加工のような痕跡も見られるが，遺存状況が悪く詳細不明である。

閉塞石（第61図）　割石・自然石が玄門部床面より約0.2m上方から数点確認されている。調査中に転落，破損したため平面図は作成できなかった。閉塞石の可能性もあるが，原位置を保つものではないと思われる。あるいは他所から流入した転石であるかもしれない。

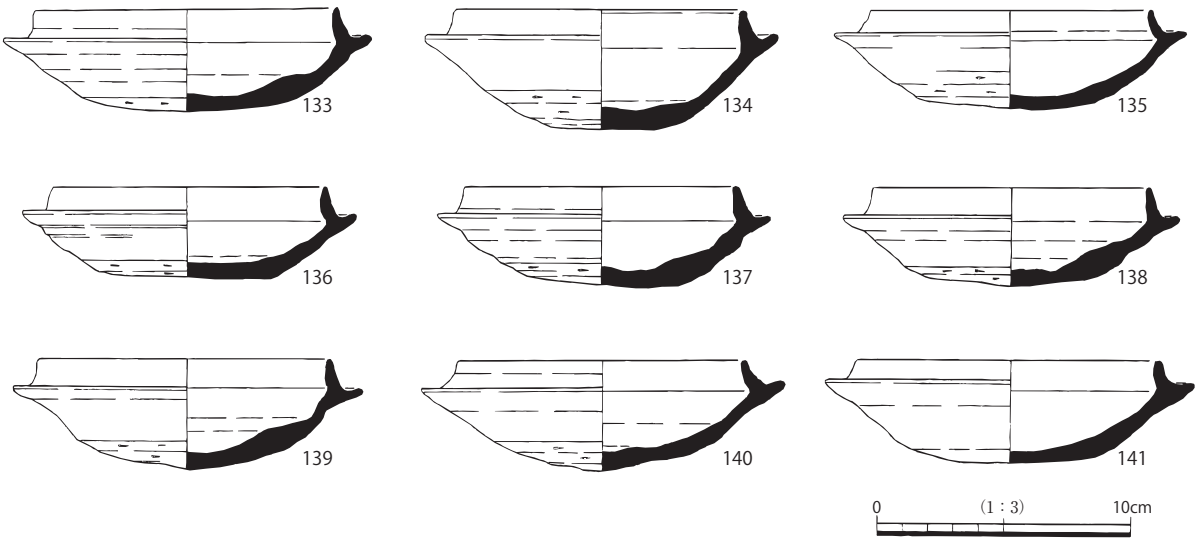
土層堆積状況（第61図）　①層は流土，②③層は流土または再進入時の掘削等に伴う土層である。④

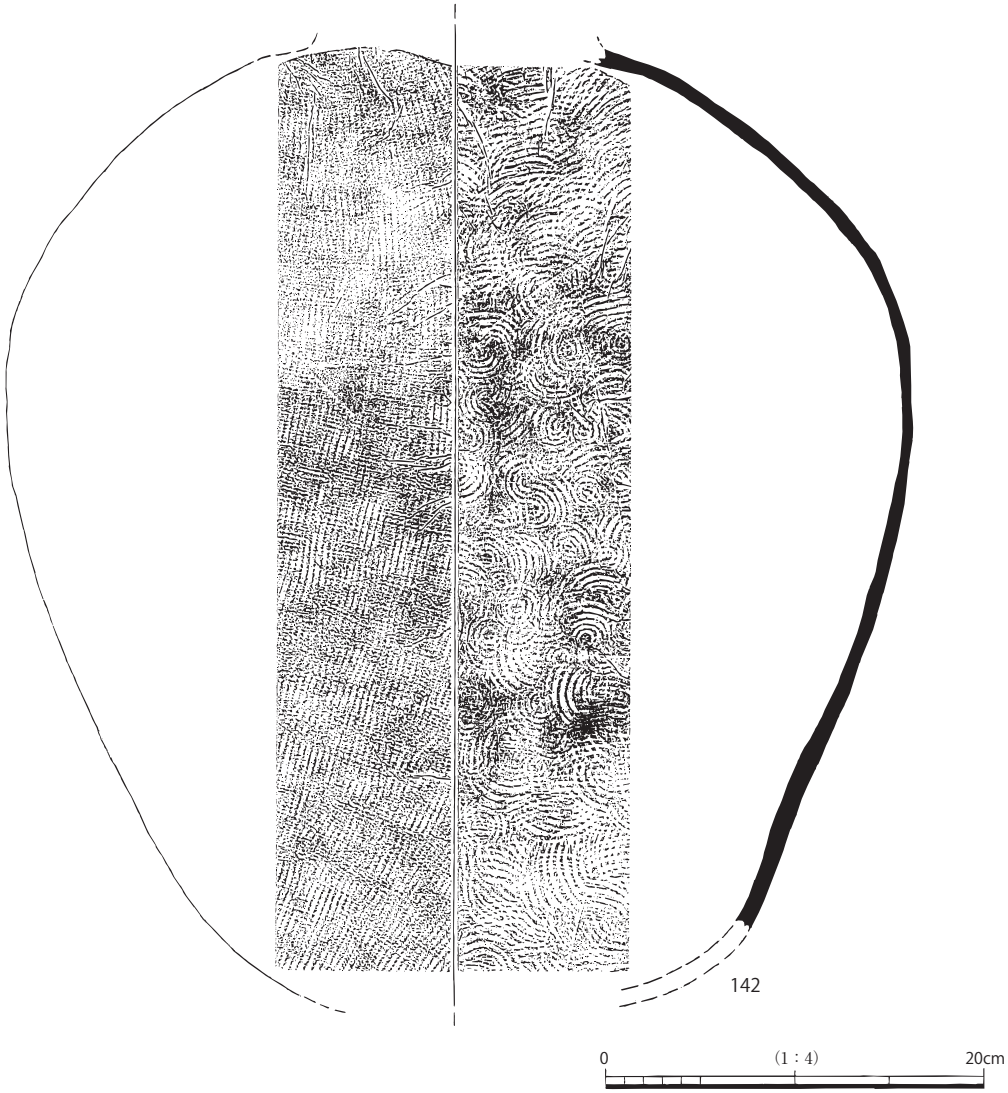


第62図　20号横穴墓遺構図１（1:40･1:20，▲は金属製品）

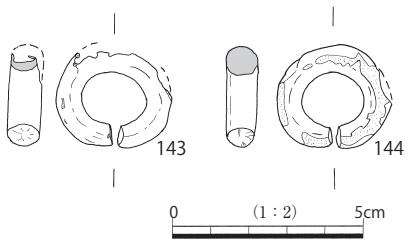


第63図　20号横穴墓遺構図２・土層図（1:40）





第64図　20号横穴墓遺物実測図１（1:3･1:4）



第65図　20号横穴墓遺物実測図２（1:2）

⑤層は初葬時の埋土等にともなうものであろうか。②③層下面（④層上面）が再進入面となる可能性があるが，詳細不明である。

出土遺物　遺物は出土していない。

時　期　出土遺物が存在せず，正確な時期についても不明であるが，周囲の横穴墓の時期，狭小な墓道等の特徴から見て大谷４期以前の横穴墓である可能性が高い。

②　20号横穴墓（第62～ 65図, カラー図版２, 図版17）

立　地　19号横穴墓の東約３mに存在し，標高は24.5mと19号横穴墓より低い。

墓道・閉塞部（第62・63 図）　Ｅ－83°－Ｓ方向に開口し，床面幅0.8m前後，残存長1.3mを測る。玄門との境界部には高低差５㎝前後の段を設け，玄門側を高くしている。

玄　門（第62・63 図）　床面幅0.45～ 0.7m，長さ1.05m，高さ0.85mを測り，玄室側がやや幅広になる。天井部の多くは残存していないが，残存部の形状からアーチ状の断面形だったものと考えられる。

玄　室（第62・63 図）　平面形は幅1.15～ 1.45m，奥行2.0mの長方形を呈し，壁沿いの床面に深さ5㎝前後の排水溝が掘られる。墓道から玄室までの残存長は4.35mとなる。右袖幅約0.1m，左袖幅約0.25mを測り，右袖が狭く，左袖が広い。天井部の多くは残存していないが，残存部の状況からアーチ形の断面形だったものと考えられる。残存高0.8m。玄室内には左側壁寄りを中心に10㎝大以下の円礫を敷いた礫床が，さらにその上面には須恵器甕を破砕してコの字状に配置した須恵器床が確認された。須恵器床下からも副葬品が出土することから，初葬時は礫床のみを埋葬施設としたものであったと考えられる。また，玄室側壁では加工痕が残っており，入口側で奥から前方向，奥壁側で前から奥方向の丸刃削痕（山陰横穴墓研究会　1995）が観察できる。

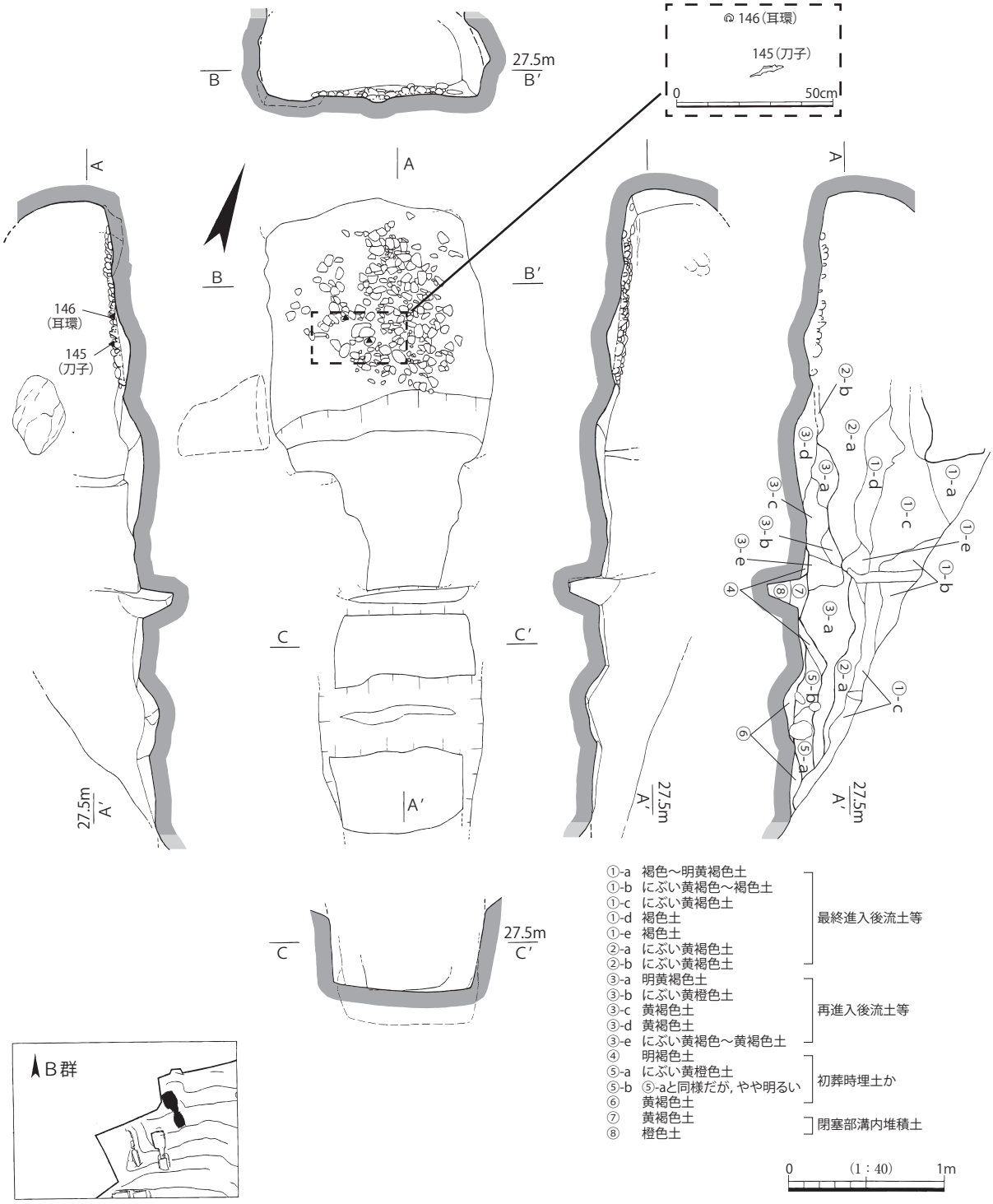
閉塞石（第62図）　割石・自然石が閉塞部から玄門全域にかけて30点以上積み上げられていた。床面直上から玄門天井部付近まで密閉するように積まれており，上部は積み直しの形跡もみられる。

土層堆積状況（第63図）　①層は流土，②層は追葬後の埋土または流土，③層は初葬後の埋土または流土である。②層下面の延長ラインで閉塞石を積み直した形跡が観察できる。②層下面以外に再掘削の可能性がある堆積状況はなく，初葬後１回のみの追葬が行われたものと思われる。

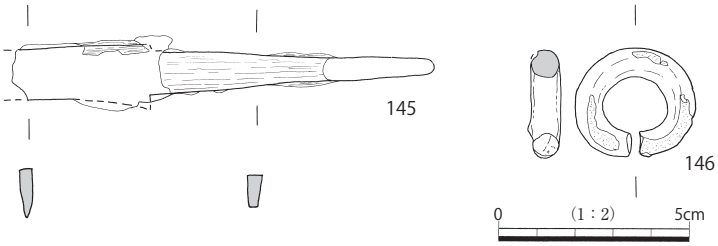
遺物出土状況（第62図）　玄室内より，須恵器杯身９点（133～ 141），須恵器床として配置された甕１個体分（142），銀環２点（143・144）が出土した。須恵器杯身の内２点（133・144）は排水溝底から奥壁に２つ並べて立てかけて配置されており，土器枕として使用されたものと考えられる。残る杯身７点（135～ 141）は全て口縁を下に伏せた状態で須恵器床の上下に混在して出土している。杯蓋は１点も出土しておらず，当初から埋葬施設の一部として置かれたものかもしれない。須恵器床甕片は礫床直上に敷かれ，奥壁側を開放したコの字状に配置されていた。基本的には内面を下に向けている。銀環２点（143・144）は前壁寄りの礫床直上，須恵器床下から出土しており，初葬時の副葬品と考えられる。初葬時には礫床のみが，追葬時に須恵器床が配置されたものであろう。初葬時の副葬品は追葬時に移動を受けていると思われるが，最終埋葬時の配置を良好に残している。

出土遺物（第64・65図，カラー図版５，図版42）　133～141は玄室内より出土した須恵器杯身で，この内133・134が土器枕として使用されたものである。141を除き全て底部外面に粗雑なヘラケズリが施される。

142は須恵器床が接合した甕である。口縁部と底部を欠いている。口縁と底部以外はほぼ全ての破



第66図　21号横穴墓遺構図・土層図（1:40・1:20，▲は金属製品）



第67図　21号横穴墓遺物実測図（1:2）

片が揃っており，意図的に打ち欠いた後に体部のみを須恵器床として使用したと考えられる。

143・144は玄室内出土の銅芯銀板貼の銀環である。143は欠損部もあるが，２点ともに断面円形に近く，端面に銀板を折り込んだシワが残るものである。

時　期　玄室内出土の須恵器蓋杯はいずれも大谷４期の特徴を示す。よって，横穴墓の築造，埋葬も大谷４期を中心とした時期の中で終了しているものと考えられる。

③　21号横穴墓（第66・67図，図版18）

立　地　20号横穴墓の北東約５ｍに存在し，標高は27ｍと20号横穴墓より高い。B群の東端にあたる横穴墓である。

墓道・閉塞部（第66図）　Ｅ−69°−Ｓ方向に開口し，床面幅0.8〜0.9m，残存長1.6ｍを測る。玄門より約0.55ｍの地点に，幅50㎝，深さ15㎝前後の溝が主軸方向に直交して掘り込まれている。

また，閉塞部には幅18㎝，深さ20㎝前後の溝が主軸方向に直交して掘り込まれ，溝と連続して閉塞部側壁も若干削り込まれている。閉塞石は無い。

玄　門（第66図）　床面幅0.5〜0.8m，長さ0.8m，残存高0.4ｍを測り，玄室側が幅広になる。天井部は残存していない。

玄　室（第66図）　平面形は幅1.15〜1.45m，奥行1.8ｍの長方形である。墓道から玄室までの残存長は4.2ｍとなる。前壁側の右袖約0.1m，左袖約0.25ｍを測り，右袖が狭く，左袖が広い。玄門より0.2〜0.3ｍの地点から床面が10㎝前後高く段状となっている。天井部の多くは残存していないが，残存部の状況からアーチ形の断面形だったものと考えられる。残存高0.5m。左側壁に幅50㎝，高さ35㎝，奥行60㎝程度の小穴が確認される。玄室床面の段より奥で10㎝大以下の円礫を敷いた礫床が確認された。礫床の礫は大部分が床面からやや浮いた状態で出土しており，玄室床面も全体に凹凸が大きい。玄室床面の段も含め，盗掘等による攪乱を床面まで受けたものである可能性があり，礫の多くも原位置から動いているものと思われる。また，玄室側壁に前から奥方向の加工痕がわずかに観察できる。

土層堆積状況（第66図）　①②層は最終進入後の流土，③層は最終進入前の堆積土等と考えられ，③層上面が最終進入面と思われる。④〜⑥層は固く締まった土層を主体としていることから，初葬時の埋土等に伴うものであろうか。その上面においても再進入に伴う掘削の痕跡が見られ，一部は床面を削り込んでいるようである。⑦⑧層は閉塞部溝内堆積土である。少なくとも⑦層は再進入後に堆積したものと思われる。以上の状況から，初葬後最低２回の再進入が行われていることが確認でき，それらの進入痕は盗掘に伴うものである可能性が高い。

遺物出土状況（第66図）　玄室内礫床に混在して刀子１点（145），銀環１点（146）が出土した。土器は

１点も出土していない。礫と同様，盗掘等による再掘削によって原位置から大きく動いているものと推定される。

出土遺物（第67図，カラー図版５，図版57）　145・146は玄室内より出土した金属製品である。145が両関の刀子で，刃部の一部と茎部が残存しているほか，鞘木と柄木の一部も残存している。146が銅芯銀板貼の銀環で，断面円形に近く，開き部端には銀板を折り込んだシワの痕跡が観察できる。

時　期　出土遺物には土器資料が存在しないため，時期についての詳細は不明であるが，今回の調査で礫床が確認される横穴墓は，21号横穴墓の他は20，22号横穴墓のみであり，それらはすべて大谷４期を中心とした時期のものである。21号横穴墓も大谷４期を中心とした時期の築造であろうか。

第３項　横穴墓群Ｃ群

谷の最奥から西向き斜面の標高22m以上に築かれた，13基の横穴墓からなる一群である。22～24号横穴墓，25～27号横穴墓，28～31号横穴墓，32～34号横穴墓で，それぞれ一定のまとまりを見ることができ，更に小支群の単位構成も想定可能だが，本章においては一括して取り扱う。

①　22号横穴墓（第68～70図，図版19）

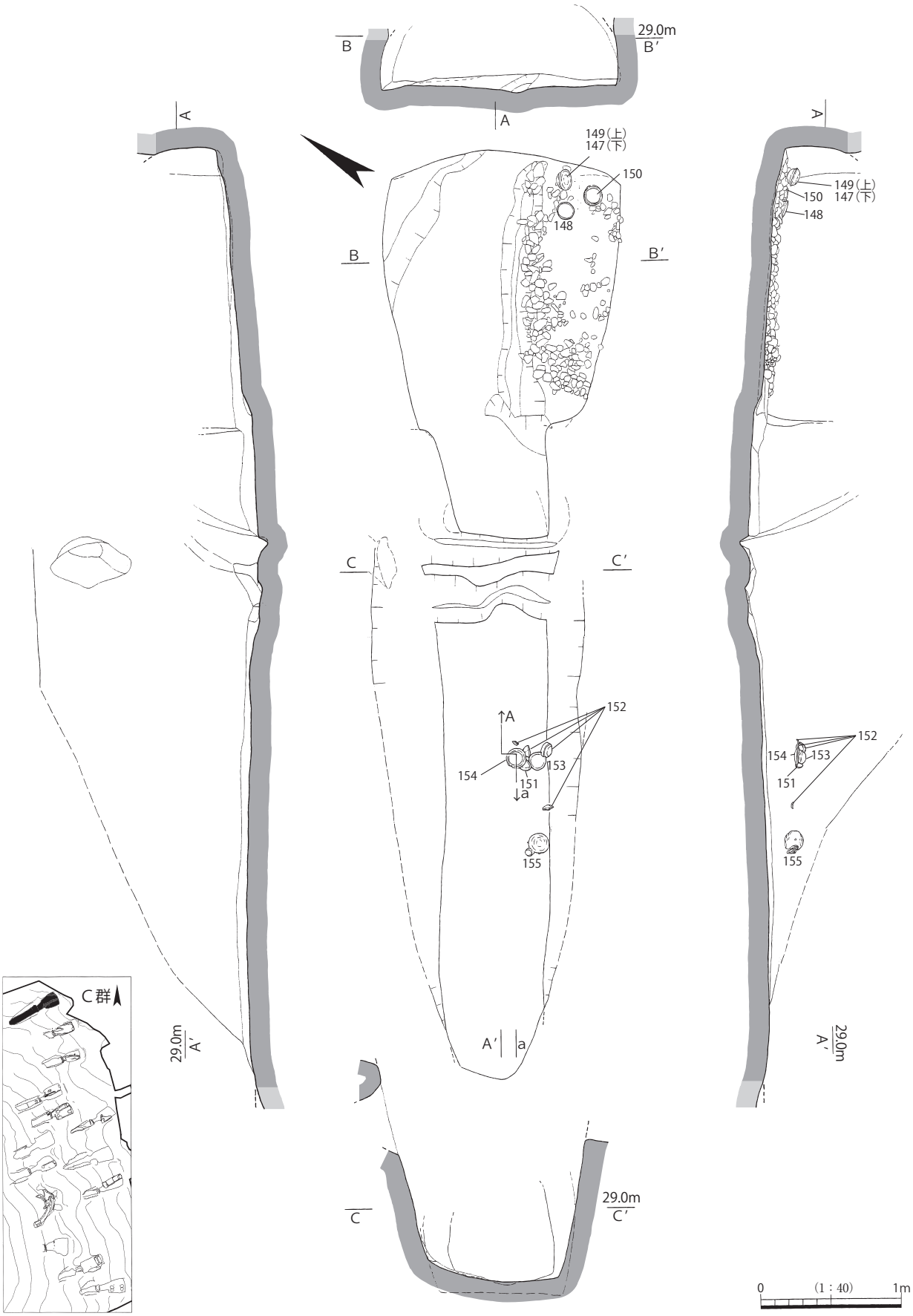
立　地　標高約28.5mのC群の北端に位置する。

墓道・閉塞部（第68図）　Ｓ－59°－Ｗ方向に開口し，床面幅0.75～0.9m，残存長3.8mを測る。玄門より約0.3m前方の地点に，幅30㎝前後，深さ10㎝前後の溝が，閉塞部に幅10～20㎝，深さ10㎝前後の溝がいずれも主軸方向に直交して掘り込まれている。閉塞部の溝と連続して側壁も一部削り込まれている。また，左側壁の閉塞部付近には小穴が確認される。閉塞石は無かった。

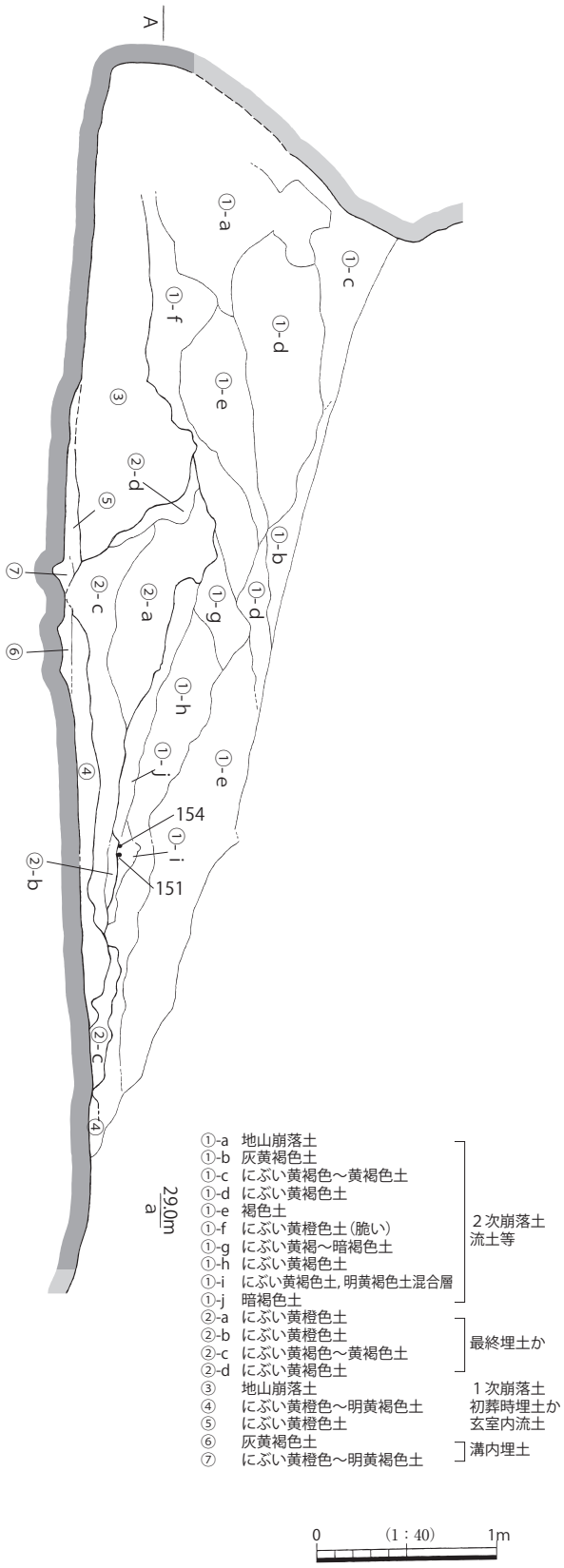
玄　門（第68図）　床面幅0.5～0.8m，長さ0.8m，残存高0.7mを測り，玄室側が幅広になる。天井部は残存していない。

玄　室（第68図）　平面形は幅1.2～1.65m，奥行1.95mの奥が広がる台形状である。墓道から玄室までの残存長は6.55mとなる。前壁側の右袖約0.25m，左袖約0.1mを測り，右袖が広く，左袖が狭い。天井部の多くが残存していないが，残存部の状況からアーチ形の断面形だったと考えられる。残存高0.5m。玄室右側には主軸に沿った浅い溝と玄門側の段によって，高さ５㎝程度，幅0.7m程度の屍床を形成している。また，この屍床直上で10㎝大以下の礫を敷いた礫床が確認された。礫床の礫は隙間が多く，一部は排水溝へ落ち込んでいる。天井部の崩落等によって移動したものであろうか。

土層堆積状況（第69図）　①層は２次崩落土および流土等である。②層は最終埋土であろうか。③層は１次崩落土である。④層は初葬時の埋土であろう。⑤は玄室内流土，⑥⑦層は溝内埋土である。②層下面において③④層を掘削して再進入を試みた形跡があるが，玄室内へは進入していないようである。また，墓道上の②層上面からは須恵器がまとまって出土している。掘削後意図的に埋戻し，その上面に須恵器を置いたものと考えられよう。また，土層からは初葬後の玄室内への再進入は明確でないが，③層崩落以前に追葬等があった可能性が残る。



第68図　22号横穴墓遺構図（1:40）



第69図　22号横穴墓土層図（1:40，●は土器）

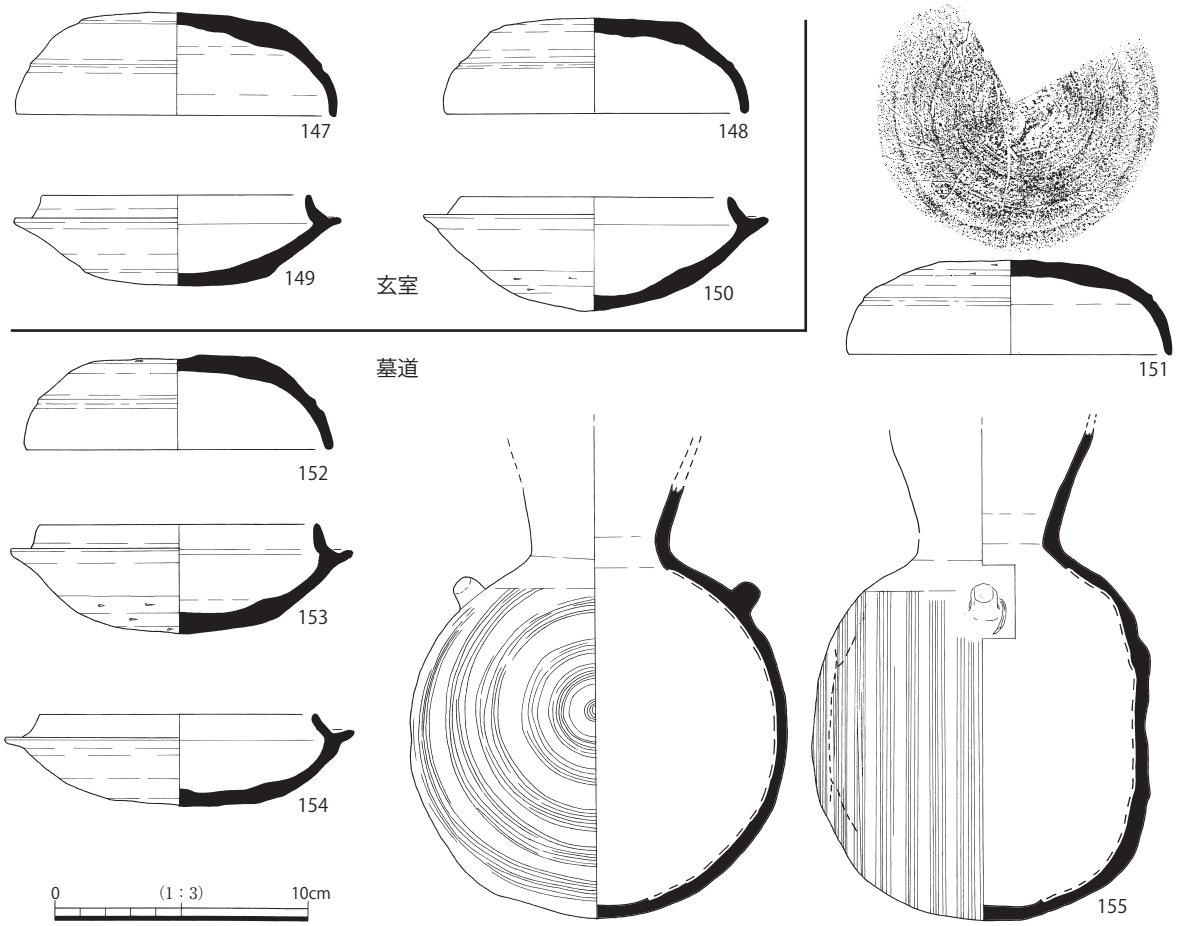
遺物出土状況（第68・69図）　玄室内礫床直上の奥壁側から須恵器蓋杯が２組（147～150）出土している。１組（147・149）は蓋を下に，身を上に組み合わせた状態で出土し，もう１組（148・150）は双方口縁を上に向けて組み合わずに出土している。天井崩落等の影響で若干原位置から動いているようで，本来は２組とも組み合わせて置かれていたものと思われる。あるいは土器枕として使用されたものかもしれない。ただし，148と150は口径が組み合わず，本来のセット関係とは異なるようである。

墓道②層上面より須恵器蓋杯蓋２点（151・152）杯身２点（153・154），提瓶１点（155）がまとまって出土した。丁寧に据え置かれたものではなく，無造作にまとめて置かれていたものである。また，この中には玄室内出土須恵器よりもやや古い様相を示す資料（151・153）が存在し，天井崩落以前の追葬等で掻き出された須恵器を含む可能性がある。

出土遺物（第70図，図版42・43）　147～150は玄室内より出土した須恵器蓋杯である。いずれも外面にヘラケズリ後ナデ，またはナデが施されている。

151～155は墓道上より出土した須恵器である。154・155では一部欠損部があるが，その他はほぼ完形に接合した。151～154が蓋杯で，杯蓋151，杯身153は外面にやや粗雑なヘラケズリが，蓋152，杯身154はヘラケズリ後ナデが施されている。また，151の杯蓋の天井部外面には２本線のヘラ記号が確認できる。155は提瓶で，肩部に瘤状の把手を持つ。

時　期　出土した須恵器は古相の資料も含め全て大谷４期の範疇で捉えられる。よって，横穴墓の築造，埋葬も大谷４期を中心とした時期の中で終了しているものと考えられる。



第70図　22号横穴墓遺物実測図（1:3）

②　23号横穴墓（第71・72図，図版20）

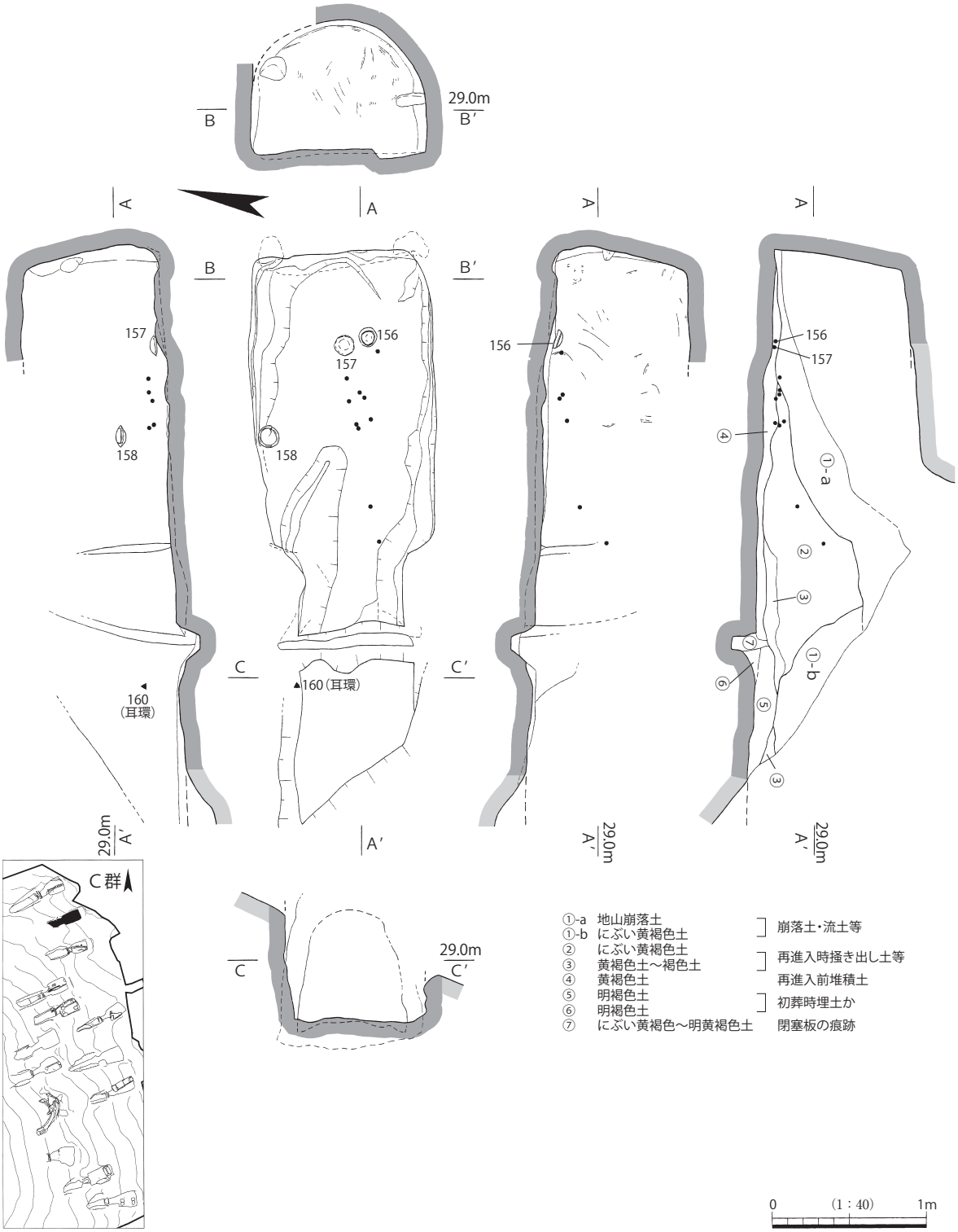
立　地　22号横穴墓の南東約３ｍに位置し，標高も22号横穴墓とほぼ同じである。

墓道・閉塞部（第71図）　Ｓ－70°－Ｗ方向に開口し，床面幅0.7ｍ，残存長1.2ｍを測る。閉塞部には幅25㎝前後，深さ15㎝前後の溝が主軸方向に直交して掘り込まれ，溝と連続して閉塞部側壁も若干削り込まれている。閉塞石は無かった。

玄　門（第71図）　床面幅0.5～ 0.8ｍ，長さ0.45ｍ測り，天井部の多くは残存していないが，残存部の状況から高さ0.6ｍ程度のアーチ状もしくは台形状の断面形だったと考えられる。両側壁沿いに幅18㎝前後，深さ５㎝前後の玄室へ続く排水溝を設ける。

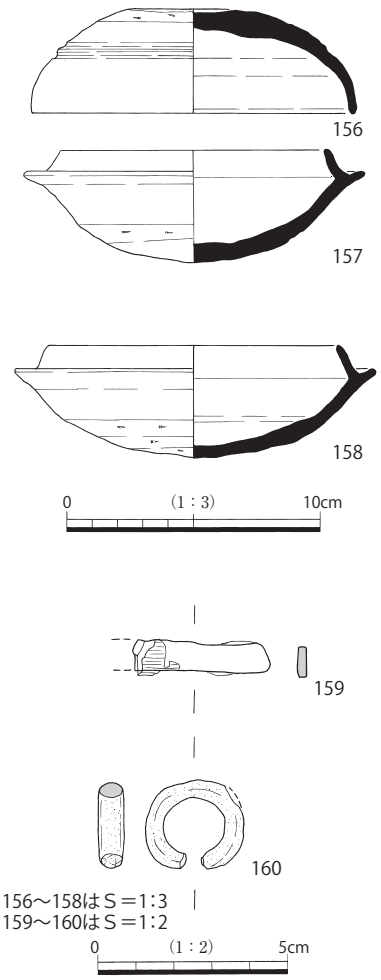
玄　室（第71図）　平面形は幅1～ 1.2ｍ，奥行1.95ｍの長方形である。残存状況は悪いが，玄門から連続する深さ５㎝前後の排水溝が壁沿いに廻っていたようである。墓道から玄室までの残存長は3.6ｍとなる。天井部は奥壁側のみ残存し，高さ0.9ｍのアーチ形の断面形である。奥壁両端に奥行10～15㎝程度の小穴が確認される。また，玄室の壁面には加工痕が残っており，側壁奥壁寄で前から奥方向，奥壁で中央付近から左右方向の丸刃削痕（山陰横穴墓研究会1995）が観察できる。

土層堆積状況（第71図）　①層は崩落土および流土である。②③層は最終進入時の掻き出し土及びその流土であろう。③層下面（④⑤層上面）において再進入に伴う掘削痕が確認できる。②層中には須



第71図　23号横穴墓遺構図・土層図（1:40，●は土器▲は金属製品）

恵器片が多く確認され，玄室内②層上面付近では完形の須恵器杯身も確認される他，墓道上③層下面付近において耳環が確認されている。④層は再進入前の堆積土，⑤⑥層は初葬時の埋土であろうか。⑦層は初葬時閉塞板の存在を示す土層である。以上の状況から，初葬後，最低１回の追葬もしくは盗掘に伴う玄室内への再進入があったものと考えられる。



第72図　23号横穴墓遺物実測図
（1:3・1:2）

遺物出土状況（第71図）　玄室内床面直上の奥壁寄りから須恵器蓋杯が１セット（156・157），玄室内堆積土②層上面付近左側壁沿いから須恵器杯身１点（158），墓道上堆積土③層下面付近から耳環１点（160）が，堆積土②層を中心に須恵器蓋杯小片，壺甕小片が多く確認されている。その他，正確な出土地点は不明だが，玄室内前方床面付近より刀子小片が１点確認された。玄室内床面直上より確認された１セットの須恵器蓋杯はいずれも口縁部を下に向けて伏せて並んでおり，原位置を留めた土器枕の可能性がある。

出土遺物（第72図，カラー図版５，図版43・57）　156・157は玄室内床面より出土した須恵器蓋杯で，セットになるものと考えられる。どちらも外面に周辺ヘラケズリが施される。

158は玄室内堆積土上より出土した須恵器杯身である。底部外面に粗雑なヘラケズリが施される。159は玄室内より出土した鉄製品小片で，刀子の茎部かと思われる。柄木の木質が一部残存している。160は墓道上より出土した耳環で，銅芯部のみ残存し，現状では楕円形の断面形である。

時　期　玄室内及び墓道上出土の須恵器はいずれも大谷４期の特徴を示す。よって，横穴墓の築造，埋葬も大谷４期を中心とした時期の中で終了しているものと考えられる。

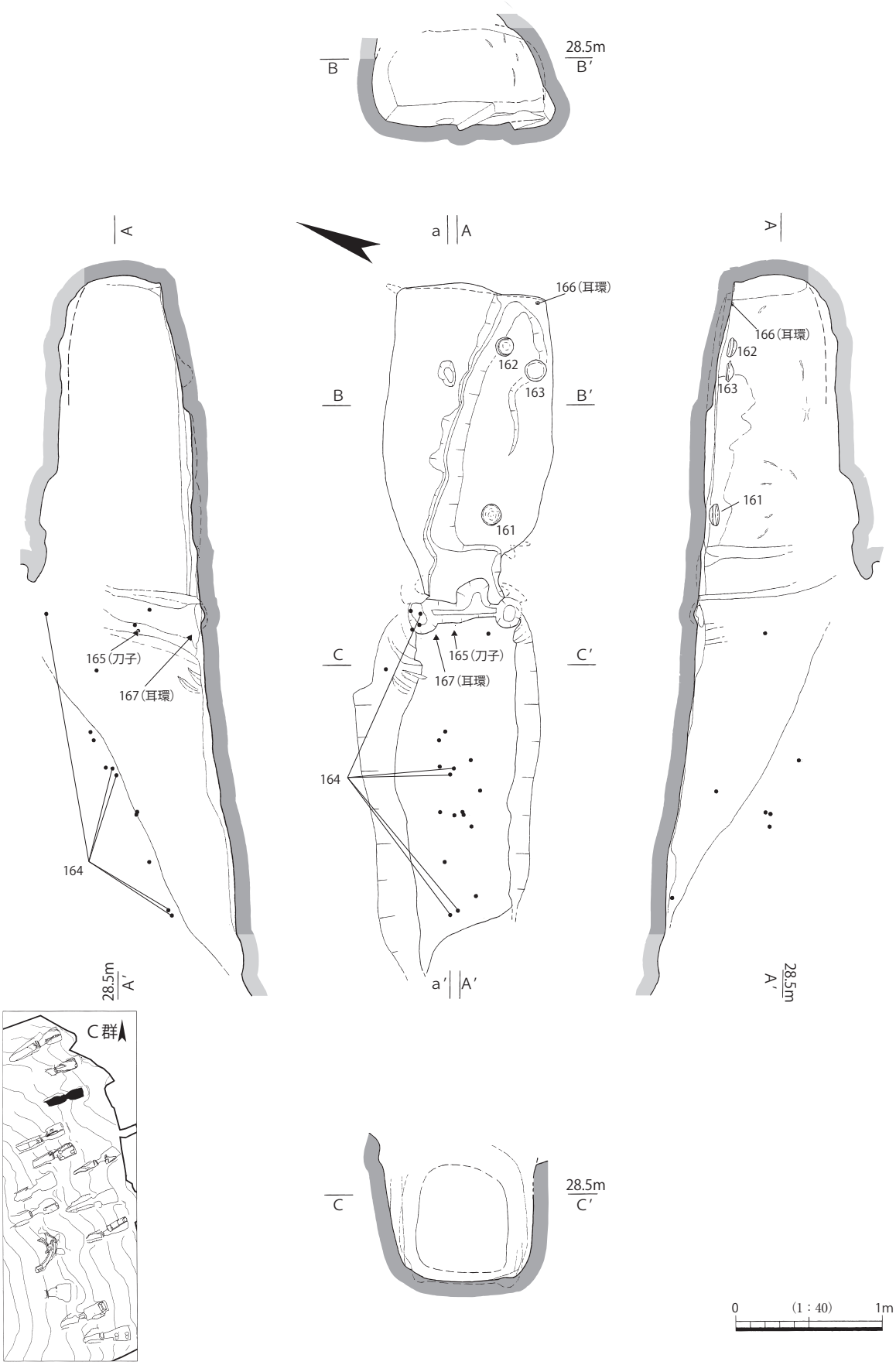
③　24号横穴墓（第73～75図，図版20）

立　地　23号横穴墓の南約３ｍに位置し，標高約28ｍと23号横穴墓よりやや低い。

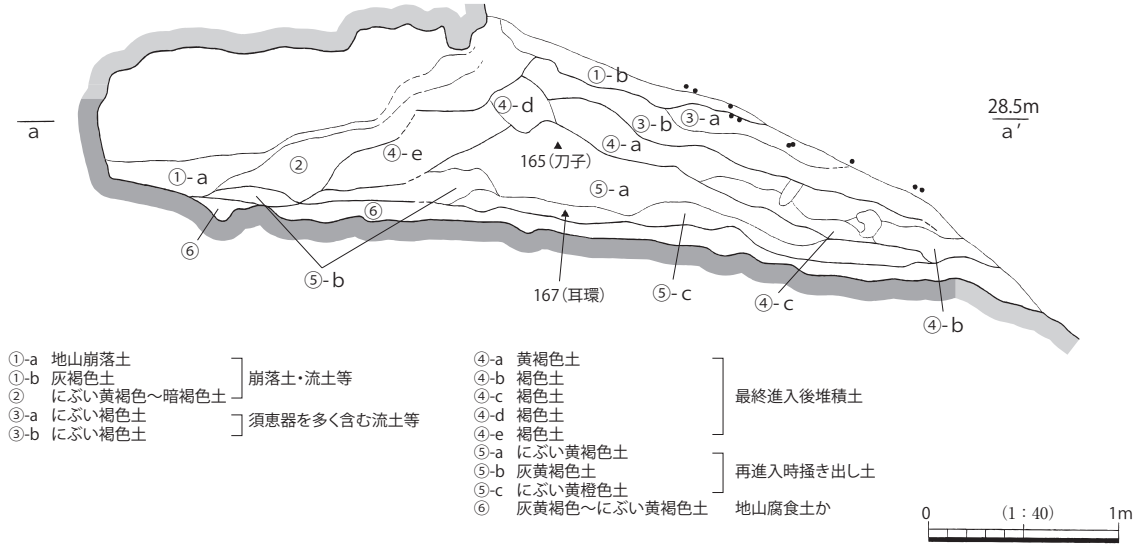
墓道・閉塞部（第73図）　Ｓ－70°－Ｗ方向に開口し，床面幅0.65～0.8ｍ，残存長2.6ｍを測る。閉塞部には幅12㎝前後，深さ10㎝前後の溝が主軸方向に直交して掘られ，溝の両端はやや深く掘り込まれている。また，閉塞部付近の側壁も若干削り込まれている。閉塞石は無かった。

玄　門（第73図）　床面幅0.5～0.6ｍ，長さ0.35ｍを測り，天井部の多くは残存していないが，残存部の状況から高さ0.7ｍ程度のアーチ状もしくは台形状の断面形だったと考えられる。床面は玄室奥より浸み出る水によってやや深くえぐられている。

玄　室（第73図）　平面形は幅1～1.1ｍ，奥行1.85ｍの徳利形に近い長方形状である。墓道から玄室までの残存長は4.8ｍとなる。基本的には袖部のなだらかな徳利形であるが，右前壁に短い袖を持ち，片袖状となる。天井部の多くが残存していないが，残存部の状況から高さ0.8ｍ程度のアーチ形の断面形だったと考えられる。床面の凹凸は玄室奥より浸み出る水で溝状にえぐれたものであろう。また，玄室右半部では加工痕が残っており，側壁の大部分で前から奥方向，側壁袖付近で奥から前方向，奥壁で内から外方向の丸刃削痕（山陰横穴墓研究会1995）が観察できる。



第73図　24号横穴墓遺構図（1:40，●は土器▲は金属製品）



第74図　24号横穴墓土層図（1:40，●は土器▲は金属製品）

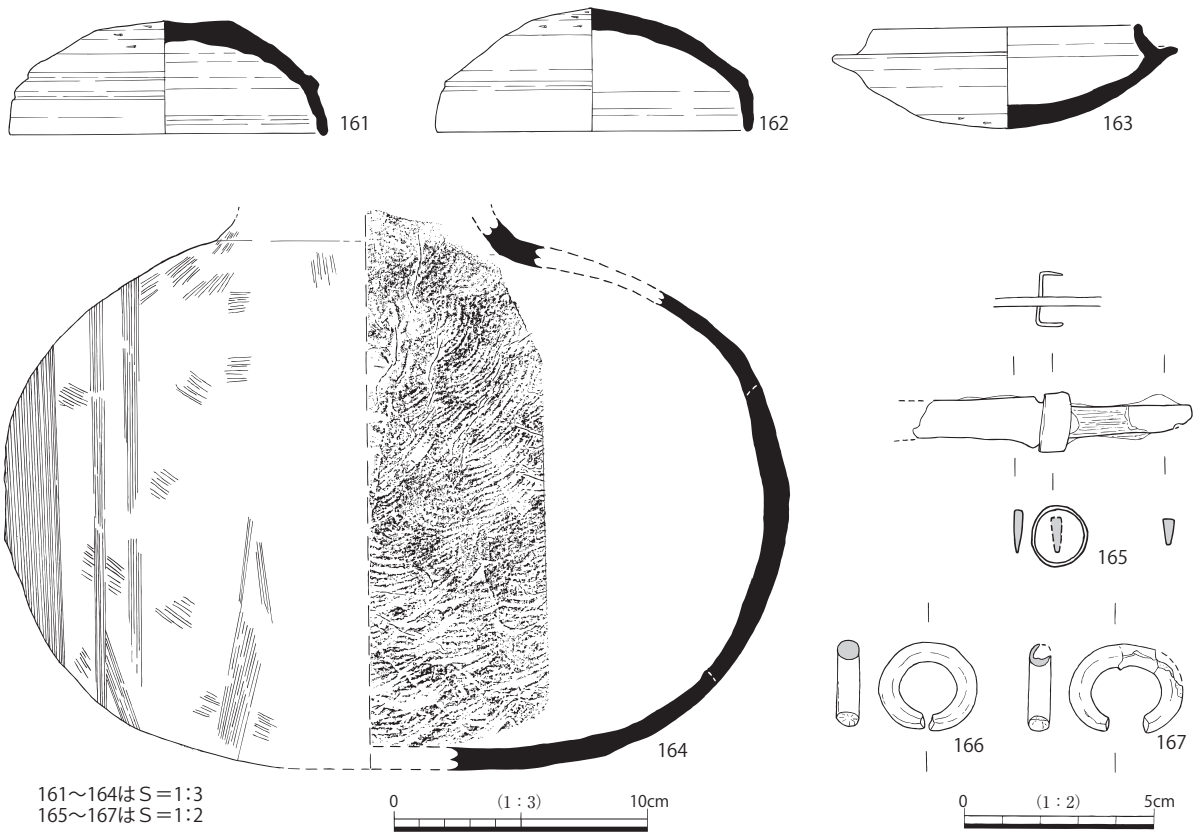
土層堆積状況（第74図）　①②層は崩落土および流土，③層は須恵器片を多く含む流土，④層は遺物をほとんど含まない堆積土である。③層出土の須恵器片は同一個体と思われる横瓶片が大多数で，④層堆積後に横瓶を使用した祭祀を行った可能性もある。⑤層は須恵器，金属製品を含む再進入時の掻き出し土である。⑥層は地山腐食土であろう。⑤層は閉塞部～墓道からも須恵器小片，金属製品が確認され，玄室内の堆積土を掻き出したものと考えられる。以上の状況から，初葬後，最低１回の追葬もしくは盗掘に伴う玄室内への再進入があったものと考えられる。

遺物出土状況（第73・74図）　玄室内右奥壁寄りの床面付近から須恵器蓋杯が１セット（162・163），銀環１点（166），玄室内玄門寄りの床面直上から須恵器杯蓋1点（161）が出土した。162・163の須恵器蓋杯は，いずれも口縁部を下に向けて伏せて並んでおり，土器枕の可能性があるが，再進入時に床面付近まで掘削を受けており，原位置を留めるものか疑問が残る。閉塞部手前，墓道上堆積土⑤層中から刀子片１点（165），銀環１点（167），須恵器杯蓋小片が確認されている。また，③層中で須恵器が多く確認され，その多くが１つの横瓶（164）として接合した。

出土遺物（第75図，カラー図版５，図版43・57）　161～163は玄室内出土の須恵器蓋杯で，162の杯蓋と163の杯身はセットになるものと考えられる。いずれも外面にやや粗雑なヘラケズリが施される。164は墓道上③層より出土した須恵器横瓶で，体部の一部のみ残存する。外面にはカキメを施している。

165～167は金属製品である。165は墓道上より出土した両関の刀子片である。刃部先端を欠き，鉄製の鏃と柄木の木質の一部が残存している。鏃は筒状の一方を塞ぎ，茎を挿入する孔を有するタイプである。166・167は玄室内及び墓道上より出土した銀環で，いずれも銅芯銀板貼である。167は欠損部も多いが，いずれも断面形はほぼ円形で，開き部端に不明瞭なシワが残る。

時　期　須恵器蓋杯は全て大谷４期の特徴を示す。⑤層より出土した図化していない小片資料含め同様の時期の範疇で捉えられる。横穴墓の築造，埋葬も同様の時期のものであろう。



第75図　24号横穴墓遺物実測図（1:3・1:2）

④　25号横穴墓（第76～78図，図版21）

立　地　24号横穴墓の南東約８ｍに存在し，標高約28m，24号横穴墓とほぼ同じである。

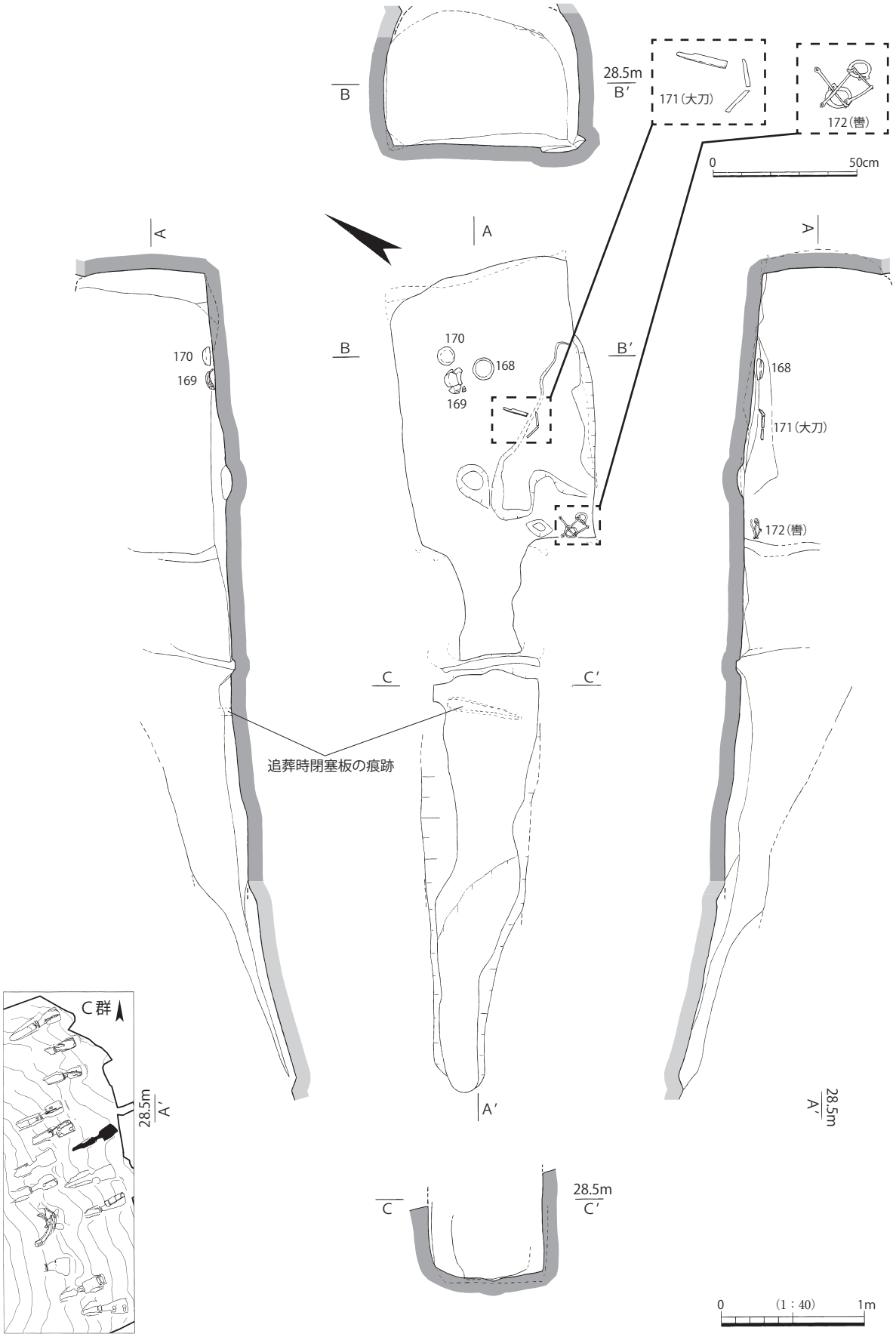
墓道・閉塞部（第76図）　Ｓ－60°－Ｗ方向に開口する。現状で床面幅0.4～0.8m，残存長3.1ｍを測るが，閉塞部より約1.5m前後から前方は本来の形状を留めていない可能性がある。閉塞部には幅10㎝前後，深さ10㎝前後の溝が主軸方向に直交して掘り込まれている。また，床面溝の前方にも埋土上から掘り込まれた追葬時閉塞板の痕跡が溝状に検出されている。閉塞石は無かった。

玄　門（第76図）　Ｓ－54°－Ｗ方向に開口し，墓道とやや異なった主軸となる。床面幅0.3～0.6m，長さ0.7m，残存高0.5mを測り，中ほどがやや幅狭になる。天井部は残存していない。

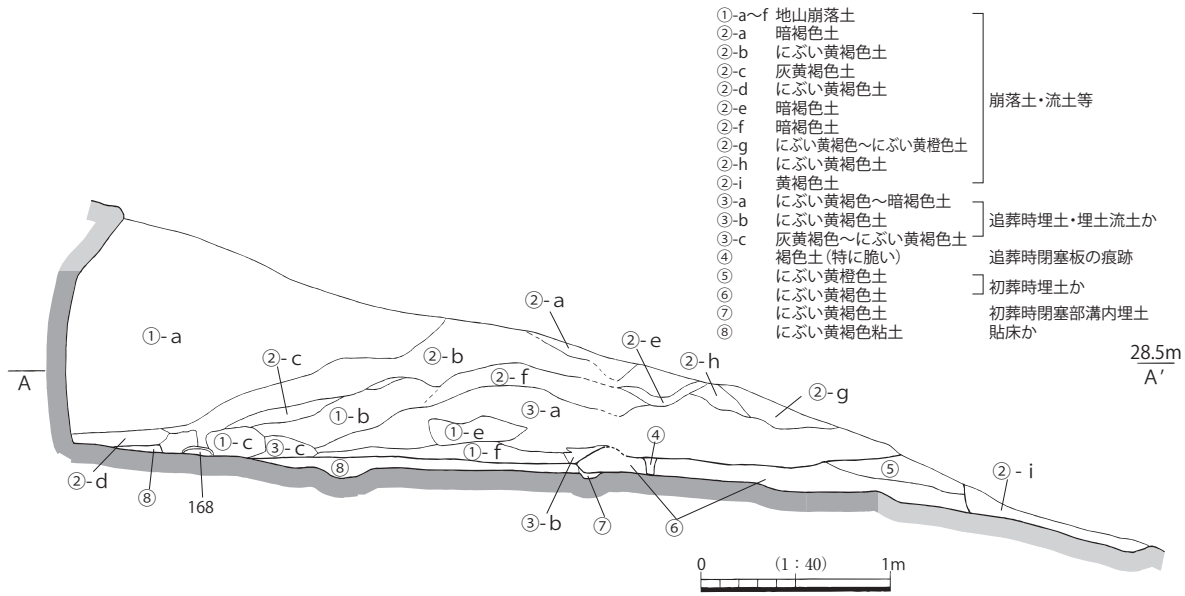
玄　室（第76図）　主軸は玄門とほぼ同一方向であるが，奥壁がやや傾く。平面形は幅1.1～1.25m，奥行約２ｍの長方形状である。墓道から玄室までの残存長は5.8mとなる。前壁側の右袖約0.5m，左袖約0.15mを測り，右袖が広く，左袖が狭い。天井部は奥壁部分がわずかに残り，アーチ形の断面形である。天井高は残存部の状況から0.9～１ｍ程度になるものと考えられる。

土層堆積状況（第77図）　①②層は流土である。③層は追葬時の埋土とその流土であろうか。④層は追葬時に閉塞板を立てた痕跡，⑤⑥層は初葬時期の埋土であろう。⑦層は初葬時の閉塞溝埋土，⑧層は貼床の可能性がある締まった土質である。⑤⑥層上面が再進入面と考えられる。以上の状況から，初葬後最低１回の玄室内への追葬に伴う再進入があったものと考えられる。

遺物出土状況（第76・77図）　玄室内床面から須恵器杯蓋３点（168～170）が，大刀１振（171），馬具



第76図　25号横穴墓遺構図（1:40・1:20）



第77図　25号横穴墓土層図（1:40）

轡１点（172）が確認されている。須恵器は玄室中央よりやや奥壁寄りに全て口縁を下にして置かれており，169は上から潰れるように割れていた。大刀は玄室中央よりやや右側壁寄りに大きく３片に折れた状態で，馬具轡は玄室右前壁付近からほぼ完形の状態で出土した。いずれも床面または⑧層直上からの出土である。直上に地山崩落土が乗ることから，最終埋葬時の配置をある程度残しているものと思われる。

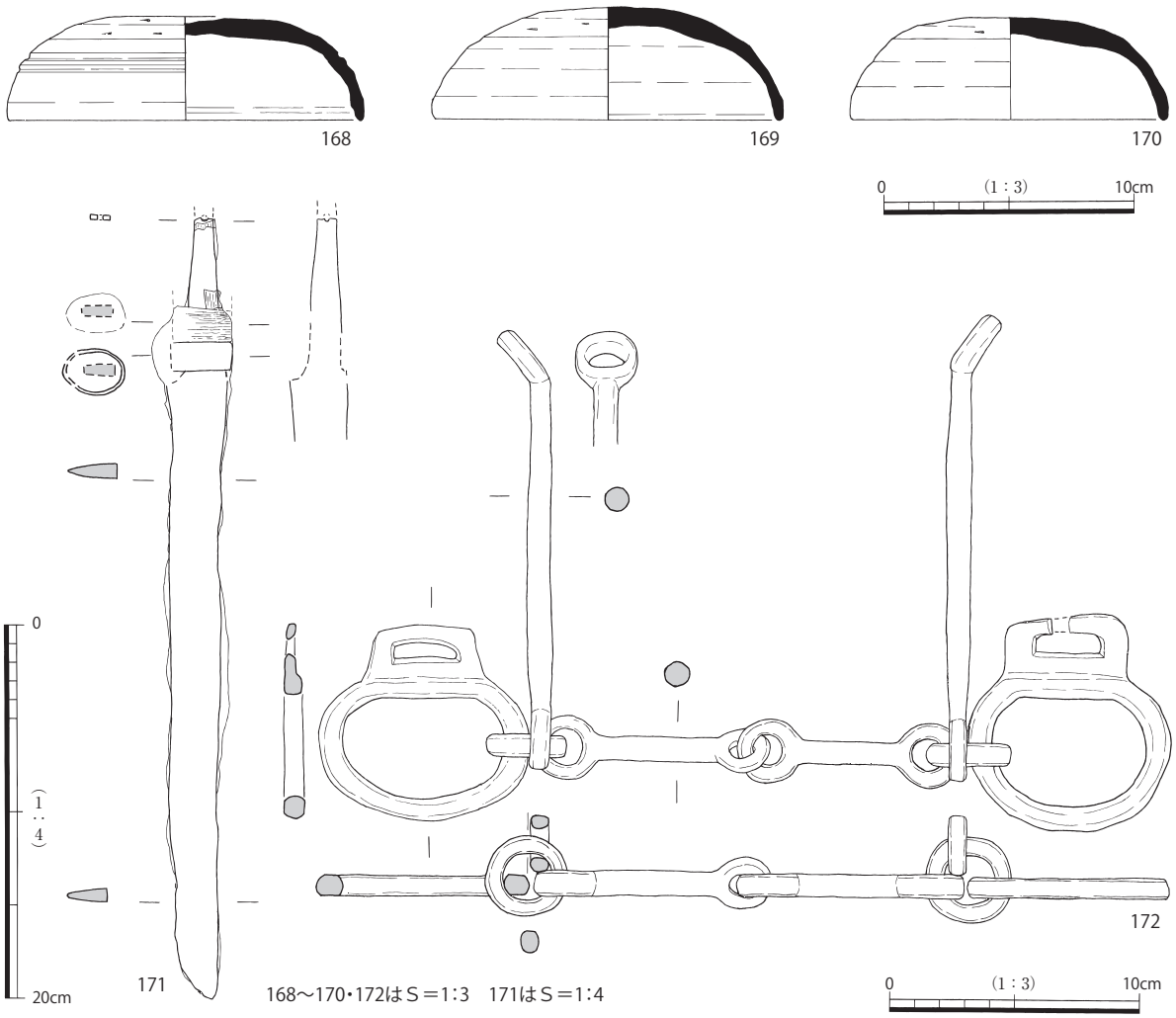
出土遺物（第78図，図版44・55）　168～170は玄室内より出土した須恵器杯蓋で，天井外面には168で丁寧なヘラケズリが確認される。169・170は風化著しいが，わずかにヘラケズリの痕跡が確認できる。169・170については口縁径の大きさに比して肩部の区画がやや不明瞭なもので，石見地方の須恵器（島根県立八雲立つ風土記の丘1998，榊原2008）に似た特徴を示す。171・172は玄室内より出土した鉄製品である。171は大刀である。関の状況は不明瞭であるが，両関であろう。茎部端を一部欠く。刃部長32.8㎝，茎部残長8.7㎝で，全残存長41.5㎝を測る。鉄製の鏃と柄木，糸巻きの一部も残存している。また，目釘穴１孔が確認できる。172が馬具の大型矩形立聞式の環状鏡板付轡（岡安1984）である。立聞孔は立聞のほぼ中央に開く。銜，引手と環状鏡板は連結環でつながる。

時　期　玄室内出土の須恵器は，168で大谷３期の特徴を示し，169・170で石見３～４期（大谷３～４期併行）の特徴を示す（島根県立八雲立つ風土記の丘1998，榊原2008）。横穴墓の築造が大谷３期，埋葬も４期の間には終了したものと考えられる。

⑤　26号横穴墓（第79～85図，カラー図版２，図版22・23）

立　地　25号横穴墓の南約４ｍに存在し，標高は約26ｍと25号横穴墓より２ｍ低い。

墓道・閉塞部（第79・80図）　Ｓ－67°－Ｗ方向に開口し，床面幅0.35～0.95ｍ，残存長3.4ｍを測る。



第78図　25号横穴墓遺物実測図（1:3・1:4）

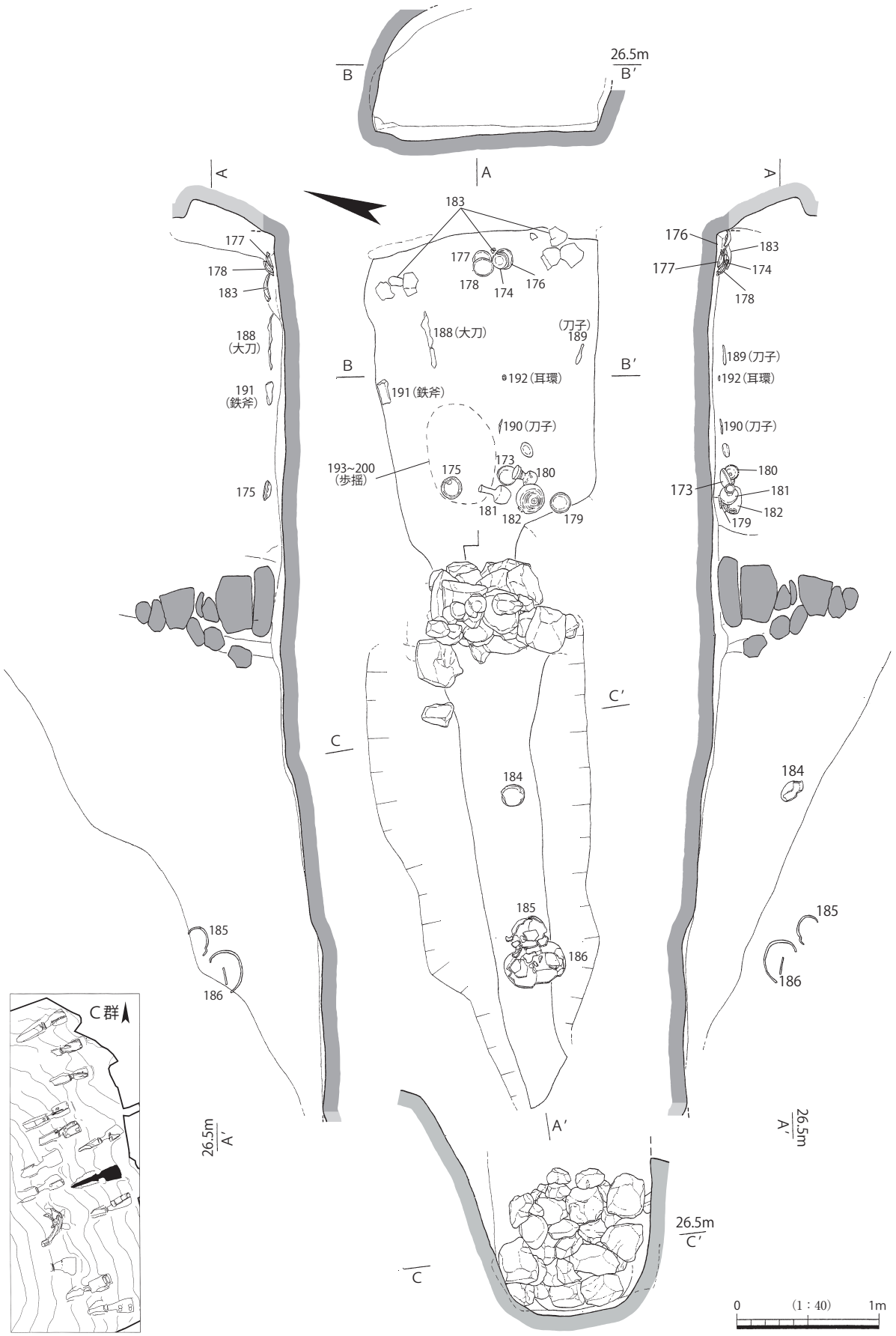
閉塞部両側壁を床面から若干削り込むが，玄門境界部の床面はフラットになっている。

玄　門（第79・80図）　床面幅0.5～ 0.8m，長さ0.65m，残存高0.5mを測り，左側壁が中ほどから玄室に向けて広くなる。天井部は残存していないが，閉塞石再上部のレベルを参照すると，本来0.95m前後の高さを有していたものと考えられる。

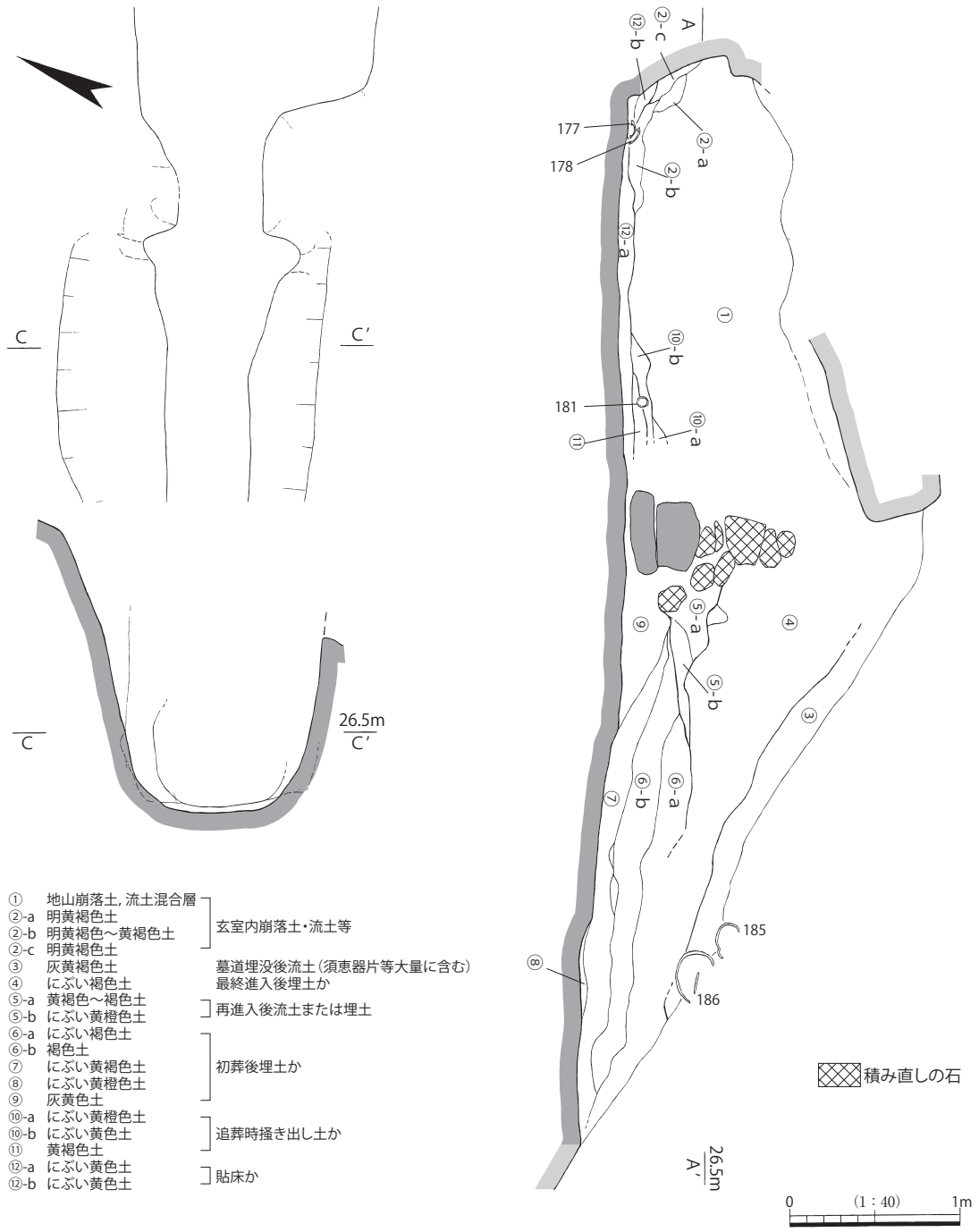
玄　室（第79図）Ｓ－76°－Ｗ方向に開口し，墓道～玄門よりやや異なった主軸となる。平面形は幅1.35～ 1.6m，奥行約2.1mの奥が広がる台形状である。墓道から玄室までの残存長は6.15mとなる。右袖のみの片袖式である。天井部の多くが残存していないが，残存部の状況から高さ0.95m程度のアーチ形の断面形だったと考えられる。

閉塞石（第79図）　割石・自然石が閉塞部から玄門にかけて約30点積み上げられていた。玄門床面直上から天井部付近まで密閉するように積まれており，上部は積み直された形跡もみられる。積み直しを受けていない下段の石は全て玄門内で収まるもので，閉塞石は本来玄門上にのみ積まれていたものと考えられる。

土層堆積状況（第80図）　①②層は玄室内への崩落土および流土である。③層は横穴墓埋没後の墓道



第79図　26号横穴墓遺構図１（1:40）



第80図　26号横穴墓遺構図２・土層図（1:40）

上堆積土で，ほぼ完形の須恵器横瓶，提瓶を含め，大量須恵器片が出土している。横穴墓埋没後にも何らかの祭祀が行われていたことが推察される。④層は最終進入後の墓道上埋土であろう。閉塞石積み直しの痕跡は明確でないが，④層下面（⑤層上面）が最終進入面と思われる。⑤層は再進入後の墓道上流土または埋土と思われる土層で，その下面（⑥層上面）が再進入面と思われる。この面では閉塞石積み直しの痕跡が明確である。⑥～⑨層は初葬後の墓道上埋土であろう。⑩⑪層は追葬時に玄室手前へ掻き出された土砂と思われ須恵器等が乱雑に集積されていた。⑫層は玄室貼床であろうか。以上の状況から，初葬後最低２回の玄室内への追葬に伴う再進入があったものと考えられる。

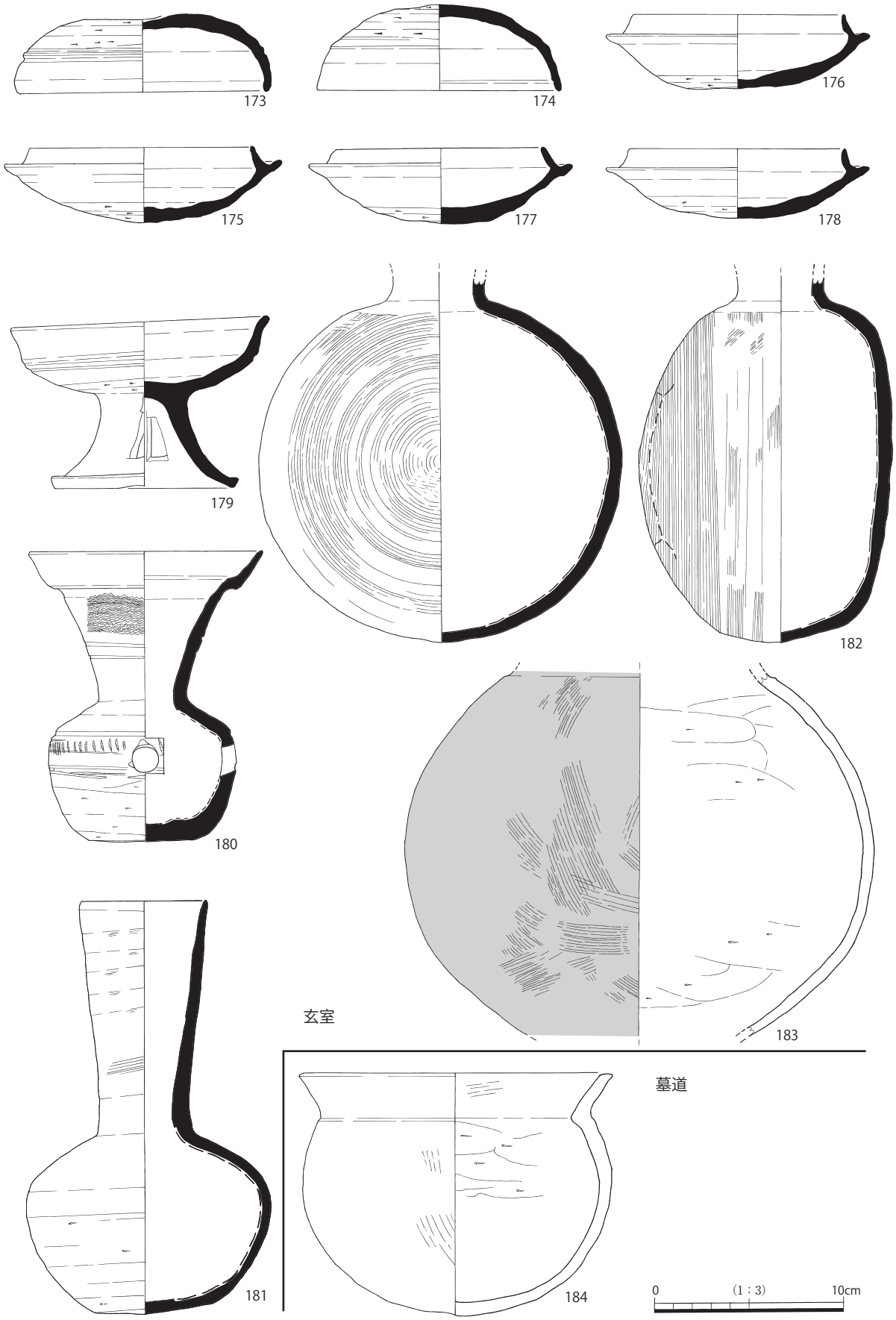
遺物出土状況（第79・80図）　玄室内奥壁際中央部の床面付近で須恵器杯身３点（176～178），杯蓋１点（174）から成る土器枕が確認された。杯身２点（177・178）を上下に，杯身（176）を下に杯蓋（174）を上に，いずれも口縁を下に向けて重ねている。須恵器枕の左右側壁寄り⑫層上面付近でもそれぞれ土師器壺体部片（183）が確認された。本来１つの土師器壺であったものを割って２ヶ所に分けたもので，いずれも破片の外面を上に向けて置かれていた。これも土器枕であろうか。その他玄室内では⑫層上面付近を中心に玄室内中ほどの地点から大刀１振（188），鉄斧1点（191），刀子２点（189・190），金環１点（192）が確認され，玄室前壁寄りでは須恵器杯蓋１点（173），杯身１点（175），無蓋高杯1点（179），瑞１点（180），長頸壺1点（181），提瓶１点（182）が集積された状態で確認されるほか，玄室入口付近⑪⑫層中から金銅製歩揺片８個体分以上（193～200）が確認された。また，正確な出土地点は不明だが，玄室内中央左半部の⑫層上面付近を中心にガラス小玉・丸玉31点（204～234），水晶・瑪瑙製勾玉３点（201～203）が確認されている。玄室内出土遺物の多くは追葬時に移動しているようだが，須恵器土器枕（174，176～178）と土器枕状土師器（183），大刀（188），鉄斧（191）は副葬時の配置を留めるものであろう。また，土器枕の須恵器杯蓋（174）は，玄室入口側に集積された須恵器中の杯蓋（173）より新しい様相を示しており，初葬時の土器枕ではないと思われる。須恵器土器枕と土器枕状土師器それぞれに追葬後の遺体が置かれていたとするならば，４人以上の被葬者が埋葬されたこととなるが，断定はできない。

墓道からは④層下面付近で土師器壺１点（184）が，③層中より須恵器提瓶１点（185），須恵器横瓶１点（186），須恵器大甕片１個体分（187）ほか土器片が確認された。なお，この内大甕については大部分の破片が26号横穴墓から出土したものであるが，9号横穴墓上方や34号横穴墓周辺からも接合する破片が確認されており，自然に分散したとは考え難い分布状況である。最終埋葬後に大甕を破砕し，広範囲に散布するような儀礼が行われたものであろう。同様な類例が安来市島田池遺跡などでも確認される（島根県教育委員会1997）。

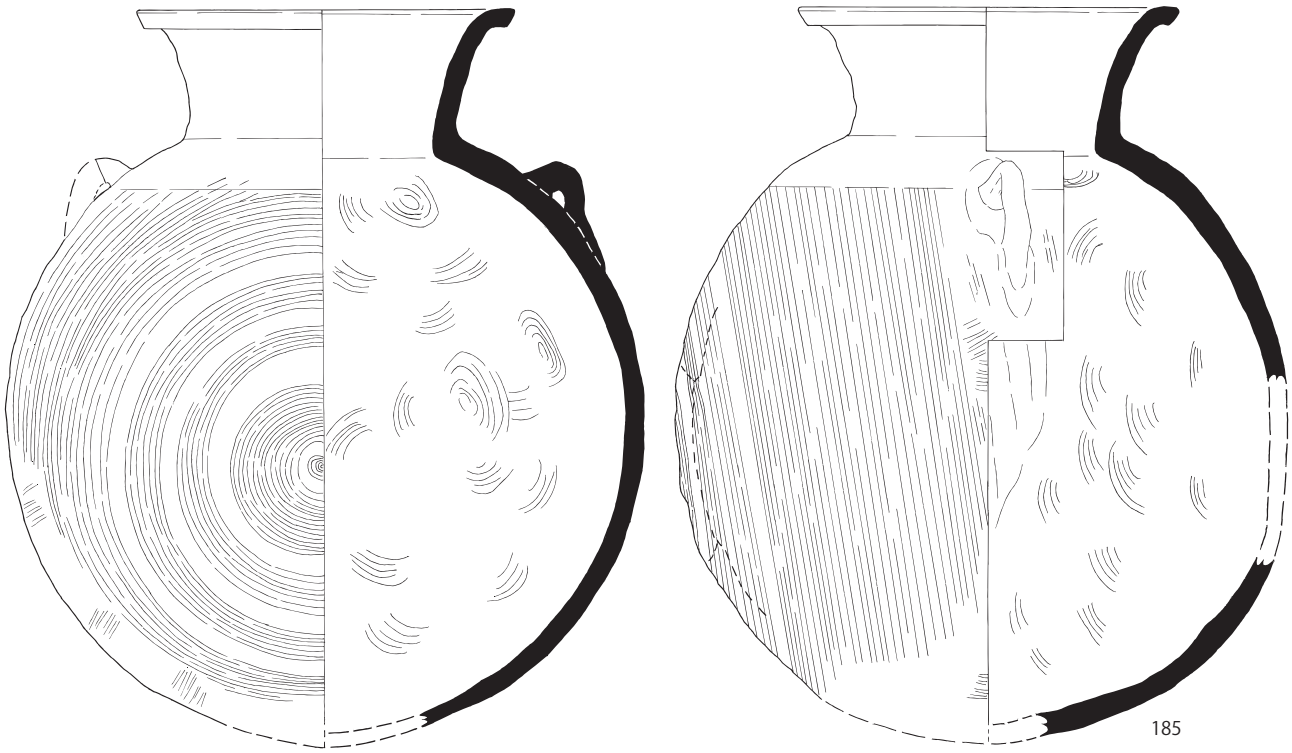
出土遺物（第81～85図，カラー図版４～７，図版44～46・55～57）　173～182は玄室内出土須恵器である。173～178は蓋杯で，この内174，176～178は土器枕である。杯蓋174の天井部外面には粗雑なヘラケズリが，杯蓋173の天井部外面には丁寧なヘラケズリが施されている。179は２方スカシの無蓋高杯である。180は瑞で，頸部上位に波状文を，体部に刺突文を施す。181は長頸壺で，頸部にカキメ状の板ナデが施される。182は把手の無い提瓶で，口縁部を意図的に打ち欠いているようである。183は玄室内から出土した土器枕状土師器の壺である。口縁と底部を欠く。外面には赤彩が施されている。

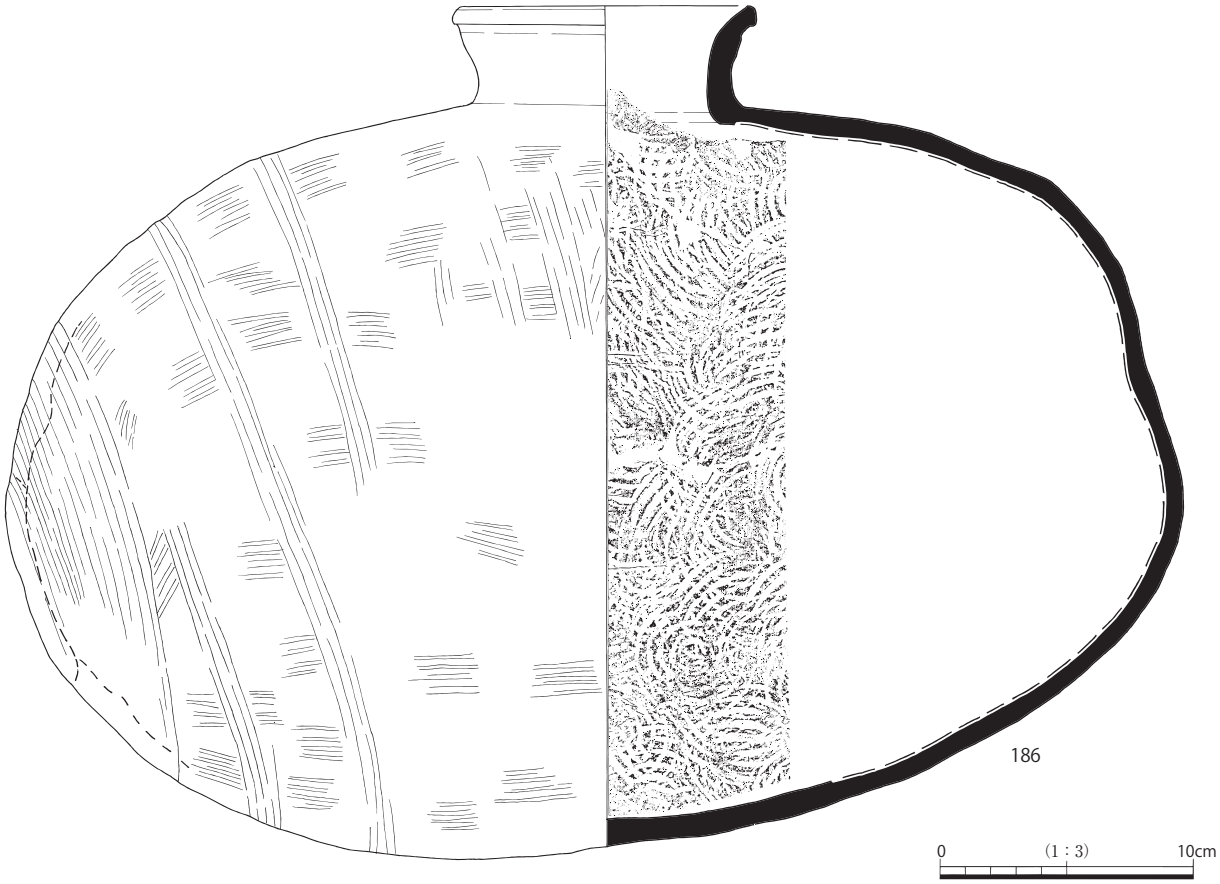
184～186は墓道上出土土器である。184は墓道上出土の土師器壺で，約１/２を欠損する。185～187は墓道上流土中出土の須恵器である。185は提瓶で，体部の一部を欠く。胴部側面形態はほぼ対照なふくらみを有し，肩部には環状の把手が付く。186は横瓶で，体部の一部を欠損する。187は大甕で，口縁部から体部にかけての約１/２と底部を欠く。頸部はに３段の波状文が施される。

188～200は玄室内出土の金属製品である。188は両関の大刀で，茎部端をわずかに欠くが，ほぼ完形品である。刃部長29.9㎝，茎部現存長8.7㎝，全長38.6㎝を測る。鉄製の鎺，目釘穴１孔，鞘木と柄木の一部が確認できる。189・190は刀子で，189は刃部の一部と茎部を欠損している。やや大型品で

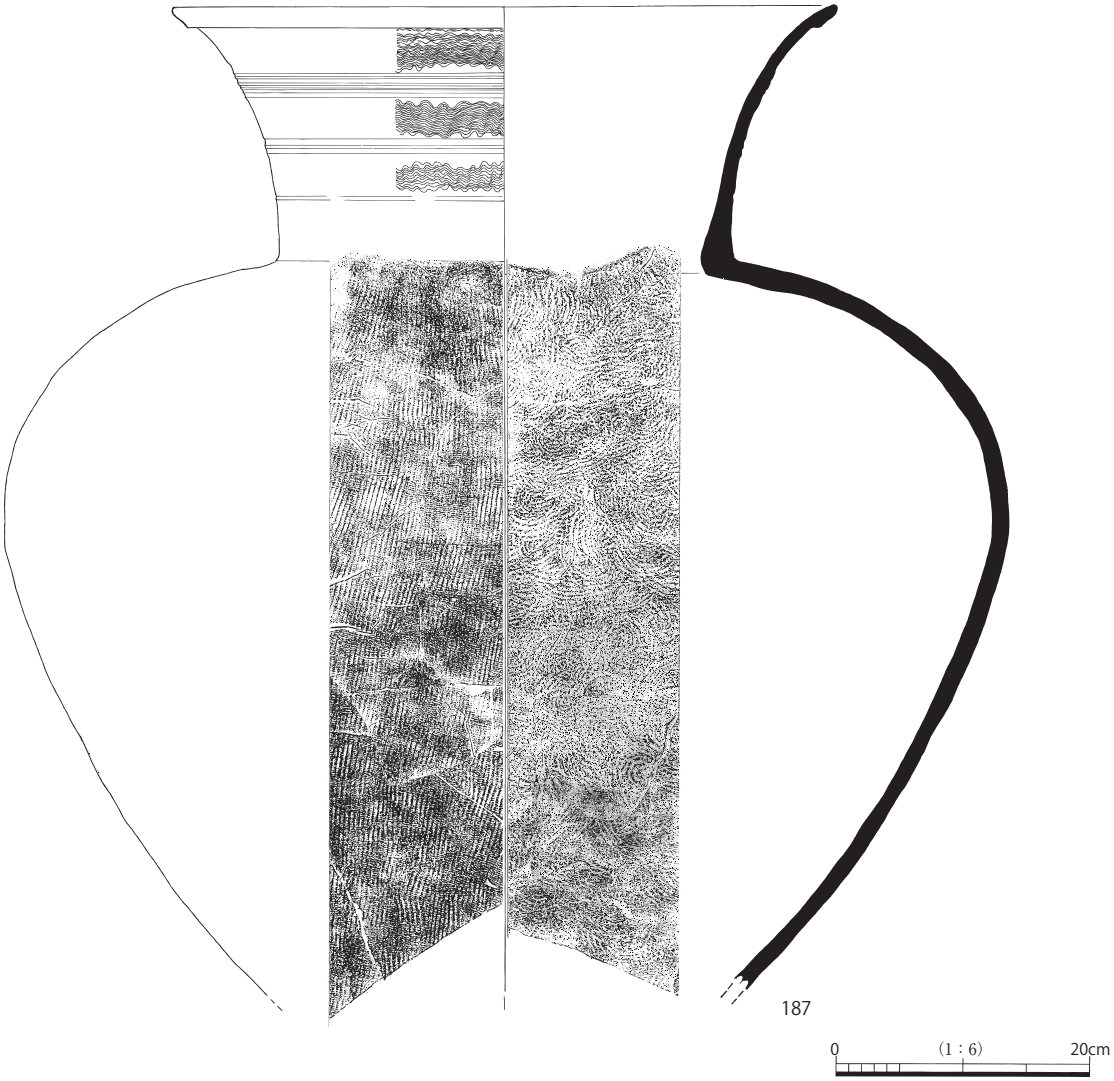


第81図　26号横穴墓遺物実測図１（1:3）





第82図　26号横穴墓遺物実測図２（1:3）

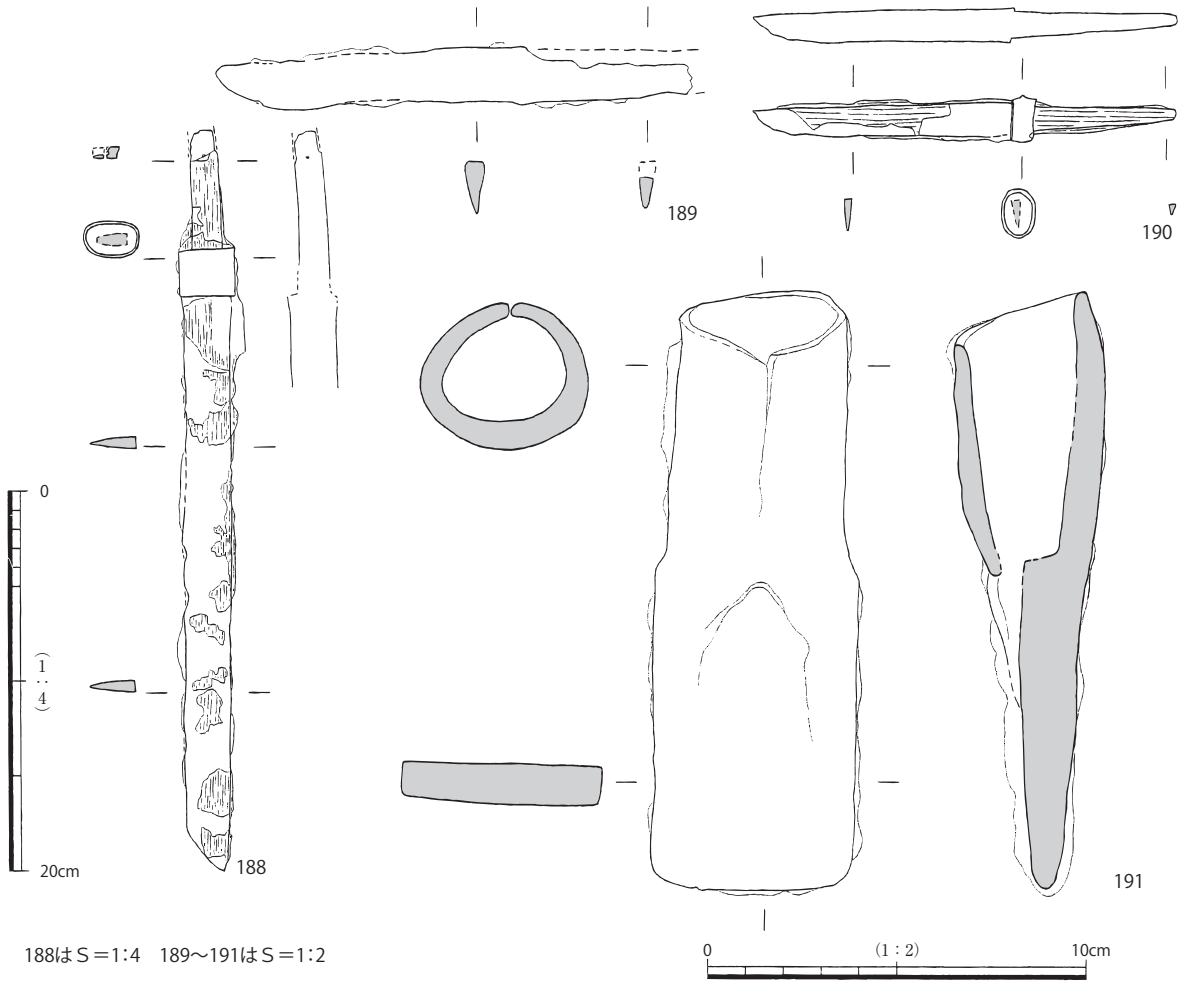


第83図　26号横穴墓遺物実測図３（1:6）

ある。190は完形品で，両関，鉄製の鏃，鞘木と柄木の一部が確認できる。191は有肩袋状鉄斧である。刃部がやや丸く納まる。192は銅芯銀板貼鍍金の金環（第６章参照）である。断面円形に近く，開き部端には銀板を折り込んだシワの痕跡がわずかに観察できる。193～ 200は金銅製歩揺である。下端が丸い涙滴形に加工された銅板全体を匙状に湾曲させ，上端部に凹面より直径1.5～２㎜程度の孔を穿っている。両面に鍍金が施される。その形状と法量から，本来馬具飾として使用されていたものと考えられる。この内，193については孔の表面に繊維状の痕跡が見られ，有機質の糸で結合した可能性があるが，撚りも明確ではなく断定できない。

201～ 234は玄室内出土玉類で，201が水晶製勾玉，202・203が赤瑪瑙製勾玉，204～ 229がガラス製小玉，230～ 234がガラス製丸玉である。小玉には紺色系，青色系，緑色系，丸玉には紺色系，青色系の色調のものが混在する。基本的にソーダガラス製の引き伸ばし技法によるものであるが，220は鋳型技法，231・233・234はカリガラス製である（第６章参照）。

時　期　玄室内集積土器中の須恵器蓋杯は大谷３期，土器枕の須恵器蓋杯は大谷４期の特徴を示す。



第84図　26号横穴墓遺物実測図４（1:2・1:4）

その他玄室内と墓道上③層出土の須恵器についても同様の範疇で捉えて矛盾ない。よって，横穴墓の築造は大谷３期，埋葬，最終埋葬後祭祀も大谷４期の中で終了しているものと考えられる。

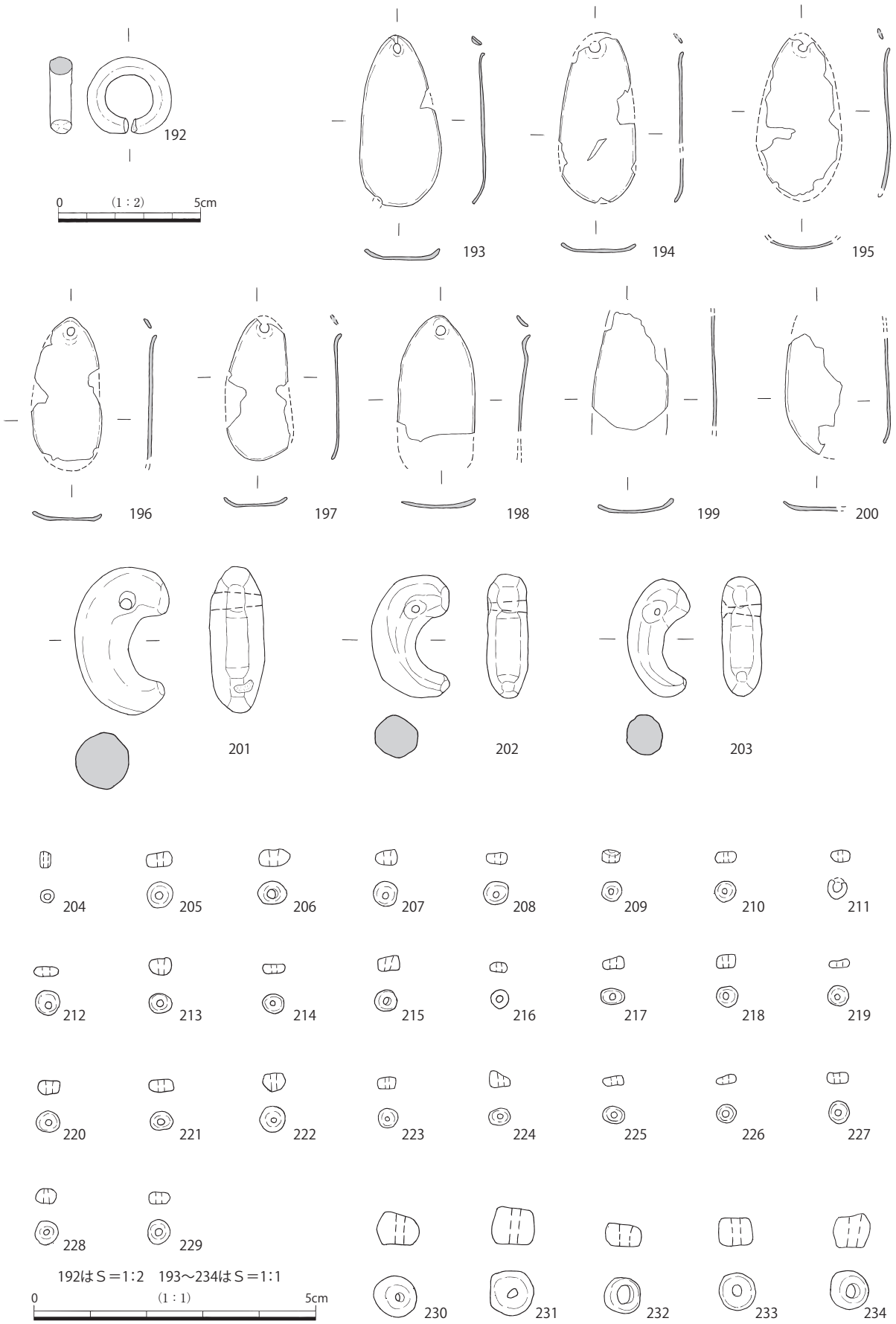
⑥　27横穴墓（第86～ 89図，カラー図版３，図版24）

立　地　26号横穴墓の南約４mに隣接し，標高は約25.5mと26号横穴墓より0.5mほど低い。

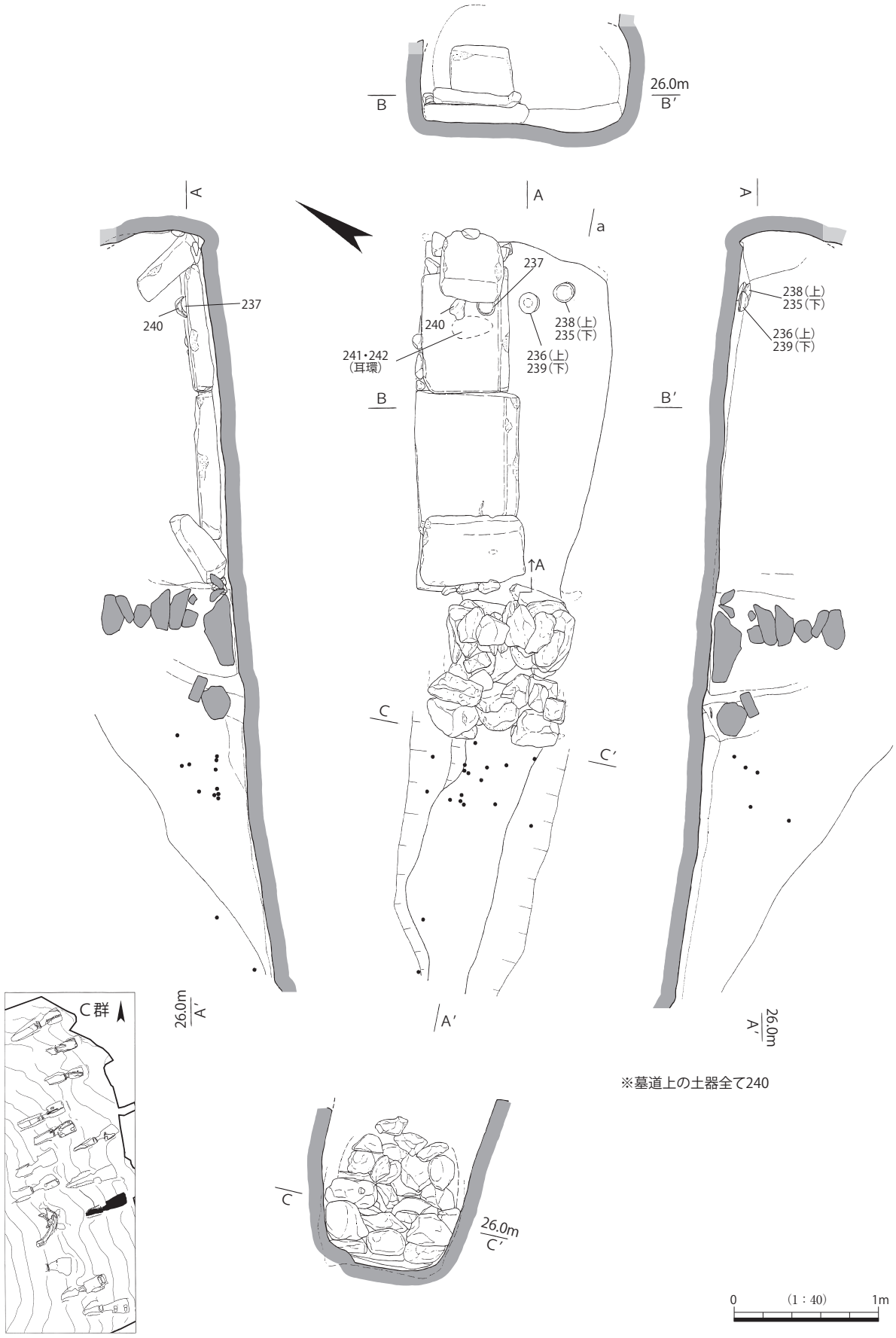
墓道・閉塞部（第86・87図）　Ｓ－72°－Ｗ方向に開口し，床面幅0.25～ 0.6m，残存長2.15mを測る。閉塞部には幅30cm前後，深さ５～ 10cm程度の溝が主軸方向に直交して掘り込まれ，溝と連続して閉塞部側壁も若干削り込まれている。

玄　門（第86・87図）　床面幅0.45～ 0.7m，長さ0.65m，残存高0.6mを測り，玄室側が幅広になる。天井部は残存していないが，閉塞石再上部のレベルを参照すると本来１m前後の高さを有していたものと考えられる。

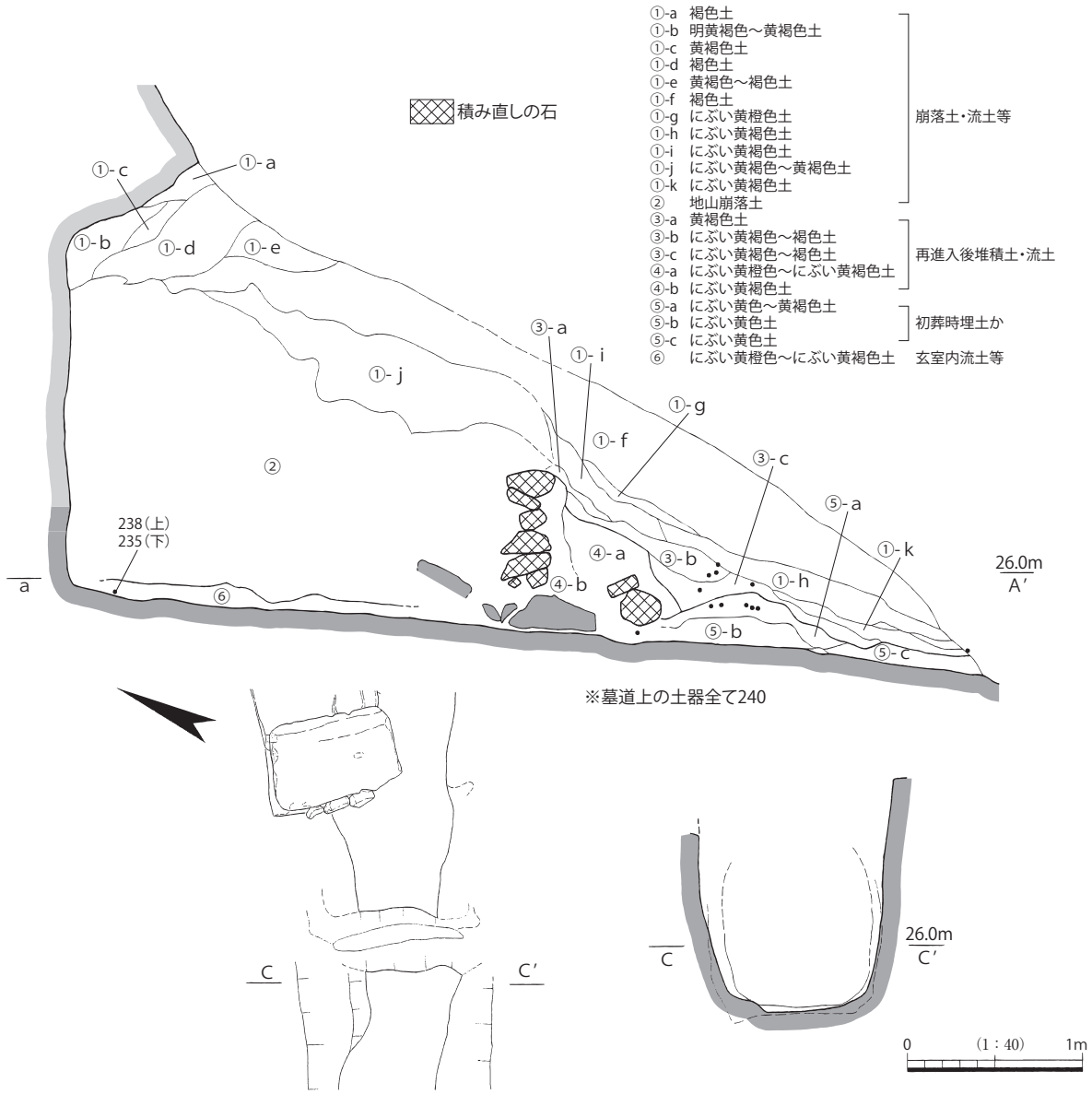
玄　室（第86図）　Ｓ－60°－Ｗ方向に開口し，墓道～玄門よりやや異なった主軸となる。平面形は幅1.05～ 1.3m，奥行約2.4mの奥が広がる台形状である。墓道から玄室までの残存長計5.2mとなる。左袖のみの片袖式である。天井部の多くが残存していないが，残存部の状況からアーチ形の断面形だっ



第85図　26号横穴墓遺物実測図５（1:1・1:2）



第86図　27号横穴墓遺構図１（1:40，●は土器）

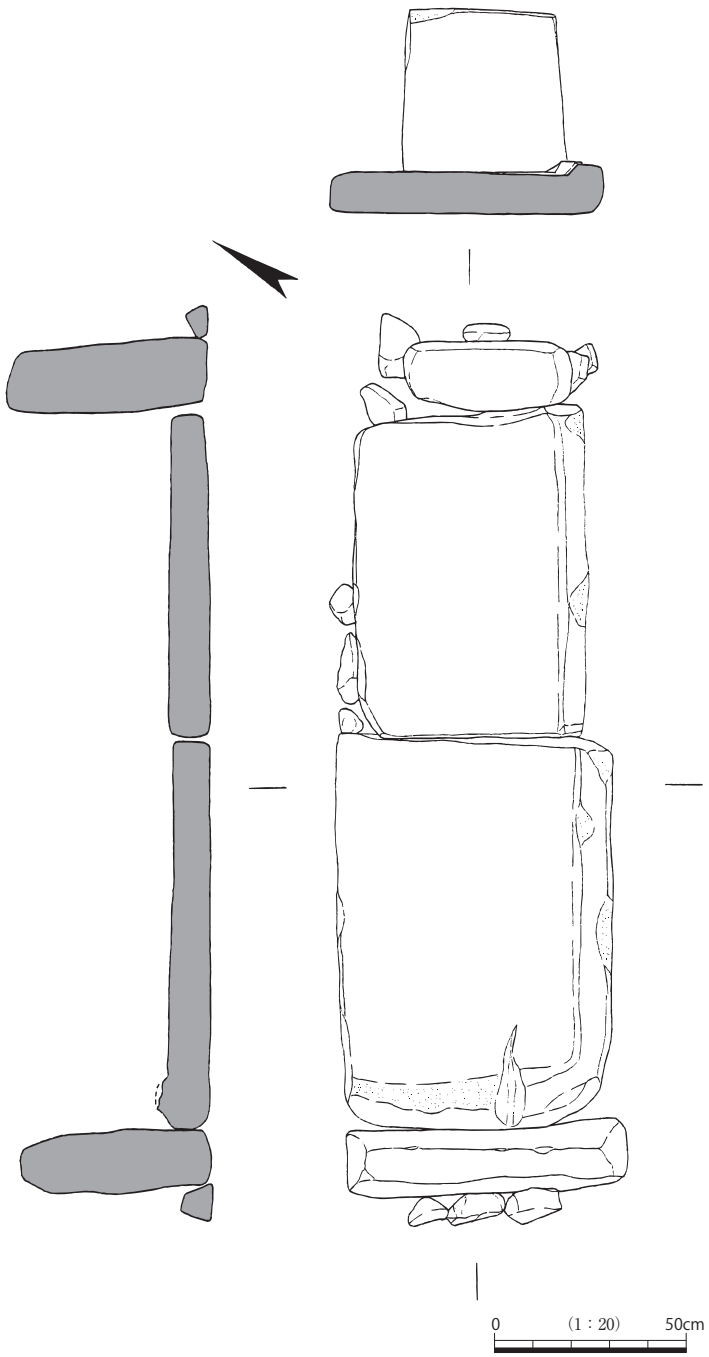


第87図　27号横穴墓遺構図２・土層図（1:40，●は土器）

たと考えられる。残存高0.7m。玄室左側壁に沿って組合式石棺が確認されている。

石　棺（第86・88図）　組合式石棺は，床石２枚，床石の短辺を挟み立てる側石２枚，玄室壁との隙間を埋める小礫数点から成り，全て砂岩を使用している。床石の縁部は玄室の前壁側と主軸側で幅７～14cm，高さ２cm程度の高まりを有する。蓋石は存在しない。各石の法量は，側石（手前）で高さ54×幅74×厚さ16cm，側石（奥）で高さ52×幅46×厚さ19cm，床石（手前）で長さ104×幅72×厚さ12cm，床石（奥）で長さ86×幅61×厚さ10cmを測る。側石は大きく傾いているが，本来の位置に復元すると，小礫を除いた石棺全体の法量は長さ225×幅74×高さ54cmとなる。側石の高さはほぼ同一であり，盗掘等の痕跡も認められないことから，本来木製の蓋が存在していたものと考えたい。

閉塞石（第86図）　割石・自然石が閉塞部から玄門にかけて約30点積み上げられていた。玄門床面直上から天井部付近まで密閉するように積まれており，最下段の石を除き少なくとも１回は積み直され



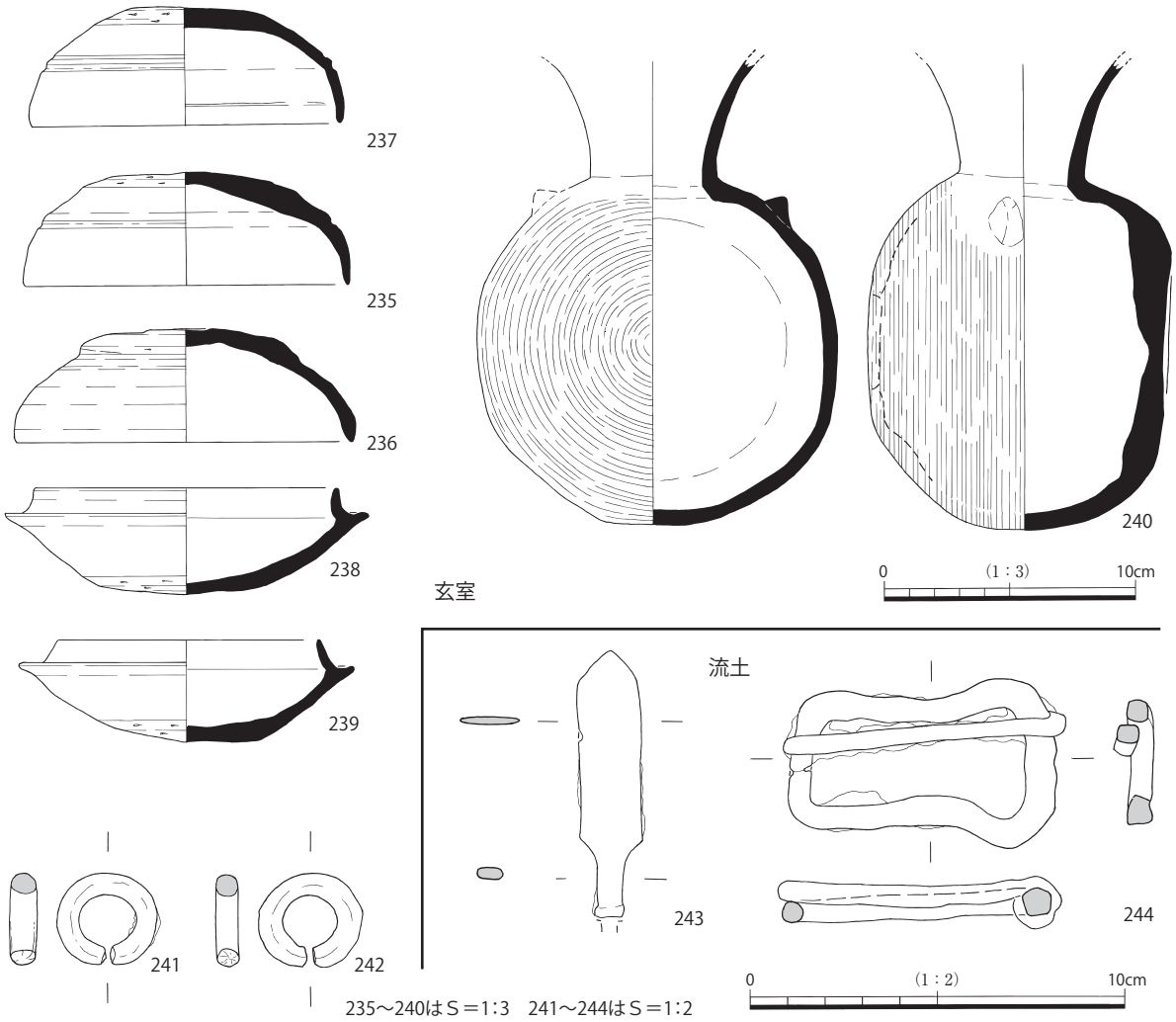
第88図　27号横穴墓石棺復元図（1:20）

ている。また，閉塞部に積まれた閉塞石は追葬時に外された石であろう。

土層堆積状況（第87図）　①②層は崩落土および流土，③④層は再進入後の堆積土等，⑤層は初葬時の埋土であろうか。⑥層は玄室内流土等である。⑤層上面が再進入面と考えられ，閉塞石積み直しの痕跡も認められる。最終閉塞直後の堆積である④層は非常にもろく，しまりのない自然堆積とみられる土層であり，少なくとも最終閉塞後に人為的な埋土はなかったものと思われる。以上の状況から，初葬後，最低１回の追葬が行われたものと思われる。

遺物出土状況（第86・87図）　玄室内奥壁際右側壁寄りの床面直上から，須恵器蓋杯２組（235と238，236と239）から成る土器枕が確認された。右側は杯蓋（235）を下に杯身（238）を上に重ねたもの，左側は杯身（239）を下に杯蓋（236）を上に重ねたものをいずれも口縁を下に向けて並べている。ただし，これらの蓋杯はいずれも口径が組み合わず，本来セット関係になるものではない。石棺内からは，奥寄りの床石直上で，須恵器杯蓋１点（237），提瓶体部片１点（240），銀環２点（241・242）が確認された。提瓶片は意図的に割られ杯蓋とともに土器枕として使用されたものと思われる。銀環２点も頭部に対応するように土器枕付近から出土している。玄室内出土遺物はほぼ原位置を保っているものと考えられる。また，墓道上③⑤層を中心に石棺上出土の須恵器提瓶片に接合する小片が多数確認された。①層以外から出土した墓道上出土遺物は全て同一の須恵器提瓶片の破片と思われる。破砕した提瓶片を意図的に散布したものであろうか。また，流土①層中より須恵器甕小片数点，鉄鏃１点，鉸具１点等が確認されているが，27号横穴墓に伴うものかは断定できない。

出土遺物（第89図，カラー図版５，図版46・55・56）　235～240は玄室内出土須恵器である。235～239は



第89図　27号横穴墓遺物実測図（1:3・1:2）

杯蓋で，杯蓋の天井部外面は235・236に粗雑なヘラケズリを，236に周辺ヘラケズリ後ナデが施される。240は提瓶で，口縁と体部の一部を欠損する。肩部に瘤状の把手を持つ。

241・242は玄室内出土の銅芯銀板貼の銀環である。断面形は円形に近く，開き部端に銀板を折り込んだシワがわずかに残る。

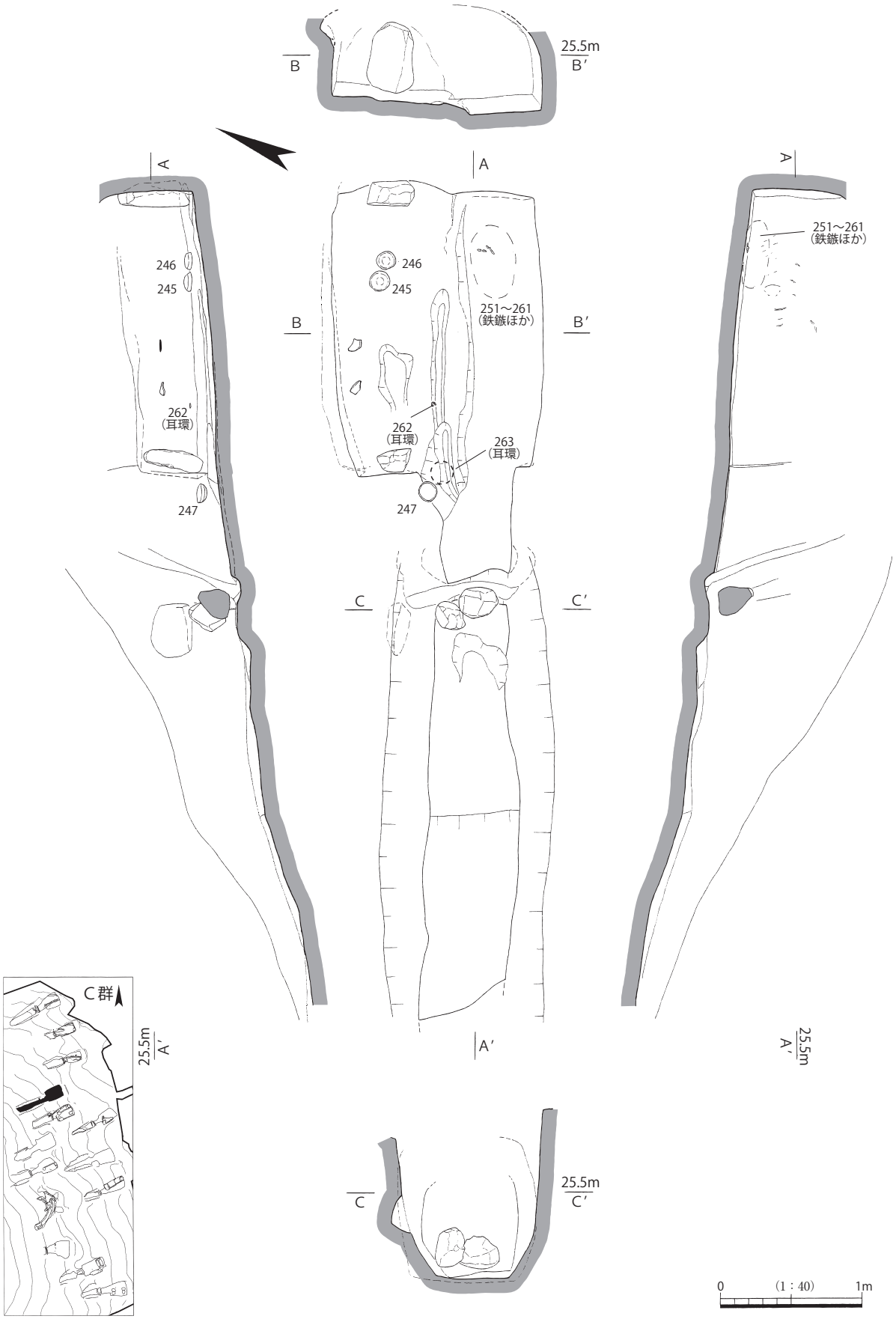
243・244は墓道上流土中から出土した鉄製品である。243はナデ関の三角形鏃で，茎部を欠損する。頸部の関がわずかに残る。244は馬具の鉸具で，輪金の広がる部分に刺金が接続する特異なものである。

時　期　玄室内出土の須恵器はいずれも大谷４期の特徴を示す。よって，横穴墓の築造，埋葬も大谷４期を中心とした時期の中で終了しているものと考えられる。

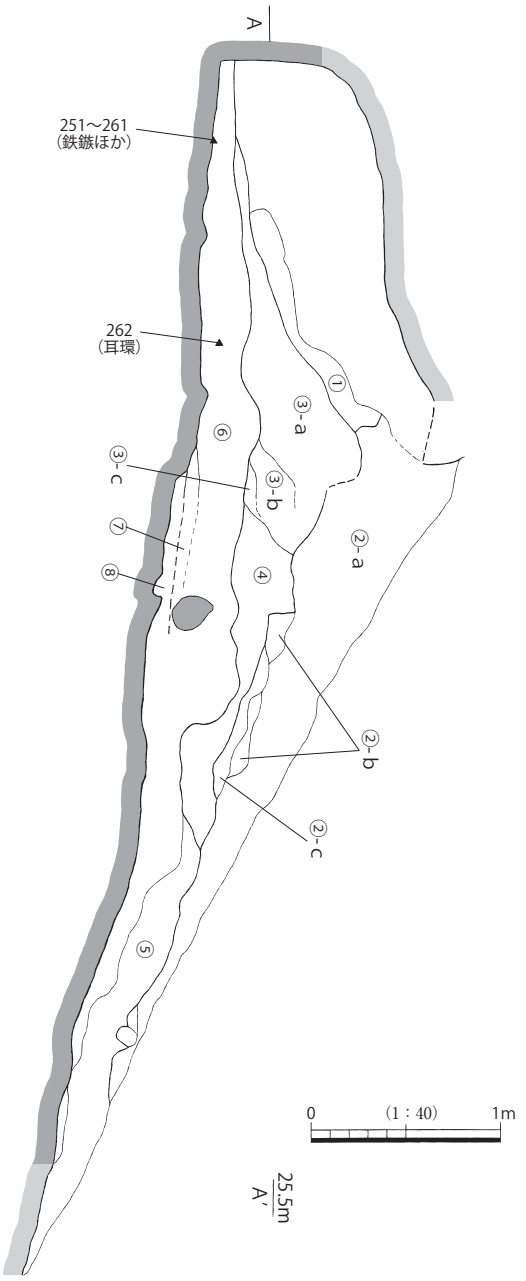
⑦　28号横穴墓（第90～93図，カラー図版３，図版25）

立　地　24号横穴墓の南西約５ｍに存在し，標高は約25ｍと24号横穴墓のやや下方に位置する。

墓道・閉塞部（第90図）　Ｓ－67°－Ｗ方向に開口し，床面幅0.5～0.7ｍ，残存長3.05ｍを測る。玄門より約1.2ｍ前方で床面がやや急傾斜となる。閉塞部には幅10～20㎝，深さ５㎝前後の溝が主軸方向



第90図　28号横穴墓遺構図（1:40）



①	地山崩落土	崩落土
②-a	褐色～暗褐色土	須恵器片を多く含む流土等
②-b	明褐色土	
②-c	褐色～暗褐色土	
③-a	褐色土	
③-b	③-aよりやや明るく脆い	
③-c	褐色土	
④	黄褐色土	流土等
⑤	黄褐色～褐色土	
⑥	灰黄褐色土	最終進入時の掻き出し土か
⑦	褐灰色粘質土	再進入後の流土等か
⑧	灰黄褐色土	初葬後流土等か

第91図　28号横穴墓土層図（1:40，▲は金属製品）

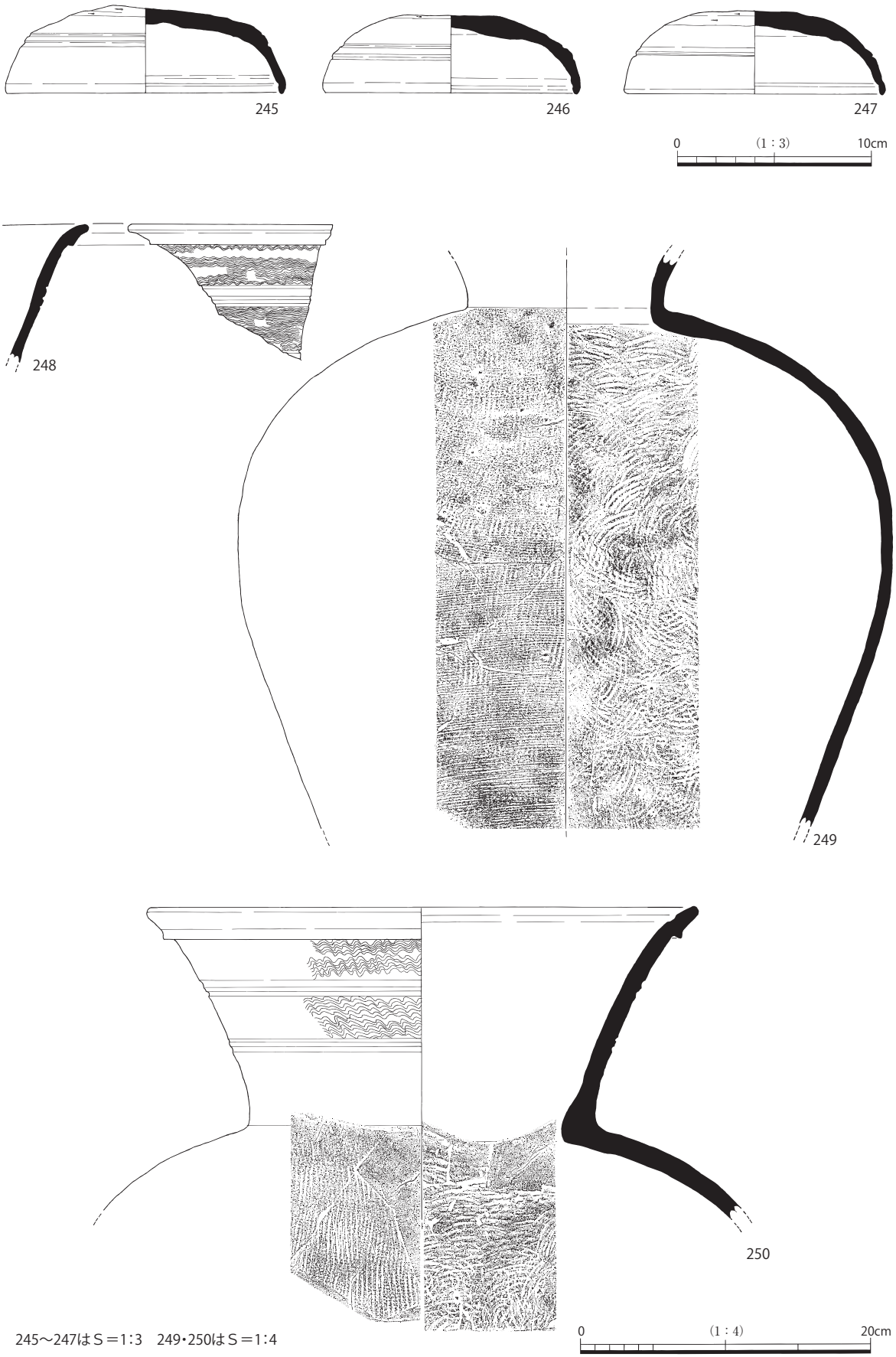
に直交して掘り込まれ，溝と連続して閉塞部側壁も若干削り込まれている。また，左側壁の閉塞部付近には浅い小穴が確認される。

玄　門（第90図）　床面幅0.45～0.75m，長さ0.8m，残存高0.6mを測り，玄室側が幅広になる。天井部は残存していない。

玄　室（第90図）　平面形は幅1.25～1.5m，奥行2.05mの長方形である。墓道から玄室までの残存長は5.9mとなる。前壁側の右袖約0.1m，左袖約0.4mを測り，左袖が広く，右袖が非常に狭い。天井部の多くが残存していないが，残存部の状況からアーチ形の断面形を基本形とすると思われる。残存高0.8m。また，左側壁を床面から高さ0.4～0.5mの位置で最大幅15㎝程度棚状に削り込んでいる。棚状の削り込みがみられる左側では，高さ５～10㎝，幅0.9m程度の屍床を設け，奥壁際と前壁際に高さ45～50㎝程度の柱状石材を配置している。側壁棚状の削り込みと柱状石材の高さがほぼ一致することから，本来は木製の蓋があったものと思われる。

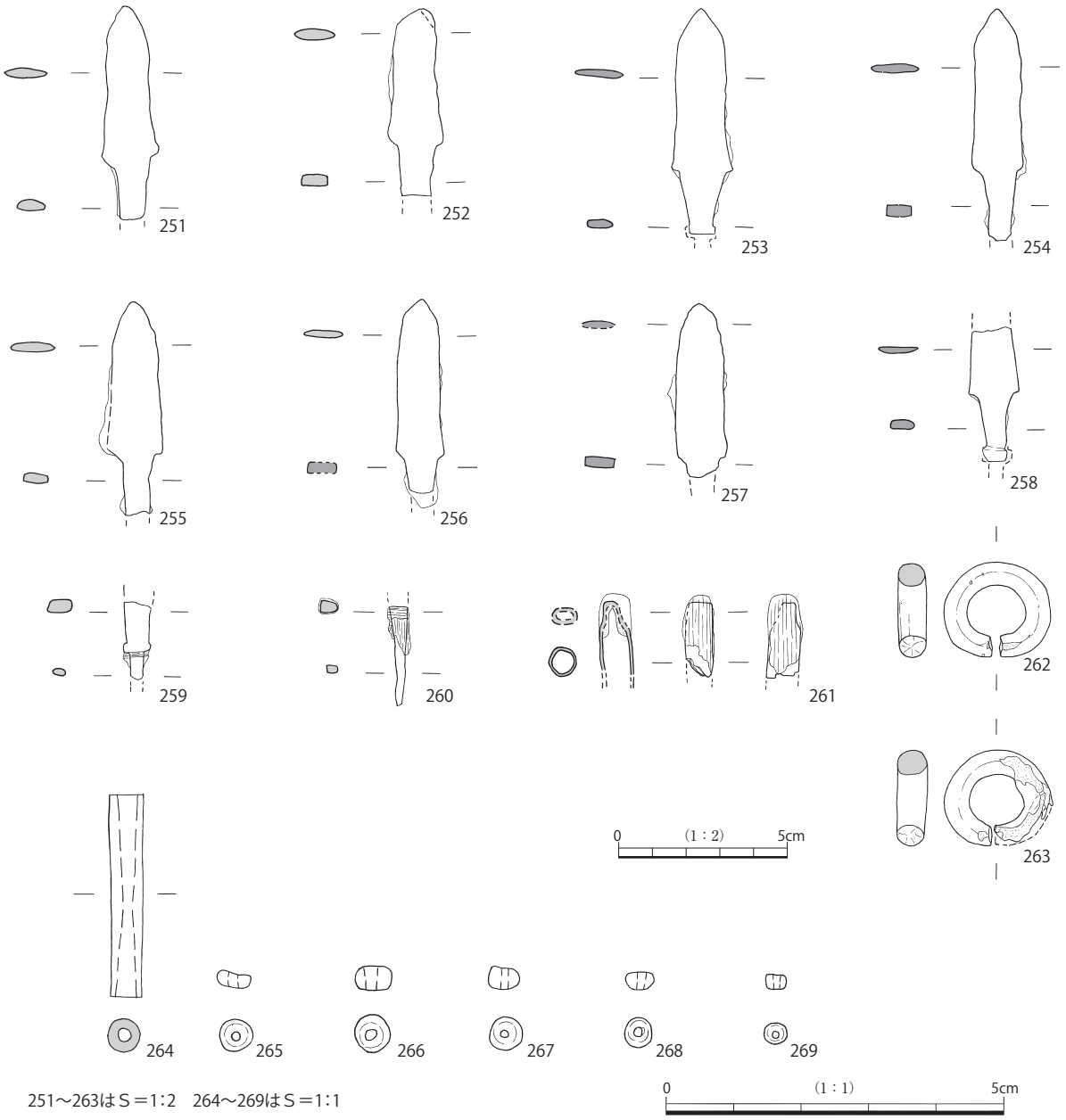
閉塞石（第90図）　割石・自然石が閉塞部溝の手前に，床面よりやや浮いた状態で２点置かれていた。追葬時に置かれたものと考えられる。溝部分に設置された閉塞板を押さえるための石であろう。

土層堆積状況（第91図）　①層は崩落土，②③層は須恵器片を多く含む流土等，④⑤層は遺物をほとんど含まない最終進入後の流土である。⑥層は最終進入時の掻き出し土等であろう。⑥層下面（⑦層上面）が最終進入面と思われる。⑦層は再進入後の流土等，⑧層は初葬後の流土等であろう。⑧層上面が再進入面と思われ，閉塞石もこの面に置かれる。以上の状況から，初葬後，２回の玄室内への再進入の痕跡が確認できる。



245～247はＳ＝1:3　249･250はＳ＝1:4

第92図　28号横穴墓遺物実測図１（1:3・1:4）



第93図　28号横穴墓遺物実測図２（1:2・1:1）

閉塞石の状況から，少なくとも１回は追葬に伴う再進入が行われたものと思われる。

遺物出土状況（第90・91図）　玄室内屍床奥壁寄りの床面直上から須恵器杯蓋２点（245・246）が，玄室内右側壁側奥壁寄りの床面付近から８個体分以上の鉄鏃片（251～260）と不明鉄製品１点（261）が，屍床周辺奥壁寄りの⑥層中から碧玉製管玉１点（264），ガラス製小玉５点（265～269）が，玄室内入口寄りから玄門にかけての⑥層中から須恵器杯蓋１点（247），銀環２点（262・263）が確認された。この内，玉類については正確な出土配置が不明である。また，玄室から墓道上にかけての②③層中より須恵器甕片が複数個体分（248～250）確認されている。この内，248と249は玄門～墓道上②層中のみの出土であるが，250は玄室内流土③層中からも接合資料が確認できる。いずれも原位置を保っている可能性は低い。

出土遺物（第92・93図，カラー図版５・６，図版47・56）　245～247は玄室内出土の須恵器杯蓋である。天井部外面は245，247に粗雑なヘラケズリが，246に周辺ヘラケズリ後ナデが施される。

248～250は流土中出土の須恵器甕である。いずれも欠損部が多いが，250の頸部に２段の波状文が，248の頸部に２段以上の波状文が確認できる。

251～263は玄室内出土の金属製品である。251～260は玄室内出土の鉄鏃で，少なくとも８個体分以上存在する。破片資料であるが，いずれも同型式の三角形鏃であろう。頸部から茎部にかけての棘状関が259で明確に確認できるほか，259・260には矢柄と樹皮巻きの一部が残存する。261は玄室内出土の不明鉄製品で、薄い筒状の鉄製品が木質に覆われ，内部に刺突痕が残っている。262・263は玄室内出土の銅芯銀板貼の銀環である。断面形は円形に近く，開き部端に銀板を折り込んだシワが残る。

264～269は玄室内出土玉類である。264が碧玉製管玉，265～269がガラス製小玉である。碧玉製管玉は両面から穿孔されており，当該期においては類例の少ないものである。小玉は紺色系，青色系，緑色系が混在する。全てソーダガラス製の引き伸ばし技法によるものである（第６章参照）。

時　期　玄室内出土の須恵器は基本的に大谷４期の特徴を示すが，245の杯蓋については口径が14㎝以上と大きく，３期と４期の過渡的な特徴を持つ。よって，横穴墓の築造は４期初頭頃，埋葬も大谷４期の中で終了しているものと考えられる。

⑧　29号横穴墓（第94～97図，図版26）

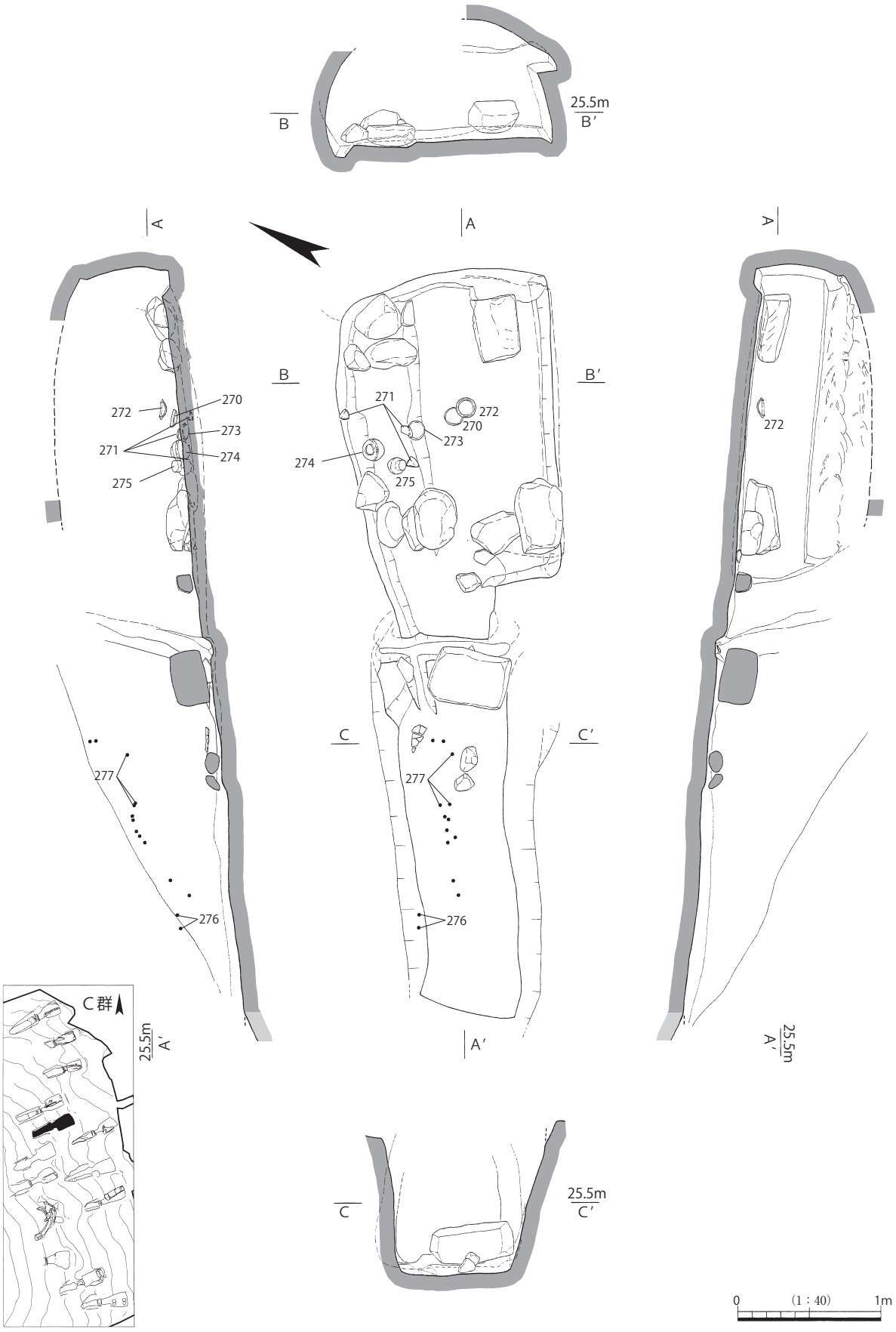
立　地　28号横穴墓の南東に隣接し，標高も28号横穴墓とほぼ同一である。

墓道・閉塞部（第94図）　Ｓ－66°－Ｗ方向に開口し，床面幅0.6～0.75m，残存長2.6mを測る。閉塞部には幅15㎝前後，深さ５㎝前後の溝が主軸方向に直交して掘り込まれ，溝と連続して閉塞部側壁も若干削り込まれている。一部刳り込み状にも見えるが，明瞭でない。また，閉塞部溝と交差して閉塞部付近左側壁沿いに玄門から続く排水溝を設ける。

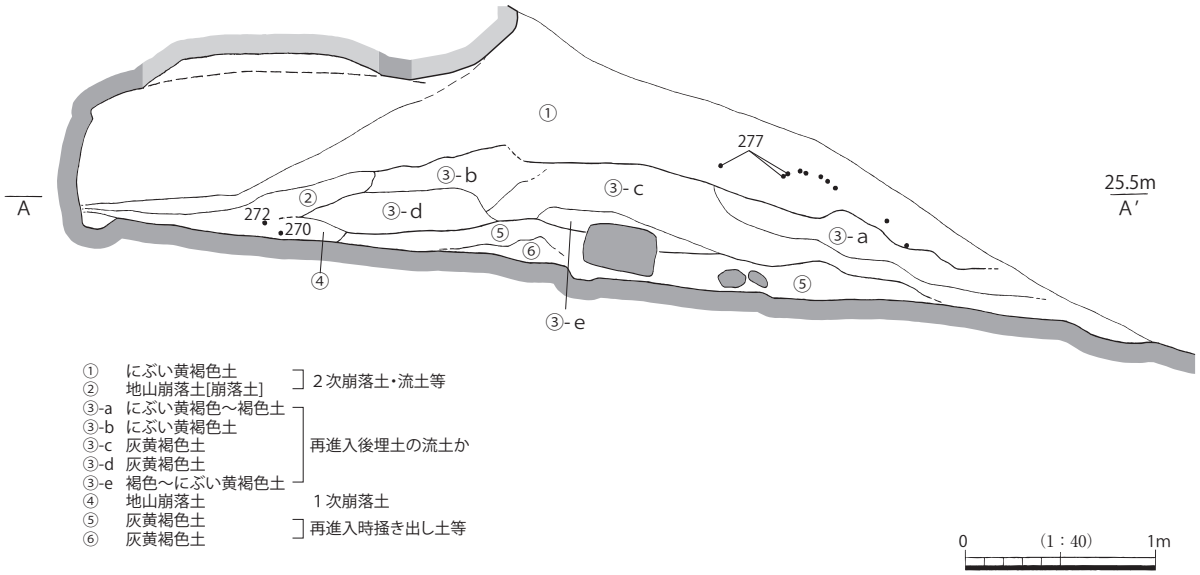
玄　門（第94図）　床面幅0.6～0.75m，長さ0.4m，残存高0.8mを測り，玄室側が幅広になる。天井部の多くは残存していない。左側壁沿いには，玄室から閉塞部へとつながる排水溝を設ける。

玄　室（第94・96図）　平面形は幅1.25～1.55m，奥行2.2mの長方形で，玄門左壁沿いから連続する深さ５～10㎝程度の排水溝が壁沿いに廻る。墓道から玄室までの残存長は5.2mとなる。右袖のみの片袖式である。天井部の多くが残存していないが，残存部の状況から，高さ0.95m程度のアーチ形の断面形を基本形とすると思われる。右側壁を床面から高さ0.45m前後の位置で最大幅15㎝程度棚状に削り込む。棚状の削り込みがある右側では，高さ５㎝，幅１m程度の屍床を設け，奥壁際と前壁際に高さ45～50㎝程度の柱状石材を配置している。棚状の削り込みと柱状石材の高さがほぼ一致しており，27号横穴墓同様，本来は木製の蓋があったものと思われる。また，玄室内左側で割石・自然石が奥壁際と入口寄りに数点ずつ集積されている。棺台として使用された可能性があるが，整然とはしておらず，断定できない。その他，玄室内入口付近に数点の転石がみられる。

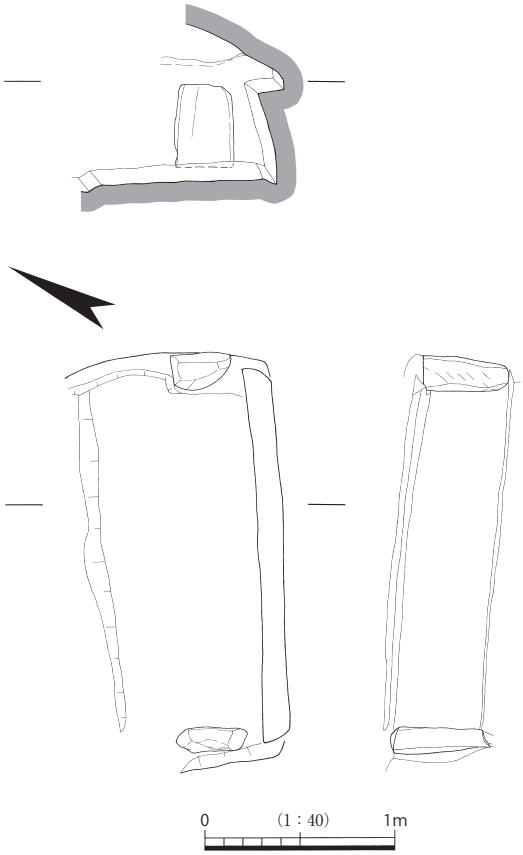
閉塞石（第94図）　閉塞部溝手前の床面付近で長辺60㎝，短片40㎝，厚さ25㎝程度の凝灰岩切石が確認された。溝部分に設置された閉塞板を押さえるための石であろうか。



第94図　29号横穴墓遺構図（1:40，●は土器）



第95図　29号横穴墓土層図（1:40，●は土器）

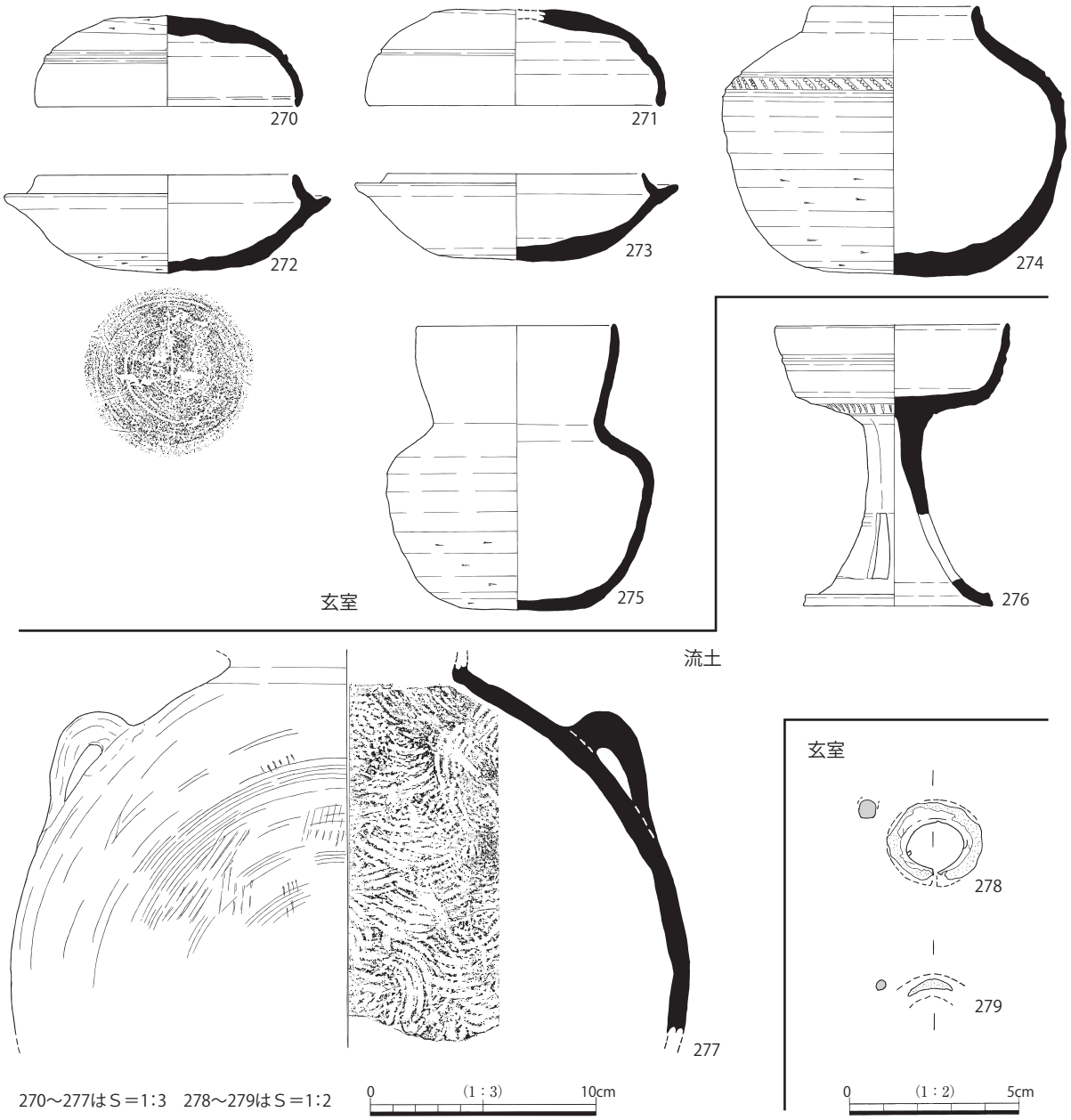


第96図　29号横穴墓埋葬施設復元図（1:40）

土層堆積状況（第95図）　①②層は２次崩落土・流土等である。③層は再進入後埋土の流土であろうか。④層は１次崩落土である。⑤⑥層は再進入時掻き出し土等であろうか。⑤層中には小礫や須恵器甕片が浮いた状態で出土しており，その堆積前に床面付近まで掘削を受ける再進入があった可能性が高い。また，③層上面，⑤層上面においても再進入があった可能性が残る。以上の状況から，初葬後，１回～３回の再進入の痕跡が認められ，その内１回は追葬等に伴う玄室内への再進入であったものと考えられる。

遺物出土状況（第94・95図）　玄室内左側壁寄りの床面付近で，須恵器杯蓋１点（271），杯身１点（273），短頸壺1点（274），直口壺１点（275）がまとめて片付けられたような状況で確認された。この内，杯蓋271については割れた状態で出土している。玄室内屍床上では，床面直上で杯蓋１点（270），崩落土④層上面付近で須恵器杯身１点（272）が確認されたほか，正確な出土位置は不明だが，屍上前方で破損した耳環２点（278・279），少量の金薄片が確認された。

玄室内入口付近から閉塞部周辺にかけては，⑤⑥層中より須恵器甕片が数点確認されており，一部は閉塞石の下からも確認された。これらの出土遺物は，床面直上の資料を含むものの，原位置を保つ



第97図　29号横穴墓遺物実測図（1:3･1:2）

ものではないと思われる。また，墓道上流土①層を中心に須恵器無蓋高杯（276），提瓶（277），甕片等が散在していた。

出土遺物（第97図，カラー図版５，図版47・48）　270～ 275は玄室内出土須恵器である。270～ 273が杯蓋で，杯蓋271を除きほぼ完形品である。杯蓋天井部外面は270に粗雑なヘラケズリが，271にヘラケズリ後ナデが施されている。272の杯身底部外面にはヘラ記号「×」が確認される。274が短頸壺で，肩部に刺突文が施される。275が直口壺である。

276・277は墓道上流土中出土の須恵器である。276がほぼ完形品の無蓋高杯で，杯底部外面に刺突文が施される。脚部には２段３方スカシが確認されるが，スカシ上段は切れ目のみで貫通しない。277が提瓶で，体部の約１/３のみが残存する。肩部の把手は環状であるが，把手下部の接合はやや簡

略化されている。

278・279は玄室内出土の耳環で，破損著しいが278では銅芯銀板貼の銀環であることが確認できる。また，279も銅芯小片とともに銀板片が発見されており，銀環として良いと思われる。その他，玄室内より金薄片が確認されている。金と銀の合金で，水銀も検出されない。金環等の箔ではないと思われる（第６章参照）。

時　期　玄室内出土の須恵器はいずれも大谷４期の特徴を示す。よって，横穴墓の築造，埋葬も大谷４期を中心とした時期の中で終了しているものと考えられる。また，墓道上①層中出土の須恵器もほぼ同時期の様相を示すが，周辺の横穴墓からの流入資料である可能性を否定できない。

⑨　30号横穴墓（第98～100図，図版27）

立　地　29号横穴墓の南西約５mに存在し，標高は約23mと28・29号横穴墓より約２m低い。

墓道・閉塞部（第98図）　Ｓ－62°－Ｗ方向に開口し，床面幅0.85～1.1m，残存長2.15mを測る。閉塞部においては床面幅約85㎝，奥行５～10㎝，玄門外縁幅10～18㎝程度の刳り込みを設けるが，玄門境界部の床面はフラットになっている。

玄　門（第98図）　床面幅0.6～0.9m，長さ1.05m，残存高0.45mを測り，玄室側が幅広になる。天井部は残存していない。

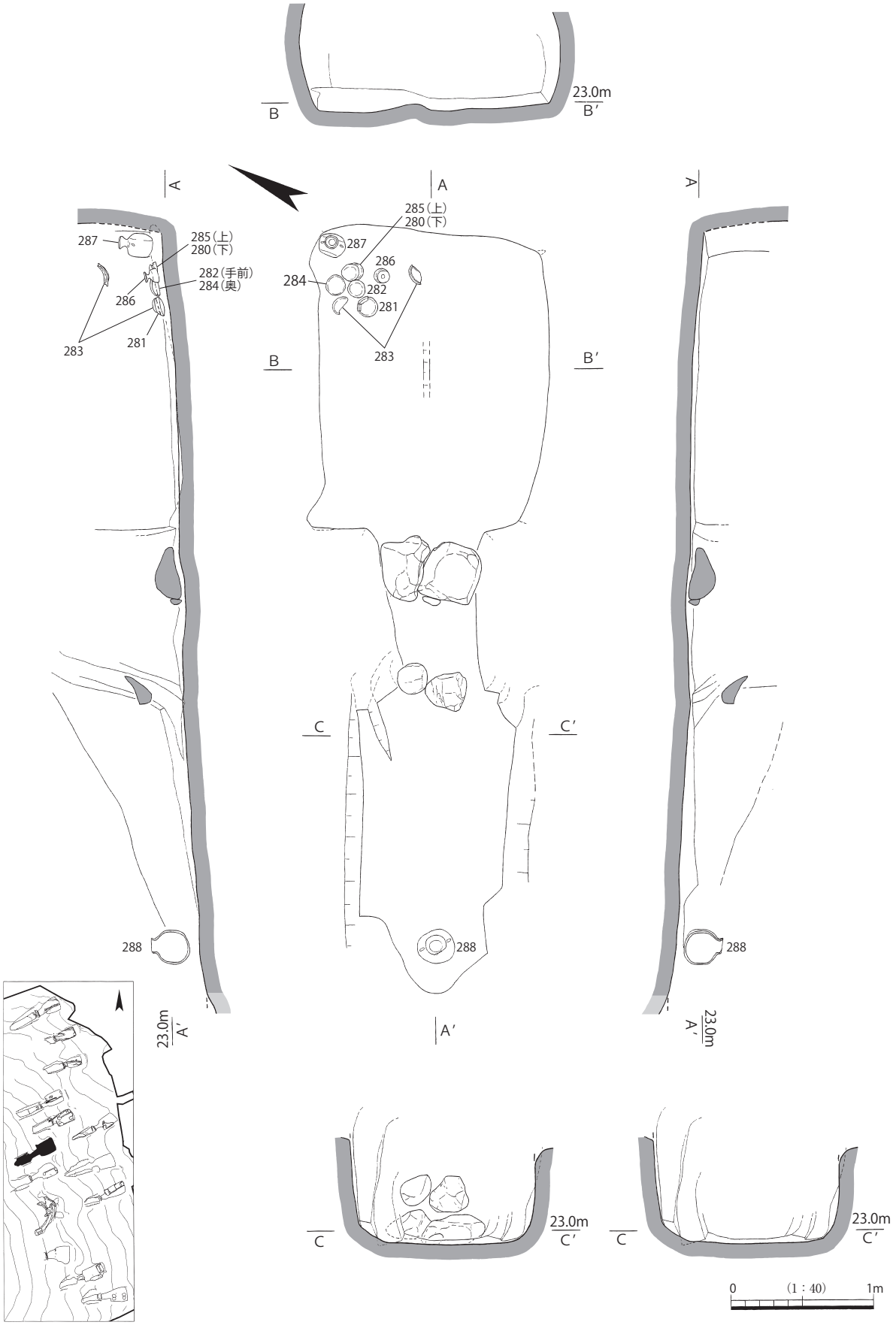
玄　室（第98図）　平面形は幅1.45～1.65m，奥行2.1mの長方形状である。墓道から玄室までの残存長は5.3mとなる。天井部の多くが残存していないが，残存部の状況からアーチ形の断面形だったと考えられる。残存高0.7m。左側壁側で床面が若干高くなっており，本来は左側壁側に屍床があったのかもしれないが明確でない。

閉塞石（第98図）　割石・自然石が閉塞部付近の床面から約20㎝浮いた地点で２点，玄門奥寄りの床面直上で３点確認された。玄門奥寄りの石の内２点は床面から据えられた40㎝大の大形のもので,初葬時の閉塞石最下段が残ったものと思われる。大半の石は再進入時に移動されたものであろう。

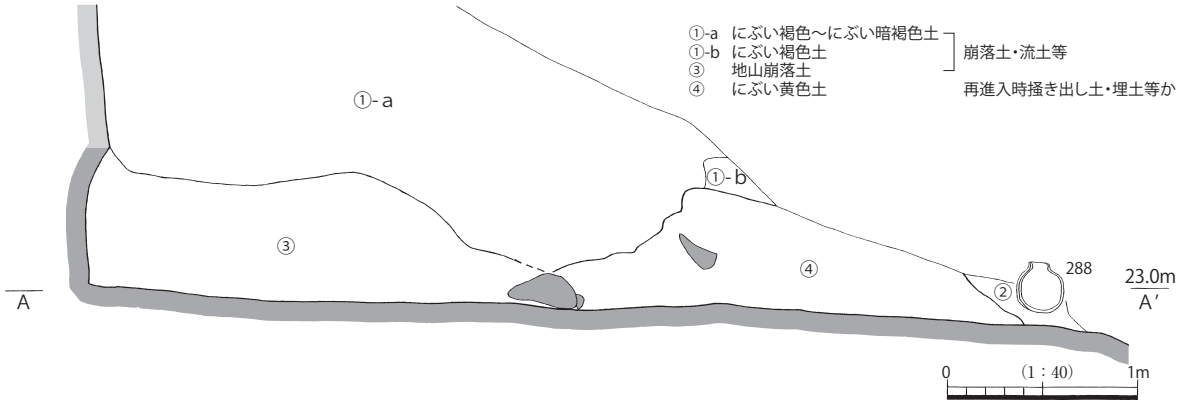
土層堆積状況（第99図）　①～③層は崩落土および流土，④層は最終進入時の掻き出し土または埋土等であろう。閉塞部の閉塞石は④層中にあった。以上の状況から，初葬後，最低１回の追葬もしくは盗掘に伴う玄室内への再進入があったものと考えられる。

遺物出土状況（第98・99図）　玄室内左奥の床面直上付近より須恵器杯蓋３点（280～282），杯身３点（283～285），低脚無蓋高杯１点（286），提瓶１点（287）がまとまって確認された。提瓶は正位置だが,その他は全て口縁を下に伏せた状態で出土している。杯蓋280と杯身285のみ上下に重なって出土しているが，組み合うものではない。また，杯身の内１点（283）は約半分が欠け，残りの半分の破片が約0.3m上方の③層中で確認された。③層は崩落土を主体とした土層であり，どのような経緯で欠損して移動したものかは不明である。283以外の須恵器は最終埋葬時の状況をほぼ保っているものと思われる。

また，墓道上②層中より須恵器提瓶１点（288）が据え置かれたような状態で確認された。最終埋葬後の祭祀に伴うと思われる。



第98図　30号横穴墓遺構図（1:40）



第99図　30号横穴墓土層図（1:40）

出土遺物（第100図，図版48）　280～287は玄室内出土須恵器である。280～285が蓋杯で，杯蓋天井部外面のヘラケズリは杯蓋280・281が粗雑なヘラケズリ，282がヘラケズリ後ナデで，杯身底部外面はいずれもヘラケズリ後ナデ，またはナデ調整である。282の杯蓋天井部外面にはヘラ記号「×」も確認される。286が低脚無蓋高杯で，脚部のスカシを持たない。287が提瓶で，口縁部をほぼ水平に打ち欠いている。肩部には潰れた環状把手が付く。

288は墓道上出土の須恵器提瓶である。胴部側面形態はほぼ対照なふくらみを有し，肩部には環状の把手が付く。

時　期　玄室内の須恵器蓋杯はいずれも大谷４期の特徴を示し，その他墓道上②層出土の須恵器提瓶についても，やや古相の特徴を残すものの，４期の範疇で捉えて矛盾はない。よって，横穴墓の築造，埋葬，埋没後祭祀も大谷４期を中心とした時期の中で終了しているものと考えられる。

⑩　31号横穴墓（第101～103図，図版28）

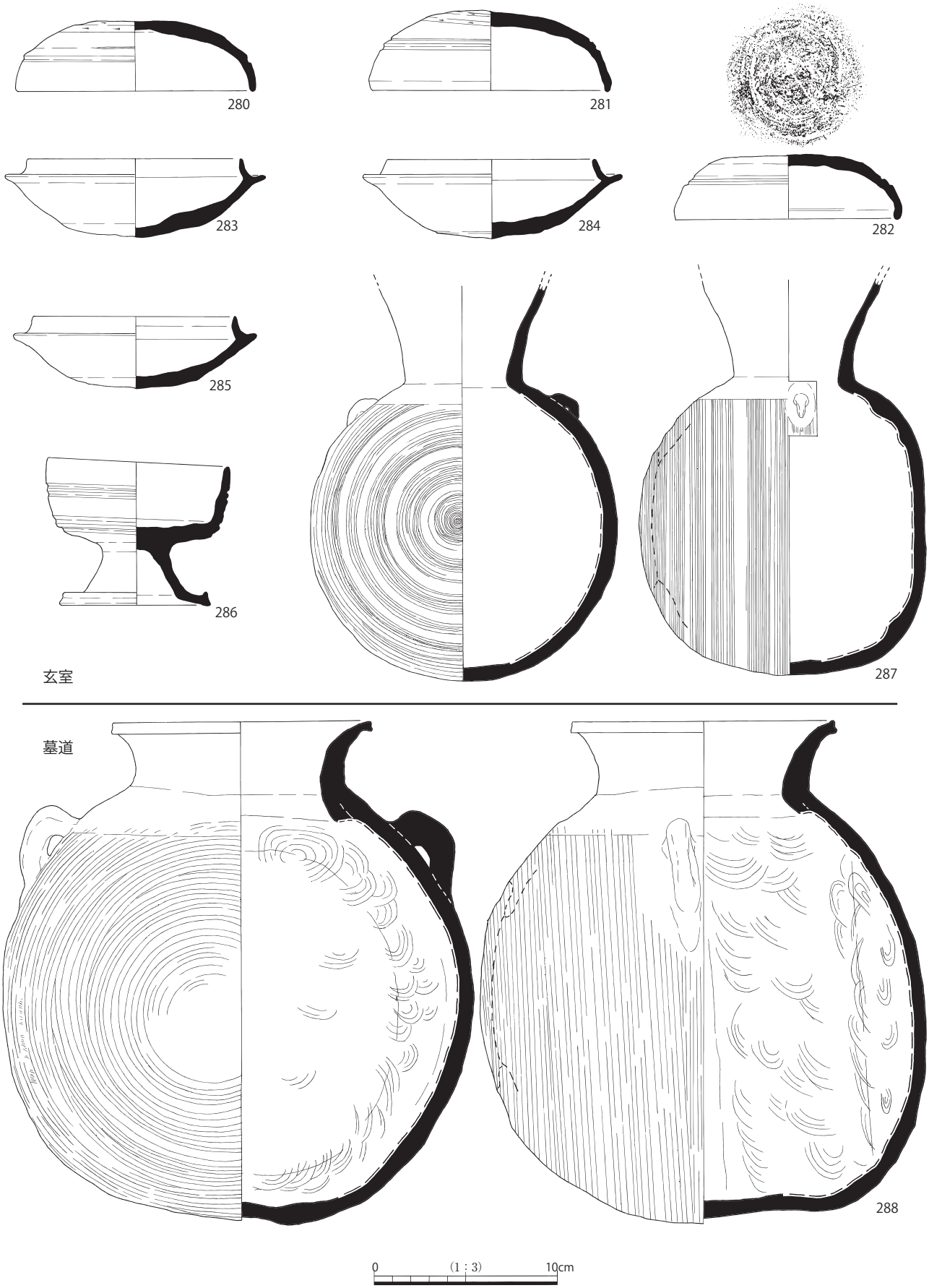
立　地　30号横穴墓の南に隣接し，標高は約22.5mと30号横穴墓よりやや低い。

墓道・閉塞部（第101図）　Ｓ－65°－Ｗ方向に開口し，床面幅0.75～1.1m，残存長2.9mを測る。閉塞部には幅20㎝，深さ10㎝程度の溝が主軸方向に直交して掘り込まれ，溝と連続した刳り込みを設ける。刳り込みは床面幅約75㎝，奥行５～10㎝，玄門外縁幅10㎝程度を測る。

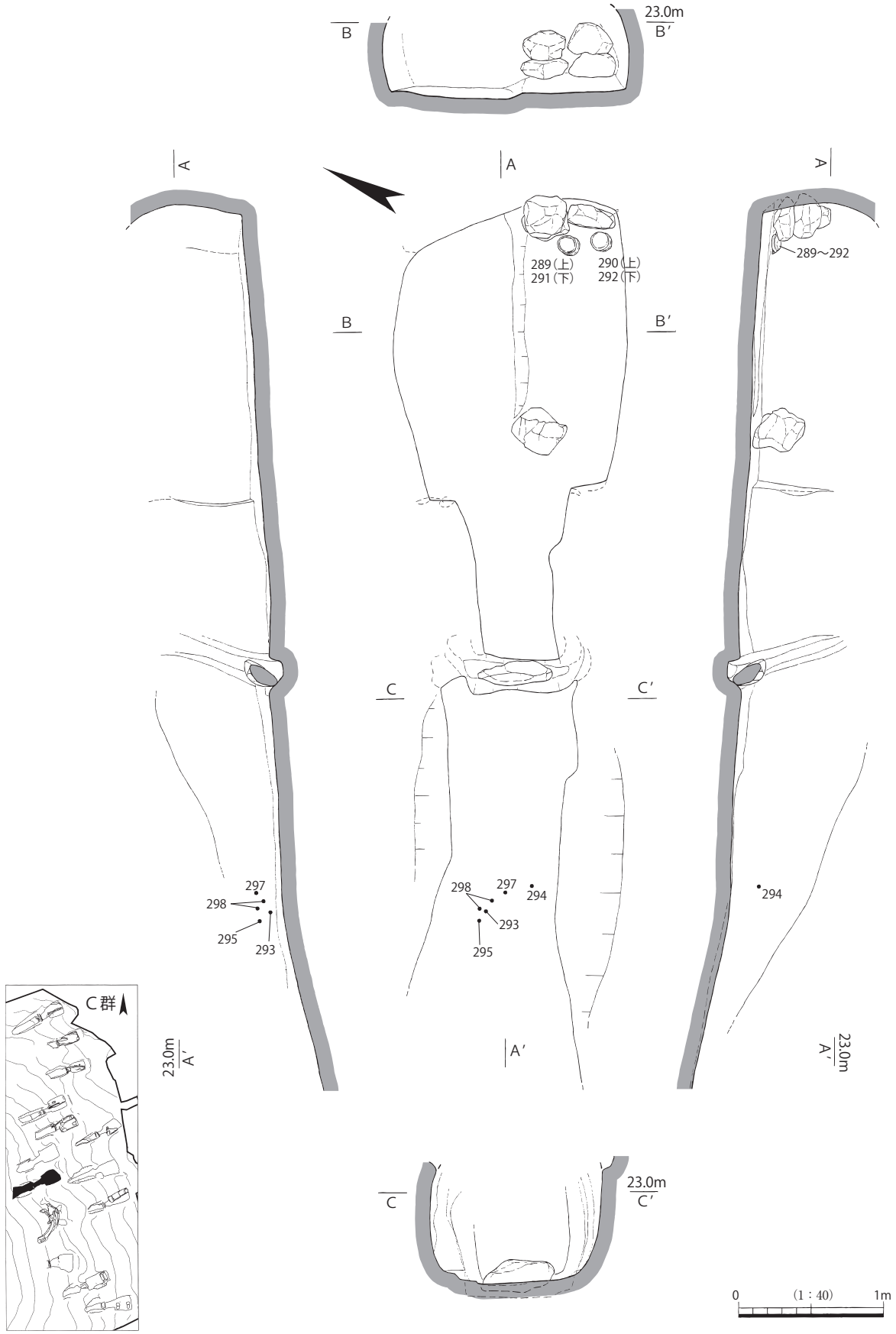
玄　門（第101図）　床面幅0.5～0.8m，長さ1.1m，残存高0.65mを測り，玄室側が幅広になる。天井部は残存していない。

玄　室（第101図）　平面形は幅1.2～1.6m，奥行２mのややいびつな長方形状である。墓道から玄室までの残存長は6.0mとなる。天井部の多くが残存していないが，残存部の状況からアーチ形の断面形だったと考えられる。残存高さ0.75m。右側壁側では高さ５㎝前後，幅0.8m程度の屍床を設けている。屍床上の３方向隅に割石を重ね，高さ35～40㎝程度の石柱状にしている。本来は木製の蓋があったものと思われる。

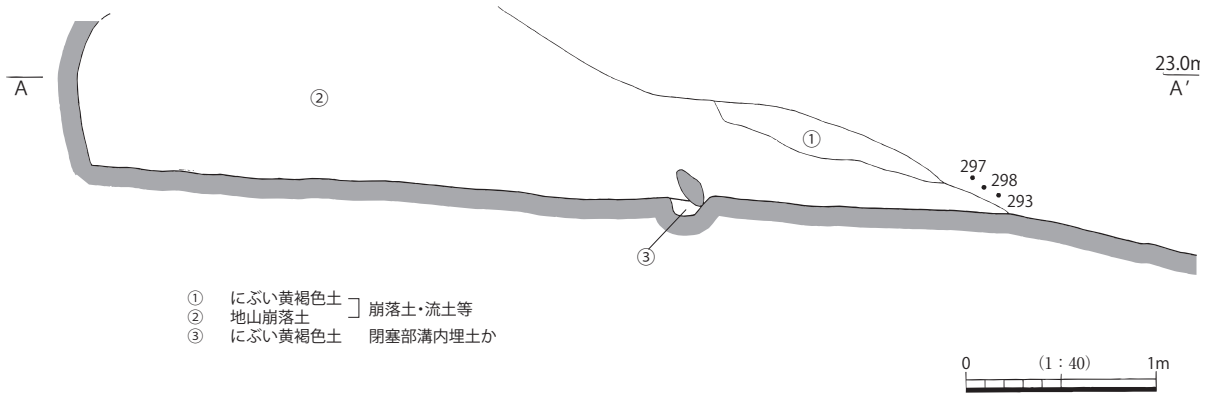
閉塞石（第101図）　割石の板状石材が閉塞部溝より１点確認された。溝前寄りに据えられ，玄門側に若干の隙間を持つ。閉塞板の押さえ石としての役割を持つものであろう。



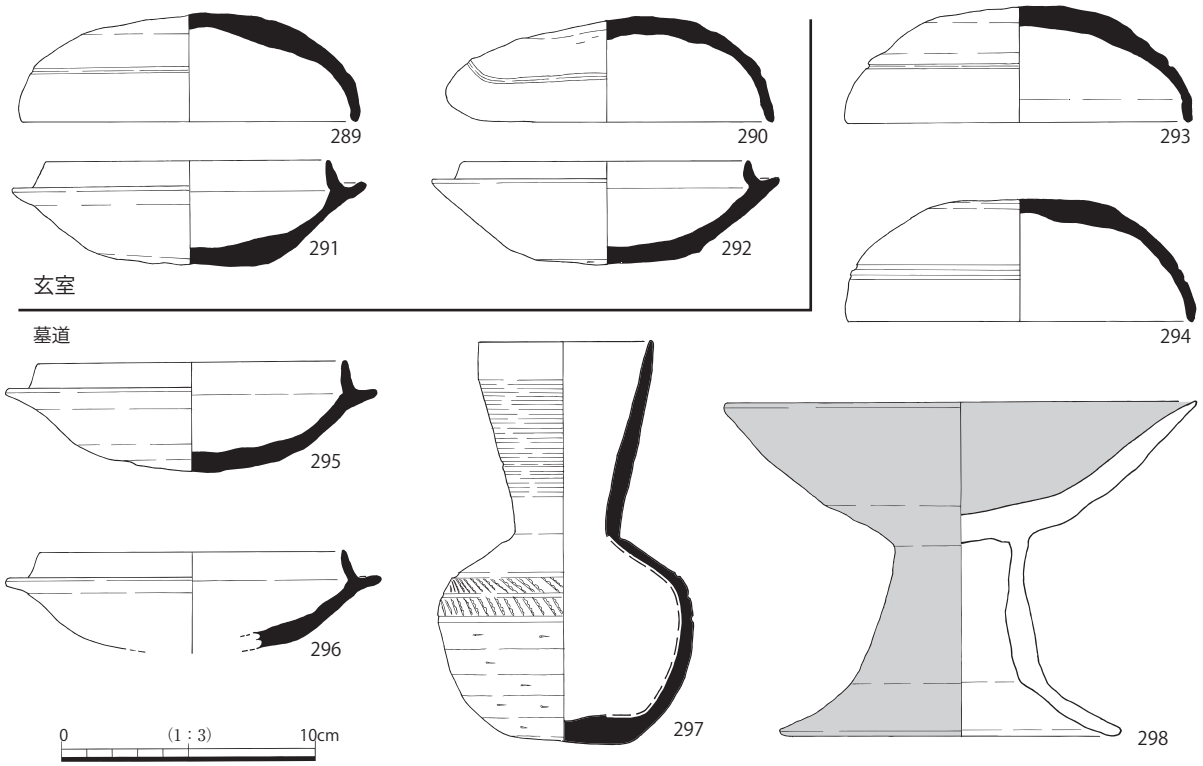
第100図　30号横穴墓遺物実測図（1:3）



第101図　31号横穴墓遺構図（1:40，●は土器）



第102図　31号横穴墓土層図（1:40，●は土器）



第103図　31号横穴墓遺物実測図（1:3）

土層堆積状況（第102 図）　確認された堆積土は大部分が崩落土および流土であり，埋葬後比較的早い段階で埋没したものと思われる。

遺物出土状況（第101・102図）　玄室内屍床奥壁側の床面直上から，須恵器蓋杯２セット（289～292）から成る土器枕が確認された。いずれも杯身を下に杯蓋を上に重ね，口縁を下に向けて並べている。埋葬時の状況を留めているものであろう。

また，墓道前方の①層中より須恵器杯蓋２点（293・294），杯身２点（295・296），長頸壺１点（297），土師器高杯１点（298）が乱雑にまとまって確認された。①層は地山崩落土上の土層であり，横穴墓が埋まった後にも②層上面付近において何らかの祭祀が行われていたものと思われる。

出土遺物（第103 図，図版49）　289～ 292は玄室内出土の須恵器蓋杯で，289と291，290と292がセットになるものである。いずれも外面にヘラケズリ後ナデが施されている。

293～ 298は墓道上出土の土器で，294，296以外はほぼ完形品である。293～ 296が須恵器蓋杯で，いずれも外面にヘラケズリ後ナデ，またはナデが施されている。297が須恵器長頸壺で、頸部にカキメが，肩部に２段の刺突文が施される。298は土師器高杯である。杯部内外面と脚部外面に赤彩の痕跡が残る。

時　期　玄室内の須恵器蓋杯はいずれも大谷４期の特徴を示し，その他墓道前方①層出土の須恵器についても，同様の時期で捉えられる。よって，横穴墓の築造，埋葬，最終埋葬後祭祀も大谷４期を中心とした時期の中で終了しているものと考えられる。

⑪　32号横穴墓（第104・105図，図版29）

立　地　31号横穴墓の南方約10mに位置し，標高は約22mと31号横穴墓よりやや低い。

墓道・閉塞部（第104図）　Ｓ－80°－Ｗ前後の方向に開口し，床面幅0.85m，残存長0.9mを測る。側壁はほとんど残存していない。閉塞部には幅25㎝，深さ５㎝程度の溝が主軸方向に直交して掘り込まれ，溝と連続して閉塞部側壁も若干削り込む。閉塞石の有無は不明である。

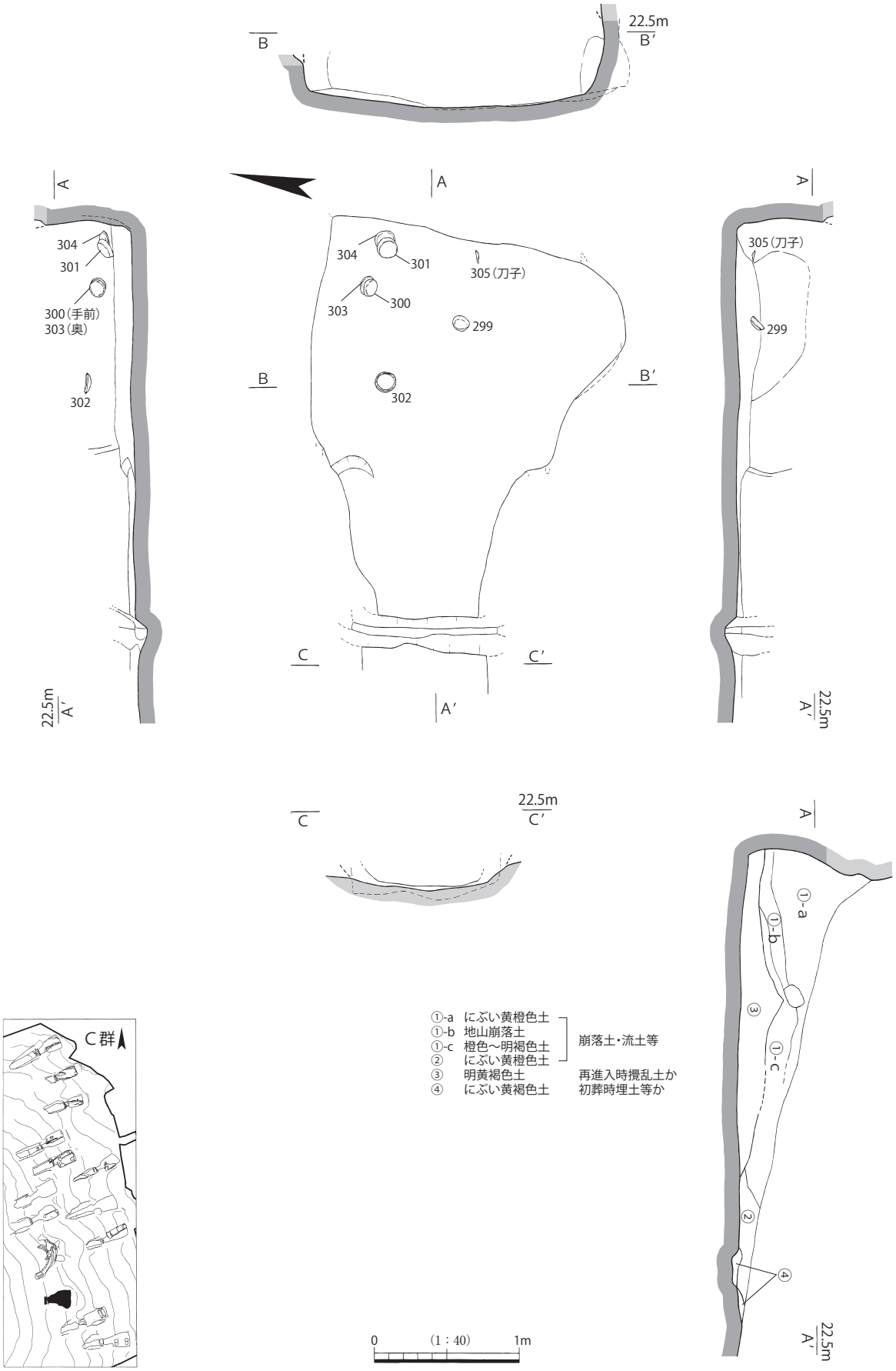
玄　門（第104図）　床面幅0.7～ 1.4m，長さ1.05m，残存高0.25mを測り，玄室側が幅広になる。側壁の大部分と天井部は残存していない。

玄　室（第104図）　Ｓ－89°－Ｗ方向に開口し，墓道～玄門とは軸をやや異にする。平面形は本来幅1.6～ 1.8m，奥行1.55mの正方形状だったと思われるが，奥壁側の右側壁を0.3m程度掘り込んで幅広にしている。墓道から玄室までの残存長は3.5mとなる。袖部分は非常に狭く不明瞭であるが，本来両袖式の形態であったと思われる。側壁の大部分と天井部は残存していない。残存高0.6m。

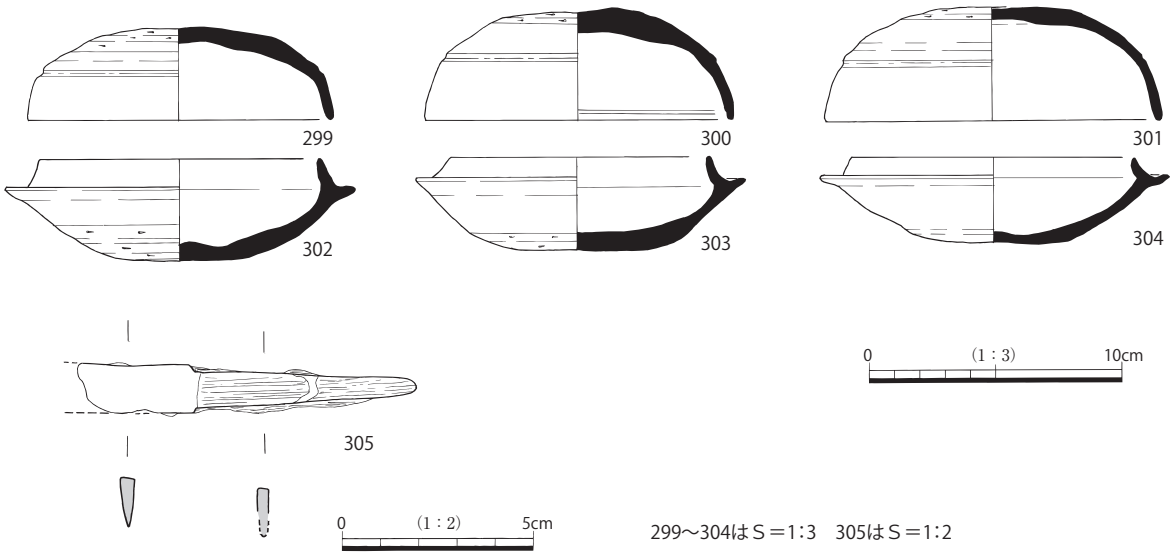
土層堆積状況（第104図）　①②層は崩落土・流土等，③層は再進入時の攪乱土であろう。④層は初葬後の埋土または流土である。床面付近～④層上面が再進入面であると思われ，③層上面においても再進入があった可能性がある。以上の状況から，初葬後，最低１回の追葬もしくは盗掘に伴う玄室内への再進入があったものと考えられる。

遺物出土状況（第104図）　玄室内遺物は全て③層中ないし③層上面付近から確認された。須恵器蓋蓋３点，（299～ 301），杯身３点（302～ 304），刀子片１点（305）がある。須恵器蓋杯の内，300と303，301と304の2組は左側壁際奥壁寄りに配置されたもので，いずれも杯身を下に杯蓋を上に重ね，口縁を下に向けて並べているが，必ずしも本来組み合うものではない。最終進入時の掘削によって若干の移動が認められるが，本来北に頭位を向ける土器枕であった可能性が高い。その他の須恵器蓋杯（299・302）と刀子片（305）は乱雑な出土配置であり，原位置を留めていないものと思われる。

出土遺物（第105図，図版49・57）　299～ 304は玄室内出土須恵器蓋杯で，この内300・301・303・304が土器枕として出土したものである。杯蓋の天井部外面には，299・300で粗雑なヘラケズリが，301で周辺ヘラケズリが施される。杯身の底部外面には，302・303で粗雑なヘラケズリが，304でヘラケズリ後ナデが施される。305は両関の刀子片で，刃部の多くを欠損している。柄木の木質が一部残存



第104図　32号横穴墓遺構図・土層図（1:40）



第105図　32号横穴墓遺物実測図（1:3･1:2）

している。

時　期　玄室内出土の須恵器はいずれも大谷４期の特徴を示す。よって，横穴墓の築造，埋葬も大谷４期を中心とした時期の中で終了しているものと考えられる。

⑫　33号横穴墓（第106～111図，カラー図版１，図版29～32）

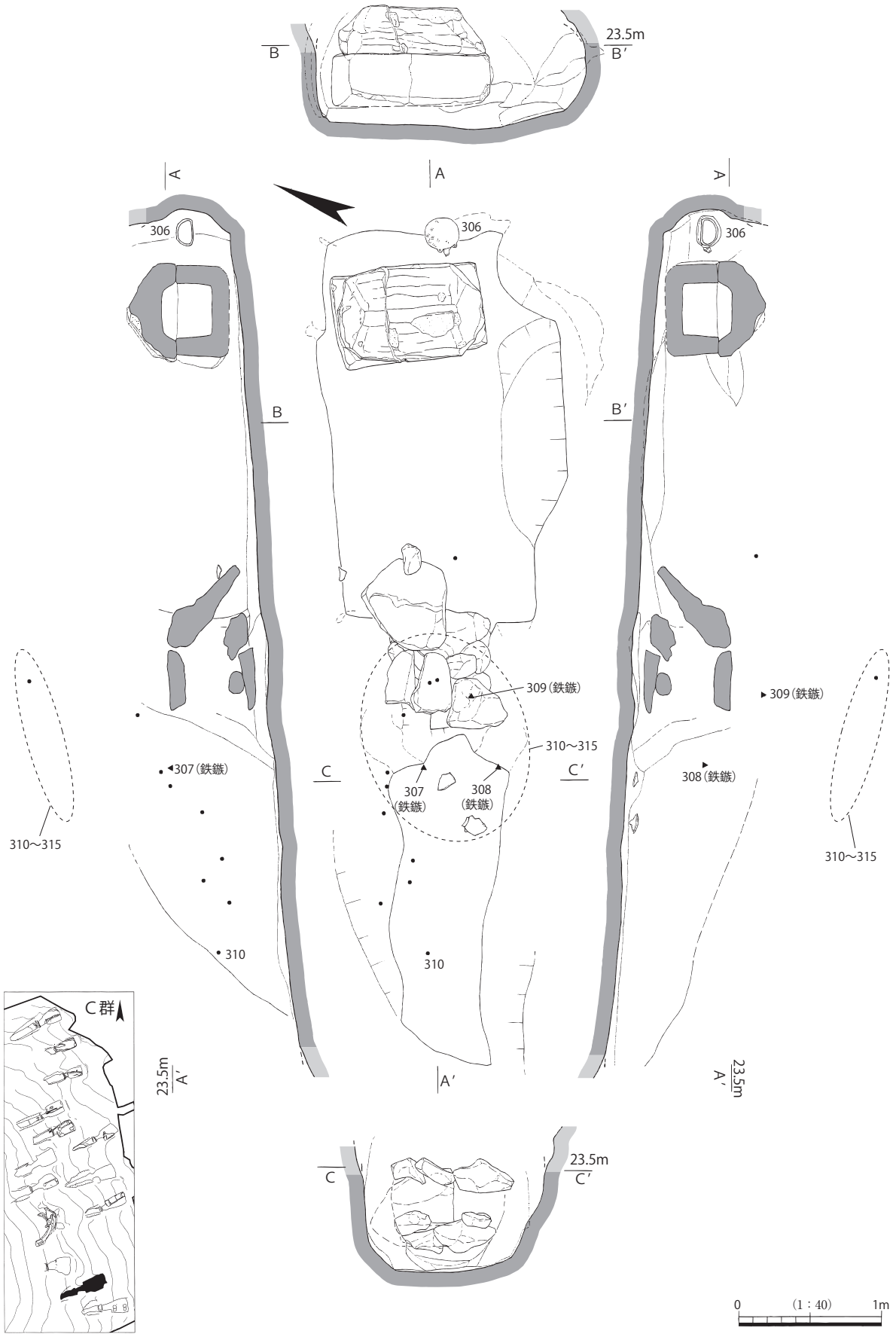
立　地　32号横穴墓の南東約４mに存在し，標高は約23mと32号横穴墓よりやや高い。

墓道・閉塞部（第106・107図）　Ｓ－69°－Ｗ前後の方向に開口し，床面幅0.55～ 0.8m，残存長2.2mを測る。閉塞部床面は現状でフラットになっているが，本来10㎝前後玄門側を高くした段を設けていたものが削平されたものと思われる。

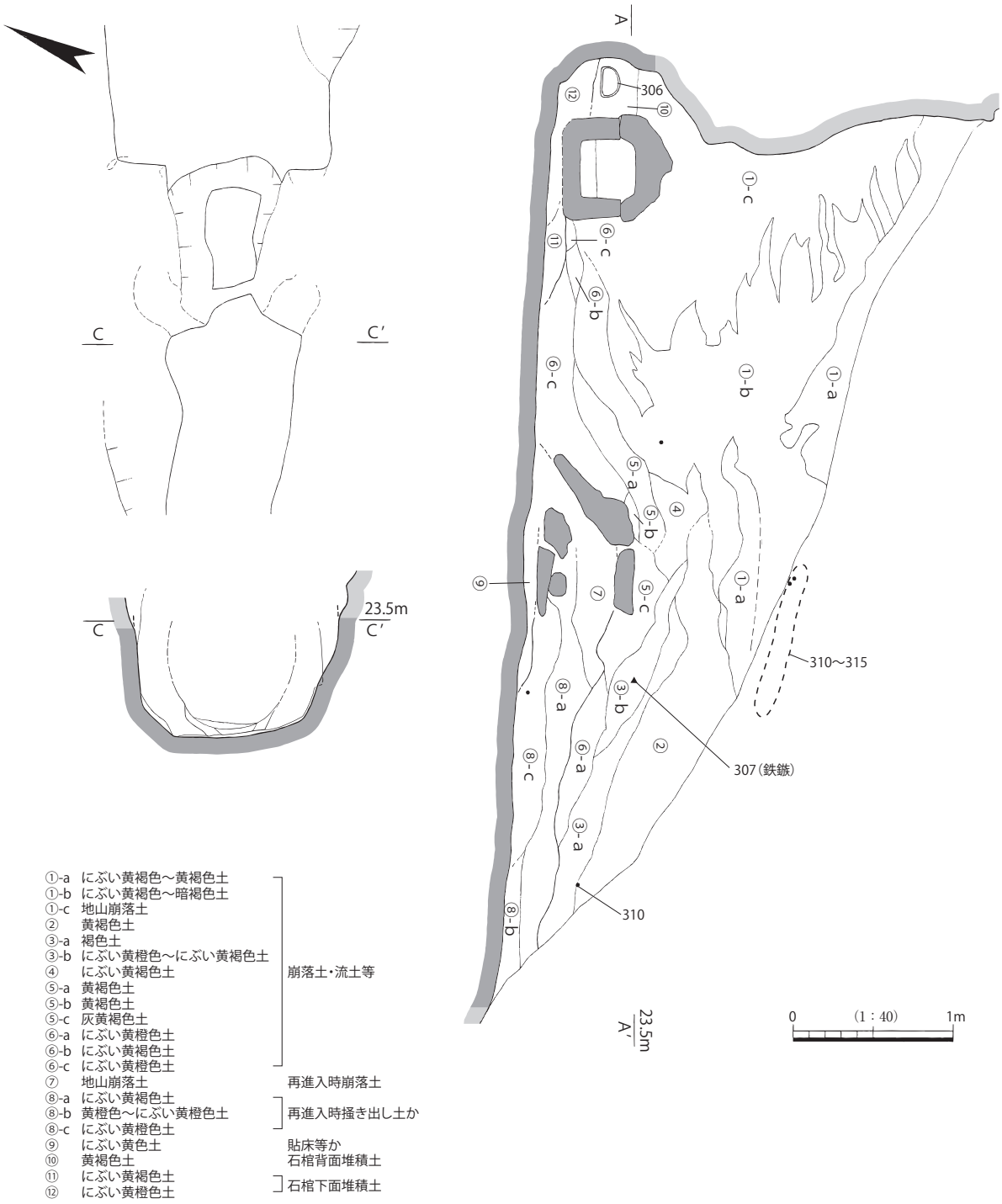
玄　門（第106・107図）　床面は石棺搬入に伴うものか，若干掘り込まれているようだが，欠損部分を掘削痕跡から復元すると幅0.45～ 0.75m，長さ0.95m，残存高0.4m程度を測り，玄室側が幅広になる。また，入口付近の側壁最大幅0.8m以上と床面に対して大きく幅広になっている。天井部は残存していない。

玄　室（第106図）　平面形は本来幅1.3～ 1.5m前後，奥行2.1m程度の長方形だったと思われるが，石棺搬入・設置に際して奥壁側を幅1.25m，奥行0.6m拡張し，奥壁拡張部に家形石棺を設置している。拡張後の玄室奥行は2.7m，墓道から玄室までの残存長は5.85mとなる。天井部は残存していないが，拡張部奥壁ではアーチ形の形跡が残る。残存高0.65m。また，右側壁側にもいびつに拡張された形跡がある。これも石棺搬入作業時の拡張であろうか。

石　棺（第106・108図）　石棺は主軸に直交して奥壁拡張部に設置され，床面には若干の土盛りが確認される。石棺を設置した際に押し込まれた土砂であろうか。棺の形状は横口の無い刳抜式の家形石棺で，蓋・身ともに１枚石の砂岩から形成されている。蓋石は四隅の角を面取りした横長八角形の平面形で，内外面とも寄棟家形に加工される。法量は外面で長さ102×幅67×高さ33㎝，内面刳り込み

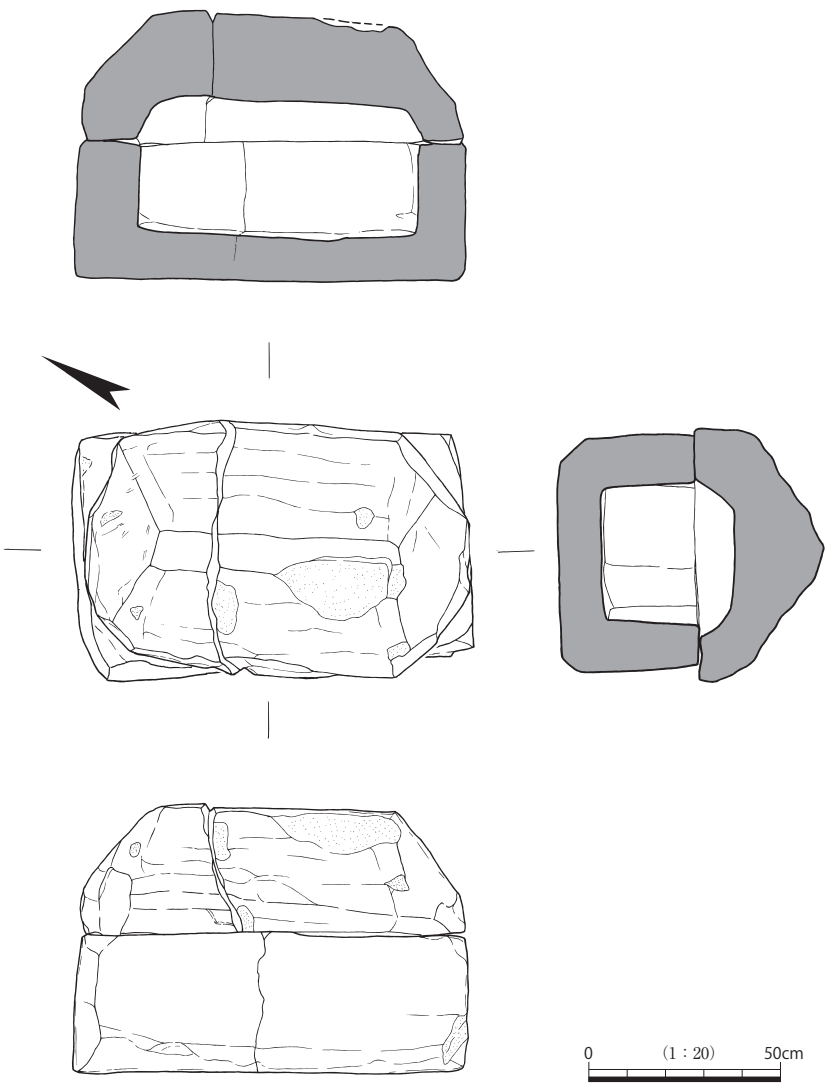


第106図　33号横穴墓遺構図１（1:40，●は土器▲は金属製品）



第107図　33号横穴墓遺構図２・土層図（1:40，●は土器▲は金属製品）

で長さ76×幅40×高さ10cmを測る。身は長方形の平面形で，内面は刳り抜かれている。法量は外面で長さ105×幅65×高さ37cm，内面刳り込みで長さ74×幅38×高さ24cmを測る。蓋と身を組み合わせた全高は70cmである。棺内には蓋の割れ目より流入したとみられる土砂が厚さ10cm程度堆積していたが，人骨・遺物等は全く確認されていない。総じて非常に小形の石棺である。



第108図　33号横穴墓石棺実測図（1:20）

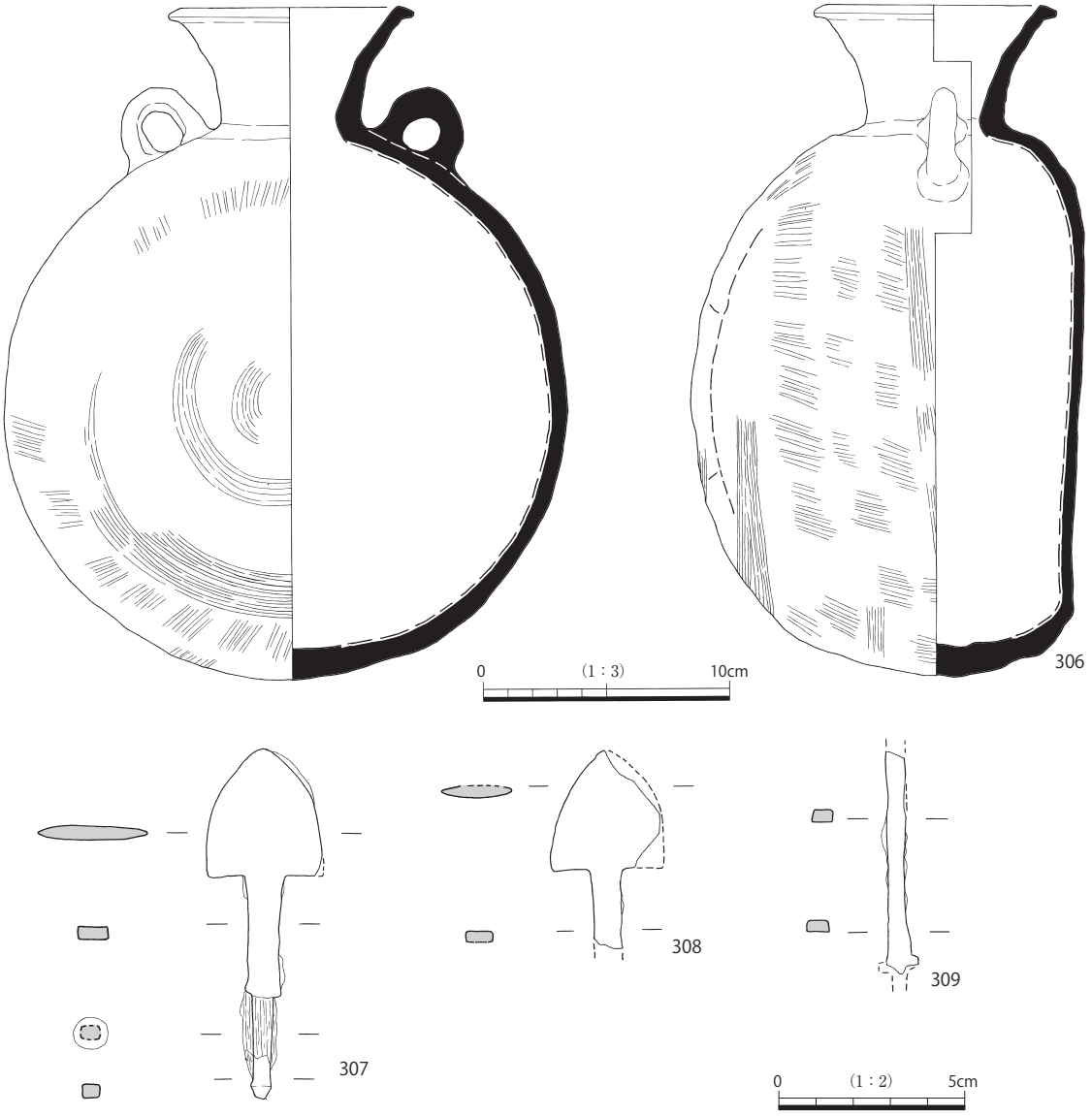
閉塞石（第106図）　割石・自然石が玄門から玄室の入口付近にかけて上段の石が５点，下段の石が７点，堆積土を挟んで積まれていた。下面の閉塞石は床面からやや浮くが，初葬時の設置であろうか。上段の閉塞石は扁平な石を敷いたような出土状況である。

土層堆積状況（第107図）

①～⑥層は崩落土，流土等である。この内，①～④層までの複雑な堆積状況はこれらが極めて短期間の内に起こった崩落に伴うことを示すものであろう。⑦⑧層は上段閉塞石設置前の土層で，⑦層は地山崩落土，⑧層は再進入時の掻き出し土等であろうか。再進入時に玄門の天井が一部崩落したものであろう。⑨層は下段閉塞石設置前の土層で，よく締まる。石棺搬入後に貼られた貼床であろうか。⑩層は石棺背面の堆積土である。⑪⑫層は石棺下堆積土で，石棺設置時に押し込まれたものか，石棺背面の⑫層が厚く盛り上がっている。閉塞石が積み直されていることから初葬後少なくとも１回の追葬等に伴う玄室内への再進入があったことが確認できる。また，貼床と思われる⑨層下で石棺搬入に伴う削平痕が見られることから，石棺は初葬時より設置されていた可能性が高い。

遺物出土状況（第106・107図）　玄室内出土遺物は，石棺背面の堆積土⑩層下面付近で出土した須恵器提瓶１点（306）のみである。石棺上から転落したものであろうか。その他は全て流土⑥層以上からの甕片が確認されるのみである。玄室内の副葬品は再進入時に意図的に撤去されたように思われる。

玄門～墓道上では，⑧層中より須恵器甕片数点，③層より須恵器甕片10数点と鉄鏃３点（307～309），①-ｂ層最上層を中心に大量の須恵器甕片（310～314）が確認された。この内，甕310については③層中出土甕片と同一個体であることが確実である。①③層はいずれも同時期の崩落に伴う土層と



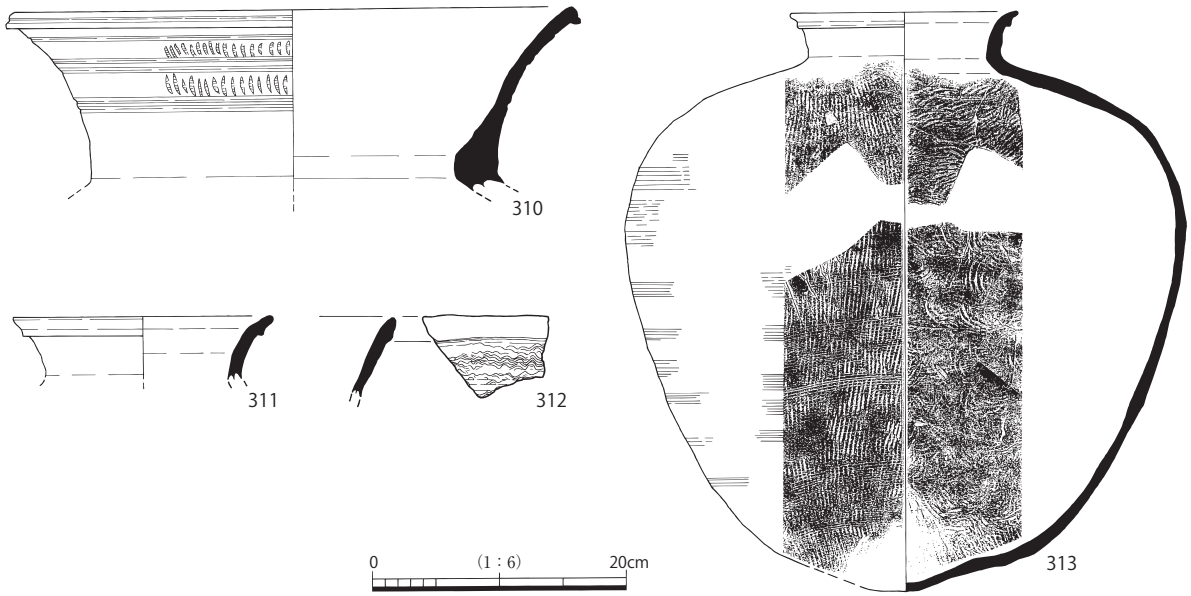
第109図　33号横穴墓遺物実測図１（1:3･1:2）

考えられ，同層出土の須恵器甕群も本来は横穴墓上方の丘陵斜面にあったものであろう。なお，甕313，314は26号横穴墓で確認された状況と同様，自然に分散したとは考え難い調査地の広い範囲から接合する破片が確認されている。313では12号横穴墓周辺，22～24号横穴墓周辺，後述するＳＸ10溝内からの接合資料が，314では12号横穴墓周辺，27号横穴墓周辺から接合資料が確認されている。大甕を破砕して広範囲に散布するような儀礼の存在を示すものであろう。

出土遺物（第109～111図，図版50・51・56）　306は玄室内より出土した須恵器提瓶である。口縁端部を一部欠損するが，ほぼ完形品である。把手は肩部にがっちりとした環状把手が付き，側面形態は背面（製作時の底）に明確な平坦面を持つ。

307～309は墓道上流土中より出土した鉄鏃である。307・308は三角形鏃で，307には矢柄の一部が残存する。309長頸鏃の頸部で，一部に棘状関が残存する。

310～315は玄門～墓道上流土中より出土した須恵器甕である。310には刺突文が，312・315には波



第110図　33号横穴墓遺物実測図２（1:6）

状文が頸部に施される。

時　期　玄室内出土の須恵器は提瓶のみであるが，大谷３期の特徴を示す。横穴墓もこの頃に築造されたものと思われる。

⑫　34号横穴墓（第112～114図，図版33）

立　地　33号横穴墓の南東約3.5mに存在し，標高は約24.5mと33号横穴墓よりやや高い。

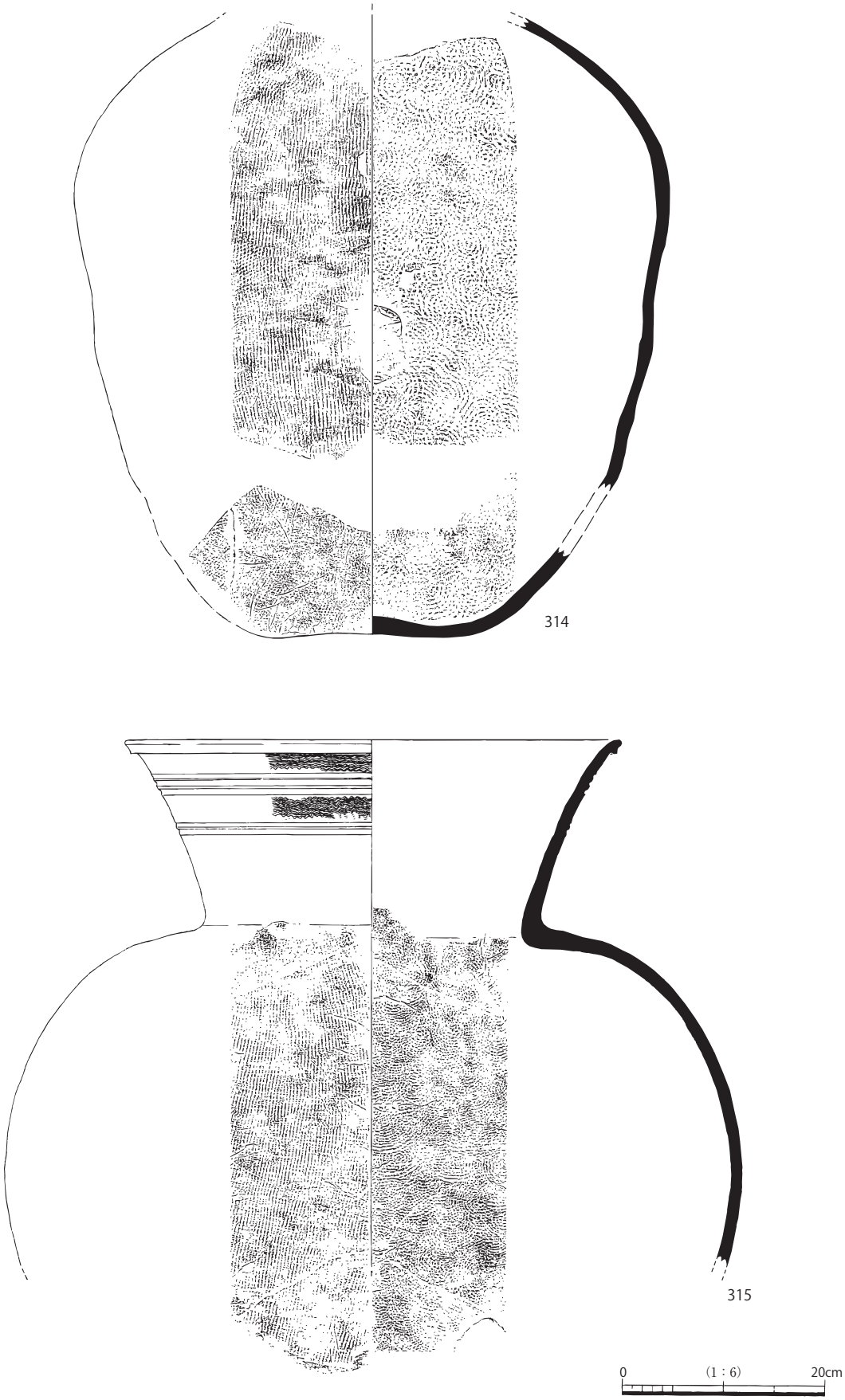
墓道・閉塞部（第112図）　Ｓ－81°－Ｗ前後の方向に開口し，床面幅0.4～0.75m，残存長2.45mを測る。玄門より0.85m付近まで左側壁がやや狭くなっており，その前面に面を持つ。閉塞部から0.6m付近まで深さ15㎝前後の半円状掘り込みが見られ，掘り込みの位置に対応して閉塞部側壁も若干削り込まれている。

玄　門（第112図）　床面幅0.65～0.85m，長さ1.05m，残存高0.6mを測り，玄室側がやや幅広になる。天井部は残存していない。

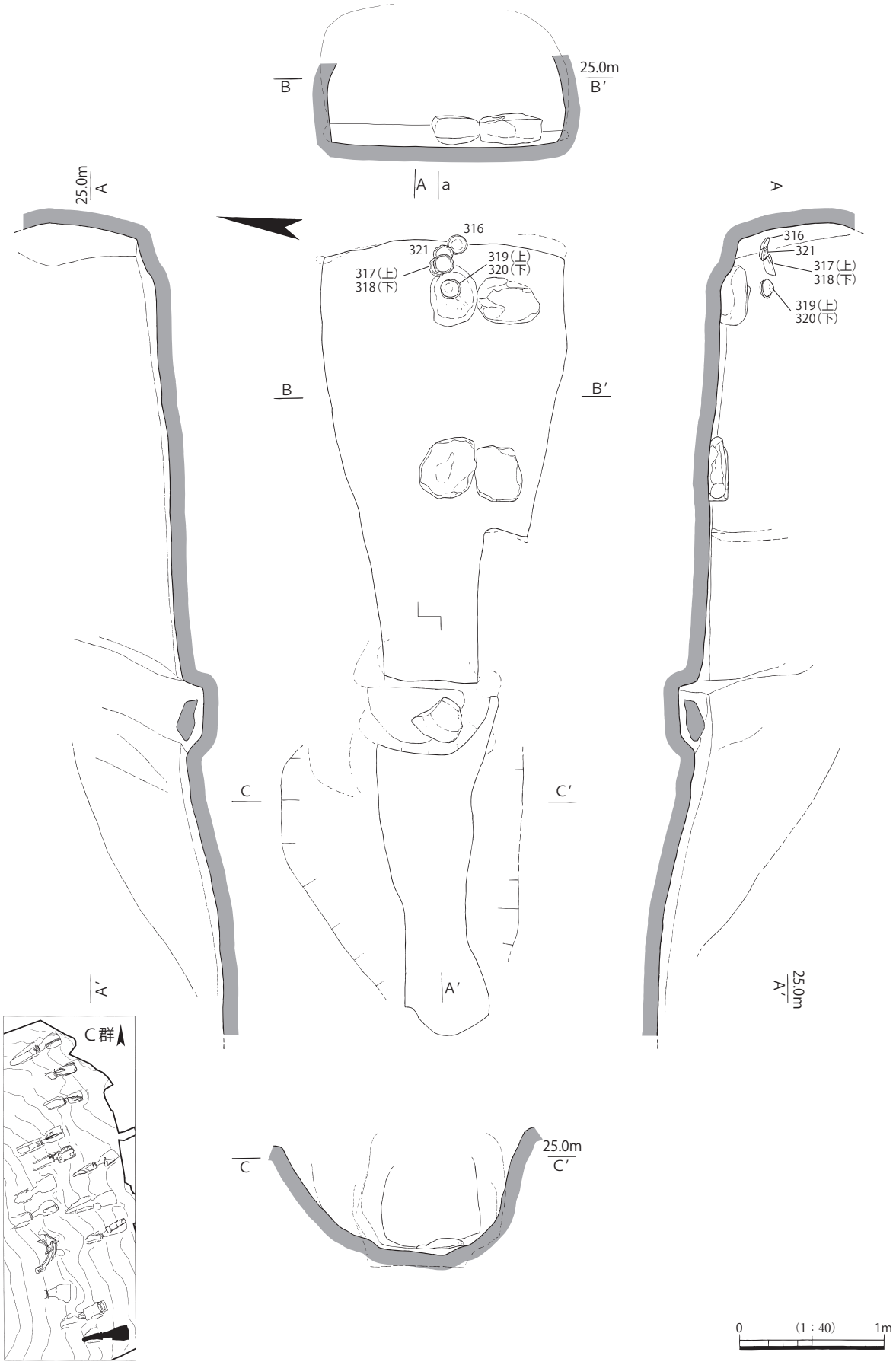
玄　室（第112図）　平面形は幅1.15～1.7m，奥行2mの奥が広がる台形状である。墓道から玄室までの残存長は5.5mとなる。右袖のみの片袖式である。天井部の多くが残存していないが，残存部の状況から高さ１m程度のアーチ形の断面形だったと考えられる。右側壁側には４つの扁平な割石からなる棺台が設置されている。棺台に使用された石の一部は上面を削って平坦に加工している。

閉塞石（第112図）　割石が閉塞部掘り込み中の地山から１点確認された。石は掘り込みの中に納まるが，地山面からはやや浮いた状態であった。閉塞板の押さえ石としての役割を持つものであろう。

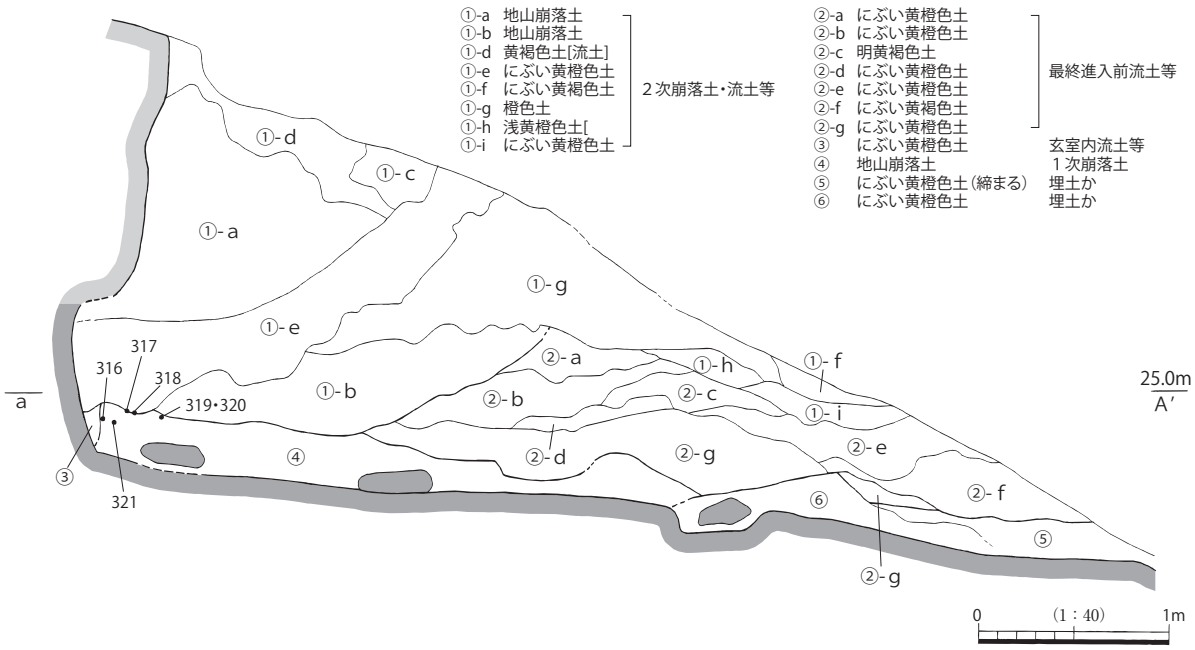
土層堆積状況（第113図）　①②層は崩落土・流土等である。②層上面が最終進入時の進入面と思われる。④層は地山崩落土，③層は④層が崩落していない範囲の玄室内流土等である。⑤⑥層は埋土等であろうか。⑥層上面にも再進入面があると思われるが，④層上面に連続する侵入面と床面まで連続す



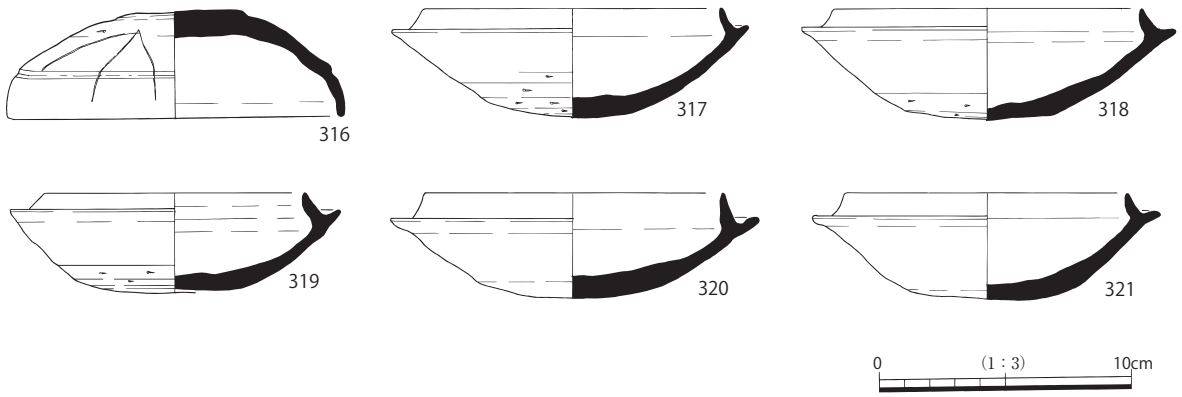
第111図　33号横穴墓遺物実測図３（1:6）



第112図　34号横穴墓遺構図（1:40）



第113図　34号横穴墓土層図（1:40，●は土器）



第114図　34号横穴墓遺物実測図（1:3）

る進入面が存在すると思われる。初葬後，最低３回の追葬もしくは盗掘等に伴う玄室内への再進入があったものと考えられる。

遺物出土状況（第112・113図）　玄室内中央奥壁際，③④層上面付近から須恵器杯蓋１点（316），杯身５点（317～321）がまとまって確認された。この内杯身２点（319・320）は口蓋を下にして重ねられており，最終埋葬時の配置を留めているものと思われる。他の蓋杯群は最終進入時に移動を受けているようだが，大幅な移動ではないものと思われる。③④層以下からは遺物は全く出土しておらず，最初の再進入時に初葬時の副葬品が片付けられた可能性もある。

出土遺物（第114図，図版51）　316～321は玄室内出土の須恵器蓋杯である。316は杯蓋で天井部外面にヘラケズリ後ナデ，三又状のヘラ記号が確認できる。317～321は杯身で，底部外面には317で粗雑なヘラケズリ，318・319で周辺ヘラケズリ，320・321でヘラケズリ後ナデが施される。

時　期　玄室内出土の須恵器はいずれも大谷４期の特徴を示す。初葬時の遺物が残存しない可能性もあるが，４期の中でも特に古い特徴を示す資料は無く，横穴墓の築造，埋葬も大谷４期を中心とした時期の中で終了しているものと考えて良いであろう。

第２節　その他の遺構

横穴墓以外の遺構としては，２～７号横穴墓下の南向き斜面裾部付近にピット群，土坑墓群ST１～７が確認された他，西向き斜面においては31・32号横穴墓の間で小穴３基と溝１基からなる性格不明遺構SX10が，斜面裾部付近において土坑SK８が，調査区南東端丘陵上方に溝SD９が確認されている。横穴墓群と同様の時期の遺構としてはSX10が確認できるのみであり，その他については近世もしくは時期不明の遺構である。以下に個々の遺構についての詳細を述べる。

①　ピット群（第115図，図版34）

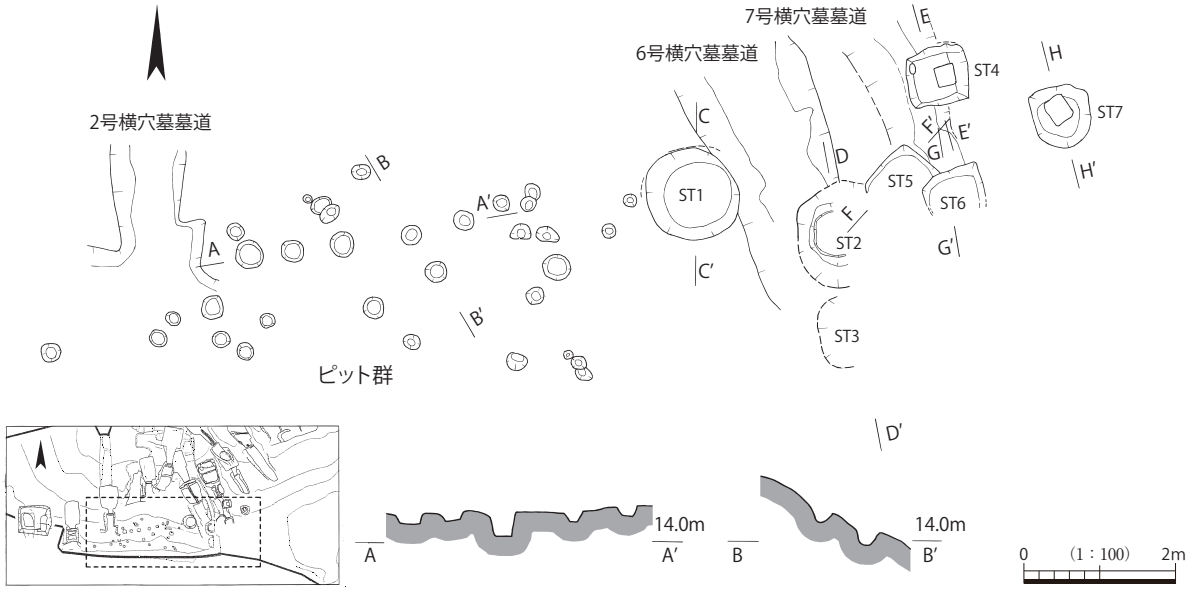
２～５号横穴墓下の南向き斜面裾部付近，標高14m前後で確認された33基のピットからなる遺構である。建物遺構となるような規則性は確認できなかった。ピット遺構の規模は直径0.4m，深さ0.35mのものが最大であり，浅いものは深さ0.1m程度であった。検出面は基盤層の布志名層であるが，本来更に上層より掘り込まれていた可能性がある。遺物については確認されていない。

②　ＳＴ１～７（第115・116・118図，図版34・57）

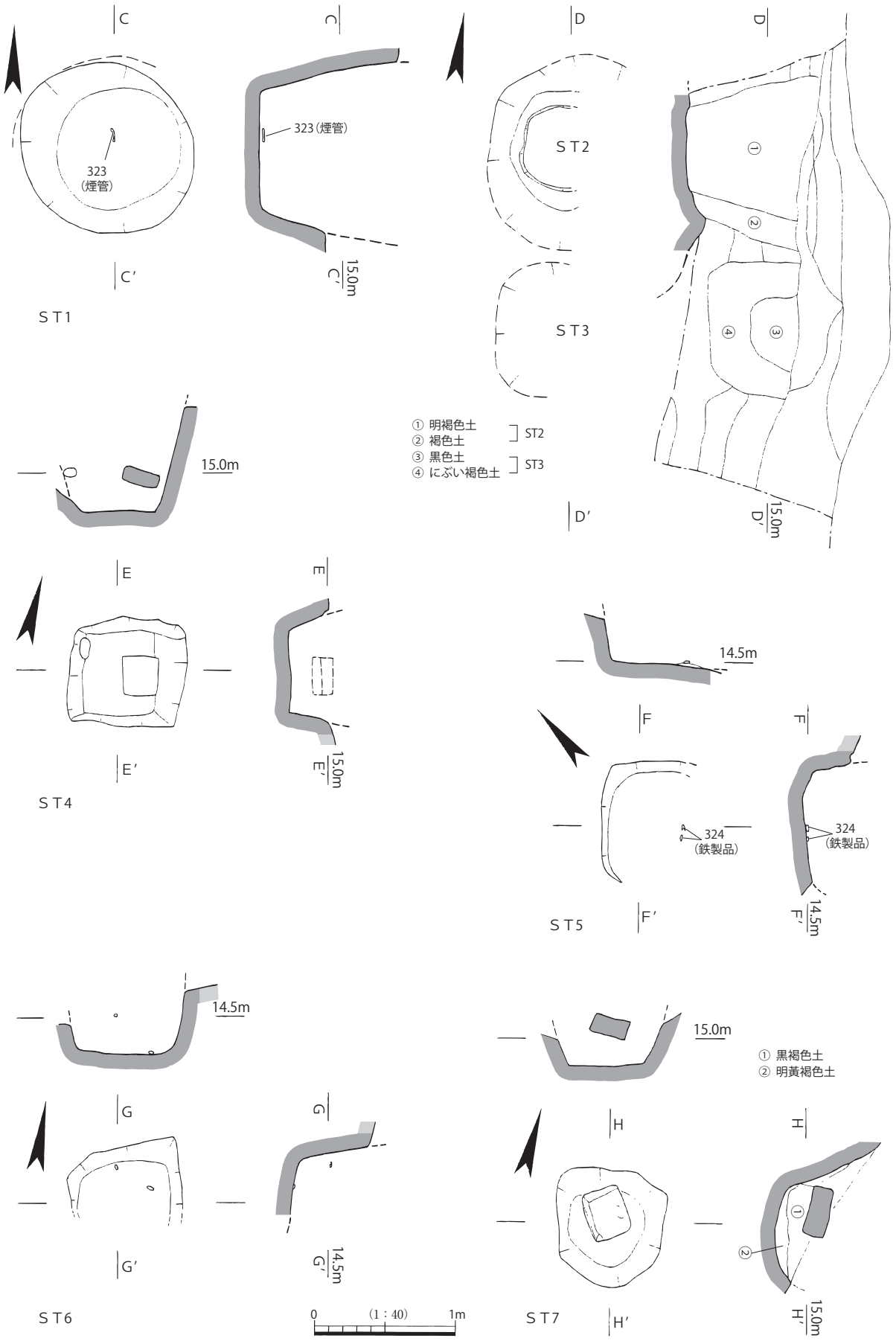
６・７号横穴墓の墓道上付近，標高15m前後で確認された近世墓群である。出土遺物の内容や調査前に無銘墓石が点在していた場所に立地していることから，近世以降の座棺に伴う墓坑と考えられる。

ST１は円形の墓坑で，直径1.2m，深さ1mを測る。床面付近より煙草盆の把手かと思われる銅製飾金具（322），煙管の雁首（323）が出土している。

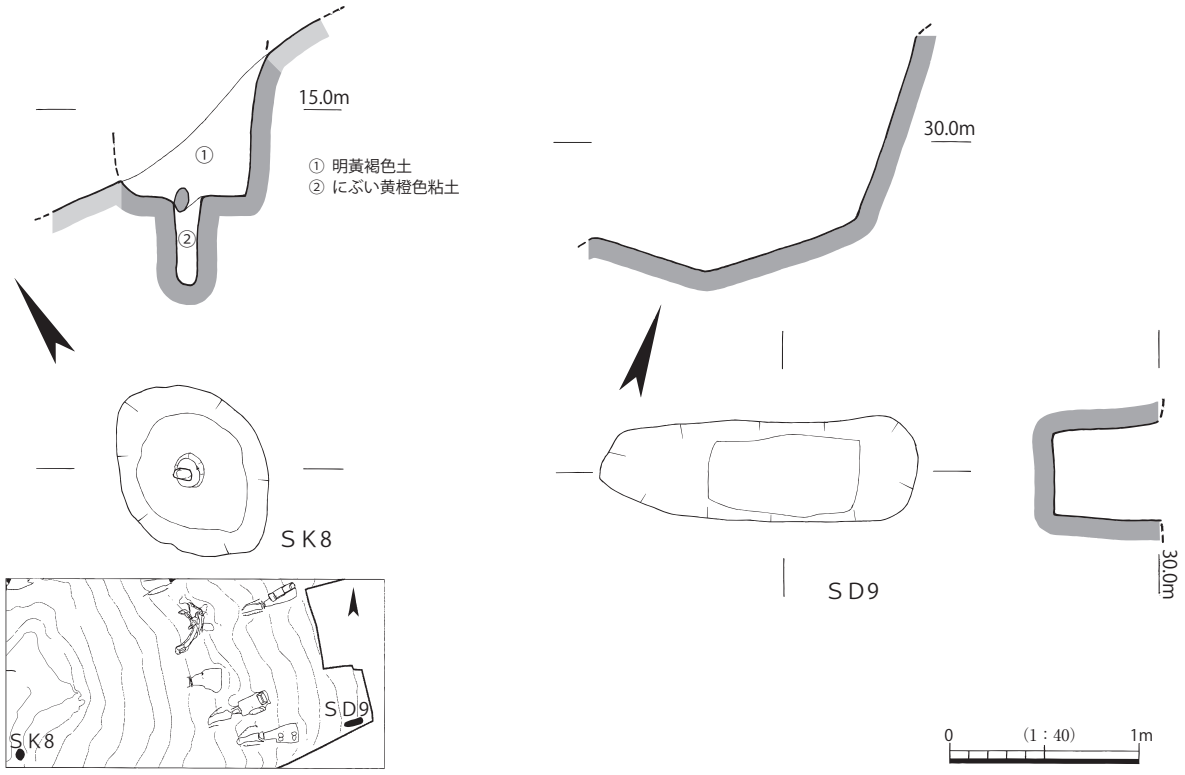
ST２は円形の墓坑で，直径1.2m前後，深さ１ｍを測る。横穴墓上の堆積土上層より掘削されている。遺物は出土していない。



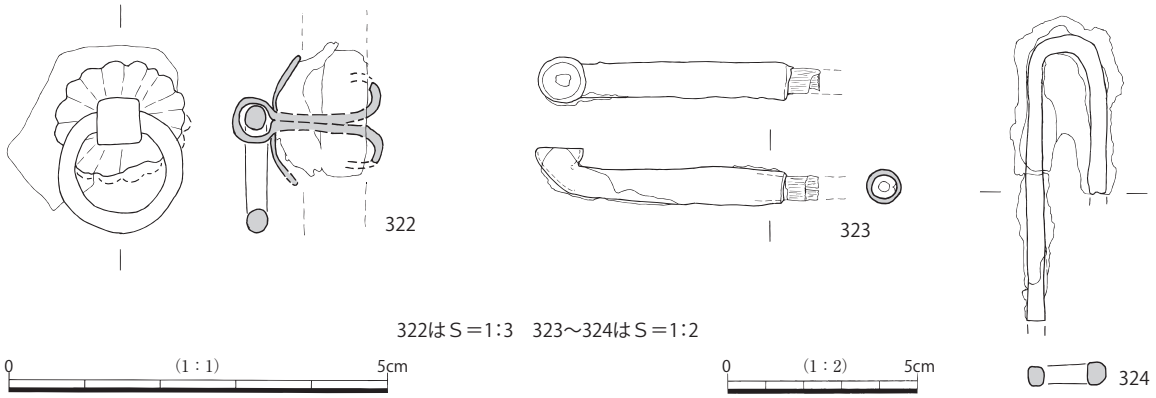
第115図　ピット群周辺遺構配置図（1:100）



第116図　ST1～7遺構図・土層図（1:40）



第117図　ＳＫ８，ＳＤ９遺構図（1:40）



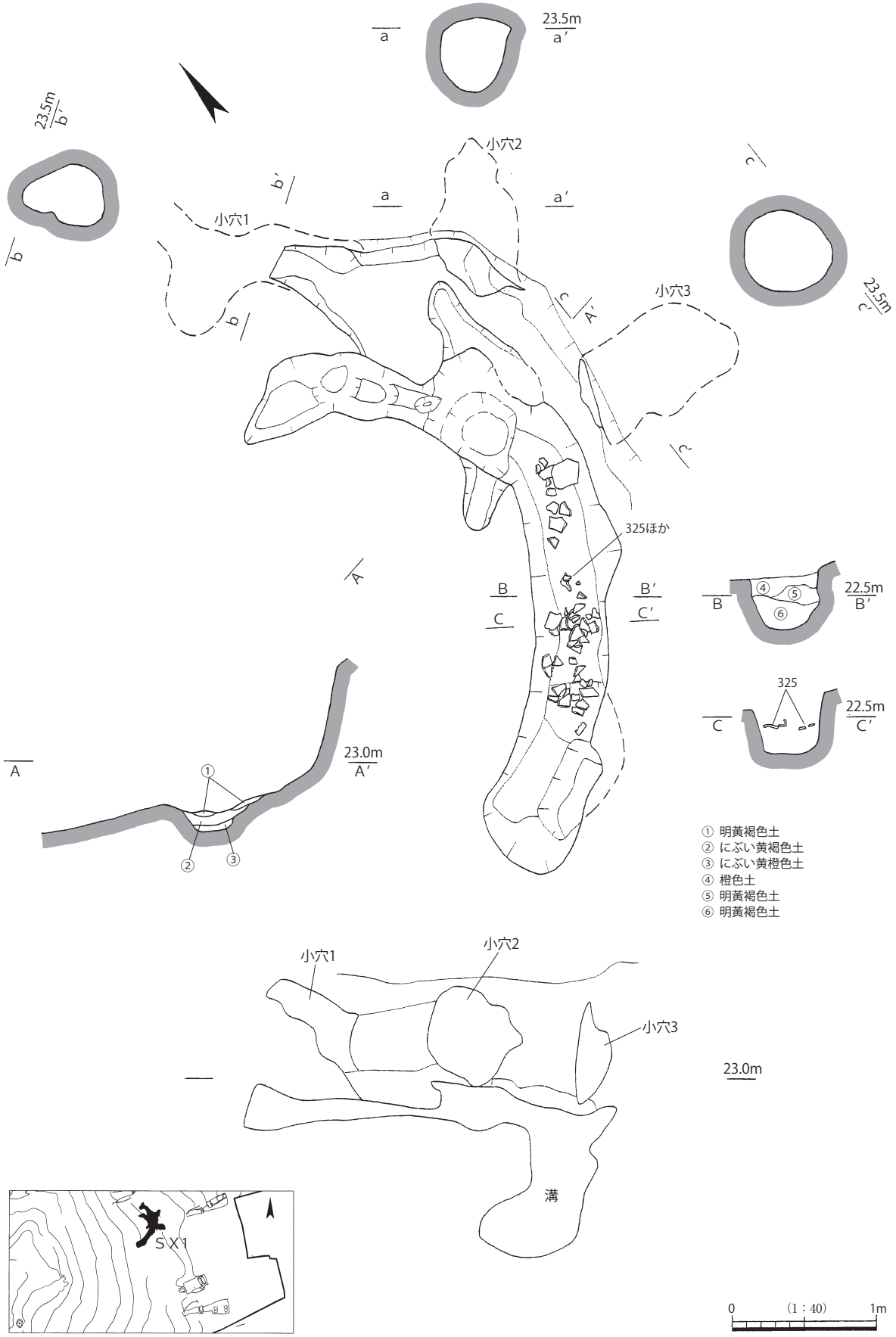
第118図　ＳＴ１・５遺物実測図（1:1･1:2）

ＳＴ３は平面形不明の墓坑で，長辺１ｍ前後，深さ0.65ｍを測る。横穴墓上の堆積土上層より掘削されている。遺物は出土していない。

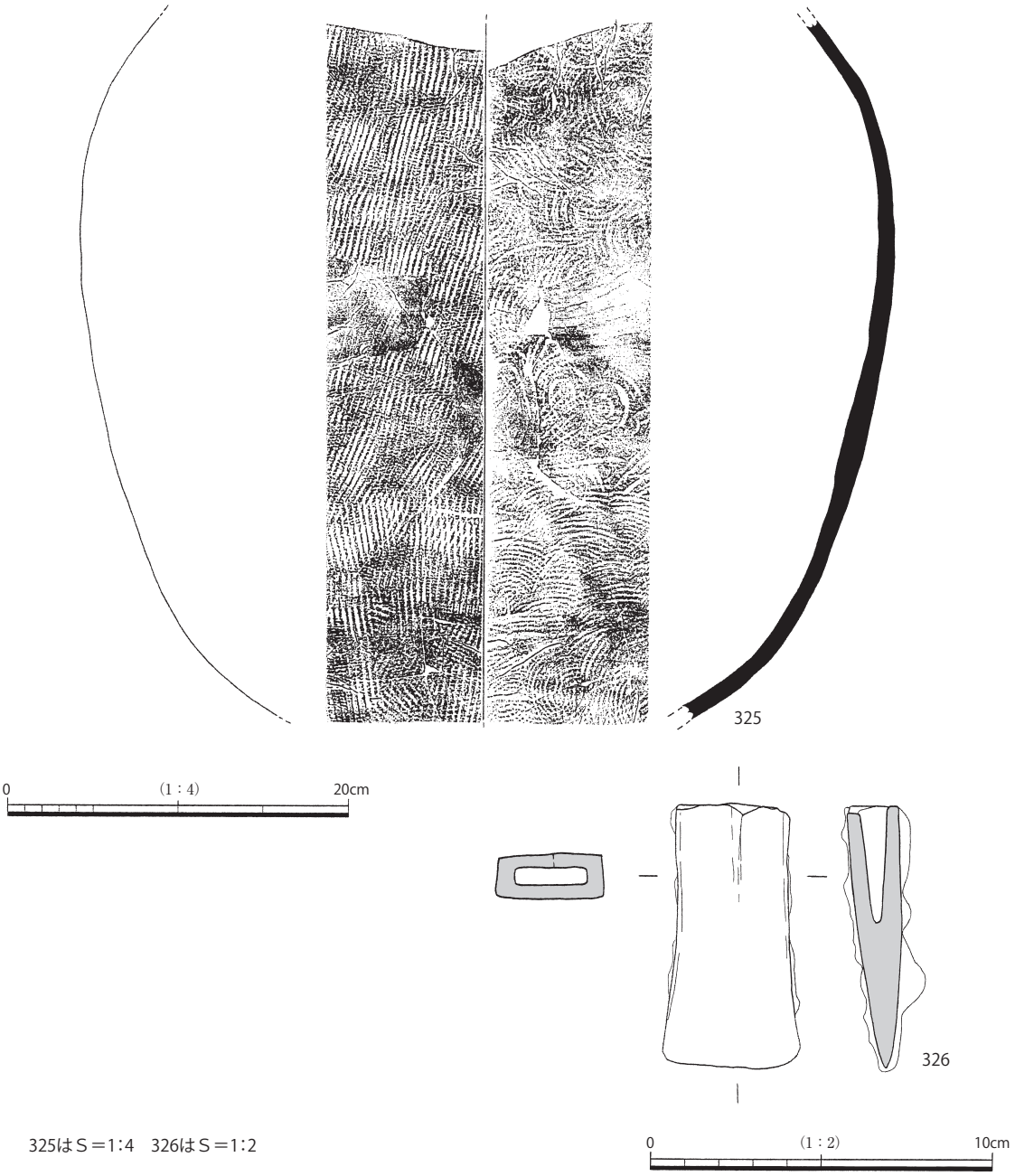
ＳＴ４は方形の墓坑で，１辺0.8ｍ前後，深さ0.8ｍを測る。土坑内に1辺0.25ｍ前後の方形の石材が落ち込んでいた。遺物は出土していない。

ＳＴ５は方形の墓坑で，１辺0.55ｍ以上，深さ0.3ｍを測る。床面付近より用途不明の鉄製品（324）が出土している。

ＳＴ６は方形の墓坑で，１辺0.8ｍ前後，深さ0.3ｍを測る。埋土より鉄小片が確認されている。



第119図　SX10遺構図・土層図（1:40）



第120図　SX10遺物実測図（1:4･1:2）

ST７は本来方形となると思われるややいびつな平面形の墓坑で，１辺0.8m前後，深さ0.8m前後を測る。墓坑内に1辺0.35m前後の方形の石材が落ち込んでいた。遺物は出土していない。

③　ＳＫ８（第117図，図版34）

西向き斜面裾部付近，標高約15mで確認された土坑である。楕円形状土坑で，直径0.8～１m，深さ0.7mを測る。底面には直径0.15m程度，深さ0.6mの小穴が掘り込まれており，細い柱状の施設を設置した際の掘り込みであると思われる。床面付近から小礫１点が確認されるのみで，遺物は出土していない。

④　ＳＤ９（第117図，図版34）

西向き斜面の調査区南東端丘陵上方，標高30m前後で確認された溝で，長さ1.7m，幅0.55m，深さ0.2～ 0.95mを測る。遺物は出土していない。

⑤　ＳＸ10（第119・120図，図版35・56）

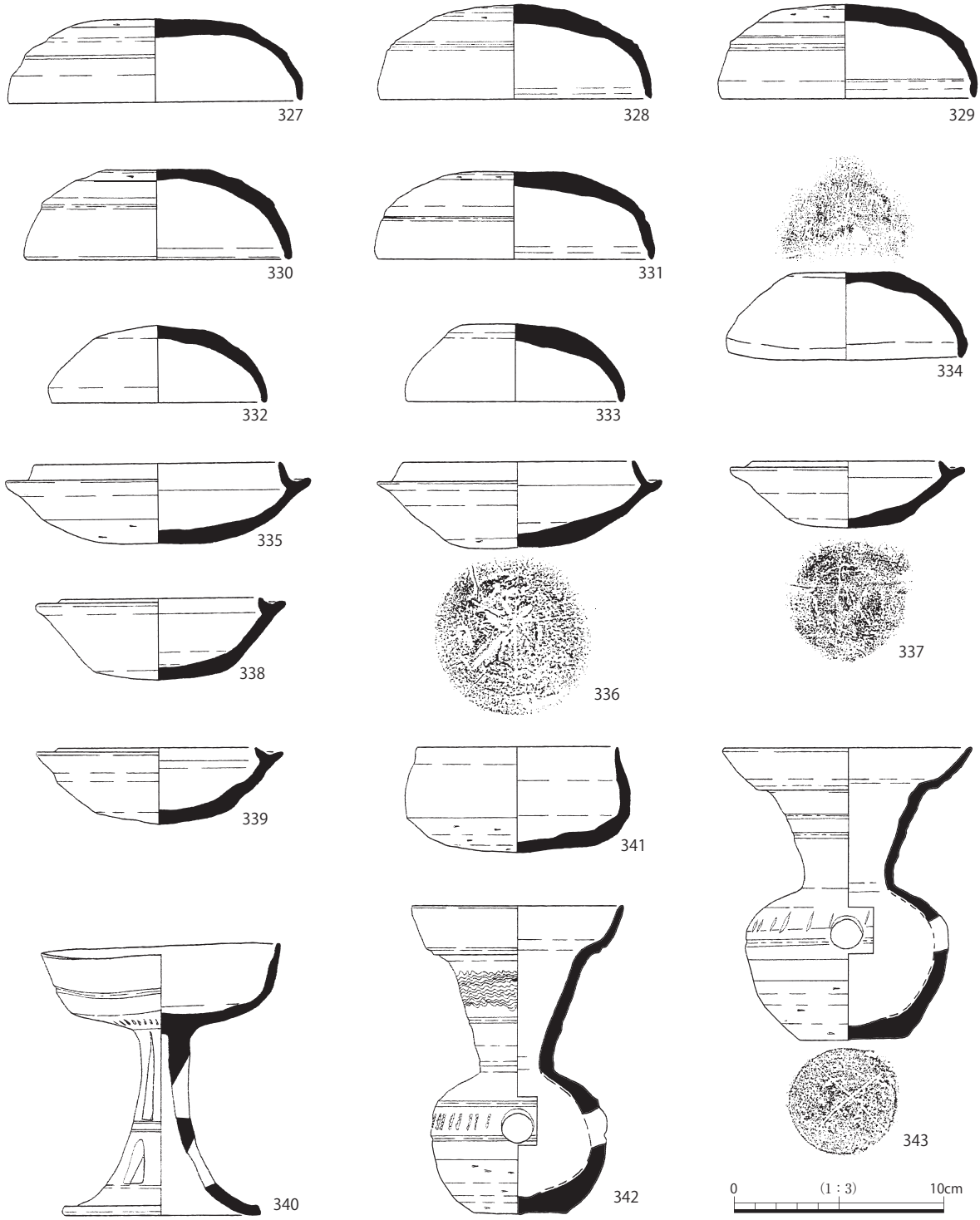
西向き斜面の31，32号横穴墓の間，標高23m前後で確認された遺構で，小穴３基と溝１基からなる。小穴の規模は開口部で幅0.4～ 0.65m，高さ0.7m前後を測り，奥行は1.1mから1.4m以上のものまでばらつきがある。床面も平坦とする意図は見られない。溝状遺構は小穴群の前方に弓なりに掘り込まれていたもので，長さ約５m，幅0.5m前後，深さ0.4m前後を測り，南端部はさらに深く掘り込まれている。

小穴２の前方流土より小型の無肩袋状鉄斧１点（326）が出土したほか，溝埋土内より破砕された須恵器甕片がまとまって出土した。甕片の大部分は同一個体（325）として接合したが，その他の破片中に前述33号横穴墓上層出土の須恵器甕（第110図313）と接合した資料も存在する。

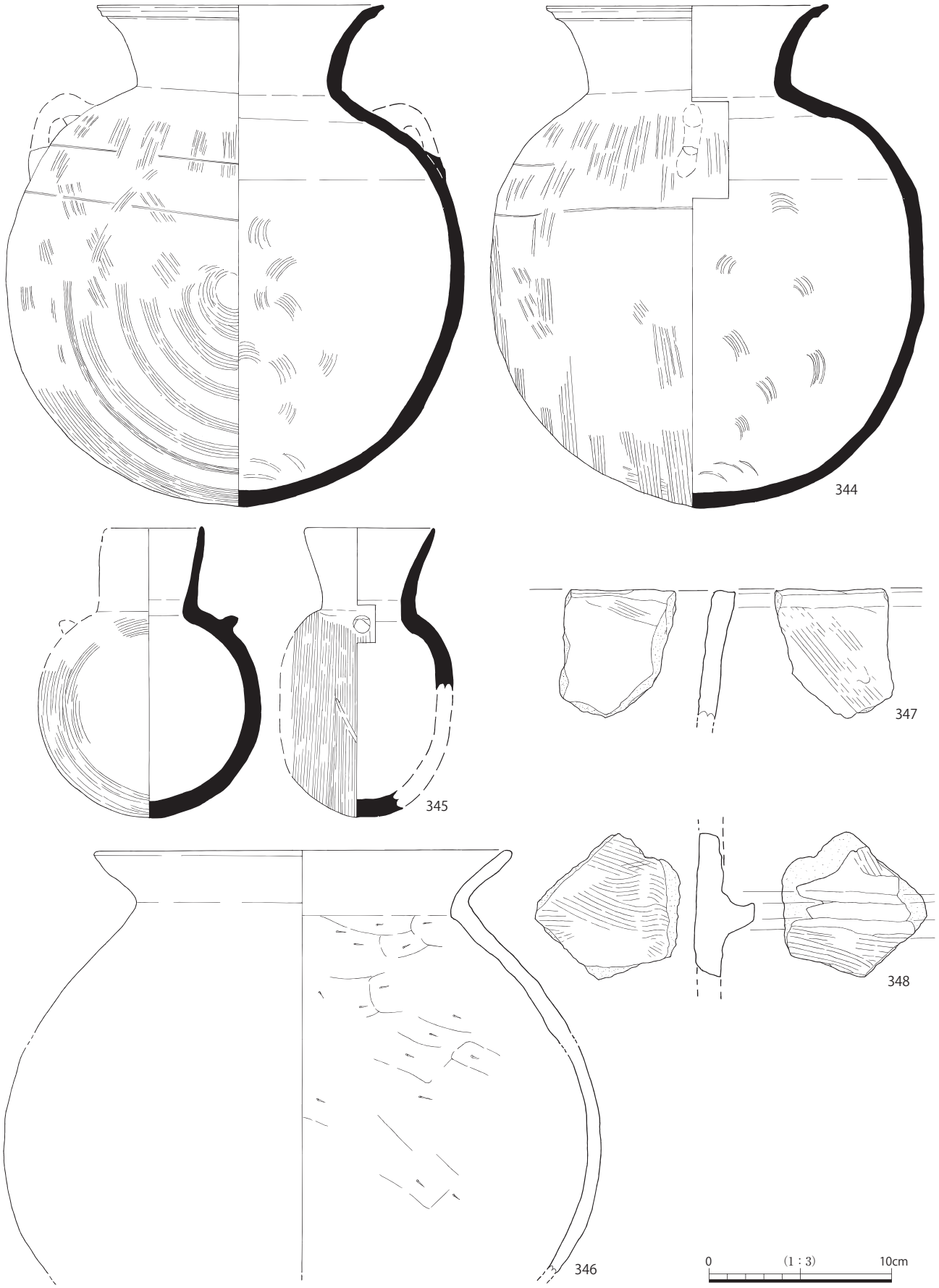
遺構の性格は不明であるが，横穴墓群が築造された時代と同時期の遺構と考えられ，横穴墓祭祀に関連したものである可能性がある。

第３節　遺構外出土遺物

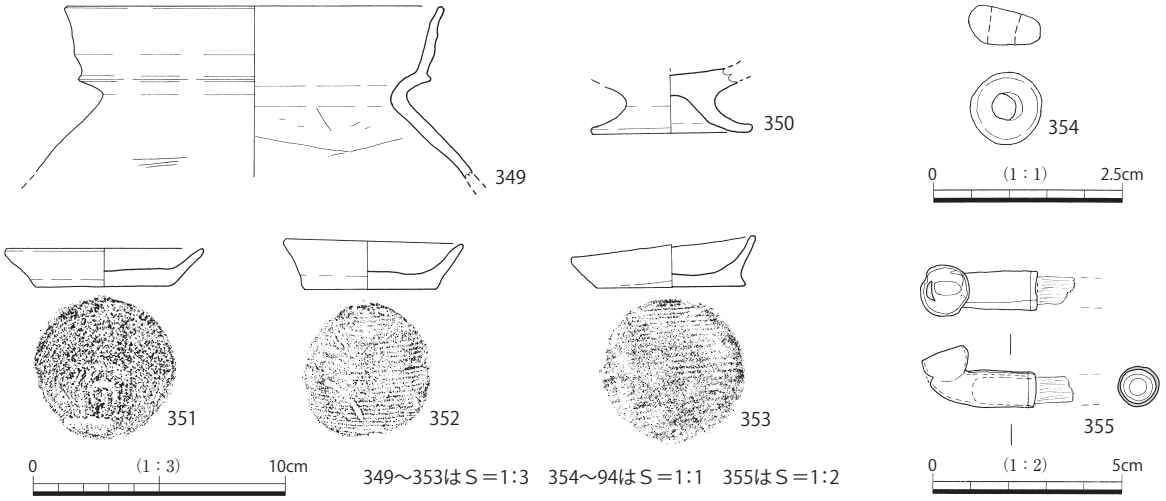
遺構に伴わない遺物については，残存状況の良好なもの，特徴的なもののみを図示した。横穴墓の造営期に伴う時期の須恵器，土師器のほか，後背墳丘や別の古墳の存在を示唆する円筒埴輪，別時代の遺構に伴うものと思われる弥生土器，近世土師器，ガラス丸玉，煙管等が出土している。以下に遺物についての概略を述べる。



第121図　遺構外出土遺物実測図１（1:3）



第122図 遺構外出土遺物実測図２（1:3）



第123図　遺構外出土遺物実測図３（1:3･1:2･1:1）

①　古墳時代の遺物（第 121・122 図，図版 52・53）

327 ～ 345 は須恵器である。完形品は 332 のみで，その他は残存率１/ ３以下の資料である。327 ～ 334 は杯蓋で，天井部外面は 327 ～ 330 が粗雑なヘラケズリ，331 が周辺ヘラケズリ，332 ～ 334 がヘラケズリを省略するものである。334 は天井外面にヘラ記号「｜」が確認できる。335 ～ 339 は杯身で，底部外面は 335 が特に粗雑なヘラケズリ，336 が周辺ヘラケズリ後ナデ，その他がヘラケズリを省略するものである。336･337 は底部外面にヘラ記号「×」が確認できる。340 は無蓋高杯である。杯底部外面に刺突文，脚部に２段３方スカシが施される。341 は椀である。342・343 は甕で，342 には頸部の波状文と体部の刺突文が，343 には体部の刺突文と底部のヘラ記号「×」が確認できる。

344・345 は提瓶で，344 は通常の壺に同心円状カキメを施し，把手を付けたものである。須恵器の時期は大谷３期から大谷６a 期までのものが確認され，横穴墓群の造営期とほぼ同時期のものである。

346 は土師器甕，347 と 348 は円筒埴輪片である。いずれも横穴墓群とほぼ同時期のものとして矛盾ない。円筒埴輪片は図化したもの以外を含め調査区の西端付近から東端付近まで広範囲に散在しており，丘陵尾根上に横穴墓の後背墳丘もしくは別の古墳が存在していた可能性が考えられる。

②　その他の時代の遺物（第 123 図，カラー図版６，図版 53・57）

349・350 は弥生土器の甕と低脚杯，351 ～ 353 は土師質土器小皿，355 は煙管雁首である。弥生土器はいずれも１～６号横穴墓下方から出土したもので，弥生時代終末期の資料であるが，周辺に弥生時代の遺構は確認されないため，すでに破壊されている丘陵上方より流入した資料と思われる。土師質土器と煙管は全てＳＴ１～７近世墓群周辺で出土しており，それらの遺構に伴うものである可能性が高い。なお，351 は底部回転糸切であり，352・353 は静止糸切である。

354 はガラス製丸玉である。７～ 10 号横穴墓周辺の遺構外排土中から確認された。緑色の鉛ガラス製で，巻き付け技法で製作されていることが確認される。第１節で報告した横穴墓出土のガラス玉類は全てソーダガラスもしくはカリガラス製であり，製作技法についても引き伸ばし技法と鋳型製法

が確認されるのみであることから，これらとは明らかに様相を異にする（第６章参照）。国内における鉛ガラスの流通時期を考慮すると，弥生時代もしくは７世紀以降の製品と思われる。時期が確定できないため，ここではその他の時代の遺物として区分しておく。

〔参考文献〕

岩本真実・神柱靖彦　2015「北長迫横穴墓群の出土土器」『金山古墳・鵜ノ鼻古墳群・北長迫横穴墓群　益田市内における古墳の調査』　島根県古代文化センター－調査研究報告書49　島根県古代文化センター－ほか

大谷晃二　1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　島根考古学会

大谷晃二　2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市埋蔵文化財調査報告書第８集　平田市教育委員会

岡安光彦　1984「いわゆる「素環の轡」について－環状鏡板付轡の型式学的分析と編年」『日本古代文化研究』創刊号　古墳文化研究会

鹿野和彦・竹内圭史　1991「Ⅳ．新第三系」『今市地域の地質』地域地質研究報告５万分の１地質図幅岡山(12) 第16号　地質調査所

榊原博英　2008「第４章　総括」『蔵地宅後古墳』浜田市教育委員会

杉山秀宏　2003「古墳時代の鉄鏃」『考古資料大観』第7巻　小学館

山陰横穴墓研究会　1995「第１回山陰横穴墓調査検討会　横穴墓築造に伴う掘削技法」『島根考古学会誌』第12集　島根考古学会

島根県教育委員会ほか　1997『島田池遺跡・鷭貫遺跡』一般国道９号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区 Ⅷ

島根県立八雲立つ風土記の丘　1998『八雲立つ風土記の丘』No. 147・148・149合併号

第６章　自然科学分析

第１節　上塩冶横穴墓群第40支群出土ガラス小玉の調査

第１項　はじめに

上塩冶横穴墓群第40支群からは多くのガラス製遺物が出土している。今回，これらのガラス製遺物について，観察による製作技法の推定と化学分析による材質調査を実施した。以下，その結果について報告する。

第２項　資料と方法

①　調査資料

本調査の対象とした資料は，26号横穴墓から出土したガラス小玉31点（No.204～234），28号横穴墓出土ガラス小玉５点（No.265～269），および遺構外から出土したガラス小玉１点（No.354）の合計37点である（第124図，カラー図版６）。

②　調査方法

１　顕微鏡観察

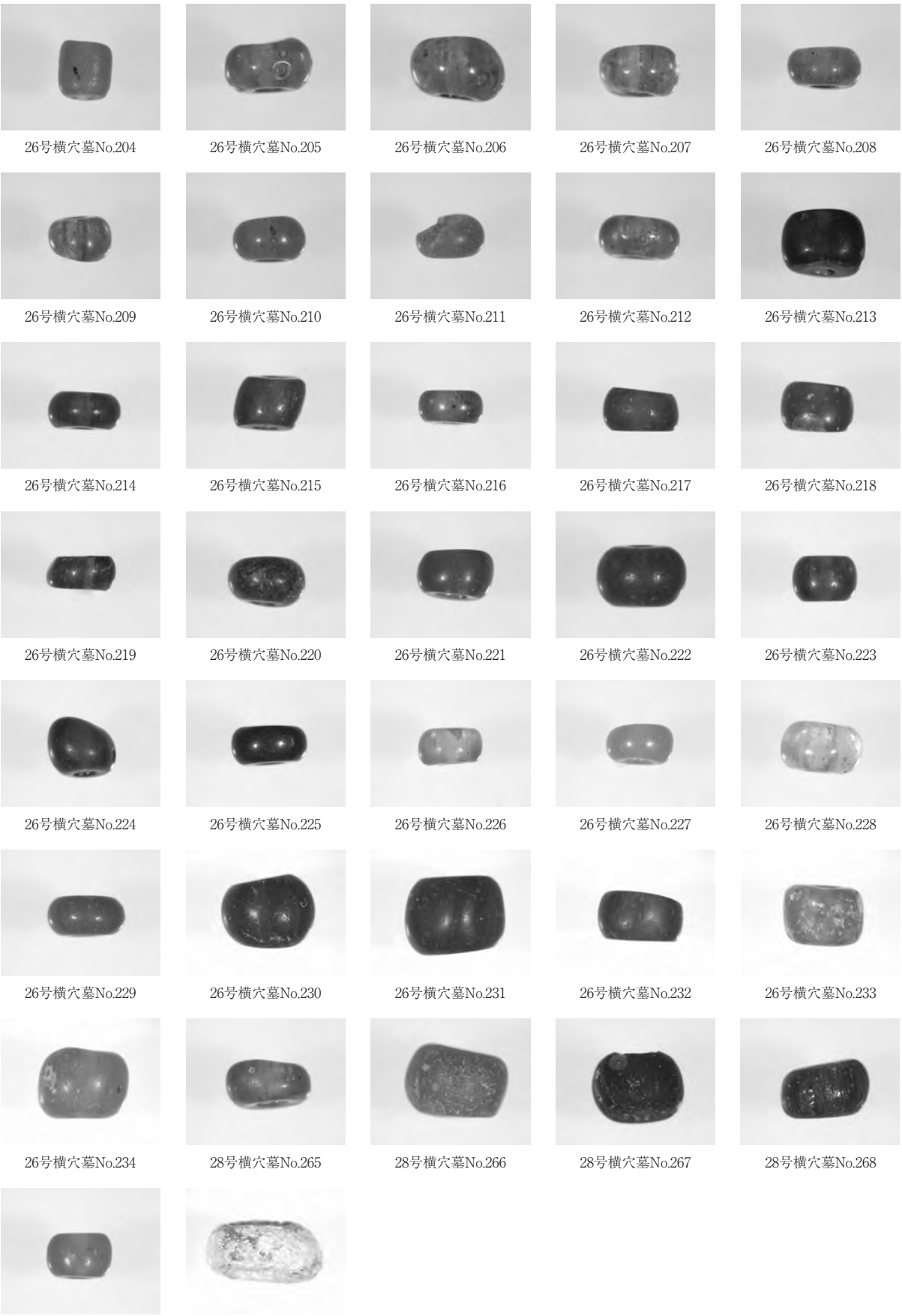
落射光および透過光下において実体顕微鏡観察をおこなった。落射光下では，ガラス玉の保存状態や色調および着色剤として添加された顔料粒子の有無などに着目して観察を実施した。透過光下では，透明感や色むらの有無，および内部の気泡の形状や配列を観察した。

２　コンピューテッドラジオグラフィ法

鉛を融剤としたガラス（鉛ガラス，鉛バリウムガラス，カリ鉛ガラスなど）の判別を目的としてX線透過撮影を実施した。本調査では，X線透過撮影法としてコンピューテッドラジオグラフィ法（Computed Radiography法：以下，CR法）を適用した。CR法は，従来のフィルムのかわりにイメージングプレート（Imaging Plate，以下，IP）を検出系に用いる方法である。用いた装置は，マイクロフォーカスX線拡大撮像システム（富士フィルム社製μFX-1000）とイメージングアナライザー（富士フィルム社製BAS-5000）である。IPにはBAS-SR2025を使用した。管電圧は40～60 kV，管電流は50～60 μA，露光時間は60 秒であった。

３　オートラジオグラフィ法

本調査では，カリウムを多く含むガラス（カリガラス，カリ鉛ガラス）の判別を目的としてオートラジオグラフィ法（Auto Radiography法：以下，AR法）を実施した。IPは放射線に対して極めて感度がよく，微弱な放射線でも長時間暴露することで検出可能である。AR法は，物質から放射される放射



第124図　上塩冶横穴墓群第40支群出土のガラス小玉（倍率不同）

表２　蛍光X線分析結果

遺構名	No.	分析箇所	製作技法	色調	基礎ガラスの分類		重量濃度（%）		
					大別	細分	Na_2O	MgO	Al_2O_3
26号横穴墓	204		引き伸ばし	淡青緑色半透明	ソーダ	Group　SII	17.9	0.7	7.7
	205		引き伸ばし	淡青色透明	ソーダ	Group　SII	18.3	0.5	7.3
	206		引き伸ばし	淡青色透明	ソーダ	Group　SII	16.3	0.1	7.8
	207		引き伸ばし	淡青色透明	ソーダ	Group　SII	14.3	0.9	9.0
	208		引き伸ばし	淡青色透明	ソーダ	Group　SII	19.6	0.5	6.2
	209		引き伸ばし	淡青色透明	ソーダ	Group　SII	17.3	0.6	9.9
	210		引き伸ばし	淡青色透明	ソーダ	Group　SII	18.4	1.0	7.7
	211		引き伸ばし	淡青色透明	ソーダ（CR法・AR法）	未分析	－	－	－
	212		引き伸ばし	淡青色透明	ソーダ	Group　SII	16.8	0.6	7.9
	213	1	引き伸ばし	紺色透明	ソーダ	不明	17.7	1.0	2.6
		2			ソーダ		14.5	0.9	2.6
	214	1	引き伸ばし	紺色透明	ソーダ	Group SIII	17.0	1.5	2.8
		2			ソーダ		13.9	4.0	2.7
	215	1	引き伸ばし	紺色透明	ソーダ	Group SIII	19.4	4.7	2.4
		2			ソーダ		16.9	4.9	2.5
	216	1	引き伸ばし	紺色透明	ソーダ	Group　SII	17.0	0.9	6.4
		2			ソーダ		16.3	0.6	6.5
	217	1	引き伸ばし	紺色透明	ソーダ	Group SIII	19.2	4.3	2.6
		2			ソーダ		19.0	4.3	2.5
	218	1	引き伸ばし	紺色透明	ソーダ	不明	16.2	1.6	3.2
		2			ソーダ		15.6	2.0	3.4
	219	1	引き伸ばし	紺色透明	ソーダ	Group SIII	14.4	4.1	2.7
		2			ソーダ		14.0	4.2	3.2
	220	1	鋳型	紺色透明	混合	混合	10.8	1.1	2.6
		2					2.3	0.8	2.6
	221	1	引き伸ばし	紺色透明	ソーダ	Group　SII	16.2	0.8	4.0
		2			ソーダ		14.9	0.2	3.7
	222	1	引き伸ばし	紺色透明	ソーダ	Group SIII	18.3	2.5	2.3
		2			ソーダ		16.5	2.7	2.4
	223		引き伸ばし	濃青色半透明	ソーダ	Group　SII	18.7	0.5	6.2
	224		引き伸ばし	濃青色半透明	ソーダ	Group　SII	14.9	0.4	7.0
	225		引き伸ばし	濃青色半透明	ソーダ	Group　SII	16.5	0.8	5.9
	226		引き伸ばし	淡青色透明	ソーダ	Group　SII	22.8	0.6	8.8
	227		引き伸ばし	淡青緑色半透明	ソーダ	Group　SII	18.1	1.0	11.0
	228		引き伸ばし	淡緑色透明	ソーダ	Group　SII	17.4	0.7	6.6
	229		引き伸ばし	黄緑色不透明	ソーダ	Group　SII	18.1	1.2	7.6
	230	1	引き伸ばし	紺色透明	ソーダ	Group SIII	16.1	3.7	2.6
		2			ソーダ		16.4	4.4	2.6
	231	1	引き伸ばし	紺色透明？	カリ	Group PII	0.1	0.3	5.2
		2					0.5	0.5	5.1
	232	1	引き伸ばし	紺色透明	ソーダ	Group SIV	13.9	0.6	1.9
		2			ソーダ		14.1	0.7	1.9
	233		引き伸ばし	淡青色透明	カリ	Group PI	0.6	0.6	2.6
	234		引き伸ばし	淡青色透明	カリ	Group PII	0.6	0.5	4.6
28号横穴墓	265		引き伸ばし	淡青色透明	ソーダ	Group　SII	16.3	0.7	7.6
	266		引き伸ばし	淡青色半透明	ソーダ	Group　SII	19.1	0.4	10.3
	267	1	引き伸ばし	紺色透明	ソーダ	Group SIII	18.6	2.8	1.9
		2			ソーダ		16.8	3.1	2.1
	268	1	引き伸ばし	紺色透明	ソーダ	Group SIII	19.3	6.2	2.5
		2			ソーダ		19.0	3.5	2.5
	269		引き伸ばし	淡青緑色半透明	ソーダ	Group　SII	16.9	1.0	10.7
遺構外	354		巻き付け	緑色透明	鉛	LII	0.3	0.1	0.3

表２　蛍光X線分析結果

No.	重量濃度　(%)														スタンダードレス		
	SiO_2	P_2O_5	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	CoO	Ni_2O_3	CuO	PbO	Rb_2O	SrO	ZrO_2	SnO_2	Sb_2O_3	BaO
204	66.6	0.2	2.5	2.2	0.42	0.06	0.98	0.01	0.05	0.44	0.02	0.01	0.02	0.26	0.01	0.01	0.13
205	64.4	0.2	2.4	4.6	0.42	0.08	1.15	0.01	0.01	0.53	0.03	0.01	0.03	0.11	0.01	0.01	0.22
206	67.4	0.1	2.6	3.2	0.44	0.09	1.27	0.02	0.00	0.55	0.01	0.02	0.03	0.13	0.01	0.02	0.22
207	66.3	0.2	2.4	3.8	0.57	0.08	1.80	0.02	0.00	0.48	0.03	0.02	0.03	0.10	0.01	0.01	0.20
208	62.9	0.2	1.9	6.7	0.37	0.05	0.96	0.02	0.01	0.60	0.01	0.01	0.03	0.00	0.01	0.01	0.23
209	63.8	0.1	3.9	2.1	0.40	0.08	1.23	0.02	0.01	0.43	0.01	0.01	0.03	0.12	0.02	0.01	0.29
210	64.6	0.2	1.8	3.8	0.30	0.05	1.45	0.02	0.00	0.56	0.02	0.00	0.03	0.12	0.01	0.00	0.15
211	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
212	66.7	0.1	2.4	3.0	0.47	0.14	1.24	0.04	0.01	0.50	0.03	0.00	0.03	0.06	0.01	0.01	0.13
213	68.7	0.2	1.1	6.2	0.33	0.34	1.55	0.10	0.01	0.14	0.09	0.01	0.05	0.03	0.02	0.02	0.06
	71.5	0.2	1.1	6.5	0.29	0.38	1.54	0.09	0.01	0.16	0.11	0.02	0.04	0.14	–	–	–
214	67.6	0.2	2.0	6.0	0.26	0.67	1.60	0.10	0.01	0.15	0.08	0.01	0.04	0.03	0.02	0.01	0.11
	68.6	0.2	2.1	6.2	0.17	0.32	1.37	0.09	0.01	0.14	0.08	0.01	0.03	0.09	–	–	–
215	64.0	0.2	1.6	5.6	0.15	0.20	1.33	0.10	0.00	0.16	0.09	0.01	0.04	0.00	0.01	0.01	0.14
	65.7	0.2	1.8	6.1	0.16	0.20	1.26	0.08	0.01	0.14	0.07	0.01	0.05	0.11	–	–	–
216	66.4	0.2	1.8	4.9	0.40	0.29	1.43	0.07	0.00	0.09	0.08	0.01	0.01	0.00	0.01	0.01	0.13
	67.1	0.1	1.8	5.0	0.41	0.30	1.47	0.07	0.00	0.10	0.03	0.01	0.06	0.07	–	–	–
217	64.2	0.2	1.7	5.7	0.14	0.22	1.33	0.10	0.01	0.16	0.09	0.02	0.04	0.04	0.01	0.01	0.17
	64.7	0.2	1.6	5.6	0.14	0.21	1.28	0.08	0.01	0.15	0.07	0.01	0.04	0.11	–	–	–
218	71.7	0.1	1.9	3.6	0.26	0.10	1.10	0.09	0.00	0.07	0.05	0.02	0.04	0.08	0.02	0.02	0.17
	71.0	0.2	1.9	3.8	0.27	0.19	1.05	0.07	0.00	0.06	0.08	0.02	0.04	0.31	–	–	–
219	68.5	0.2	2.0	6.0	0.20	0.19	1.27	0.11	0.01	0.15	0.06	0.01	0.05	0.06	0.01	0.01	0.17
	68.3	0.2	2.2	5.8	0.20	0.19	1.20	0.11	0.00	0.13	0.08	0.02	0.05	0.13	–	–	–
220	72.6	0.2	6.5	3.5	0.18	0.92	1.31	0.10	0.00	0.09	0.04	0.02	0.04	0.00	0.02	0.01	0.37
	80.4	0.2	7.3	2.4	0.27	1.90	1.50	0.08	0.00	0.06	0.05	0.01	0.04	0.17	–	–	–
221	70.8	0.3	1.8	2.5	0.25	1.71	1.38	0.07	0.00	0.05	0.03	0.01	0.01	0.14	0.02	0.01	0.29
	73.1	0.1	1.7	2.5	0.25	1.78	1.41	0.07	0.01	0.05	0.01	0.02	0.03	0.09	–	–	–
222	65.0	0.2	1.8	7.8	0.18	0.45	1.13	0.06	0.01	0.09	0.06	0.02	0.04	0.05	0.02	0.01	0.13
	66.1	0.3	1.9	7.9	0.20	0.44	1.15	0.07	0.01	0.09	0.07	0.02	0.05	0.10	–	–	–
223	67.6	0.1	1.7	2.5	0.30	0.39	1.13	0.02	0.01	0.80	0.04	0.01	0.01	0.11	0.01	0.01	0.09
224	68.7	0.1	2.8	2.1	0.76	0.57	1.72	0.03	0.01	0.80	0.01	0.02	0.06	0.16	0.02	0.01	0.33
225	68.0	0.2	1.6	1.4	0.55	1.00	2.12	0.02	0.00	1.06	0.60	0.01	0.01	0.14	0.15	0.01	0.33
226	60.1	0.2	2.1	2.3	0.78	0.10	1.42	0.03	0.00	0.48	0.05	0.00	0.03	0.16	0.06	0.01	0.25
227	61.2	0.2	1.9	4.0	0.43	0.07	1.63	0.02	0.00	0.37	0.05	0.01	0.03	0.00	0.02	0.01	0.20
228	62.4	0.3	1.9	8.7	0.40	0.06	1.32	0.02	0.00	0.15	0.04	0.01	0.04	0.09	0.04	0.01	0.18
229	64.1	0.5	1.5	2.4	0.47	0.10	2.15	0.04	0.01	1.19	0.72	0.02	0.03	0.08	0.18	0.01	0.18
230	66.9	0.2	3.1	5.7	0.22	0.10	1.07	0.05	0.00	0.07	0.04	0.01	0.04	0.05	0.01	0.01	0.09
	66.0	0.2	3.2	5.7	0.24	0.08	1.12	0.05	0.00	0.07	0.05	0.01	0.04	0.05	–	–	–
231	74.8	0.1	15.4	0.5	0.26	1.71	1.30	0.03	0.00	0.11	0.01	0.03	0.01	0.11	0.01	0.00	0.47
	75.0	0.1	15.0	0.6	0.24	1.63	1.25	0.02	0.00	0.12	0.03	0.02	0.01	0.06	–	–	–
232	74.9	0.2	1.1	5.2	0.17	1.32	0.66	0.07	0.01	0.02	0.04	0.02	0.05	0.05	0.01	0.01	0.45
	74.8	0.2	1.0	5.1	0.15	1.18	0.62	0.06	0.01	0.02	0.00	0.01	0.04	0.08	–	–	–
233	79.1	0.1	13.1	1.2	0.07	0.03	0.41	0.01	0.01	1.92	0.04	0.03	0.03	0.12	0.01	0.01	0.04
234	72.9	0.1	18.2	0.7	0.16	0.02	0.48	0.00	0.01	1.43	0.25	0.03	0.02	0.06	0.14	0.01	0.09
265	67.4	0.2	2.3	2.8	0.46	0.11	1.19	0.02	0.00	0.85	0.03	0.01	0.04	0.07	0.03	0.01	0.24
266	62.6	0.1	2.5	2.3	0.47	0.05	0.95	0.02	0.01	1.11	0.11	0.01	0.04	0.07	0.07	0.01	0.29
267	64.7	0.2	3.1	6.6	0.08	0.06	1.20	0.11	0.00	0.23	0.15	0.02	0.05	0.11	0.01	0.00	0.07
	66.1	0.3	3.2	6.7	0.08	0.07	1.22	0.11	0.00	0.21	0.14	0.01	0.04	0.04	–	–	–
268	62.8	0.2	1.7	5.7	0.14	0.12	0.99	0.07	0.01	0.13	0.06	0.01	0.03	0.14	0.01	0.01	0.09
	64.8	0.2	1.9	5.9	0.16	0.21	1.33	0.10	0.01	0.13	0.07	0.02	0.06	0.10	–	–	–
269	61.7	0.2	1.7	5.0	0.45	0.10	1.71	0.02	0.00	0.50	0.03	0.01	0.05	0.12	0.01	0.01	0.07
354	34.8	0.2	0.0	0.1	0.00	0.04	0.08	0.02	0.01	0.17	63.25	0.00	0.15	0.47	0.16	0.04	0.50

線をフィルムやIPに記録して画像を得る方法であり，放射線の蓄積線量により画像の濃淡が異なる。カリガラスは一般に酸化カリウム（K_2O）を18%前後含有し，^{40}Kに由来する放射線（ベータ線）を放射している。したがって，カリガラスとソーダ石灰ガラスをIP上に同じ時間だけ暴露した場合，得られた画像の中でより濃いものを，カリガラスとして識別することができる。

本調査では，以下の手順でAR法を実施した。まず，資料を直接上に置いたIPを，外部からの放射線を遮断するため，鉛製の遮蔽箱内に設置した。そして，遮蔽箱の鉛に由来する放射線を遮蔽するため，IPの周辺を銅板で囲った。使用したIPはBAS-SR2025であり，暴露時間は168時間とした。また，比較のための標準試料として，日本岩石標準試料JB-1aとJG-1aの粉体圧縮ピース，およびBCR126A（IRMM（Institute for Reference Material and Measurement）標準物質）を同時に暴露した。これらの酸化カリウム（K_2O）の含有量は，それぞれ1.4%，4.0%および10.0%である。暴露後，IPを取り出し，CR法と同様にイメージングアナライザーによりスキャンニングをおこない，AR像をデジタルデータとして取得した。

４　蛍光X線分析法

ガラス小玉の主要な構成成分とそれらのおおよその含有量を知るために蛍光X線分析を実施した。本調査ではエネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて非破壊測定をおこなった。資料表面の非破壊測定では，風化の影響により構成元素の一部が増減するため，資料本来の化学組成を知ることはできないものの，基礎ガラスの種類や着色要因を推定することは可能である。

資料の測定箇所は，亀裂等が少なく，保存状態が良好と判断した部分を選定した。なお，測定に先立ち，土などの汚れは顕微鏡下でエチルアルコールを用いた洗浄をおこなった。測定結果は，測定試料と近似する濃度既知のガラス標準試料（CG-A，SG5，SG7，SGT5，NIST620）を用いて補正した理論補正法（Fundamental Parameter method，以下FP法とよぶ）により，検出した元素の酸化物の合計が100%になるように規格化した。

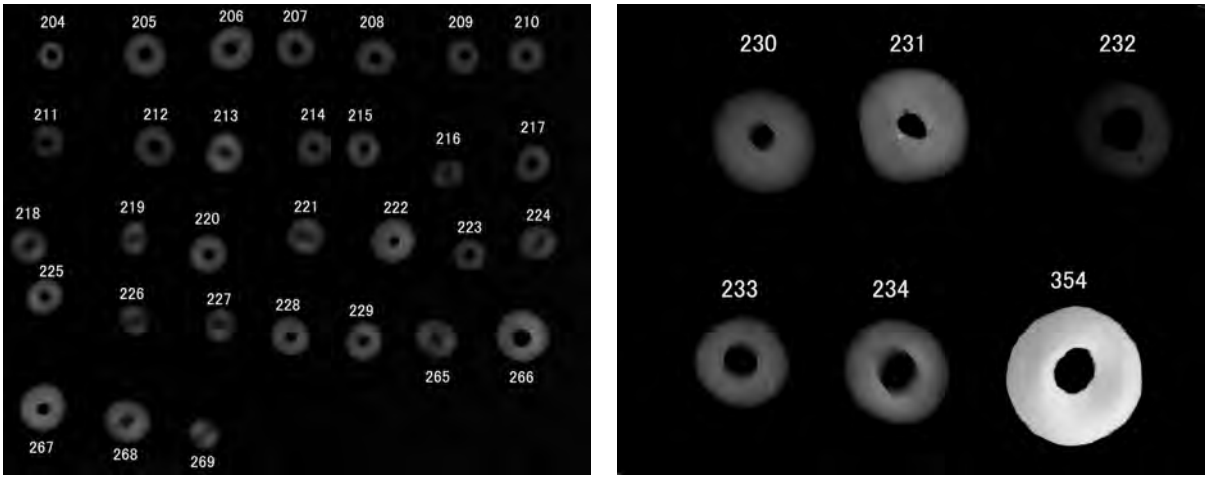
測定に用いた装置は，エダックス社製EAGLEⅢである。励起用X線源はMo管球，管電圧は，FP法を用いた定量分析では20 kVに設定し，一部の資料については20 keV以上のスペクトルを検出するため，50 kVに設定した。管電流は100 μA，X線照射径は112 μm，計数時間は300 秒とした。なお，測定は真空中で実施した。

第３項　結果と考察

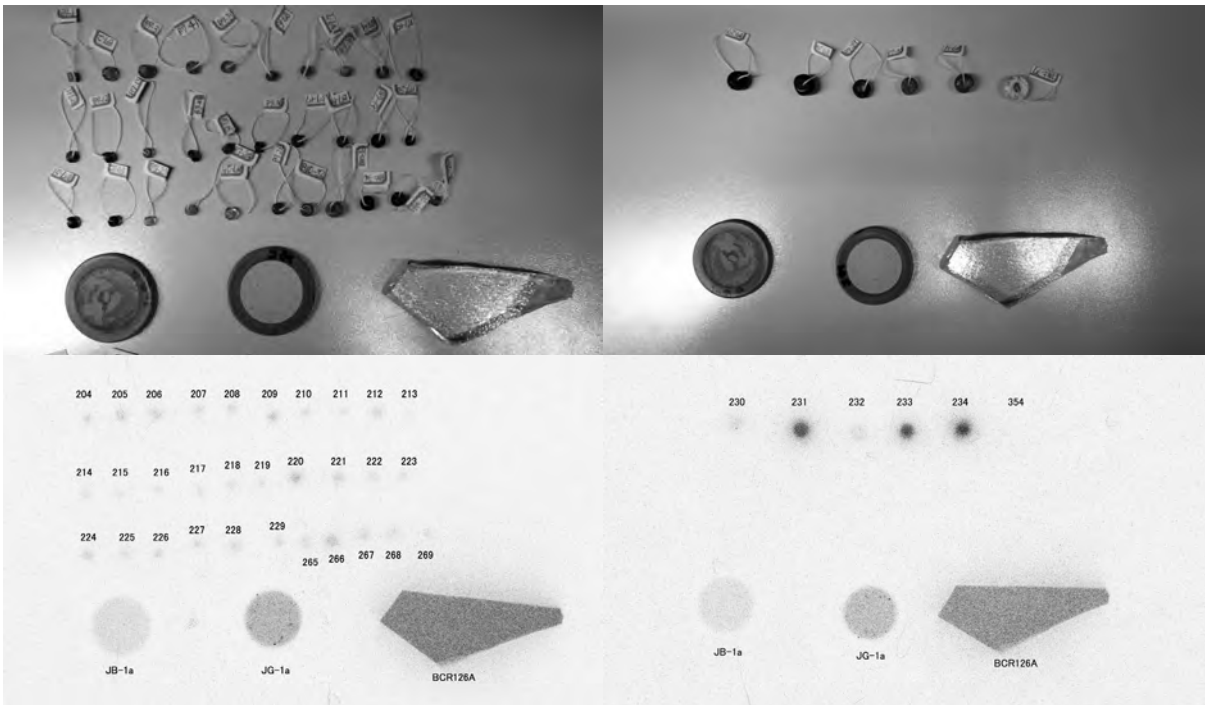
①　製作技法

本調査資料には，引き伸ばし法（下記以外），巻き付け法（遺構外出土No.354），鋳型法（26号横穴墓出土No.220）の３種類の製作技法が認められた。引き伸ばし法は，軟化したガラスを引き伸ばしてガラス管を作り，それを分割して小玉を製作する方法で，孔と平行に並ぶ気泡列が認められるのが特徴である（第125図－左）。既往研究で「管切り法」（朝比奈・小田1954など）や「引き伸ばし法」（大賀2002）と呼ばれる製作技法に相当する。ここでは，引き伸ばし法と呼ぶ。ただし，引き伸ばし法と判断した

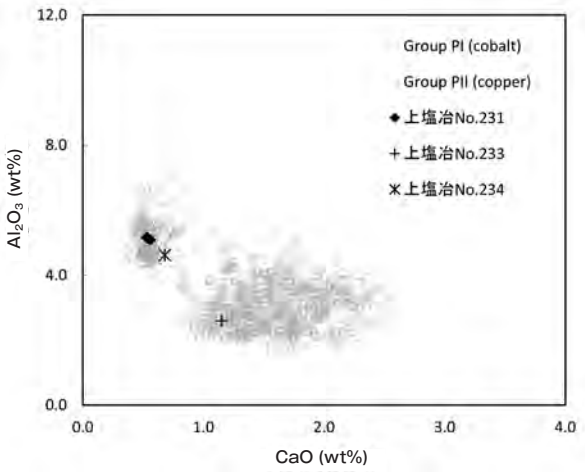
第125図　各種製作技法（左：引き伸ばし法No207，中：巻き付け法No.354，右：鋳型法No.220）



第126図　ガラス小玉のCR画像



第127図　ガラス小玉のAR画像



第128図　カリガラスグループのCaO-Al_2O_3含有量による細分

もののうち，№214，216，222，231（いずれも26号横穴墓出土）については，孔周辺や孔内の形状が典型的な引き伸ばし法の特徴とは異なり，製作技法推定にやや疑問が残ったが，気泡の配列や色むらの伸びる方向が孔と平行であることから，引き伸ばし法と判断した。巻き付け法と推定した資料は，孔と直交方向にめぐる蝕像が認められる（第125図－中）。鋳型法は，破砕したガラスの小片を鋳型の型穴に詰めて加熱成形することにより小玉を製作する方法である。鋳型法で製作されたと判断したガラス小玉には，不規則な色むらや融けきらなかったガラス片の痕跡と考えられる突起物が表面に認められた（第125図－右）。

②　CR法・AR法による材質推定結果

CR法を実施した結果，遺構外出土のNo.354のみX線の吸収が著しく大きく，鉛ケイ酸塩ガラスの可能性が高いことがわかった（第126図）。一方，その他の資料はいずれもアルカリケイ酸塩ガラスであると推定される。

AR法の結果を第127図に示す。No.231，233，234のみ比較資料のBCR126A（K_2O：10.0%）よりも濃い画像が得られた。CR法の結果と総合して，これら３点のガラス小玉はカリガラスの可能性が高いと判断される。一方，これら以外のガラス小玉のK_2O含有量は，比較資料のJB-1aと同程度，またはJB-1a とJG-1aの中間程度と推定される。これらは，CR法でX線の吸収の大きかったNo.354を除き，ソーダガラスと推定される。

以上の結果を踏まえて，蛍光X線分析を実施した。結果を表２に示す。ただし，No.211は亀裂が多く脆弱であったため，真空下に置くことによる破損が危惧されたため，蛍光X線分析は実施せず，CR法およびAR法による材質推定にとどめた。

③　蛍光X線分析結果

１　カリガラスグループ

AR法およびCR法によりカリガラスと推定されたNo.231，233，234は，蛍光X線分析の結果，K_2Oの定量値が13.1-18.2%という高い値を示し，カリウムを融剤としたカリガラスであることが明らかとなった（表２）。さらに，No.231およびNo.234は，カリガラスの中でも酸化アルミニウム（Al_2O_3）含有量が多く，酸化カルシウム（CaO）含有量が少ないタイプのカリガラス（Group PII）（Gga and Tamura 2013）に相当する。一方，No.233は，Al_2O_3含有量が相対的に少なく，CaOが多いタイプのカリガラス（Group PI）に相当することがわかった（第128図）。

これまでの類例調査において，Group PIはコバルト着色の紺色カリガラスに，Group PIIは銅着色の淡青色カリガラスに対応することが明らかとなっている。本資料のうち，No.233については，基礎ガラスの化学組成と着色剤の組み合わせから，典型的なGroup PIIのカリガラスであると言える。さらに，No.233は着色剤としての銅原料に付随すると考えられる鉛と錫をわずかに含む。このような着色剤の特徴もこれまでに知られている典型的なGroup PIIのカリガラスと一致する。

一方，No.231とNo.234は基礎ガラスの化学組成と着色剤の組み合わせが，典型的なGroup PIとも Group PIIとも異なっている。すなわち，No.231は基礎ガラスの化学組成においてはGroup PIIに相当するものの，わずかにコバルトが検出されており，コバルトイオンが着色に関与していると考えられる。さらに，酸化マンガン（MnO）を多量に含有する一方で，酸化銅（CuO）や酸化鉛（PbO）の含有量は0.1％程度またはそれ以下ときわめて少ない。本資料は，酸化コバルト（CoO）の含有量がやや少ないものの，MnOが多くCuOとPbOがきわめて少ないという点で，むしろ典型的なGroup PIに適用されているコバルト原料が着色に用いられていると考えられる。このような基礎ガラスと着色剤の組み合わせは，現在のところ類例がない。

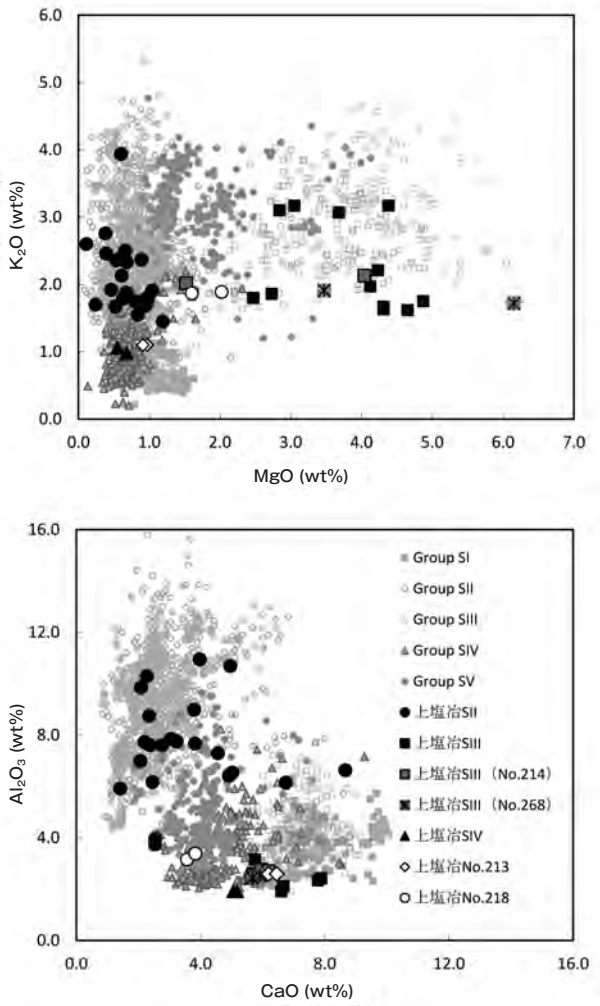
No.233は，基礎ガラスの化学組成においては，Group PIに相当するものの，着色に関与する成分については，CuOを1.92％含有することから，銅イオンが主な着色要因である。ただし，本資料には，鉛や錫がほとんど含まれないことから，上述のNo.233とは着色剤として添加された銅原料が異なると考えらえる。鉛や錫をほとんど伴わないような銅原料で着色されたGroup PIのカリガラスは僅かながら類例が確認されている（大賀・田村2016）。

２　ソーダガラスグループ

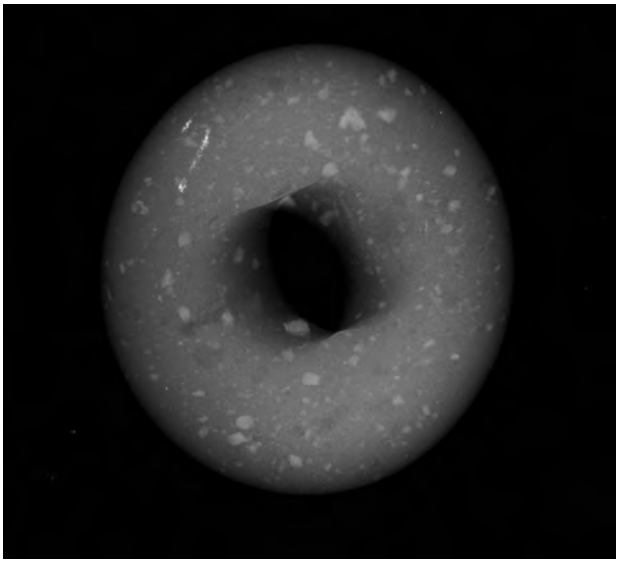
CR法およびAR法の結果からソーダガラスと推定されたものは，蛍光X線分析の結果，Na_2Oを13.9-22.8％含有するソーダガラスであることが確認された（未分析のNo.211を除く）。これらの資料について，ソーダガラスを細分する指標である酸化マグネシウム（MgO），酸化カリウム（K_2O），酸化カルシウム（CaO），酸化アルミニウム（Al_2O_3）の含有量から，既存のグループ（Group SI ～ SV）への帰属を検討した（第129図）。その結果，高アルミナタイプのソーダガラス（Group SII）に帰属すると判断されるもの（26号横穴墓出土No.204～ 210，212，216，221，223～ 229，28号横穴墓出土No.265，266，269），植物灰タイプのソーダガラス（Group SIII）に帰属すると判断されるもの（26号横穴墓出土No.214，215，217，219，222，230，28号横穴墓出土No.267，268），ナトロン主体タイプのソーダガラス（Group SIV）と判断されるもの（26号横穴墓出土No.232），帰属判断に疑問が残るもの（26号横穴墓出土No.213，218）にわけられた。

高アルミナタイプのソーダガラス（Group SII）　これらは，MgO-K_2Oのグラフ上でMgOが少なくK_2Oが多く，かつ，CaO-Al_2O_3のグラフ上で比較的Al_2O_3の多い特徴を有する。これらは，ほかにもTiO_2の含有量が他のグループに比べて相対的に多い。なお，今回蛍光X線分析を実施しなかったNo.211についても，CR法・AR法による材質推定および製作技法と色調の類似性からGroup SIIに帰属する可能性が高いと推察される。

これらのガラスは色調と着色剤の種類が最も多様であり，着色に関与する成分によって，銅着色



第129図　ソーダガラスグループの細分
（上：MgO-K_2O，下：CaO-Al_2O_3）



第130図　No.225の拡大CR画像

による淡青色～淡青緑色のもの（26号横穴墓出土No.204～210，212，226～227，28号横穴墓出土No.265，266，269），マンガンと銅で複合的に着色された濃青色のもの（26号横穴墓出土No.223～225），コバルト着色による紺色のもの（26号横穴墓出土No.216，221），わずかに含まれる銅と原料の不純物として含まれると考えられる鉄分によって淡い緑色を呈するもの（26号横穴墓出土No.228），および銅と人工黄色顔料の錫酸鉛（$PbSnO_3$）によって黄緑色を呈するもの（26号横穴墓出土No.229）がある。

銅着色による淡青色～淡青緑色のものに関しては，No.266のみPbOの含有量がやや多く，微量の錫も検出されたが，その他は鉛および錫はほとんど検出されていないことから，両者で着色剤として利用された銅原料が異なると考えられる。

銅とマンガンにより濃青色を呈するガラス小玉については，No.223およびNo.224が鉛と錫をほとんど含まないのに対し，No.225ではPbOを0.60％含むとともに比較的多くの錫も検出された。この差異については，着色に用いられた銅原料の際に起因する可能性が考えられる。本資料の鉛と錫の含有量は後述する銅と錫酸鉛（$PbSnO_3$）によって黄緑色を呈するものと類似しており，もともと銅と錫酸鉛で着色されていたガラスにマンガンが添加された可能性もある。ただし，CR画像によるとNo.225にはX線の吸収の大きい角張った形状の不純物が多く含まれており（第130図），何らかの金属片が混入していると考えられることから，鉛や錫はこれらの不純物に由来する可能性も否定できない。

コバルト着色のもの２点については，コバルト原料の不純物と考えられるMnOの含有

量がNo.216では0.30％程度と少ないのに対し，No.221では1.7％を超えており，両者でコバルト原料が異なる。後者のコバルト原料は上述のGroup PIの紺色カリガラスと共通の特徴を有しており，同種の原料が用いられたと推定される。これまでの類例では，Group SIIに帰属するコバルト着色の紺色ガラス小玉には，MnO含有量の多いコバルト原料が用いられている場合が圧倒的であるが，古墳時代後期の資料の一部にMnO含有量の少ないコバルト原料が用いられたものも確認されており（肥塚ほか2010，Oga and Tamura　2013），先行研究と矛盾しないと考える。

淡緑色透明を呈するNo.228は，着色に関与すると成分が少ないが，わずかにCuOを0.15％含む。なお，1.32％含まれるFe_2O_3も発色に関与していると考えられるが，他の色調のものと比べても同程度しか含まれていないことから，鉄に関しては，ケイ砂などの原料に伴う不純物由来であり，着色剤として意図的に添加されたものではないと考えられる。なお，このような色調と着色剤の特徴をもつガラス小玉はGroup SIIには少なく，むしろ弥生時代後期後半に流通したGroup SVに多い。しかしながら，本資料はMgOや P_2O_5含有量が少ない点，およびTiO_2含有量が多い点などがGroup SVの特徴と異なっており，Group SIIに帰属すると判断した。

黄緑色不透明を呈するNo.229については，CuOを1.19％，PbOを0.72％含有するとともに錫を顕著に検出した（スタンダードレスのFP法では，SnO_2：0.18％）。さらに，顕微鏡で観察するとガラス中に黄色不透明粒子が散在していることが分かる。このことから，銅イオンと人工黄色顔料である錫酸鉛（$PbSnO_3$）で複合的に着色されたと考えられる。

植物灰タイプのソーダガラス（Group SIII）　MgOおよびK_2Oの含有量がいずれも1.5％よりも多く，かつ，低アルミナ（Al_2O_3 ＜５％）高カルシウム（CaO ＞５％）であることが特徴である。本資料では，26号横穴墓出土No.214，215，217，219，222，230，28号横穴墓出土No.267，268の８点が該当する。いずれも紺色を呈し，CoOを0.1％前後含有するコバルト着色のガラス小玉である。コバルト原料は，MnO含有量が少なく，CuOおよびPbOを0.1％前後含むタイプである。このような基礎ガラスの化学組成と着色剤の組み合わせは古墳時代後期に流通したガラス小玉に一般的なものである。ただし，26号横穴墓出土No.214と28号横穴墓出土No.268に関しては，分析箇所によっていくつかの成分に顕著な差異が認められた。どちらの値もGroup SIIIの変異の中におさまるものの，特にMgOの含有量の差異が大きく，No.214では測定箇所１においてMgO含有量が境界基準値の1.5％であるのに対し，測定箇所２では４％も含まれている。風化の影響による変動の可能性が考えられるが，ソーダガラスを構成する成分のうち最も風化による影響を受けやすいNa_2Oの含有量に大きな違いがない点が注意される。さらに，No.214では風化の影響を受けにくいMnOの含有量にも比較的大きな差異が認められる。これらについては，異なる種類のガラスが混合されている可能性も否定できない。

ナトロン主体タイプのソーダガラス（Group SIV）　26号横穴墓出土No.232が該当する。Group SIV は，MgOおよびK_2Oの含有量が少ないタイプのソーダガラスだが，典型的なナトロンガラス（Group SI）と比較するとK_2Oの含有量が多いことや，CaO含有量が少ない傾向が認められる。さらに，Group SIは，巻き付け法や連珠法によるガラス小玉に偏って出現し，引き伸ばし法で製作されたインド・パシフィックビーズには出現しないのに対し，Group SIVは，すべて引き伸ばし法で製作され

たインド・パシフィックビーズである。26号横穴墓出土No.232は，これらの特徴をすべて具備している。さらに，本資料はコバルト着色による紺色ガラス小玉であり，MnO含有量が多く（MnO：1.18-1.32％），CuOおよびPbOの含有量が極めて少ない（どちらも0.1％未満）タイプのコバルト原料が用いられている。このような着色剤の特徴も，これまでに知られるGroup SIVの類例と矛盾しない。

その他　今回，蛍光X線分析を実施した資料のうち，26号横穴墓出土No.213，218の２点については，既存のグループに帰属させることに疑問が残った。いずれも紺色を呈するガラス小玉である。このうちNo.213は，MgO，K_2O，CaO，Al_2O_3含有量においては，Group SIVの特徴と一致する。ただし，着色剤の特徴がこれまでに知られるGroup SIVと異なる。すなわち，MnO含有量が0.34-0.38％と少なく，CuOおよびPbOを0.1％前後含有する。このようなコバルト原料は上述の植物灰ガラス（Group SIII）に一般的だが，これまでGroup SIVに利用された例は確認されていない。ただし，これまでに確認されたGroup SIV のガラス小玉は弥生時代後期後半および古墳時代中期前半の資料が中心であるため，Group SIV に用いられるコバルト原料が時期的に変化する可能性も否定できないが，現状では類例がなく，判断を保留した。

No.218については，MgO，K_2O，CaO，Al_2O_3含有量において，Group SII ，Group SIV，Group SIIIなどと近似の値を示すものの，Group SII やGroup SIV と比較するとMgO含有量が過剰であり，Group SIIIと比較するとCaOの含有量が少ない。着色剤に関しては，本資料もコバルト着色による紺色を呈し，Group SIII に一般的なMnO含有量の少ないタイプのコバルト原料が用いられている。総合的に判断するとGroup SIIIの蓋然性が高いが，決め手を欠くことから，ソーダガラス内の特定のグル―プへの帰属判断は保留した。

３　鉛ガラスグループ

遺構外から出土したNo.354については，バリウム（Ba）を含まず，PbOを63.25％含有する高鉛タイプの鉛ガラス（Group LII）であった。着色に関与する成分としては，CuOを0.17％含有しており，銅によって緑色に着色されたと推定できる。PbOの含有量が多いと，銅イオンは濃緑色を呈するCu^{2+} - O - Cu^{+}結合子を生成すると言われている（伊藤1996）。巻き付け法で製作された鉛ガラス製の小玉は，弥生時代後期（Group LIIA）および古墳時代後期末以降（Group LIIB）の二段階に流通し，先行研究における鉛同位体比分析により，時期によって生産地が異なることが知られる。一方で，両者の化学組成に有意な差異は認められていない。本資料は遺構外からの出土品であるが，非破壊的手法による本調査結果からは本資料の帰属時期を限定することはできない。

４　鋳型法によるガラス小玉の化学組成の検討

最後に鋳型法で製作されたNo.220について述べる。No.220は素材となったガラス片が完全に融け合っていないことに起因すると考えられる色むらが認められるものの，全体として紺色を呈する。鋳型法で製作されたガラス小玉には種類の異なるガラスが混合される可能性があるため，化学組成の検討には注意が必要である。今回，No.220の異なる２箇所について測定を実施した結果，カリガラスとソーダガラスの中間的な値が得られた。特に，測定箇所１においては，Na_2Oを10.8％含むと同時にK_2Oを6.5％含有する。AR画像では，全体として比較資料JG-1a（K_2O：4.0％）と同程度の放射線が検

出されているため，原料素材の中心はソーダガラスと考えられるが，カリガラスが混合されている可能性が高い。また，着色に関与する成分については，0.1％前後のCoOを含むことからコバルト着色のガラスが素材と言える。さらに，MnOを１％前後含有する一方でCuOおよびPbOの含有量は0.1％未満ときわめて少ない。このような着色剤の特徴は典型的なGroup PIの紺色カリガラスと一致することから，少なくとも本資料にはGroup PIの紺色カリガラスが素材として含まれている可能性が高い。一方，本資料の主な素材にはコバルト着色のソーダガラスが利用されていると考えられるが，候補となる種類が多く，かつ，異なる種類のソーダガラスが混在している可能性もあり，特定は困難であった。

（田村朋美　奈良文化財研究所）

引用・参考文献

朝比奈貞一・小田幸子　1954「日本古代ガラス玉の成形について」『古文化財の科学』第７号，10～ 13頁。

伊藤　彰　1996『―ガラスにおける―炎と色の技術』アグネ技術センター。

大賀克彦　2002「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』（『清水町埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅴ）127-145頁。

大賀克彦・田村朋美　2016「日本列島カリガラスの考古科学的研究」『古代学』（奈良女子大学古代学学術研究センター）第8号，11～ 23頁

肥塚 隆保・田村朋美・大賀克彦　2010「材質とその歴史的変遷」『月刊文化財』№566，13～ 25頁。

Oga and Tamura 2013 Ancient Japan and the Indian Ocean International Sphere：Chemical Compositions, Chronologies, Provenences and Trade Routes of imported glass beads in the Yayoi-Kofun Periods（3rd Century BCE- 7th Century CE）, Journal of Indian Ocean Archaeology No.9, pp.34-60.

第２節　上塩冶横穴墓群第40支群出土金属製品

第１項　はじめに

出雲市上塩冶横穴墓群第40支群から出土した金属製品６点について，材質を明らかにする為に以下の通り成分分析を行った。その結果を報告する。

第２項　資料

調査した試料は表3に示す金属製品５点（カラー図版４・５）である。

表３　資料表

No.	名　　称	概　　要
35	耳環	緑青に覆われている。
192	耳環	緑青と土錆に覆われている
94	耳環	緑青に覆われている。金箔？が見られる
196	歩揺	緑青に覆われている。金箔？が見られる
番外	金薄片	金の薄片

第３項　方法

試料を用いて蛍光X線分析を行い，金属元素を同定した。装置は島津製作所製のエネルギー分散型蛍光X線分析装置EDX-800を用いた。

第４項　分析結果

成分分析結果のスペクトルを付す（第132～135図）。表４に分析結果一覧を示すが，その数値はあくまで参考にすぎない。また，Si~Fe，Zn，Br，Nd~Osは土壌に由来する成分と思われる。No.35耳環は主成分として銅（Cu）が検出され，その他の元素として銀（Ag），金（Au），砒素（As），水銀（Hg）が検出されている。No.192耳環は主成分として銀（Ag）が検出され，その他の元素として金（Au），銅（Cu），水銀（Hg），砒素（As）が検出されている。No.94耳環は主成分として銅（Cu）が検出され，その他の元素として金（Au），銀（Ag），水銀（Hg），砒素（As），セレン（Se）が検出されている。No.196歩揺は主成分として金（Au）が検出され，その他の元素として水銀（Hg），銅（Cu），銀（Ag），錫（Sn）が検出されている。番外金薄片は主成分として金（Au）が検出され，その他の元素として銀（Ag），銅（Cu）が検出されている。

第５項　概要

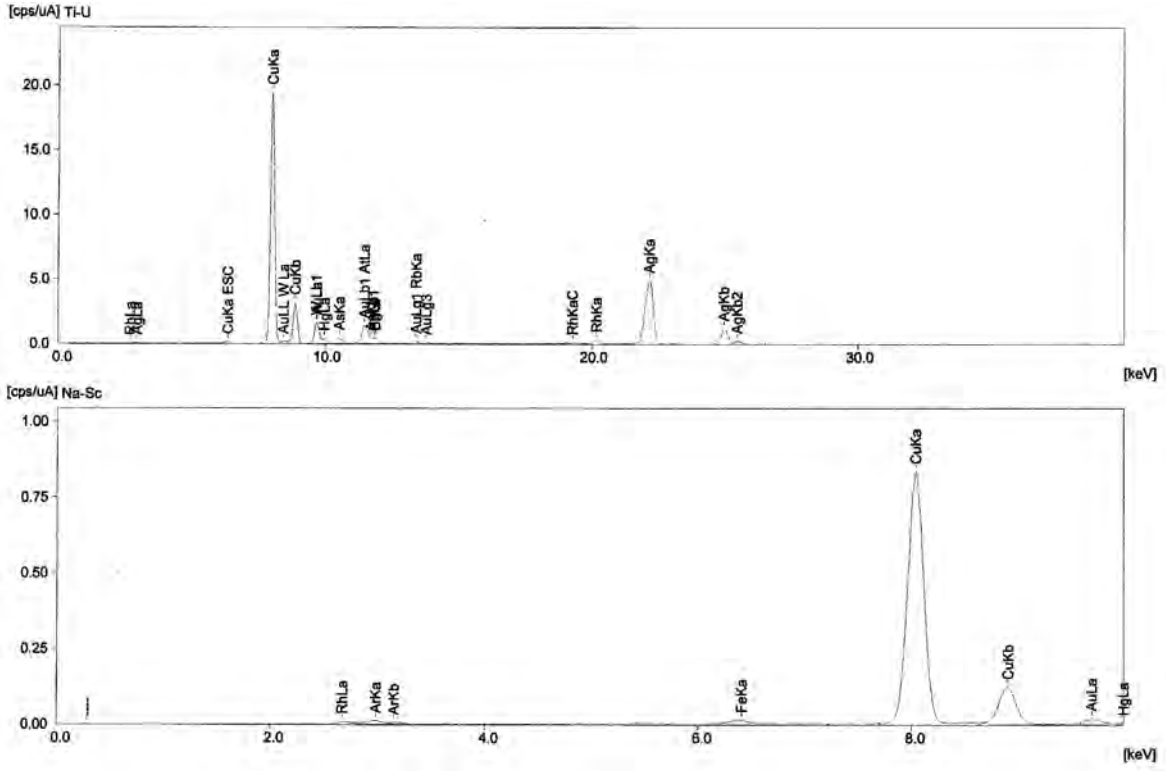
分析結果から，No.35耳環，No.192耳環とNo.94耳環は一番外側に薄板の層が確認でき，さらに金と共に水銀が検出されている。これ等から銅芯に銀の板を貼り，鍍金を施した銅芯銀板貼鍍金の耳環と

推察される。No.196歩揺は金と共に水銀が検出されており，銅で造り出された製品に直接，鍍金が施されたと考えられる。番外金薄片は水銀が未検出なので，金と銀の合金の箔と考えられる。

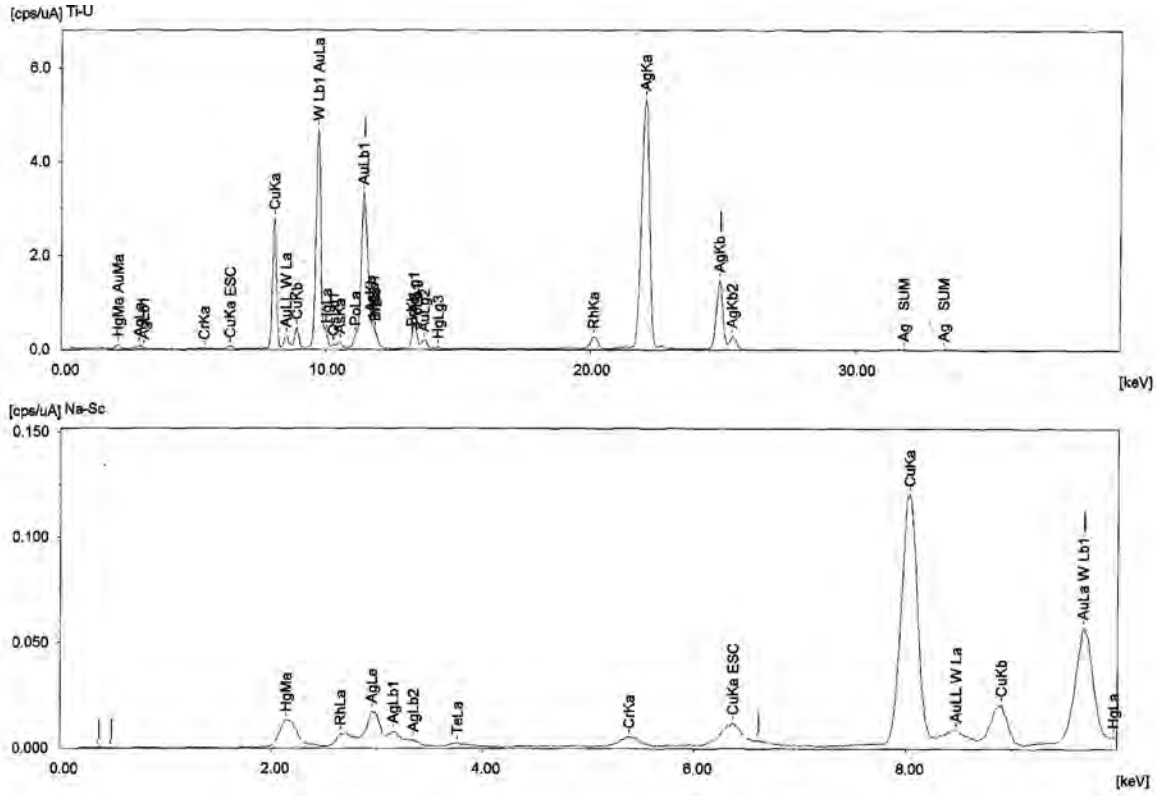
（株式会社　吉田生物研究所）

表４　出土遺物成分分析結果一覧

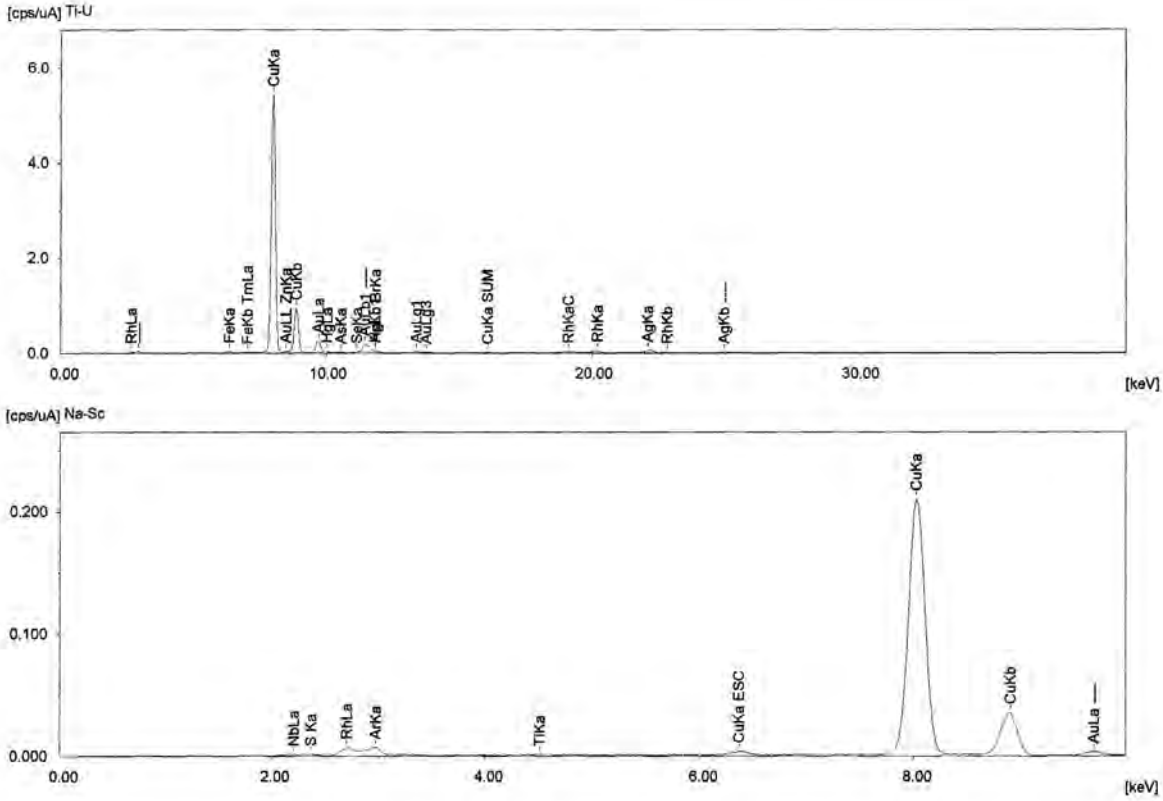
元素	S	K	Ca	Cr	Fe	Cu	Zn	As	Se	Br	Ag	Sn	Nd	W	Os	Au	Hg
No.35（wt%）	-	-	-	-	-	47.86	-	1.11	-	0.50	32.74	-	-	0.29	-	11.76	2.31
No.192（wt%）	-	-	-	0.32	-	10.42	-	0.34	-	0.81	56.01	-	-	0.32	-	28.67	2.03
No.94（wt%）	2.70	-	-	-	0.54	79.66	0.19	0.43	0.17	0.51	2.14	-	-	-	-	11.87	1.60
No.196（wt%）	-	2.32	0.85	0.44	-	5.92	-	-	-	2.75	0.79	0.48	-	0.74	1.22	69.09	12.80
番外（wt%）	-	0.37	0.94	-	1.76	2.58	-	-	-	0.77	24.63	-	0.80	0.90	-	64.41	-



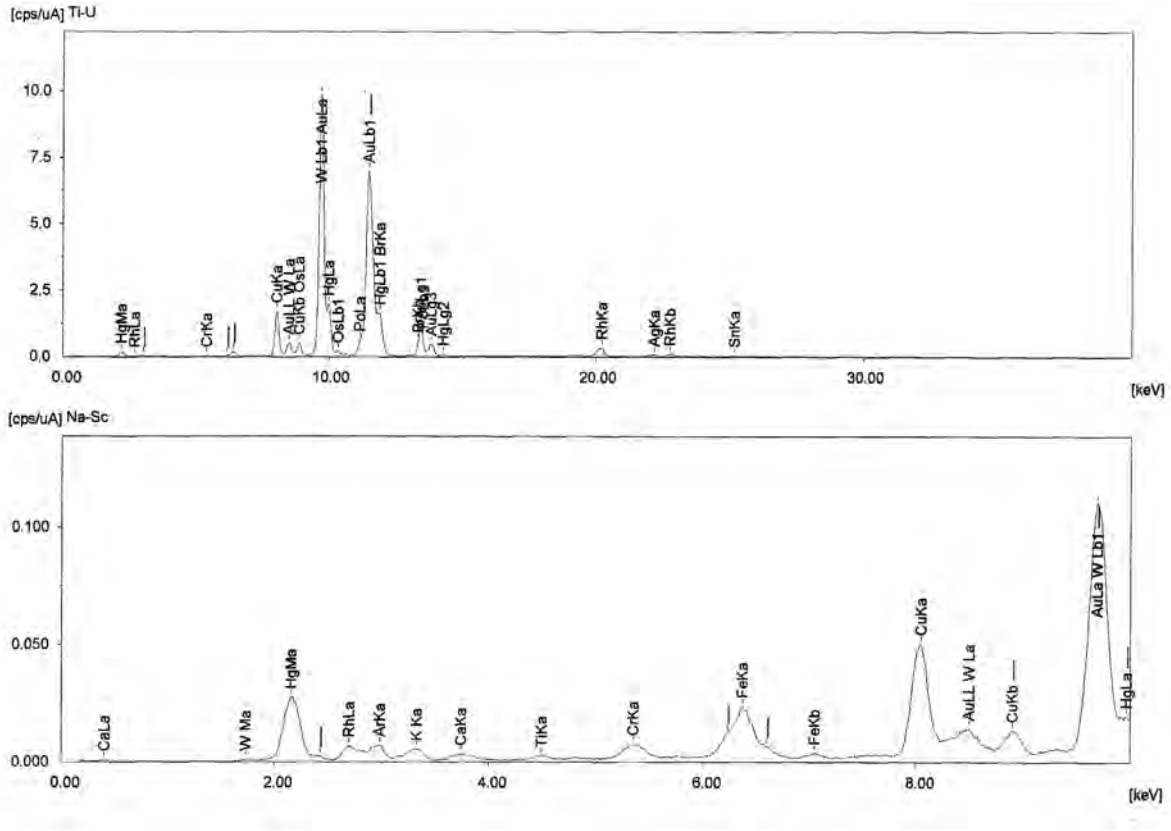
第131図　No.35耳環



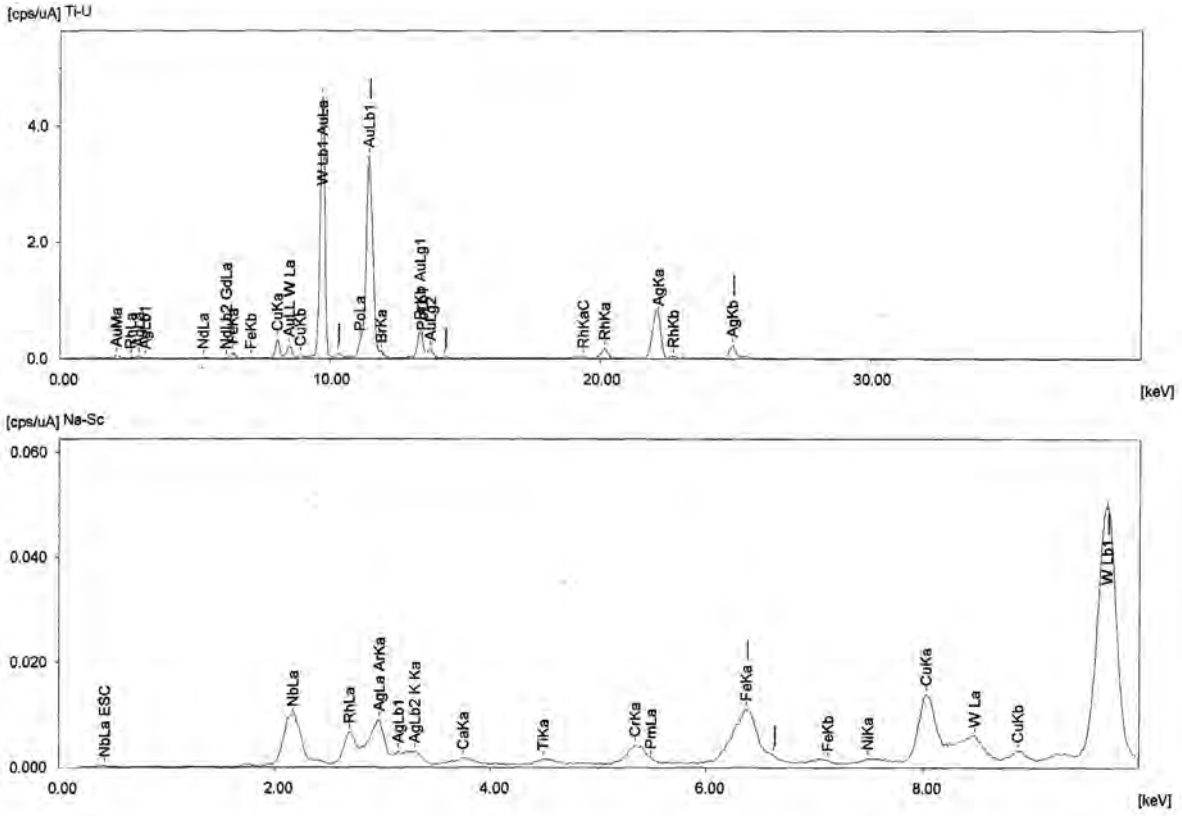
第132図　No.192耳環



第133図　No.94耳環



第134図　No.196歩揺



第135図　番外 金薄片

第７章　総　括

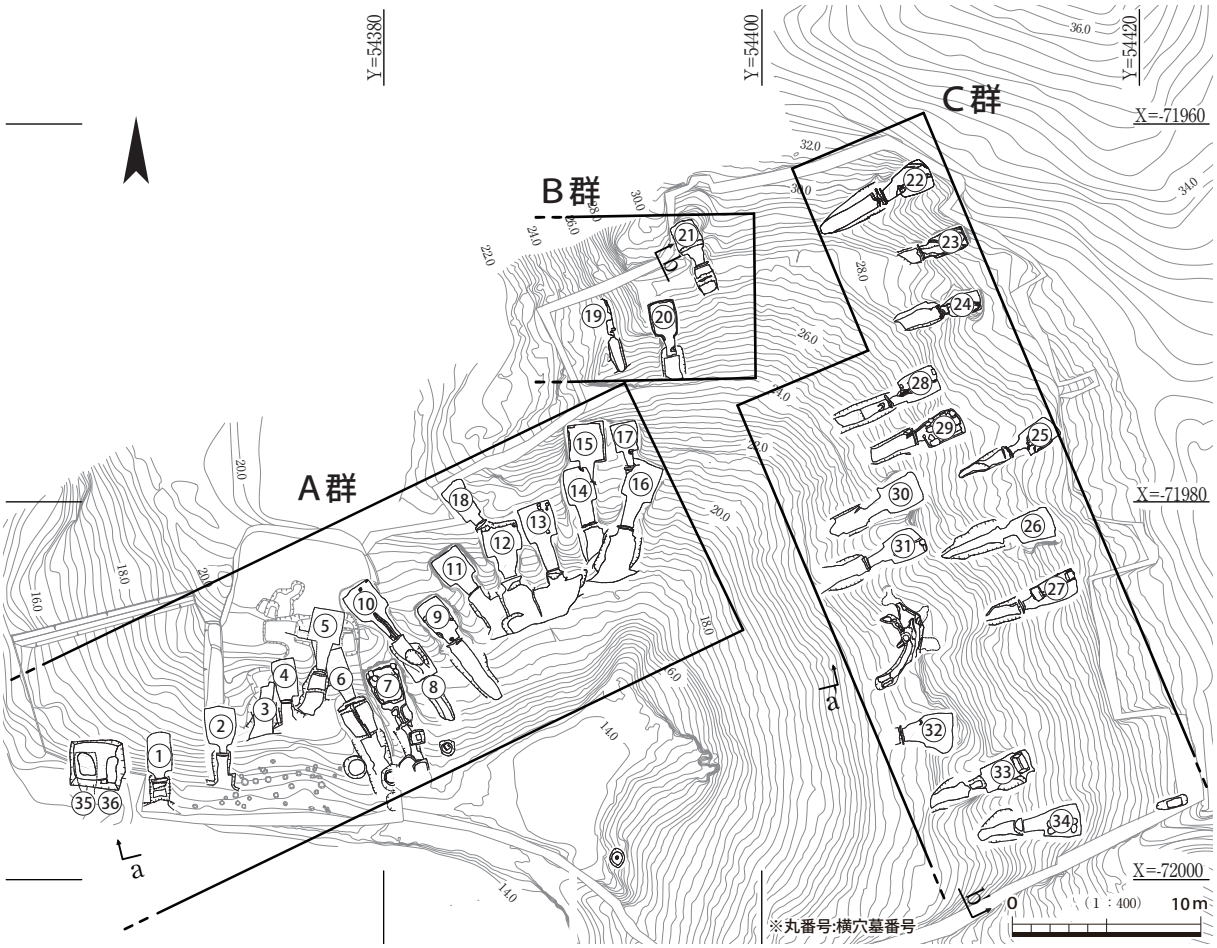
上塩冶横穴墓群第40支群の特徴について，その概要をまとめる。各横穴墓の基本的な特徴と時期，小支群の区分等については表５，第136図を参照していただきたい。

第１節　形態と時期（第137図）

横穴墓の各部分の形態に着目し，第40支群を１期～４期に区分する。須恵器編年との対応については，第40支群１期が大谷編年３期，２期が大谷編年４期，３期が大谷編年５期，４期が大谷編年６a期以降である。

１期（大谷３期）　横穴墓導入期にあたる。過去に上塩冶横穴墓群で確認された横穴墓の中でも，最古相に位置する一群である。

玄室の形態は，アーチ形縦長長方形プランの玄室を基本とするが，８号横穴墓のみ平天井である。玄室内の埋葬施設は，33号横穴墓のみで刳抜式小型家形石棺が確認される。羨道は無く，玄門長1m未満のものに限られる。閉塞石は26・33号横穴墓のみで確認され，いずれも玄門部に割石・自然石を積み上げるタイプのものである。



第136図　横穴墓配置図（1:400）

４・８・18・25・26・33号横穴墓の６基が確認される。この内，最も古相の須恵器蓋杯が出土するのが８号横穴墓で，本支群唯一の平天井形態が特徴的である。最古相の横穴墓として別に時期設定を設けるべきかもしれないが，１基のみで確認された形態であるため，他の横穴墓と同一の時期設定とした。

２期（大谷４期）　横穴墓の数が増加し，埋葬形態等も多様性が見られる。拡散期として捉えられる時期である。

玄室の形態は，１期と同様にアーチ形縦長長方形プランの玄室を基本とするが，一部に方形プランに近い形状のもの（32号）も出現する。玄室内の埋葬施設は，屍床，礫床，須恵器床，石製棺台，石柱，石棺等，多様性に富んだ施設が数多く確認される。羨道は無いが，閉塞部に墓道幅より狭い刳り込みを設けるもの（30・31号）がある。玄門長は，1.2m未満のものに限られる。閉塞石は，1期の26，33号横穴墓に同様なもの（7・25・27号）に加え，閉塞部手前で１点～数点の割石・自然石・切石を設置するタイプのもの（９・28・29・31・34号）がある。

１・２・７・９・19・20・22～24・27～32・34号横穴墓の16基が確認される。

表5　横穴墓主要要素一覧表

	第40支群	1期	2期	3期	4期		横穴形態			埋葬施設	玄門長	閉塞石	主な副葬品等						
	須恵器編年	3期	4期	5期	6a期	6bc期~	天井	プラン	羨道				大刀	馬具	鏃	工具	玉類	耳環	その他
A群	1号		■				アーチ	縦長	×		短		●		○	○		○	
	2号		■				アーチ	縦長	×		短								
	3号						造墓途中				中?								
	4号	■	■				アーチ	縦長	×		短								石見地方の須恵器
	5号			■			家	正方形	×		長							●	
	6号			■			アーチ	縦長	○		長	閉塞部割石						△	
	7号		■	■	■	■	アーチ	縦長	×	石製棺台	中	玄門部割石						○	
	8号	■					平	縦長	×		中								
	9号		■	■			?	縦長	×		短	閉塞部割石板							
	10号			■	■		家	正方形	×		長	閉塞部割石				○		●	
	11号			■			アーチ	正方形	○		中	閉塞部割石							
	12号			■			家	正方形	○		長		●						
	13号			■			家	正方形	○	石製棺台?	長	閉塞部割石							不明鉄器
	14号						アーチ	縦長	×		長								
	15号			■			家	正方形	?		中	閉塞部切石板							
	16号			■			家	正方形	○		長	閉塞部割石							
	17号						アーチ	正方形	?		中								
	18号	■	■				?	縦長	?		短								石見地方の須恵器
B群	19号						?	?	×		短	割石?							
	20号		■				アーチ	縦長	×	礫床･須恵器床	中	玄門部割石						○	
	21号						アーチ	縦長	×	礫床	中					○		○	
C群	22号		■				アーチ	縦長	×	礫床	中								
	23号		■				アーチ	縦長	×		短					○		△	
	24号		■				アーチ	縦長	×		短					○		○	
	25号	■	■				アーチ	縦長	×		中		○	○					石見地方の須恵器
	26号	■	■				アーチ	縦長	×		中	玄門部割石	○	?		○	○	●	歩揺･甕破砕散布
	27号		■				アーチ	縦長	×	木蓋組合石棺	中	玄門部割石		?	?			○	
	28号		■				アーチ	縦長	×	木蓋石柱	中	閉塞部割石			○		○	○	甕破砕
	29号		■				アーチ	縦長	×	木蓋石柱他	短	閉塞部切石						○	金薄片
	30号		■				アーチ	縦長	×		中	玄門部割石							
	31号		■				アーチ	縦長	×	木蓋石柱(簡易)	中	閉塞部割石							
	32号		■				アーチ?	正方形	?		中					○			
	33号	■					アーチ	縦長	×	刳抜家形石棺	中	玄門部割石			○				甕破砕散布
	34号		■				アーチ	縦長	×	石製棺台	中	閉塞部割石							

※玄門長　短：0.5m未満　中：0.5～1.2m未満　長：1.2m以上
※大刀　●：刃部60～70cm　○：刃部30cm前後
※耳環　●：金環　○：銀環　△：不明

３期（大谷５期）　横穴墓の形態等に大きな変化が現れる時期である。

玄室の形態は，家形方形プランの玄室が出現し，主流となる。一部にアーチ形天井の玄室（６・11号）や縦長長方形プランの玄室（６号）が残存する。玄室内の埋葬施設はほとんど見られず，棺台の可能性がある小礫が13号横穴墓で確認される程度である。羨道が付設されるものが出現し，主流となる。一部に羨道のないもの（５・10号）も残存する。玄門長は0.8～1.7mのものが確認され，0.5m以下の短い玄門が見られなくなる。閉塞石は全て閉塞部手前に設置され，玄門部に積み上げるタイプが見られなくなる。大部分が割石・自然石の閉塞石であるが，15号横穴墓では凝灰岩切石の板石４枚で閉塞されたものも確認された。

５・６・10～13・15・16号横穴墓の８基が確認される。家形方形プランの玄室と羨道部を付設した横穴墓の出現・主流化がこの時期の最も大きな特徴で，こうした特徴は「意宇型」（出雲考古学研究会1987）と呼ばれる出雲地方東部を中心とした横穴墓に見られるものである。

４期（大谷６a期以降）　新たな横穴墓は築造されておらず，７・10号横穴墓における追葬のみが確認される。この時期の上塩冶横穴墓群の他支群においては，多くの支群で横穴墓が築造されており，第40支群は比較的早期にその築造を終了した支群であると言える。

以上の変遷の流れをまとめると，玄室の形状は「アーチ形縦長長方形（１～３期）→家形方形（３期）」，埋葬施設は「僅少（１期）→多様な施設（２期）→僅少（３期）」，閉塞石は「玄門部（１・２期）→閉塞部（２・３期）」，羨道は「無（１～３期）→有（３期）」，玄門は「短（１・２期）→中（１～３期）→長（３期）」の流れの中で，古い様相を残したものが残存しつつ変化したものと思われる。

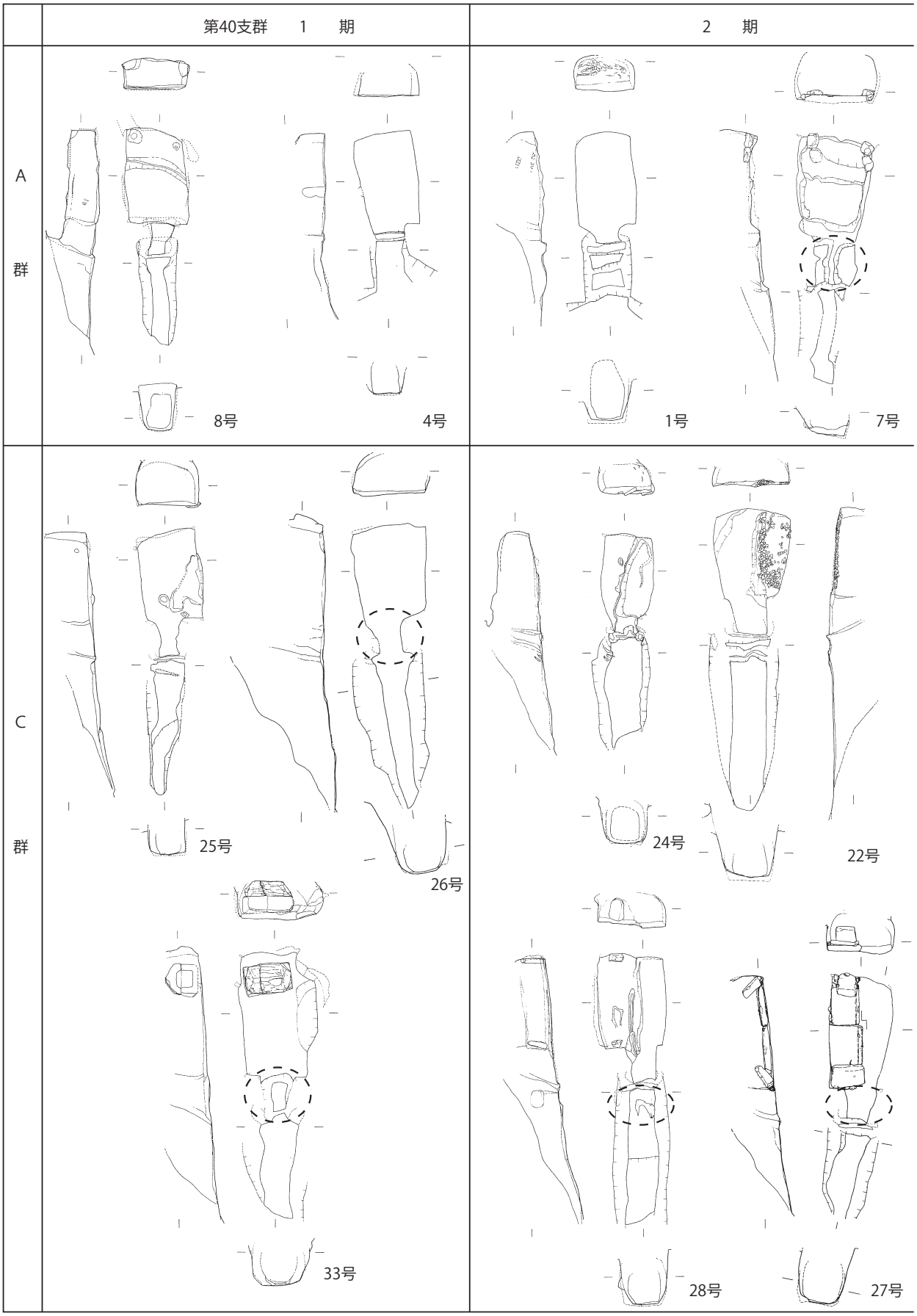
第40支群の変遷は，基本的には上塩冶横穴墓群における他支群の傾向（山陰横穴墓研究会 1997・出雲市教育委員会ほか 2000）とも類似するが，３期に見られる羨道付設の主流化，玄門長延長については他支群において必ずしも一般的なものでは無い。当支群の形態的特徴とも言えよう。また，時期的に見ると上塩冶横穴墓群の最古段階から築造され，比較的早期にその築造を終えることがその特徴である。

第２節　埋葬施設（第138図）

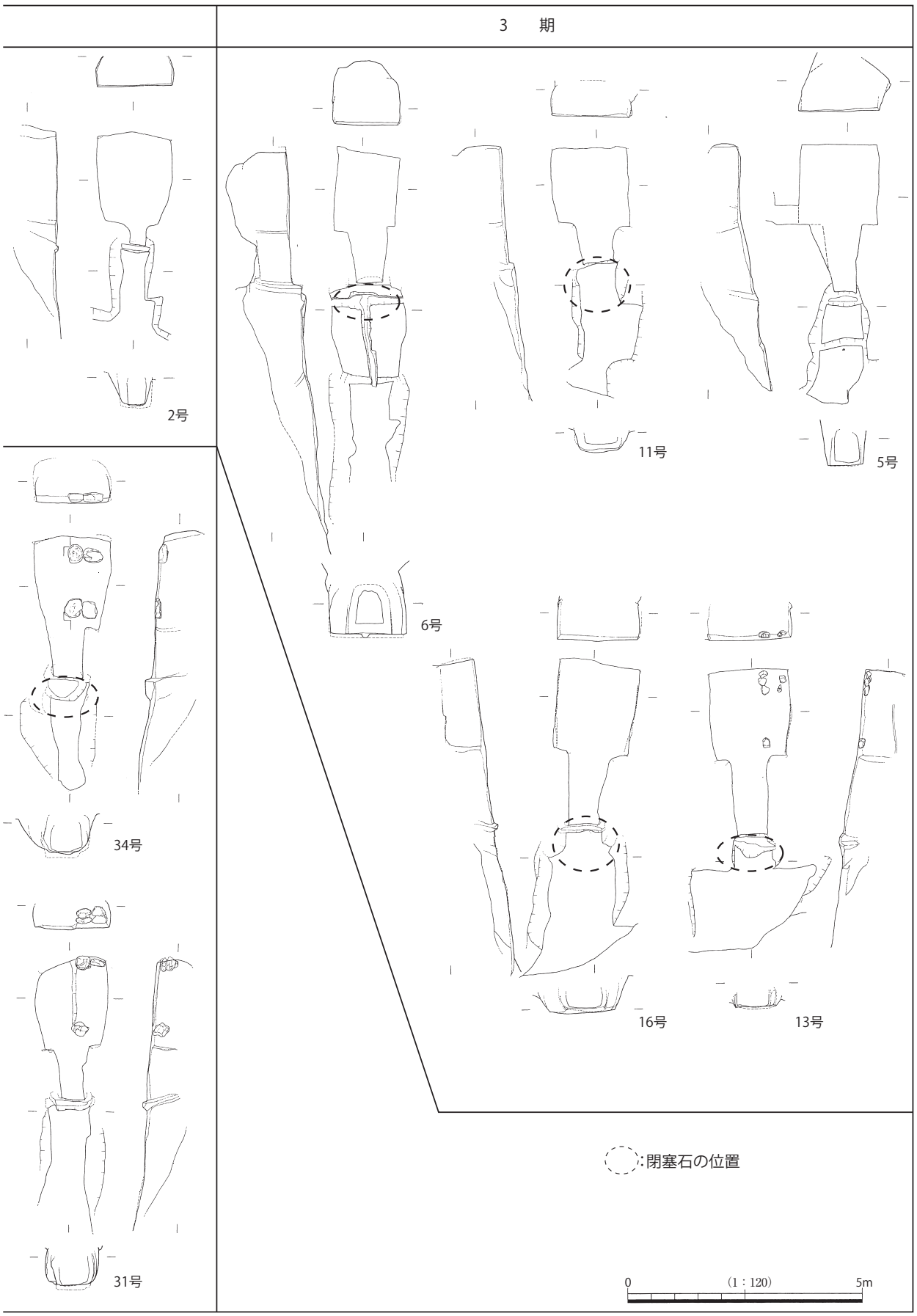
今回調査した横穴墓においては，玄室内に多様性に富んだ埋葬施設が確認されている。土器枕，屍床を除くと，礫床，須恵器床，石製棺台，石柱，組合式石棺，刳抜式小型家形石棺の６種に大別できる。以下各埋葬施設の概略について述べる。

礫床　20～22号横穴墓で確認される埋葬施設である。この３基は比較的近接した位置にまとまって立地している。いずれも10cm大以下の比較的小さい円礫を敷き詰めたものである。22号横穴墓では，排水溝によって屍床状に区画された範囲にのみ礫が敷かれていた。20・22号横穴墓の礫床は２期の埋葬施設である。21号横穴墓もこれらに近い時期のものであろう。

須恵器床　20号横穴墓のみで確認された埋葬施設である。初葬時の礫床上に重ねて2次的に設置されたものである。口縁部と底部を予め打ち欠いた須恵器甕を破砕し，奥壁側を開放したコの字状に配置していた。一般的な須恵器床とは様相を異にする。２期の埋葬施設である。



第137図　横穴墓変遷図（1:120）


3　期
2号
11号
5号
6号
34号
16号
13号
31号
:閉塞石の位置
0
(1：120)
5m

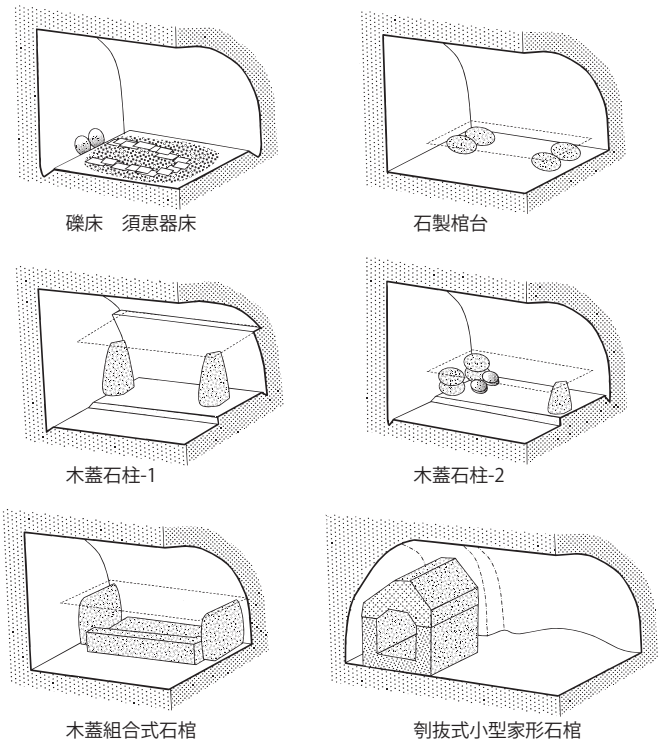
石製棺台　７・34号横穴墓で確認された埋葬施設で，13・29号横穴墓の石材も類似した施設の可能性がある。７・34号横穴墓で確認された石製棺台は，棺の短辺位置に40㎝大前後の扁平な石や，扁平に加工した石を各２個設置したものである。７号横穴墓では主軸方向に直交して，34号横穴墓では平行して配置されていた。13・29号横穴墓玄室内で確認された石は前述の２者ほど整った配置を残していないが，13号横穴墓では棺の隅に対応すると思われる位置に20㎝大の小礫を３ヶ所配置しており，29号横穴墓では左側壁寄りに棺の短辺と思われる位置２ヶ所に40㎝大以下の割石を数点ずつ配置している。これらも簡易な棺台としての機能していた可能性がある。基本的には２期の埋葬施設であるが，13号横穴墓の石材も棺台とするならば，３期にも簡易な棺台が存在していたということとなる。

石　柱　28・29・31号横穴墓で確認された埋葬施設で，屍床上に複数の石柱を設け，石柱上に木製の蓋を設置したと思われるものである。28・29号横穴墓で確認される形態と31号横穴墓で確認される形態の２タイプに分かれる。前者は屍床の奥壁側と前壁側に高さ45㎝～ 50㎝程度の石柱を各１点配置し，玄室側壁の石柱高に相当する位置に棚状の刳り込みを設けたものである。棚状刳り込みと石柱棺に木製の蓋を設置していたものと思われる。後者は屍床の奥壁側に２個の割石を重ねた石柱を２ヶ所，前壁側に１個の割石からなる石柱を１ヶ所配置したもので，石柱の高さも35㎝～ 40㎝とほぼそろっている。玄室側壁に刳り込みは無い。これも石柱上に木製の蓋を配置したものと思われる。全て２期の埋葬施設である。

組合式石棺　27号横穴墓のみで確認された埋葬施設である。石棺は縁を持つ底石２枚，底石の短辺を挟み立てる側石２枚，玄室壁との隙間を埋める小礫数点から成り，蓋石を持たない。未盗掘で，蓋以外の棺材も良好に残存していたことから，当初から蓋石を有さなかったと考えて良いであろう。石柱を用いた木蓋棺の存在を考慮すれば，この形態の棺にも木製の蓋が存在した可能性が高いと思われる。２期の埋葬施設である。

刳抜式小型家形石棺　33号横穴墓のみで確認された埋葬施設である。身に横口の無い刳抜式の小型家形石棺で，当該期の出雲地方で普遍的に用いられる横口式の家形石棺とは様相の異なるものである。

蓋・身ともに１枚石の砂岩から形成されている。蓋と身を合わせた法量は，長さ105×幅67×高さ70㎝で，非常に小型の石棺である。時期については須恵器提瓶のみからの判断となるが，１期の埋葬施設と思われる。



第138図　埋葬施設模式図

第３節　小支群の動向（第136・137図）

第40支群においては，南向き斜面標高21m以下に築かれた１～18・35・36号横穴墓をＡ群，南向き斜面標高24m以上に築かれた19～21号横穴墓をＢ群，西向き斜面にまとまって築かれた22～34号横穴墓をＣ群として小支群を捉えた。

以下で群ごとの動向をまとめ，各群の比較を行ってみたい。

Ａ群　合計20基からなる小支群である。１期から３期まで継続的に築造され，４期にも一部で追葬が継続する。最盛期は３期である。埋葬施設は貧弱である。

１期には８号横穴墓を初現として４号・18号横穴墓の計３基が確認される。２期には１・２・７・９号横穴墓の計４基が確認される。７号横穴墓で石製棺台が確認される。３期になると５・６・10～13・15・16号横穴墓の少なくとも８基が立て続けに築造されており，この群の最盛期となる。13号横穴墓で棺台の可能性がある礫が確認されるが，埋葬施設と断定できない。４期には新たな横穴墓は築造されておらず，７・10号横穴墓で追葬が確認されるのみである。

Ｂ群　大部分が破壊されていると思われるが，現状で合計３基からなる小支群である。２期以前の築造と思われ，埋葬施設は礫床が多いという特徴が見られるが，確認数が少ないため，小支群全体のの特徴として捉えることは難しい。

時期の確定する横穴墓は２期の20号横穴墓のみである。礫床・須恵器床が確認される。その他の横穴墓は時期判定可能な資料が存在しないが，19号横穴墓に見られる狭小な墓道と極端に短い玄門等の特徴，21号横穴墓に見られる礫床等の特徴から見て，全て２期以前に築造された横穴墓と推定した。

Ｃ群　合計13基からなる小支群である。1期から２期まで築造され，追葬も含め埋葬も全て２期までで終了する。最盛期は２期である。２期を中心に多様性のある埋葬施設が充実している。

１期には25・26・33号横穴墓の計３基が確認される。33号横穴墓で刳抜式小型家形石棺が確認される。２期には22～24・27～32・34号横穴墓の計10基が確認され，この群の最盛期となる。埋葬施設も最も充実した時期であり，27号横穴墓で組合式石棺（木蓋），28・29・31号横穴墓で石柱（木蓋），34号横穴墓で石製棺台，22号横穴墓で礫床が確認される。３期以降は新たな横穴墓は築造されておらず，追葬も行われていない。

全体の動向としては，いずれの小支群もほぼ同時期に開始され，２期にC群が最盛期を迎え，３期にA群が最盛期を迎えるようである。また，特に２期において，埋葬施設の貧弱なA群と埋葬施設の充実したC群との相違が顕著であることも確認できた。少なくともA群とC群の主要横穴墓については異なる集団単位を想定することが可能である。

また，立地状況から見ると，Ａ群は１～５・35・36号横穴墓と６～18号横穴墓の２群に，Ｃ群は22～24号横穴墓，25～27号横穴墓，28～31号横穴墓，32～34号横穴墓の４群に，さらなる小支群として捉えることも可能である。この内，25～27号横穴墓の一群は大刀や馬具等の副葬品を持つものが多く，28～31号横穴墓の一群は石柱構造の埋葬施設が多い。一定の集団単位や階層を反映しているものと思われる。

〔参考文献〕

大谷晃二　1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　島根考古学会
大谷晃二　2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市埋蔵文化財調査報告書第８集　平田市教育委員会
出雲考古学研究会　1987『石棺式石室の研究』
出雲市教育委員会ほか　2000『上塩冶横穴墓群第17・18・19・38支群　大井谷Ⅲ遺跡　石切場跡１・２　三田谷３号墳』斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書Ⅰ
山陰横穴墓研究会　1997『第７回山陰横穴墓調査検討会　出雲の横穴墓―その型式・変遷・地域性―』

表6　上塩冶横穴墓群第40支群横穴墓一覧

横穴墓番号	玄室形態		玄室法量	玄門法量	羨道法量	墓道前庭法量	埋葬施設	閉塞施設	その他の施設等	出土遺物	備考	築造時期（大谷編年）
	天井	プラン	幅 長 高	幅 長 高	幅 長 高	幅 長						
1号	アーチ	縦長	1.2～1.3 2.05 (0.85)	0.5 0.4 —		0.6～0.8 1.4		閉塞部溝	墓道に直交溝	大刀1・鉄鏃1 鉄斧1・不明鉄器1 銀環2・須恵器		4期
2号	アーチ	縦長	1.2～1.6 2.05 —	0.35～0.4 0.4 —		0.5～0.65 1.5		閉塞部溝		須恵器・土師器		4期
3号	造墓途中			0.7 1 —		1 1.9				須恵器（流土中）		
4号	アーチ	縦長	1～1.2 2.05 —	0.65～0.7 0.2 —		0.5～0.6 1.3		閉塞部溝		須恵器	石見産須恵器有	3期
5号	家	正方形	1.6～1.7 1.75 —	0.5～0.85 1.45 —		0.8～0.95 2.5		閉塞部溝	墓道段	金環1・須恵器		5期
6号	アーチ	縦長	1.35 1.8 (1)	0.6～0.9 1.2 (0.7)	1.25～1.6 2 (1.1)	0.65～0.9 2.2		閉塞部段・刳込 閉塞部割石閉塞	羨道T字状排水溝	耳環1・須恵器		5期
7号	アーチ	縦長	1.2～1.6 2.2 —	0.8～0.9 1 —		0.3 2.1	石製棺台	閉塞部段 玄門部割石閉塞	玄室周囲～ 玄門中央排水溝	銀環2・須恵器		4期
8号	平	縦長	1.25～1.35 2.05 0.75	0.32～0.5 0.65 0.75		0.28～0.4 2.2		閉塞部段	玄門・玄室境界段	須恵器		3期
9号	?	縦長	1.15～1.35 2.1 —	0.7～0.8 0.45 —		0.7～0.85 3.9		閉塞部溝 閉塞部割石板閉塞		須恵器・土師器		4期
10号	家	正方形	1.7 1.9 —	0.55～1 1.6 —		0.35～0.8 2.3		閉塞部段 閉塞部割石閉塞	玄門中央排水溝	刀子1・金環3 須恵器		5期
11号	アーチ	正方形	1.55～1.7 1.7 —	0.65～1 0.8 —	0.8 0.9 —	1.3以上 2		閉塞部段 閉塞部割石閉塞	前庭右壁のみ 広がる	須恵器		5期
12号	家形	正方形	1.9～2 1.7 —	0.7～1.2 1.2 —	0.9～1.2 0.5 —	1.4～1.55 2.2		閉塞部溝	玄室奥壁沿排水溝	大刀1・須恵器		5期
13号	家形	正方形	1.5～1.75 1.9 —	0.7～0.8 1.7 —	0.8 0.75 —	2.7以上 1.8	石製棺台?	閉塞部溝 閉塞部割石閉塞		不明鉄器1・須恵器 銀環1(流土中)		5期
14号	アーチ	縦長	1.25～1.55 1.9 —	0.75～0.9 1.2 —		0.9 1.9		閉塞部溝・刳込状				
15号	家	正方形	1.9 2 —	0.8 1.1 —	—	—		閉塞部段 閉塞部切石板閉塞	玄室壁沿排水溝	須恵器		5期
16号	家	正方形	1.7～1.85 2 —	0.7～1.2 1.5 —	0.8 0.4 —	1.4 2.1		閉塞部溝 閉塞部割石閉塞		須恵器		5期
17号	アーチ	正方形	1.15～1.4 1.5 —	0.3～0.5 0.8 —		—		閉塞部溝				
18号	?	縦長	0.95～1.3 2.1 —	0.55 0.4 —		—		閉塞部溝		須恵器	石見産須恵器有	3期～4期初
19号	?	?	— (1.9) —	0.35 0.35 —		0.5 1.6		割石?	玄門・玄室境界溝			
20号	アーチ	縦長	1.15～1.45 2 —	0.45～0.7 1.05 0.85		0.8 1.3	礫床，須恵器床	閉塞部段 玄門部割石閉塞	玄室壁沿排水溝	銀環2・須恵器		4期
21号	アーチ	正方形	1.15～1.45 1.8 —	0.5～0.8 0.8 —		0.8～0.9 1.6	礫床	閉塞部溝	墓道に直交溝	刀子1・銀環1		
22号	アーチ	縦長	1.2～1.65 1.95 —	0.5～0.8 0.8 —		0.75～0.9 3.8	屍床，礫床	閉塞部溝	玄室中央排水溝 墓道に直交溝	須恵器		4期
23号	アーチ	縦長	1～1.2 1.95 0.9	0.5～0.8 0.45 (0.7)		0.7 1.2		閉塞部溝	玄室～玄門壁沿 排水溝	刀子1・耳環1・須恵器		4期
24号	アーチ	縦長	1～1.1 1.85 —	0.5～0.6 0.35 (0.7)		0.65～0.8 2.6		閉塞部溝		刀子1・銀環2・須恵器		4期
25号	アーチ	縦長	1.1～1.25 2 (0.9～1)	0.3～0.6 0.7 —		0.4～0.8 3.1		閉塞部溝 埋土上追葬時溝		大刀1・馬具轡1 須恵器	石見産須恵器有	3期
26号	アーチ	縦長	1.35～1.6 2.1 (0.95)	0.5～0.8 0.65 (0.95)		0.35～0.95 3.4		玄門部割石閉塞		大刀1・鉄斧1・刀子2 銀環1・歩揺8・玉類34 須恵器・土師器	甕破砕散布	3期
27号	アーチ	縦長	1.05～1.3 2.4 —	0.45～0.7 0.65 (1)		0.25～0.6 2.15	木蓋組合式石棺	閉塞部溝 玄門部割石閉塞		銀環2・須恵器 鉸具1・鉄鏃1(流土中)		4期
28号	アーチ	縦長	1.25～1.5 2.05 —	0.45～0.75 0.8 —		0.5～0.7 3.05	屍床，石柱 (玄室棚状刳込)	閉塞部溝 閉塞部割石閉塞		鉄鏃10・不明鉄器1 銀環2・玉類6	甕破砕	4期
29号	アーチ	縦長	1.25～1.55 2.2 (0.95)	0.6～0.75 0.4 (0.9)		0.6～0.75 2.6	屍床，石柱 (玄室棚状刳込) 石製棺台?	閉塞部溝 閉塞部切石閉塞	玄室～玄門壁沿 排水溝	銀環2・金薄片1 須恵器		4期
30号	アーチ	縦長	1.45～1.65 2.1 —	0.6～0.9 1.05 —		0.85～1.1 2.15	屍床?	閉塞部刳込 玄門部割石閉塞		須恵器		4期
31号	アーチ	縦長	1.2～1.6 2 —	0.5～0.8 1.1 —		0.75～1.1 2.9	屍床，石柱	閉塞部溝・刳込 閉塞部割石閉塞		須恵器・土師器		4期
32号	アーチ?	正方形	1.6～1.8 1.55 —	0.7～1.4 1.05 —		0.85 0.9		閉塞部溝	玄室側壁拡張	刀子1・須恵器		4期
33号	アーチ	縦長	1.3～1.5 2.7 —	0.45～0.75 0.95 —		0.55～0.8 2.2	刳抜式 小型家形石棺	閉塞部段 玄門部割石閉塞	玄室奥0.6mは 拡張の痕跡あり	須恵器 鉄鏃3(流土中)	甕破砕散布	3期
34号	アーチ	縦長	1.15～1.7 2 (0.9～1)	0.65～0.85 1.05 —		0.4～0.75 2.45	石製棺台	閉塞部溝 閉塞部割石閉塞		須恵器		4期

第８章　結語

上塩冶横穴墓群は，東西約１㎞，南北約1.5㎞の範囲の丘陵地に41支群約230穴以上が確認されている大横穴墓群である。その中でも，第40支群では過去に調査された支群の中で最大数，36穴もの横穴墓が確認された。また，過去に調査された横穴墓の大部分は出雲の須恵器編年大谷５期以降の築造であったが，今回調査した第40支群は大谷４期以前のものが大半であり，上塩冶横穴墓群開始期の様相をうかがい知る上で貴重な資料を得ることができた。これらの成果を踏まえ，結語として上塩冶横穴墓群全体の中における第40支群の位置づけについてまとめておきたい。

上塩冶第40支群は，上塩冶横穴墓群の最古段階から造営されたものであり，その開始時期は西方に立地する上塩冶築山古墳（島根県古代文化センター 1999）を盟主墳とした築山古墳群（出雲市教育委員会2009）が造営され始めた時期（大谷３期・第40支群１期）とほぼ一致する。特に，古墳群を西方に望むC群においては，その終焉時期（大谷４期・第40支群２期）もほぼ一致しており，金銅製歩揺の副葬，刳抜式家形石棺の設置等，特殊な遺物や埋葬施設も確認される。C群造営期（大谷３～４期・第40支群１～２期）において，上塩冶築山古墳，築山古墳群，上塩冶横穴墓群第40支群周辺が一体的な古墳群として築造されたものである可能性を指摘しておきたい。上塩冶横穴墓群の中でも，第40支群が中核的な支群として位置づけられる時期である。

一方，A群のみの築造となる大谷５期（第40支群３期）においては羨道，玄門に若干の特徴がある他は他支群との際立った差異は認められない。C群造墓活動の終焉に伴い没個性化が進むとともに，支群全体も他支群に比べ早期に終焉を迎えている。当該期は上塩冶横穴墓群全体を見ても家形方形プランの玄室形態採用，石製埋葬施設の僅少化と定型的な組合式家形石棺の採用，横穴墓数の激増といった大きな変化が数多く現れる時期であり，それに伴うように墓域の中心が谷奥部へ移動している（山陰横穴墓研究会 1997・出雲市教育委員会ほか 2000）。第40支群の造墓集団もこの大きな変化に伴ってしだいに墓域を移動させていったものであろうか。

以上，今回の調査成果を踏まえた見解を述べてきた。上塩冶横穴墓群第40支群は，上塩冶横穴墓群初現期における中核的な支群の一つであるとともに，当地域における横穴墓の導入と展開の様相を示すメルクマールともなり得る重要な遺跡であると言えよう。

〔参考文献〕

大谷晃二　1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　島根考古学会
出雲市教育委員会　2009『築山遺跡Ⅳ』
出雲市教育委員会ほか　2000『上塩冶横穴墓群第17・18・19・38支群　大井谷Ⅲ遺跡　石切場跡１・２　三田谷３号墳』斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書Ⅰ
山陰横穴墓研究会　1997『第７回山陰横穴墓調査検討会　出雲の横穴墓―その型式・変遷・地域性―』
島根県古代文化センター　1999『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書４

遺　物　観　察　表

表７　出土土器観察表

番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)					調整等	胎土・焼成・色調	型式・その他 ※須恵器型式は大谷1994による
				口径	器高	最大径	脚底径	残存率・その他			
1号横穴墓											
1	1号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	13	4.8			ほぼ完形	外:天井粗雑なケズリ・肩部稜 内:ナデ	良 硬質 暗灰色	蓋杯A4 天井外面ヘラ記号「｜」
2	1号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.9	4.4			ほぼ完形	外:天井粗雑なケズリ・肩部稜 内:ナデ・口縁沈線	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A4
3	1号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.8	4.4			完形	外:天井周辺ケズリ後ナデ・肩部稜 内:ナデ・口縁沈線	良 硬質 灰黄色	蓋杯A6
4	1号横穴墓 玄門～墓道 4～5層	須恵器	杯蓋	(12.6)	(3.7)			約1/8残存	外:天井粗雑なケズリ・肩部稜 内:ナデ	良 硬質 灰黄色	蓋杯A4
5	1号横穴墓 玄門～墓道 4～5層	須恵器	杯身	(12)	(4)	(14.4)		約1/6残存 かえり長:1.3	外:底ケズリあり 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A4～6
6	1号横穴墓 玄門～墓道 4～5層	須恵器	杯身	(11.8)	(3.2)	(14.4)		1/4 ～1/5残存 かえり長:1.2	外:底ケズリあり 内:ナデ	良 硬質 灰黄色	蓋杯A4～6
7	1号横穴墓 玄門～墓道 4～5層	須恵器	杯身	(10.4)	(3.8)	(13.4)		約1/4残存 かえり長:1.4	外:底ケズリあり? 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A4～6
8	1号横穴墓 墓道4～5層	須恵器	高杯			(8.8)		杯部底部の約1/4残存	杯部稜2条・底に刺突文	良 硬質 灰褐色	(長脚無蓋高杯A4 ～ A5)
2号横穴墓											
15	2号横穴墓 墓道(試掘)	須恵器	杯蓋	(12.6)	4			約1/2残存	外:天井周辺ケズリ?後ナデ・肩部沈線 内:ナデ	良 硬質 灰白～灰色	蓋杯A6 天井外面ヘラ記号「｜」
16	2号横穴墓 玄室内	土師器	杯	(14)	(3.8)			口縁端を除きほぼ完形	調整風化	良 軟質 にぶい橙色	内外面赤彩
17	2号横穴墓 玄室内	土師器	杯		(4)			小片	調整風化	良 軟質 にぶい橙色	内外面赤彩
3号横穴墓											
18	3号横穴墓 墓道1～2層	須恵器	平瓶		13以上	16.7		口縁部を除き完形	外:カキメ 内:ナデ 把手瘤状	良 硬質 灰黄～灰色	平瓶C2?
4号横穴墓											
19	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	13	4.5			完形	外:天井丁寧なケズリ・肩部稜 内:ナデ・口縁沈線	良 硬質 灰色	蓋杯A3
20	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.8	4.8	14.4		完形 かえり長:1.7	外:底丁寧なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰色	蓋杯A3
21	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	13.8	4			完形	外:天井丁寧なケズリ・肩部稜 内:ナデ・口縁段	良 硬質 暗灰色	蓋杯A3
22	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	12.2	3.8	14.3		完形 かえり長:1.4	外:底やや粗雑なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰黄色	蓋杯A3～ 4
23	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	14.3	4.3			完形	外:天井丁寧なケズリ・肩部沈線 内:ナデ・口縁段	やや粗い 硬質 灰黄～灰色	石見産か
24	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.6	4.1	14		完形 かえり長:1.5	外:底やや粗雑なケズリ 内:ナデ	やや粗い 硬質 灰色	石見産か
25	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	13	3.7			完形	外:天井やや粗雑なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	石見産か
26	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.4	3.7	13.7		完形 かえり長:1.6	外:底やや粗雑なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰色	石見産か
27	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	13.4	3.1			完形	外:天井丁寧なケズリ 板状圧痕 内:ナデ・口縁段	良 硬質 灰色	石見型須恵器
28	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.7	4.4	14.3		完形 かえり長:1.6	外:底やや粗雑なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰黄色	石見産か
29	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	11.6	3.1			完形	外:天井丁寧なケズリ 内:ナデ・口縁段	良 硬質 暗灰～灰白色	石見型須恵器
30	4号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10.5	3.7	12.7		完形 かえり長:1.2	外:底粗雑なケズリ 板状圧痕 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	石見型須恵器

番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)					調整等	胎土・焼成・色調	型式・その他 ※須恵器型式は大谷1994による
				口径	器高	最大径	脚底径	残存率・その他			
5号横穴墓											
31	5号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	11.2	3.9			完形	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A7
32	5号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10.4	4.1	13.2		完形 かえり長:0.9	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰褐色	蓋杯A7
33	5号横穴墓 玄門～玄室	須恵器	脚付椀	9.2	6		脚5.9	完形	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 暗灰黄	
34	5号横穴墓 墓道5～6層	須恵器	平瓶	7.6 ～ 5.5	14.7	14.9		完形 (底部穿孔部を除く)	外:カキメ・下半ケズリ 内:ナデ 把手:ボタン状	良 硬質 灰黄～灰色	平瓶C2 底部穿孔 底外面ヘラ記号?「丨」
6号横穴墓											
36	6号横穴墓 羨道排水溝	須恵器	杯蓋					小片	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰白～灰色	蓋杯A7～8
37	6号横穴墓 羨道排水溝	須恵器	杯身	(11.2)	3.3	(13.4)		約1/3残存 かえり長:0.9	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰白～灰黄色	蓋杯A7
38	6号横穴墓 墓道下層 攪乱土	須恵器	杯身	10.6	3以上	13.2		受け部約1/2残存 かえり長:0.9	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰黄色	蓋杯A7
39	6号横穴墓 墓道下層	須恵器	平瓶	6.8	15.4	14.3		ほぼ完形	外:カキメ・下半ケズリ 内:ナデ 把手:ボタン状	良 硬質 灰黄～暗灰色	平瓶C2
7号横穴墓											
41	7号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.2	4.3			完形	外:ナデ・肩部沈線 内:ナデ	良 硬質 灰黄色	蓋杯A7
42	7号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10.6	3.5	13.2		ほぼ完形 かえり長:0.9	外:底最外周ケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰～灰白色	蓋杯A4～6
43	7号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.2	4.2			完形	外:天井特に粗雑なケズリ・ 肩部稜 内:ナデ	良 硬質 灰褐色	蓋杯A4～5
44	7号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.4	4.4			完形	外:天井周辺ケズリ?後ナデ・肩部沈線 内:ナデ	良 やや軟質 灰黄色	蓋杯A6～7
45	7号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.6	4.1			完形	外:ナデ 内:ナデ	良 やや軟質 灰色	蓋杯A6～7 天井内面ヘラ記号「×」
46	7号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	11.8	4.3			ほぼ完形	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A7
47	7号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	9.3 ～ 10.4	4.1			完形	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A8
48	7号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	9.6	2.6	12.6		完形 かえり長:0.5	外:ナデ 内:ナデ 擬宝珠状つまみ、かえりあり	良 硬質 灰黄色	蓋杯C2
49	7号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.6	4.4	13.9		完形 かえり長:1.1	外:底周辺ケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰色	蓋杯A4～6
50	7号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11	4	14		完形 かえり長:1.2	外:底周辺ケズリ 内:ナデ	良 軟質 灰黄色	蓋杯A4～6
51	7号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10.8	3.7	13.4		ほぼ完形 かえり長:0.9	外:底周辺ケズリ 内:ナデ	良 軟質 灰黄～灰白色	蓋杯A4～6
52	7号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10.6	3.7	13		ほぼ完形 かえり長:0.5	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰色	蓋杯A7
53	7号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10.1	3.8	12.1		完形 かえり長:0.5	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰～灰白色	蓋杯A7
54	7号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	9.4	3.4	11.5		ほぼ完形 かえり長:0.7	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰～灰白色	蓋杯A7
55	7号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	9.6	3.8	11.8		ほぼ完形 かえり長:0.3	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰～灰褐色	蓋杯A7
56	7号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	8.6	3.5	10.8		完形 かえり長:0.4	外:ナデ(天井未調整) 内:ナデ	良 硬質 灰黄色	蓋杯A8
57	7号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	8.6	3.4	10.8		完形 かえり長:0.7	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰色	蓋杯A8

番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)					調整等	胎土・焼成・色調	型式・その他 ※須恵器型式は大谷1994による
				口径	器高	最大径	脚底径	残存率・その他			
58	7号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	9.3	3.2			完形	外:底やや粗雑なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯C1 ～ 2
59	7号横穴墓 玄門～玄室	須恵器	杯身	11.2	4.2	14.1		完形 かえり長:0.7	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰黄色	蓋杯A6 ～7 天井外面ヘラ記号「×」
60	7号横穴墓 玄門～玄室	須恵器	杯身	10.4	3.5	13		完形 かえり長:0.7	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A6 ～7
61	7号横穴墓 墓道2層下面	須恵器	杯身	12	3.7	14.6		ほぼ完形 かえり長:0.9	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A4～6
8号横穴墓											
63	8号横穴墓 玄室内 2層	須恵器	杯蓋	13.8	3.3			ほぼ完形	外:天井丁寧なケズリ・肩部稜 内:ナデ・口縁段	良 硬質 灰色	蓋杯A3
64	8号横穴墓 玄室内 2層	須恵器	杯蓋	13.2	4.2			完形	外:天井丁寧なケズリ・肩部稜 内:ナデ・口縁沈線	良 硬質 灰白～灰色	蓋杯A3
65	8号横穴墓 玄室内 2層	須恵器	杯身	12	3.5	14.2		完形 かえり長:1.2	外:底丁寧なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰～暗灰色	蓋杯A3
66	8号横穴墓 玄室内 2層	須恵器	杯身	11.6	4	14		完形 かえり長:1.3	外:底丁寧なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰色	蓋杯A3
67	8号横穴墓 玄室内 2層	須恵器	短頸壺	(10)	10.4	(13.2)		口縁端約1/4 体部約1/2残存	外:下半ケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰褐～暗灰色	
68	8号横穴墓 玄門 1 ～2層	須恵器	甕			(10.8)		頸～肩部小片	外:肩部刺突文・沈線1条 内:ナデ	良 硬質 灰色	
9号横穴墓											
69	9号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.8	4.6			ほぼ完形	外:天井粗雑なケズリ・肩部稜 内:ナデ・口縁沈線	良 硬質 灰色	蓋杯A4
70	9号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.2	4			完形	外:天井周辺ケズリ・肩部稜 内:ナデ・口縁沈線	良 硬質 灰色	蓋杯A5
71	9号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.2	4.2	13.6		完形 かえり長:1.3	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰色	蓋杯A4～5
72	9号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.2	4.1	13.4		完形 かえり長:1.2	外:底周辺ケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A4～6
73	9号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.2	4.2	13.8		完形 かえり長:1.4	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰色	蓋杯A4～5
74	9号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10.6	4	13.2		完形 かえり長:1.2	外:底やや粗雑なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A3～4
75	9号横穴墓 玄門	須恵器	杯蓋	(12.8)	4.1			約1/3残存	外:天井粗雑なケズリ・肩部稜 内:ナデ・口縁沈線	良 硬質 灰色	蓋杯A4
76	9号横穴墓 玄門	須恵器	杯蓋	(13)	4.3			約1/2残存	外:天井粗雑なケズリ・肩部稜 内:ナデ	良 やや軟質 灰黄～灰白色	蓋杯A4
77	9号横穴墓 玄門	須恵器	杯蓋	12.2	4.1			約3/4残存	外:天井粗雑なケズリ・肩部稜 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A4
78	9号横穴墓 玄門	須恵器	杯身	10.4	3.7	13.1		完形 かえり長:1.3	外:底周辺ケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰色	蓋杯A4～6
79	9号横穴墓 墓道	須恵器	杯蓋	13	4.2			完形	外:天井丁寧なケズリ・肩部稜 内:ナデ	良 硬質 灰白～灰色	蓋杯A3～4
80	9号横穴墓 墓道	須恵器	杯身	10.6	3.5	12.8		完形 かえり長:1	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	良 やや軟質 灰黄～灰白色	蓋杯A4～5
81	9号横穴墓 墓道	須恵器	杯身	(10.8)	(4)	(13.6)		約2/5残存 かえり長:1.2	外:ナデ 内:ナデ	良 やや軟質 灰黄色	蓋杯A4～6
82	9号横穴墓 墓道	須恵器	杯身	(12)	(4)	(13.8)		約2/5残存 かえり長:0.8	外:ナデ 内:ナデ	良 やや軟質 灰色	蓋杯A6～7
83	9号横穴墓 墓道	土師器	高杯					接合部のみ残存	外:ナデ 内:ナデ	良 軟質 黄橙色	

番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)					調整等	胎土・焼成・色調	型式・その他 ※須恵器型式は大谷1994による
				口径	器高	最大径	脚底径	残存率・その他			
10号横穴墓											
84	10号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12	3.9			完形	外:ナデ・肩部沈線 内:ナデ	良 硬質 灰色	蓋杯A7
85	10号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10.2	4.4	12.8		完形 かえり長:1	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰白～灰色	蓋杯A6～7
86	10号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	10.6	3.9			完形	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰白～灰色	蓋杯A8 天井外面ヘラ記号「×」
87	10号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	9.4	3.7	11.6		完形 かえり長:0.5	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰白～灰色	蓋杯A8 底外面ヘラ記号「×」
88	10号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	8.2	3.2			完形	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰白～灰色	蓋杯A8 天井外面ヘラ記号「×」
89	10号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	7.4	3.1	10		完形 かえり長:0.7	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A8
90	10号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10.5	3.8	13		完形 かえり長:1	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰色	蓋杯A6～7
11号横穴墓											
95	11号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.4	3.7	13.8		完形 かえり長:0.7	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰褐～暗灰色	蓋杯A7 土器枕?
96	11号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10.2	3.8	13.2		完形 かえり長:0.5	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A7 土器枕?
97	11号横穴墓 墓道3層	須恵器	杯身	10.3	3.6	13		完形 かえり長:0.9	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A7
12号横穴墓											
98	12号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12	4.1			完形	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 褐灰～灰黄色	蓋杯A7
13号横穴墓											
101	13号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	11.6	4.5			完形	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰白色	蓋杯A7
102	13号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	9.6	3.9	12.4		完形 かえり長:0.7	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰白色	蓋杯A7 底外面ヘラ記号「×」
103	13号横穴墓 前庭	須恵器	杯身	10	3.8	12.6		完形 かえり長:0.7	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰黄色	蓋杯A7 底外面ヘラ記号「×」
104	13号横穴墓 前庭	須恵器	平瓶	6.8	14.2	14.5		ほぼ完形	外:カキメ・下半ケズリ 内:ナデ 把手なし・竹管文1対	良 硬質 灰白～灰色	平瓶C3
105	13号横穴墓 上層	須恵器	杯蓋	(12.6)	4.2			約1/3残存	外:天井周辺ケズリ後ナデ・肩部稜 内:ナデ	良 やや軟質 灰白～灰色	蓋杯A6 混入品か
106	13号横穴墓 上層	須恵器	杯身	12	3.4	14.8		完形 かえり長:1	外:ナデ 内:ナデ	良 やや軟質 灰黄～灰白色	蓋杯A4～6 混入品か
107	13号横穴墓 上層	須恵器	有蓋高杯	12	12.1	15	脚12.4	ほぼ完形 かえり長:1.2	外:ナデ 内:ナデ 脚:1段3方向三角形スカシ+沈線1条	良 硬質 灰黄～灰色	有蓋高杯D 混入品か
108	13号横穴墓 上層	須恵器	有蓋高杯	12.4	11.2	15.1	脚12.4	ほぼ完形 かえり長:1	外:ナデ 内:ナデ 脚:2段2方向方形スカシ+沈線3条	良 硬質 灰色	有蓋高杯C´ ※スカシ2方向 混入品か
109	13号横穴墓 上層	須恵器	有蓋高杯	12.2	11.5	15	脚(12)	脚部約1/2欠損 かえり長:1	外:ナデ 内:ナデ 脚:2段2方向方形スカシ+沈線3条	良 硬質 灰色	有蓋高杯C´ ※スカシ2方向 混入品か
110	13号横穴墓 上層	須恵器	有蓋高杯	(12.2)		(15.2)		杯部のみ約1/3残存 かえり長:1.6	外:ナデ 内:ナデ 脚:2方向(三角形)スカシ	良 硬質 灰黄～灰色	有蓋高杯E3? 混入品か
111	13号横穴墓 上層	須恵器	無蓋高杯	(14)	11.6		脚(11.4)	口縁端約3/4と 脚端約5/6欠損	外:ナデ 内:ナデ 脚:1段2方向三角形スカシ	良 やや軟質 灰黄～灰色	低脚無蓋高杯A4 混入品か
112	13号横穴墓 上層	須恵器	無蓋高杯	14	10.1		脚(11)	口縁の一部と 脚部約2/3欠損	外:ナデ 内:ナデ 脚:1段2方向方形スカシ	良 やや軟質 灰黄～灰色	低脚無蓋高杯A4 混入品か
113	13号横穴墓 上層	須恵器	提瓶	7.2 ～8.2		幅(14.2)		口縁約2/3と 体部下半欠損	外:カキメ 内:ナデ 把手瘤状	良 硬質 灰黄～灰色	提瓶Cエ 混入品か

番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)					調整等	胎土・焼成・色調	型式・その他 ※須恵器型式は大谷1994による
				口径	器高	最大径	脚底径	残存率・その他			
15号横穴墓											
116	15号横穴墓 玄室内	須恵器	長頸壺	7	17.1	13.3		ほぼ完形	外:ナデ・下半ケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	長頸壺1
118	15号横穴墓 3層	須恵器	杯身	9	3.7	11.8		完形 かえり長:0.8	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰黄色	蓋杯A7 底外面ヘラ記号「×」 混入品の可能性あり
117	15号横穴墓 上層	須恵器	杯蓋	12.8	3.9			約1/2残存	外:天井粗雑なケズリ・肩部稜 内:ナデ・口縁沈線	良 硬質 暗灰色	蓋杯A4 混入品
119	15号横穴墓 上層	須恵器	壺?				脚7.6	脚部のみ残存	外:ナデ 内:ナデ	良 やや軟質 灰黄～灰色	混入品
16号横穴墓											
120	16号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	11.8	4.2			ほぼ完形	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰白～灰色	蓋杯A7 天井外面ヘラ記号「Ⅲ」
121	16号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10.2	3.3	12.4		完形 かえり長:0.5	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰白～灰色	蓋杯A7
122	16号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10	4.1	12.6		完形 かえり長:0.8	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰白～灰黄色	蓋杯A7
123	16号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10	4	12.6		完形 かえり長:0.9	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰色	蓋杯A7
124	16号横穴墓 玄室内	須恵器	平瓶	6.7	16.6	14.7		完形	外:ナデ・下半ケズリ 内:ナデ 把手なし	良 硬質 灰褐～灰白色	平瓶C3 肩部ヘラ記号「∋」
125	16号横穴墓 上層	須恵器	杯蓋	(11.8)	4.1			口縁端約1/5残存	外:天井粗雑なケズリ・肩部稜 内:ナデ・口縁沈線	良 硬質 灰色	蓋杯A4 混入品
126	16号横穴墓 上層	須恵器	壺			15		体部のみ約1/2残存	外:カキメ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰白色	平瓶か 混入品
18号横穴墓											
127	18号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	13.4	4			完形	外:天井やや丁寧なケズリ・肩部稜 内:ナデ・口縁沈線	良 やや軟質 灰黄色	蓋杯A3～4 天井外面ヘラ記号「｜」 土器枕
128	18号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	13.2	4.3			完形	外:天井丁寧なケズリ・肩部沈線 内:ナデ・口縁段	良 硬質 灰色	石見産か 土器枕※頭部接触部変色
129	18号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	13.4	3.8			完形	外:天井ケズリ後ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰白～暗灰色	石見産か 土器枕
130	18号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	(12.5)	(3)	14.5		完形 かえり長:1.3	外:底丁寧なケズリ 板状圧痕 内:ナデ	良 硬質 灰色	歪みあり(法量は補正値) 石見型須恵器 土器枕
131	18号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10.6	4.5	13.7		完形 かえり長:1.8	外:底丁寧なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰色	蓋杯A3～4 土器枕
132	18号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.2	3.7	13.4		完形 かえり長:1.3	外:底周辺ケズリ 板状圧痕 内:ナデ	良 硬質 灰白～灰色	石見型須恵器 土器枕
20号横穴墓											
133	20号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.8	4.1	14.4		完形 かえり長:1.4	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	良 やや軟質 灰白色	蓋杯A4～5 土器枕
134	20号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.4	4.7	13.8		完形 かえり長:1.4	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰白色	蓋杯A4～5 一部緑色灰釉かかる 土器枕
135	20号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11	3.9	13.8		完形 かえり長:1.2	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A4～5
136	20号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10.7	3.6	13		完形 かえり長:1.3	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A4～5
137	20号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10.8	3.9	13		完形 かえり長:1.3	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	良 やや軟質 灰黄～灰白色	蓋杯A4～5
138	20号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10.8	3.9	13.2		完形 かえり長:1.3	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰白～灰色	蓋杯A4～5
139	20号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.4	4.3	13.8		完形 かえり長:1.4	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰白色	蓋杯A4～5
140	20号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.2	4.3	14.2		完形 かえり長:1.3	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰白色	蓋杯A4～5
141	20号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.8	4	14.4		完形 かえり長:1	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A4～6

番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)					調整等	胎土・焼成・色調	型式・その他 ※須恵器型式は大谷1994による
				口径	器高	最大径	脚底径	残存率・その他			
142	20号横穴墓 玄室内	須恵器	甕			48.2		口縁と底部欠損 体部ほぼ完形	外:タタキ 内:タタキ	良 硬質 灰黄～灰褐色	須恵器床接合 底部と口縁部意図的に打ち欠く 底付近他個体甕片融着
22号横穴墓											
147	22号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.6	4			完形	外:天井周辺ケズリ後ナデ・肩部稜 内:ナデ	やや粗い 硬質 灰黄色	蓋杯A6 土器枕?
148	22号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	11.8	3.7			完形	外:天井周辺ケズリ後ナデ・肩部稜 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰白色	蓋杯A6 土器枕?
149	22号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10.6	3.6	13		ほぼ完形 かえり長:1.2	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰黄色	蓋杯A6 土器枕?
150	22号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10.6	4.5	13.6		完形 かえり長:1.2	外:天井周辺ケズリ後ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A6 土器枕?
151	22号横穴墓 墓道2層上面	須恵器	杯蓋	12.7	3.6			口縁端約1/2と 天井約1/4欠損	外:天井やや粗雑なケズリ・肩部稜 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A4 天井外面ヘラ記号?「=」
152	22号横穴墓 墓道2層上面	須恵器	杯蓋	12	3.7			ほぼ完形	外:天井ケズリ後ナデ・肩部稜 内:ナデ	良 硬質 灰黄色	蓋杯A6 やや風化
153	22号横穴墓 墓道2層上面	須恵器	杯身	11	4.3	13.5		完形 かえり長:1.3	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A4～5
154	22号横穴墓 墓道2層上面	須恵器	杯身	11	3.6	13.8		ほぼ完形 かえり長:1	外:底周辺ケズリ後ナデ 内:ナデ	やや粗い 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A4～6
155	22号横穴墓 墓道2層上面	須恵器	提瓶			幅14.8 厚13.4		口縁端を除きほぼ完形	外:カキメ 内:ナデ 把手長い瘤状	やや粗い 硬質 灰～灰褐色	提瓶B3orAウorCウ
23号横穴墓											
156	23号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.8	4.1			完形	外:天井周辺ケズリ・肩部稜 内:ナデ・口縁沈線	良 硬質 灰白～灰色	蓋杯A5 土器枕?
157	23号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10.6	4.4	13.4		完形 かえり長:1.4	外:底周辺ケズリ 内:ナデ	やや粗い 硬質 灰白～灰色	蓋杯A5 土器枕?
158	23号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.4	4.4	14.2		ほぼ完形 かえり長:1.4	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	良 硬質 暗灰～灰褐色	蓋杯A4～5
24号横穴墓											
161	24号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.4	4.5			完形	外:天井やや粗雑なケズリ・肩部稜 内:ナデ・口縁沈線	良 硬質 灰白～灰色	蓋杯A3～4
162	24号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.2	4.8			完形	外:天井やや粗雑なケズリ・肩部稜 内:ナデ・口縁段	良 硬質 灰色	蓋杯A3～4 土器枕?
163	24号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10.6	4	13.6		完形 かえり長:1.3	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰白～灰色	蓋杯A3～4 土器枕?
164	24号横穴墓 墓道3層	須恵器	横瓶			幅(31) 厚(21)		体部の一部のみ残存	外:タタキ後カキメ 内:タタキ	良 硬質 灰黄～暗灰色	一部緑色灰釉かかる
25号横穴墓											
168	25号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	14	4			完形	外:天井丁寧なケズリ・肩部沈線 内:ナデ・口縁段	やや粗い 硬質 暗灰色	蓋杯A3
169	25号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	13.8	4.5			ほぼ完形	外:天井ケズリ(風化) 内:ナデ	良 軟質 灰黄～暗白色	石見産か 調整風化
170	25号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.6	4			完形	外:天井ケズリ(風化) 内:ナデ	良 軟質 灰黄色	石見産か 調整風化
26号横穴墓											
173	26号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	13	4.1			完形	外:天井丁寧なケズリ・肩部稜 内:ナデ・口縁沈線状	良 硬質 灰色	蓋杯A3
174	26号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.6	4.5			完形	外:天井特に粗雑なケズリ・肩部稜 内:ナデ・口縁沈線	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A4～5 土器枕
175	26号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.7	3.9	14.5		完形 かえり長:1.3	外:底やや粗雑なケズリ 内:ナデ	良 やや軟質 灰黄～暗白色	蓋杯A3～A4
176	26号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.2	3.9	13.8		完形 かえり長:1.3	外:底丁寧なケズリ 内:ナデ	やや粗い 硬質 灰白～灰色	蓋杯A3～A4 土器枕
177	26号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10.8	4	13.8		完形 かえり長:1.2	外:底丁寧なケズリ 内:ナデ	やや粗い 硬質 灰色	蓋杯A3～A4 土器枕

番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)					調整等	胎土・焼成・色調	型式・その他 ※須恵器型式は大谷1994による
				口径	器高	最大径	脚底径	残存率・その他			
178	26号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.1	3.9	13.8		完形 かえり長:1.2	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A4～A5 土器枕
179	26号横穴墓 玄室内	須恵器	無蓋高杯	13.3	9		脚9.4	完形	外:杯底部ケズリ・中央稜 内:ナデ 脚:1段2方向三角形スカシ	良 硬質 灰黄～灰色	低脚無蓋高杯A4
180	26号横穴墓 玄室内	須恵器	瓶	12.3	15.3	体9.9	底5.6	完形	外:口縁波状文・沈線2条 体部刺突文・沈線2条 下半ケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰白～灰色	瓶A4～A5
181	26号横穴墓 玄室内	須恵器	長頸壺	6.5	21.8	12.8	底6.2	完形	外:ナデ・下半ケズリ 頸部一部カキメ状のナデ 内:ナデ	良 硬質 オリーブ黒色	一部褐色灰釉かかる
182	26号横穴墓 玄室内	須恵器	提瓶			幅19 厚13.3		口縁部を除きほぼ完形	外:タタキ後カキメ 内:タタキ後?ナデ 把手なし	良 硬質 灰白～オリーブ黒色	
183	26号横穴墓 玄室内	土師器	甕			24.8		口縁部と底部欠損 体部の約2/3残存	外:ハケ 内:ケズリ	良 軟質 浅黄橙色	外面赤彩 土器枕2所接合
184	26号横穴墓 墓道4層下面	土師器	壺	16.4	12.8	16.2		口縁端約1/2欠損	外:ハケ 内:ケズリ	良 軟質 淡橙色	
185	26号横穴墓 墓道3層	須恵器	提瓶	14.8	(28.8)	幅25 厚(24)		体部の一部欠損	外:タタキ後カキメ 内:背面タタキ・前面ナデ 把手環状	良 硬質 灰黄～灰褐色	提瓶B1
186	26号横穴墓 墓道3層下面	須恵器	横瓶	11.6	33.5	幅46.2 厚29		体部の一部欠損	外:タタキ後カキメ 内:タタキ	良 硬質 灰黄～灰色	
187	26号横穴墓 墓道上層ほか	須恵器	甕	52.6		80		底部欠損 口縁～胴部の約1/2残存	外:口縁波状文3段・沈線8条 体部タタキ 内:体部タタキ	良 硬質 灰白～オリーブ黒色	広範囲の破片接合(9号横穴墓上層・34号横穴墓周辺)
27号横穴墓											
235	27号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.8	4.5			ほぼ完形	外:天井粗雑なケズリ・肩部稜 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A4 土器枕
236	27号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	13.4	4.5			完形	外:天井周辺ケズリ後ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰白～灰色	蓋杯A6※口径はA6より古相 土器枕
237	27号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.4	4.7			完形	外:天井粗雑なケズリ・肩部稜 内:ナデ・口縁沈線	良 硬質 灰～灰白色	蓋杯A4 棺上土器枕
238	27号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	12	4.3	14.4		完形 かえり長:1.2	外:底丁寧なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰褐～灰色	蓋杯A4か 土器枕
239	27号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	10.4	4.1	13.4		完形 かえり長:1.3	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰色	蓋杯A4～6 土器枕
240	27号横穴墓 玄室内ほか	須恵器	提瓶			幅14.4 厚12.1		口縁端と体部の一部欠損	外:カキメ 内:ナデ 把手瘤状	良 硬質 暗灰～灰白色	提瓶B3orAウorCウ 棺上土器枕と墓道上破片接合
28号横穴墓											
245	28号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	14.2	4.5			完形	外:天井粗雑なケズリ・肩部稜 内:ナデ・口縁沈線	良 硬質 灰白～灰色	蓋杯A3～4 ※口径がA4より古相
246	28号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	13	4			完形	外:天井周辺ケズリ・肩部稜 内:ナデ・口縁沈線	良 硬質 灰白～灰色	蓋杯A5
247	28号横穴墓 玄門	須恵器	杯蓋	13.4	4.3			完形	外:天井粗雑なケズリ・肩部稜 内:ナデ・口縁沈線	良 硬質 灰白～暗灰色	蓋杯A4
248	28号横穴墓 墓道2層	須恵器	甕					口縁小片	外:波状文2段以上・沈線4条以上 内:ナデ・口縁沈線	良 硬質 灰黄～灰褐色	
249	28号横穴墓 墓道2層	須恵器	甕			(45)		口縁部と底部欠損 頸部の約1/2 体部の約1/3残存	外:タタキ後カキメ 内:タタキ	やや粗い やや軟質 灰黄～灰色	
250	28号横穴墓 玄室内3層 墓道2層	須恵器	甕	38				口縁部の約1/2 頸～肩部の一部残存	外:口縁波状文2段・沈線4条 体部タタキ 内:体部タタキ	良 硬質 灰褐色	
29号横穴墓											
270	29号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	11.4	4			完形	外:天井粗雑なケズリ・肩部稜 内:ナデ・口縁沈線	良 硬質 灰色	蓋杯A4
271	29号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.8	4.2			約3/4残存	外:天井周辺ケズリ?後ナデ・肩部沈線 内:ナデ	良 硬質 灰白～灰色	蓋杯A6

番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)					調整等	胎土・焼成・色調	型式・その他 ※須恵器型式は大谷1994による
				口径	器高	最大径	脚底径	残存率・その他			
272	29号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.4	4.3	14.4		完形 かえり長:1.4	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A4～5 底外面ヘラ記号「×」
273	29号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.2	3.8	14.2		ほぼ完形 かえり長:1	外:底周辺ケズリ後ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰色	蓋杯A5～6
274	29号横穴墓 玄室内	須恵器	短頸壺	7.4	11.8	15.2		完形	外:肩部刺突文・沈線2条 下半ケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰色	
275	29号横穴墓 玄室内	須恵器	直口壺	8.6	12.5	11.7		完形	外:下半ケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰白～暗灰色	
276	29号横穴墓 墓道1層	須恵器	無蓋高杯	10.3	12.4		脚8.4	ほぼ完形	外:杯部沈線による稜2条 杯底部刺突文・沈線1条 内:ナデ 脚:2段3方向切れ目・方形スカシ	良 硬質 灰黄～灰色	長脚無蓋高杯A4
277	29号横穴墓 墓道1層	須恵器	提瓶			幅(29.8)		体部の約1/3残存	外:タタキ後カキメ 内:タタキ 把手環状	良 やや軟質 灰黄～灰色	提瓶B1?
30号横穴墓											
280	30号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.8	3.8			ほぼ完形	外:天井粗雑なケズリ・肩部稜 内:ナデ	良 硬質 灰色	蓋杯A4
281	30号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.8	4.3			完形	外:天井粗雑なケズリ・肩部稜 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A4
282	30号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12	3.5			ほぼ完形	外:天井周辺ケズリ?後ナデ・肩部稜 内:ナデ	やや粗い 硬質 灰褐～オリーブ黒色	蓋杯A6 天井外面ヘラ記号「×」
283	30号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.6	4.3	14.2		完形 かえり長:1.1	外:底周辺ケズリ?後ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰黄色	蓋杯A4～6 調整風化
284	30号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.2	4.3	14.1		完形 かえり長:1.2	外:ナデ 内:ナデ	やや粗い 硬質 灰白～灰色	蓋杯A4～6
285	30号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11	3.8	13.2		完形 かえり長:1.1	外:ナデ 内:ナデ	やや粗い 硬質 灰色	蓋杯A4～6
286	30号横穴墓 玄室内	須恵器	低脚 無蓋高杯	9.8	8		脚8.1	完形	外:沈線による稜2条 内:ナデ	良 硬質 灰～暗灰色	
287	30号横穴墓 玄室内	須恵器	提瓶			幅16.7 厚15.4		口縁端を除きほぼ完形	外:カキメ 内:ナデ 把手つぶれた環状	良 硬質 灰黄～灰色	提瓶B2orC2
288	30号横穴墓 墓道2層	須恵器	提瓶	14	27.2	幅25.6 厚24.2		ほぼ完形	外:タタキ後カキメ 内:背面タタキ・前面ナデ 把手環状	良 硬質 灰黄～灰色	提瓶B1
31号横穴墓											
289	31号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	13	4.2			完形	外:天井周辺ケズリ?後ナデ・肩部沈線 内:ナデ	良 硬質 灰～暗灰色	蓋杯A6 土器枕
290	31号横穴墓 玄室内	須恵器	杯蓋	12.4 ～ 12.8	4.1			完形	外:天井周辺ケズリ後ナデ・肩部沈線 内:ナデ	やや粗い 硬質 灰～暗灰色	蓋杯A6 土器枕
291	31号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11	4.1	13.8		完形 かえり長:1.3	外:底周辺ケズリ?後ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～暗灰色	蓋杯A6 土器枕
292	31号横穴墓 玄室内	須恵器	杯身	11.2	4.1	13.5		完形 かえり長:1	外:底周辺ケズリ後ナデ 内:ナデ	やや粗い 硬質 灰黄色	蓋杯A6 土器枕
293	31号横穴墓 墓道1層	須恵器	杯蓋	13.4	4.5			完形	外:天井周辺ケズリ?後ナデ・肩部沈線 内:ナデ	良 硬質 灰色	蓋杯A6
294	31号横穴墓 墓道1層	須恵器	杯蓋	13.4	4.7			口縁の約1/3欠損	外:天井周辺ケズリ?後ナデ・肩部沈線 内:ナデ	良 やや軟質 灰黄～灰色	蓋杯A6
295	31号横穴墓 墓道1層	須恵器	杯身	12	4.3	14.4		完形 かえり長:1.2	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰色	蓋杯A6
296	31号横穴墓 墓道1層	須恵器	杯身	(12)		(14.6)		約1/6残存 かえり長:1.1	外:底部周辺ケズリ?後ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰色	受部～内面に赤彩の痕跡
297	31号横穴墓 墓道1層	須恵器	長頸壺	6.8	15.8	10		ほぼ完形	外:頸部カキメ 肩部刺突文2段・沈線3条 下半ケズリ 内:ナデ	やや粗い 硬質 灰白～暗灰色	
298	31号横穴墓 墓道1層	土師器	高杯	18.5	13以上		脚13.4	ほぼ完形	外:ナデ 内:ナデ	やや粗い 軟質 淡橙色	外面と杯部内面に赤彩

番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)					調整等	胎土・焼成・色調	型式・その他 ※須恵器型式は大谷1994による
				口径	器高	最大径	脚底径	残存率・その他			
32号横穴墓											
299	32号横穴墓 玄室内 3層上面	須恵器	杯蓋	11.9	3.7			完形	外:天井粗雑なケズリ・肩部稜 内:ナデ	良 硬質 灰黄～暗灰色	蓋杯A4
300	32号横穴墓 玄室内 3層上面	須恵器	杯蓋	12.1	4.4			完形	外:天井特に粗雑なケズリ・肩部沈線 内:ナデ・口縁沈線	やや粗い 硬質 暗灰色	蓋杯A4 土器枕
301	32号横穴墓 玄室内 3層上面	須恵器	杯蓋	13.2	4.5			完形	外:天井周辺ケズリ・肩部稜 内:ナデ	良 硬質 灰～灰褐色	蓋杯A5 土器枕
302	32号横穴墓 玄室内 3層上面	須恵器	杯身	11.1	4	13.8		完形 かえり長:1.2	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰色	蓋杯A4～5
303	32号横穴墓 玄室内 3層上面	須恵器	杯身	10.2	3.7	13		完形 かえり長:1.1	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰～暗灰色	蓋杯A4～5 土器枕
304	32号横穴墓 玄室内 3層上面	須恵器	杯身	11.2	3.4	13.8		完形 かえり長:0.9	外:底周辺ケズリ?後ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰褐～暗灰色	蓋杯A5～6 土器枕
33号横穴墓											
306	33号横穴墓 玄室内 12層上面	須恵器	提瓶	(9.8)	27.3	幅22.8 厚15.7		口縁の約5/6を欠く 体部完形	外:タタキ後カキメ 内:タタキ後ナデ? 把手環状	良 硬質 灰～オリーブ黄色	提瓶Aアに似る 口縁形態特殊(水平に拡張) 緑色灰釉かかる
310	33号横穴墓 1b層・3層	須恵器	甕	(44)				口縁のみ約1/4残存	外:刺突文2段・沈線5条 内:ナデ	良 硬質 暗灰～オリーブ黄色	緑色灰釉かかる
311	33号横穴墓 1b層	須恵器	甕	(20.4)				口縁のみ約1/7残存	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰～オリーブ黄色	緑色灰釉かかる
312	33号横穴墓 1b層	須恵器	甕					口縁小片	外:波状文 内:ナデ	良 硬質 灰～オリーブ黒色	
313	33号横穴墓 1b層ほか	須恵器	甕	18		(44.4)		約1/2残存	外:タタキ後カキメ 内:タタキ	良 硬質 灰～オリーブ黒色	広範囲の破片接合(SX10溝内・12・22～24号横穴墓周辺)
314	33号横穴墓 1b層ほか	須恵器	甕			60		体部のみ約1/2残存	外:タタキ 内:タタキ	良 硬質 灰白～灰色	広範囲の破片接合(12号横穴墓周辺・27号横穴墓周辺)
315	33号横穴墓 1b層ほか	須恵器	甕	(50)		74.2		胴部～頸部約2/3 口縁端約1/5残存	外:口縁波状文2段・沈線5条・体部タタキ 内:体部タタキ	良 硬質 灰黄～灰色	34号横穴墓上層出土片接合
34号横穴墓											
316	34号横穴墓 玄室内 3層上面付近	須恵器	杯蓋	13	4.3			完形	外:天井周辺ケズリ?後ナデ・肩部稜 内:ナデ	良 硬質 灰色	蓋杯A6 外側面ヘラ記号「／|＼」
317	34号横穴墓 玄室内 4層上面付近	須恵器	杯身	11.6	4.3	14		完形 かえり長:1	外:底粗雑なケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A4～5
318	34号横穴墓 玄室内 4層上面付近	須恵器	杯身	12.2	4.4	14.7		完形 かえり長:1	外:底周辺ケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A4～6
319	34号横穴墓 玄室内 4層上面付近	須恵器	杯身	10.2	3.9	13		完形 かえり長:1.2	外:底周辺ケズリ 内:ナデ	やや粗い 硬質 灰～暗灰色	蓋杯A4～6
320	33号横穴墓 玄室内 4層上面付近	須恵器	杯身	11.8	4.1	14.5		完形 かえり長:1.4	外:底周辺ケズリ?後ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰～暗灰褐色	蓋杯A4～6
321	33号横穴墓 玄室内 3層上面付近	須恵器	杯身	11.2	4.2	13.8		ほぼ完形 かえり長:1.1	外:底周辺ケズリ?後ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰白～灰色	蓋杯A4～6
SX10											
325	SX10溝内	須恵器	甕			(48)		胴部のみ1/4～1/5残存	外:タタキ後一部カキメ 内:タタキ	良 硬質 灰黄～灰色	
遺構外											
327	9, 11～13号 横穴墓周辺	須恵器	杯蓋	13.8	3.9			約2/3残存	外:天井粗雑なケズリ・肩部稜 内:ナデ	良 硬質 灰黄～暗灰褐色	蓋杯A4
328	14～17号 横穴墓周辺	須恵器	杯蓋	(12.8)	4.4			約1/2残存 (口縁端約2/5)	外:天井やや粗雑なケズリ・肩部稜 内:ナデ・口縁沈線	良 硬質 灰～暗灰色	蓋杯A4
329	14～17号 横穴墓周辺	須恵器	杯蓋	(12)	4.4			約2/3残存 (口縁端約1/5)	外:天井やや粗雑なケズリ・肩部稜 内:ナデ・口縁沈線	良 硬質 灰黄～暗灰色	蓋杯A4
330	9, 11～13号 横穴墓周辺	須恵器	杯蓋	12.6	4.2			約3/4残存	外:天井粗雑なケズリ・肩部稜 内:ナデ・口縁太い沈線	良 硬質 灰白～灰黄色	蓋杯A4
331	14～17号 横穴墓周辺	須恵器	杯蓋	(12.8)	4.1			約2/3残存 (口縁端約1/4)	外:天井周辺ケズリ・肩部稜 内:ナデ・口縁沈線	良 硬質 灰黄～暗灰色	蓋杯A5

番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)					調整等	胎土・焼成・色調	型式・その他 ※須恵器型式は大谷1994による
				口径	器高	最大径	脚底径	残存率・その他			
332	14～17号 横穴墓周辺	須恵器	杯蓋	10.2	3.6			完形	外:ナデ(天井未調整) 内:ナデ	良 硬質 灰黄～暗灰色	蓋杯A8
333	14～17号 横穴墓周辺	須恵器	杯蓋	10.2	3.7			約1/2残存	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A8
334	9, 11～13号 横穴墓周辺	須恵器	杯蓋	10.1 ～10.9	4.1			約3/4残存	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A8 天井外面ヘラ記号「｜」
335	9, 11～13号 横穴墓周辺	須恵器	杯身	11.6	3.8	14.4		約1/2残存 かえり長:1.3	外:粗雑なケズリ 内:ナデ	良 やや軟質 灰黄色	蓋杯A4～5
336	34号横穴墓 周辺	須恵器	杯身	11	4	13.6		ほぼ完形 かえり長:1.3	外:底周辺ケズリ後ナデ 内:ナデ	良 やや軟質 灰黄色	蓋杯A5～6 底外面ヘラ記号「×」
337	南向斜面	須恵器	杯身	8.8	3.2	11.1		約3/4残存 かえり長:0.7	外:ナデ(底未調整) 内:ナデ	良 硬質 灰白～灰黄色	蓋杯A8 底外面ヘラ記号「×」
338	1～6号横穴 墓 周辺	須恵器	杯身	9.5	3.8	12		約2/3残存 かえり長:0.7	外:ナデ 内:ナデ	良 硬質 灰黄～灰色	蓋杯A8
339	南向斜面	須恵器	杯身	9.3	3.6	11.8		約1/2残存 かえり長:0.8	外:ナデ(底未調整) 内:ナデ	良 硬質 灰白～灰色	蓋杯A8
340	9, 11～13号 横穴墓周辺	須恵器	無蓋高杯	11.4	12.8		脚9.4	口縁端約1/3脚端約1/4 を除きほぼ完形	外:杯部沈線1条 杯底部刺突文 内:ナデ 脚:2段3方向三角形スカシ	良 硬質 灰～オリーブ黒色	長脚無蓋高杯A2
341	14～17号 横穴墓周辺	須恵器	椀	9.4	4.9	10.6		約1/2残存	外:下半ケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰白～暗灰色	
342	34号横穴墓 下方斜面	須恵器	瓶	10	14.6	体8.3	底4.4	口縁端約1/2を除き ほぼ完形	外:口縁波状文・沈線1条 体部刺突文・沈線2条 下半ケズリ 内:ナデ	良 硬質 灰白～灰色	瓶A4
343	南向斜面	須恵器	瓶	(11.8)	13.8	体9.5	底5	口縁端約2/3を除き ほぼ完形	外:口縁沈線2条 体部刺突文・沈線2条 下半ケズリ 内:ナデ	やや粗い 硬質 灰～暗灰色	瓶A6 底外面ヘラ記号「×」
344	14～17号 横穴墓周辺	須恵器	提瓶	15.6	27.3	幅24.9 厚23.5		口縁端約1/3と体部の一 部を欠損	外:タタキ後カキメ　浅い 沈線2条 内:タタキ後ナデ 把手環状	良 硬質 灰白～暗灰色	提瓶B1
345	14～17号 横穴墓周辺	須恵器	提瓶	(5.3 ～6.8)	15.8	幅12 厚(9.5)		口縁端約3/4と体部の約 1/2欠損	外:前面カキメ・背面ナデ 内:ナデ 把手瘤状	良 硬質 暗灰色	提瓶Cエ
346	SX10周辺	土師器	甕	(22.6)		(32.2)		口縁約1/6 体部約1/4残存	外:ナデ 内:ケズリ	やや粗い 軟質 明赤褐色～橙色	
347	34号横穴墓 周辺	埴輪	円筒埴輪					口縁小片	外:ナナメハケ 内:ナナメハケ	良 軟質 橙色	風化
348	27号横穴 墓周辺	埴輪	円筒埴輪					タガ接合部小片 タガ高:1.7	外:ナナメハケ 内:ナナメハケ	良 やや軟質 明赤褐色	
349	2～6号横穴 墓 下方	弥生土器	甕	15				口縁～肩部の約1/2残 存	外:ハケ 内:ケズリ	良 軟質 にぶい黄橙色	風化
350	1～6号横穴 墓 周辺	弥生土器	低脚杯				脚6.4	脚部のみ約1/2残存	外:ナデ 内:ナデ	良 軟質 にぶい黄橙色	風化
351	1～6号横穴 墓 周辺	土師質土器	小皿	7.8	1.5		底5.4	口縁端約1/2欠損	外:ナデ 内:ナデ　底回転糸切	良 やや軟質 にぶい橙～黄橙 色	
352	ST3周辺	土師質土器	小皿	7.1	1.7～2		底5.2	完形	外:ナデ 内:ナデ　底静止糸切	良 やや軟質 にぶい橙～黄橙 色	
353	ST3周辺	土師質土器	小皿	7.3	1.2～2		底5.8	完形	外:ナデ 内:ナデ　底静止糸切	良 やや軟質 にぶい橙～黄橙 色	

表８　出土玉類観察表

番号	出土地点	種別	材質	色調	法量(mm)					備　　考
					長	幅(径)	厚	孔径	その他	
26号横穴墓										
201	26号横穴墓玄室内	勾玉	水晶	白色 半透明	26	16.5	9.5	1.5 ～ 3		片面穿孔
202	26号横穴墓 玄室内	勾玉	瑪瑙	白橙色	22	13.5	7.5	1 ～ 2.5		片面穿孔
203	26号横穴墓 玄室内	勾玉	瑪瑙	淡白橙色	20.5	11	6.5	1 ～ 2		片面穿孔
204	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	淡青緑色 半透明		2	3	1		ソーダガラス　引き伸ばし
205	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	淡青色透明		4.5	2.5	1		ソーダガラス　引き伸ばし
206	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	淡青色透明		4.5 ～ 5.5	3	1.5 ～ 2		ソーダガラス　引き伸ばし
207	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	淡青色透明		4	3	1.5		ソーダガラス　引き伸ばし
208	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	淡青色透明		4	2	1		ソーダガラス　引き伸ばし
209	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	淡青色透明		3.5	2	1		ソーダガラス　引き伸ばし
210	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	淡青色透明		4	2	1		ソーダガラス　引き伸ばし
211	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	淡青色透明		3.5	2	1.5	約1/4欠損	ソーダガラス　引き伸ばし
212	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	淡青色透明		4.5	2	1		ソーダガラス　引き伸ばし
213	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	紺色透明		3.5 ～ 4	3	1		ソーダガラス　引き伸ばし
214	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	紺色透明		4	2	1		ソーダガラス　引き伸ばし
215	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	紺色透明		4	3	1		ソーダガラス　引き伸ばし
216	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	紺色透明		3.5	1.5	1		ソーダガラス　引き伸ばし
217	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	紺色透明		3 ～ 4	2	1.5		ソーダガラス　引き伸ばし
218	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	紺色透明		4	2.5	1 ～ 1.5		ソーダガラス　引き伸ばし
219	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	紺色透明		4	1.5	1		ソーダガラス　引き伸ばし
220	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	紺色透明		4	2.5	1		ソーダガラス?　鋳型
221	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	紺色透明		4	2.5	1.5		ソーダガラス　引き伸ばし
222	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	紺色透明		4	3	1		ソーダガラス　引き伸ばし
223	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	濃青色 半透明		3	2	1		ソーダガラス　引き伸ばし
224	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	濃青色 半透明		3 ～ 4	1.5 ～ 3	1		ソーダガラス　引き伸ばし
225	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	濃青～黒色 半透明		3 ～ 4	2	1.5		ソーダガラス　引き伸ばし
226	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	淡青色透明		3.5	2	1		ソーダガラス　引き伸ばし
227	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	淡青緑色半透明		4	2	1.5		ソーダガラス　引き伸ばし
228	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	淡緑色透明		4	2.5	1		ソーダガラス　引き伸ばし
229	26号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	黄緑色 不透明		4	2	1		ソーダガラス　引き伸ばし
230	26号横穴墓 玄室内	丸玉	ガラス	紺色透明		7.5	5 ～ 6	1.5 ～ 2		ソーダガラス　引き伸ばし
231	26号横穴墓 玄室内	丸玉	ガラス	濃青色 半透明?		7.5	6 ～ 6.5	1.5 ～ 2		カリガラス　引き伸ばし
232	26号横穴墓 玄室内	丸玉	ガラス	紺色透明		6.5	3 ～ 4	2 ～ 2.5		ソーダガラス　引き伸ばし
233	26号横穴墓 玄室内	丸玉	ガラス	淡青色透明		6	5	2		カリガラス　引き伸ばし
234	26号横穴墓 玄室内	丸玉	ガラス	淡青色透明		7	5 ～ 6	2 ～ 2.5		カリガラス　引き伸ばし
28号横穴墓										
264	28号横穴墓 玄室内	管玉	碧玉	暗緑色	30	5		2 ～ 3.5		両面穿孔
265	28号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	淡青色透明		4	2 ～ 2.5	1.5		ソーダガラス　引き伸ばし
266	28号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	淡青色 半透明		5.5	4	2		ソーダガラス　引き伸ばし
267	28号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	紺色透明		4.5	3	1 ～ 1.5		ソーダガラス　引き伸ばし

番号	出土地点	種別	材質	色調	法量(mm)					備　　考
					長	幅(径)	厚	孔径	その他	
268	28号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	紺色透明		4	2.5	1～1.5		ソーダガラス　引き伸ばし
269	28号横穴墓 玄室内	小玉	ガラス	淡青緑色 半透明		3	2	1		ソーダガラス　引き伸ばし
遺構外										
354	7～10号横穴墓周辺排土	丸玉	ガラス	緑色透明		9.5	3～5	4		鉛ガラス　巻き付け 表面に風化した白色ガラス層

表９　出土金属器観察表

番号	出土地点	種別	法量(cm)					備　　考
			長	幅	厚	その他	残存率等	
1号横穴墓								
9	1号横穴墓 玄室内	大刀	残73.0	3.4	0.7	刃部残長62.3 茎部残長10.7 鑵長2.4幅3.6厚2.35	刃部端･茎部端欠損	片関,目釘穴2所 鑵残存 鞘の木質わずかに残存
10	1号横穴墓 玄室内	鍔	8.8	7.6	0.5 ～0.75		ほぼ完形	6窓 縁部断面T字状
11	1号横穴墓 玄室内	鉄鏃	16.8	3.5	0.4	刃部残長8.65 頸部長2.90 茎部長6.35	鏃身部の一部欠損	腸抉柳葉鏃
12	1号横穴墓 玄室内	鉄斧	10.7	4.9	2.7		完形	有肩袋状　袋部断面楕円形 不明鉄製品小片付着
13	1号横穴墓 玄室内	銀環	左右 2.8	上下 2.55	0.7	開き部厚0.7×0.5	表面一部欠損	銅芯銀板貼
14	1号横穴墓 玄室内	銀環	左右 3.0	上下 2.7	0.8	開き部厚0.7×0.5	表面一部欠損	銅芯銀板貼
5号横穴墓								
35	5号横穴墓 玄室内流入土	金環	左右 2.05	上下 1.95	0.75	開き部厚0.6×0.5	表面一部欠損	銅芯銀板貼鍍金
6号横穴墓								
40	6号横穴墓 玄室内流入土	耳環	左右 残2.35	上下 残2.10	残0.3		腐食した銅芯部の み残存	
7号横穴墓								
62	7号横穴墓 玄室内	銀環	左右 2.4	上下 2.2	0.8	開き部厚0.7×0.5	表面一部欠損	銅芯銀板貼 対になる耳環と思われる銅芯,銀板細片が別途付近より出土
10号横穴墓								
91	10号横穴墓 玄室内	刀子	残3.75	1.5	0.5		刃部小片	鞘の木質わずかに残存
92	10号横穴墓 玄室内	金環	左右 2.4	上下 2.2	0.7	開き部厚0.7×0.4	表面一部欠損	銅芯銀板貼鍍金
93	10号横穴墓 玄室内	金環	左右 1.4	上下 1.3	0.3	開き部厚0.3×0.2	表面一部欠損	銅芯銀板貼鍍金
94	10号横穴墓 玄室内	金環	左右 1.4	上下 1.3	0.3		表面一部と開き部端 欠損	銅芯銀板貼鍍金
12号横穴墓								
99	12号横穴墓 玄室内	鍔	残7.3	(6.6)	0.3		約1/2残存	大刀に装着状態で出土 無窓 端部断面L字状
100	12号横穴墓 玄室内	大刀	残86.4	3.7	0.7	刃部長79.9 茎部残長6.5 鑵長1.5幅3.7厚(2.6)	茎部端わずかに欠 損	片関,目釘穴1所 目釘･鑵残存 鞘･束の木質一部残存
13号横穴墓								
114	13号横穴墓 玄室内	不明鉄製 品	5.8 4.3	1.85 1.40	0.3 0.3		ほぼ完形?	鎹状製品2本 木質一部残存
115	13号横穴墓 1層上層	銀環	左右 3.3	上下 2.8	0.7	開き部厚0.7×0.6	表面一部欠損	銅芯銀板貼 混入品
20号横穴墓								
143	20号横穴墓 玄室内	銀環	左右 3.1	上下 (2.7)	0.8	開き部厚0.8×0.6	一部欠損	銅芯銀板貼
144	20号横穴墓 玄室内	銀環	左右 3.0	上下 2.65	0.8	開き部厚0.7×0.5	一部欠損	銅芯銀板貼
21号横穴墓								
145	21号横穴墓 玄室内	刀子	残11.2	1.6	0.4	刃部残長3.6 茎部残長7.6	刃部一部欠損	両関 鞘･束の木質一部残存
146	21号横穴墓 玄室内	銀環	左右 3.2	上下 2.85	0.7	開き部厚0.7×0.6	表面一部欠損	銅芯銀板貼
23号横穴墓								
159	23号横穴墓 玄室内	刀子	残3.75	0.7	0.3		茎部の一部のみ残 存	柄の木質一部残存
160	23号横穴墓 墓道5層上面	耳環	左右 残2.6	上下 残2.3	残0.6		銅芯部のみ残存	

番号	出土地点	種別	法量(cm)					備　　考
			長	幅	厚	その他	残存率等	
24号横穴墓								
165	24号横穴墓 墓道5層	刀子	残7.4	1.3	0.3	刃部残長3.2 茎部長4.2 鑢長0.7幅1.6厚1.4	刃部一部欠損	両関 鑢残存 柄の木質一部残存
166	24号横穴墓 玄室内	銀環	左右 2.6	上下 2.3	0.55	開き部厚0.6×0.4	完形	銅芯銀板貼
167	24号横穴墓 墓道5層	銀環	左右 3.0	上下 2.3	0.55	開き部厚0.7×0.6	一部欠損 破損による歪み有	銅芯銀板貼
25号横穴墓								
171	25号横穴墓 玄室内	大刀	残41.5	3.2	8.5	刃部長32.8 茎部残長8.7 鑢長1.5幅3.4厚2.5	茎部端欠損	両関か,目釘穴1所 鑢残存 柄の木質,糸巻き一部残存
172	25号横穴墓 玄室内	轡	鏡板 7.8 8.6 銜 17.2 引手 17.5 18.6 連結環 径3.2 径3.2	8.5 8.1	0.8 0.8 断面1.0 断面1.0 断面1.0 断面0.9 断面0.9		ほぼ完形	矩形立聞式環状鏡板付轡
26号横穴墓								
188	26号横穴墓 玄室内	大刀	38.6	2.6	0.7	刃部長29.9 茎部長8.7 鑢長2.5幅2.9厚1.9	ほぼ完形	両関,目釘穴1所 鑢残存 鞘･柄の木質一部残存
189	26号横穴墓 玄室内	刀子	12.6	1.5	0.5		刃部の一部と茎部欠損	
190	26号横穴墓 玄室内	刀子	11.2	0.9	0.25	刃部長6.8 茎部長4.4 鑢長0.6幅1.2厚0.9	完形	両関 鑢残存 鞘･柄の木質一部残存
191	26号横穴墓 玄室内	鉄斧	15.8	5.4	4.0		完形	有肩袋状　袋部断面楕円形
192	26号横穴墓 玄室内	金環	左右 3.0	上下 2.7	0.8	開き部厚0.8×0.5	開き部表面一部欠損	銅芯銀板貼鍍金
193	26号横穴墓 玄室内	金銅製 歩揺	3	1.45	0.25	孔径0.15	一部欠損	銅板内外面鍍金 孔に繊維状の痕跡?
194	26号横穴墓 玄室内	金銅製 歩揺	(3)	1.3	0.2	孔径0.2	一部欠損	銅板内外面鍍金
195	26号横穴墓 玄室内	金銅製 歩揺	(3)	(1.4)	0.2	孔径0.2	一部欠損	銅板内外面鍍金
196	26号横穴墓 玄室内	金銅製 歩揺	(2.6)	1.2	0.2	孔径0.15	一部欠損	銅板内外面鍍金
197	26号横穴墓 玄室内	金銅製 歩揺	2.55	(1.2)	0.2	孔径0.2	一部欠損	銅板内外面鍍金
198	26号横穴墓 玄室内	金銅製 歩揺	残2.25	1.35	0.25	孔径0.15	約1/4欠損	銅板内外面鍍金
199	26号横穴墓 玄室内	金銅製 歩揺	残2.1	1.3	0.2		約1/3欠損	銅板内外面鍍金
200	26号横穴墓 玄室内	金銅製 歩揺	残2.1	残1.0	0.15		約1/2欠損	銅板内外面鍍金
27号横穴墓								
241	27号横穴墓 玄室内棺上	銀環	左右 2.6	上下 2.4	0.7	開き部厚0.7×0.4	完形	銅芯銀板貼
242	27号横穴墓 玄室内棺上	銀環	左右 2.8	上下 2.45	0.6	開き部厚0.6×0.5	完形	銅芯銀板貼
243	27号横穴墓 墓道上1層	鉄鏃	残7.1	1.7	0.3	刃部長5.1 頸部長2.0	茎部欠損	ナデ関三角形鏃 混入品の可能性あり
244	27号横穴墓 墓道上1層	鉸具	7.6	4.5	1.4	輪金具厚0.5～0.7		混入品の可能性あり
28号横穴墓								
251	28号横穴墓 玄室内	鉄鏃	残6.3	1.7	0.3	刃部長4.4 頸部残長1.9	頸部の一部と茎部欠損	三角形鏃
252	28号横穴墓 玄室内	鉄鏃	残5.5	1.6	0.4	刃部長3.9 頸部残長1.6	頸部の一部と茎部欠損	三角形鏃
253	28号横穴墓 玄室内	鉄鏃	残6.7	1.8	0.3	刃部長4.8 頸部残長1.9	頸部の一部と茎部欠損	三角形鏃
254	28号横穴墓 玄室内	鉄鏃	残6.8	1.5	0.35	刃部長4.6 頸部残長2.2	頸部の一部と茎部欠損	三角形鏃
255	28号横穴墓 玄室内	鉄鏃	残6.3	1.7	0.3	刃部長4.5 頸部残長1.8	頸部の一部と茎部欠損	三角形鏃
256	28号横穴墓 玄室内	鉄鏃	残5.8	1.4	0.3	刃部長4.6 頸部残長1.2	頸部の一部と茎部欠損	三角形鏃
257	28号横穴墓 玄室内	鉄鏃	残5.15	1.5	0.35	刃部長4.55 頸部残長0.6	頸部の一部と茎部欠損	三角形鏃
258	28号横穴墓 玄室内	鉄鏃	残3.9	1.45	0.3	刃部残長1.9 頸部残長2.0	刃部の一部と茎部欠損	三角形鏃?

番号	出土地点	種別	法量(cm)					備　　考
			長	幅	厚	その他	残存率等	
259	28号横穴墓 玄室内	鉄鏃	残2.3	残0.8	0.4	頸部残長1.5 茎部残長0.8	関部周辺のみ残存	矢柄,樹皮巻き一部残存
260	28号横穴墓 玄室内	鉄鏃	残3.0	残0.55	0.35		茎部のみ残存	木質樹皮巻き一部残存
261	28号横穴墓 玄室内	不明鉄製品	残2.25	0.8	1.0		端部のみ残存	内部に径0.3cm程度の刺突痕跡有 外面木質に覆われる
262	28号横穴墓 玄室内	銀環	左右 3.2	上下 2.8	0.8	開き部厚0.8×0.65	表面わずかに欠損	銅芯銀板貼
263	28号横穴墓 玄室内	銀環	左右 3.1	上下 2.8	0.6	開き部厚0.8×0.6	一部欠損	銅芯銀板貼
29号横穴墓								
278	29号横穴墓 玄室内	銀環	左右 残2.8	上下 残2.3	0.6		外縁部の大部分欠損	銅芯銀板貼
279	29号横穴墓 玄室内	耳環	残1.4		残0.3		銅芯部小片	
未掲載	29号横穴墓 玄室内	金薄片					小片	
31号横穴墓								
305	31号横穴墓 玄室内	刀子	残8.9	1.3	0.35	刃部残長2.9 茎部長6.8	刃部一部欠損	両関 柄の木質一部残存
32号横穴墓								
307	33号横穴墓 墓道上3層	鉄鏃	9.55	3.1	0.4	刃部長3.5 頸部長3.3 茎部長3.75	完形 茎部端やや潰れる	三角形鏃 茎部矢柄一部残存
308	33号横穴墓 墓道上3層	鉄鏃	残5.4	(3.3)	0.35	刃部長3.2 頸部残長2.2	頸部の一部と茎部欠損	三角形鏃
309	33号横穴墓 墓道上3層	鉄鏃	残6.0	残0.8	0.35		頸部のみ残存	長頸鏃
ST1								
322	ST1底面	銅製 飾金具	飾(1.6) 環径1.7	(1.8)	0.9 0.3		一部欠損	表面黒漆塗木質残存 煙草盆か
323	ST1底面	銅製煙管	6.6		径1.0	火皿径1.2	雁首完形	羅宇一部残存 包布付着
ST5								
324	ST5底面	用途不明鉄製品	残7.6	2.1	0.6		一部欠損	錆薄板状に付着
SX10								
326	SX10 小穴前方流土	鉄斧	7.5	4	1.5		完形	無肩袋状　袋部断面長方形
遺構外								
355	6号横穴墓付近	銅製煙管	3.1		径1.0	火皿径1.2	雁首ほぼ完形	羅宇一部残存

写　真　図　版

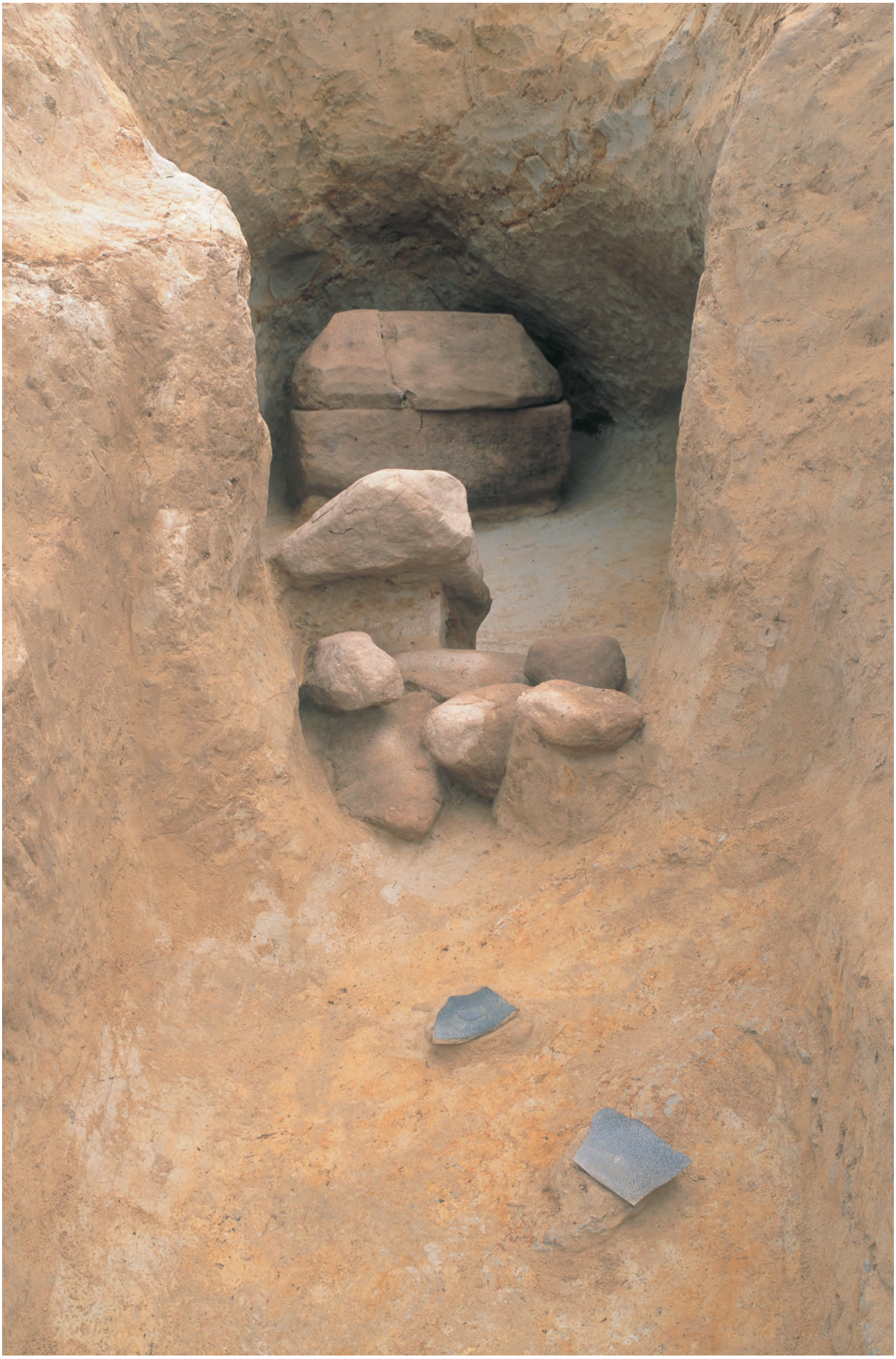
●建物の縮尺については以下のとおりである。

土　器：S≒１／３を基本とし，その他の縮尺の場合は各図版は表示。

金属器：各図版に表示。

玉　類：各図版に表示。

●図版中の遺物番号は挿図・遺物観察表の番号に対応する。



33号横穴墓

カラー図版２

20号横穴墓

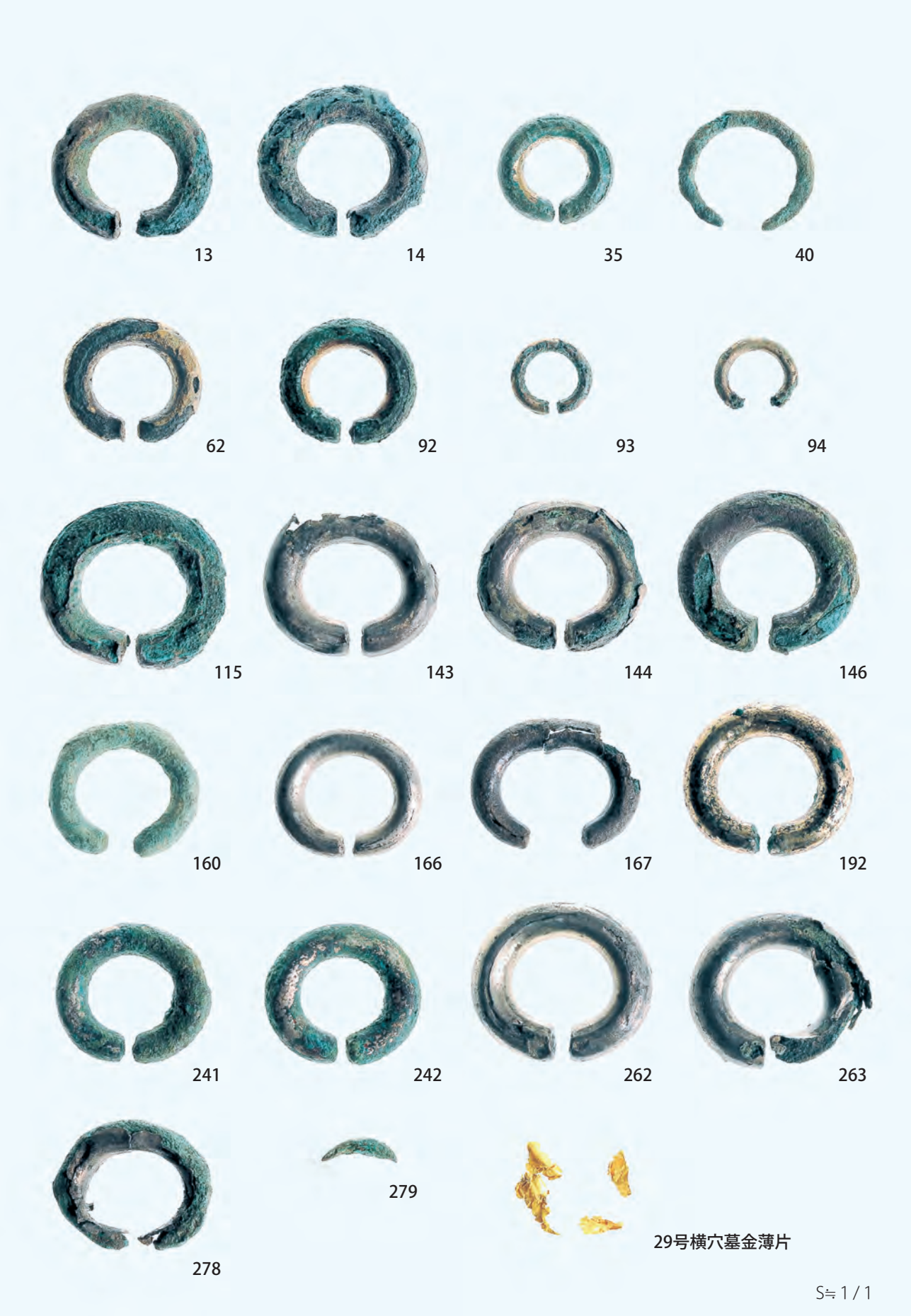
26号横穴墓

27号横穴墓

28号横穴墓

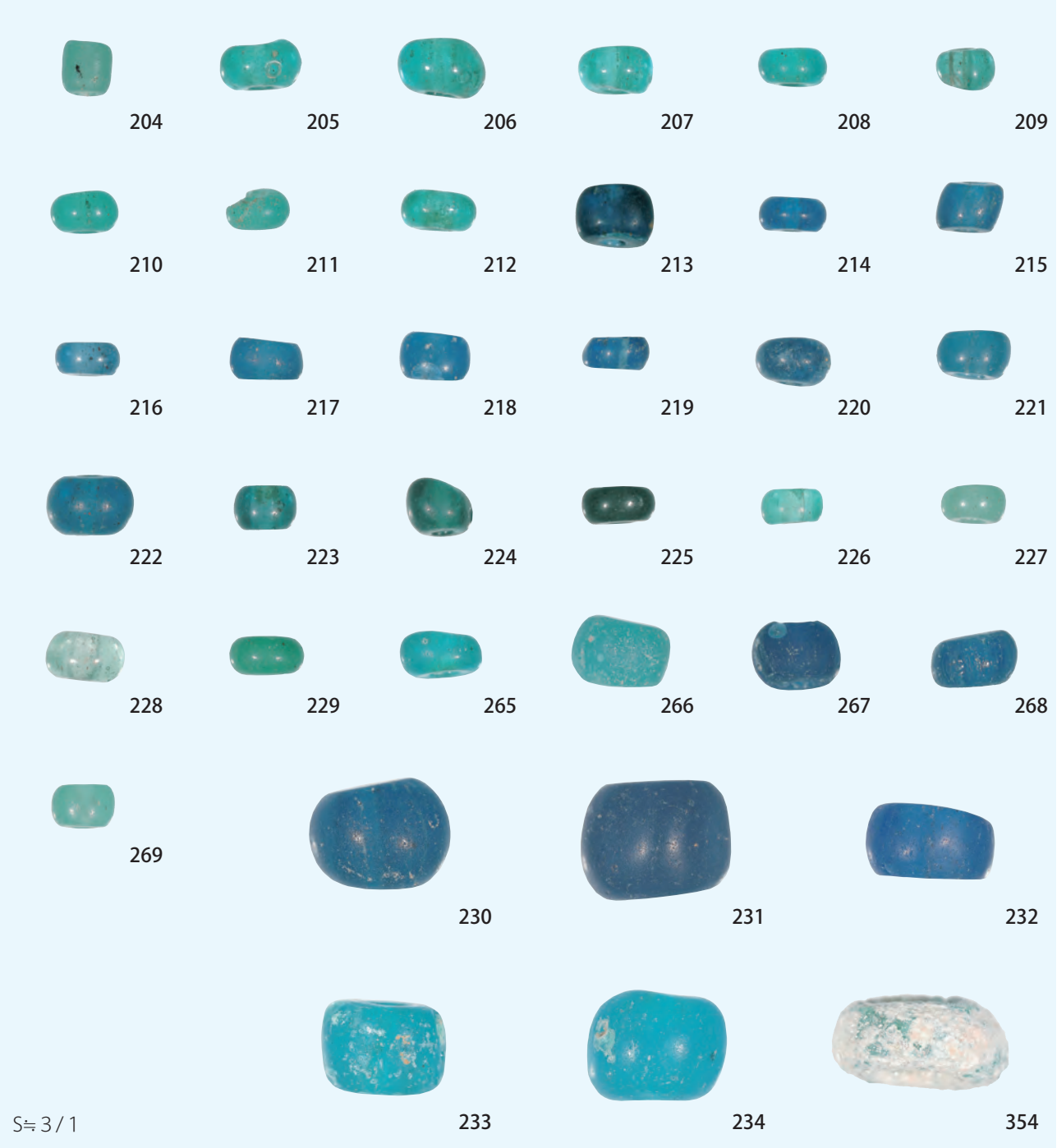
横穴墓出土大刀（9・10：１号，99・100：12号，171：25号，188：26号）

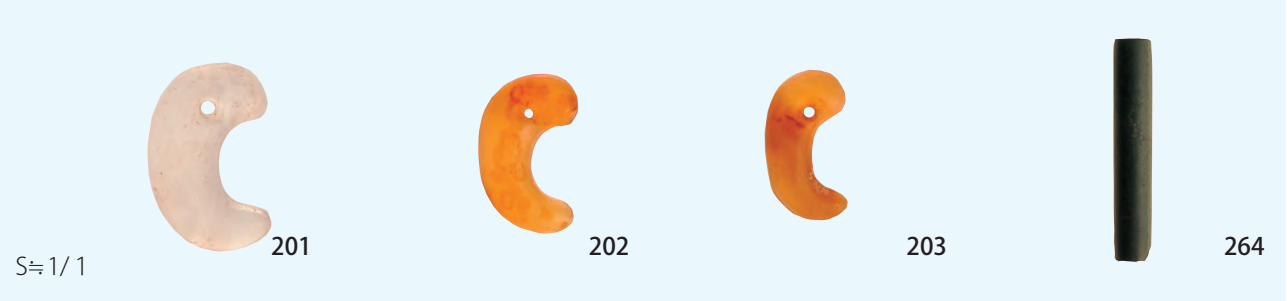
26号横穴墓出土歩揺



横穴墓出土耳環ほか

（13・14：1号，35：5号，40：6号，62：7号，92～94：10号，115：13号，143・144：20号，146：21号，160：23号，166・167：24号，192：26号，241・242：27号，262・263：28号，278・279：29号，番外：29号）





出土玉類（201 ～ 234：26号横穴墓，264 ～ 269：28号横穴墓，354：遺構外）
※ガラス玉類撮影：奈良文化財研究所

26号横穴墓出土須恵器

調査前全景（南西より）

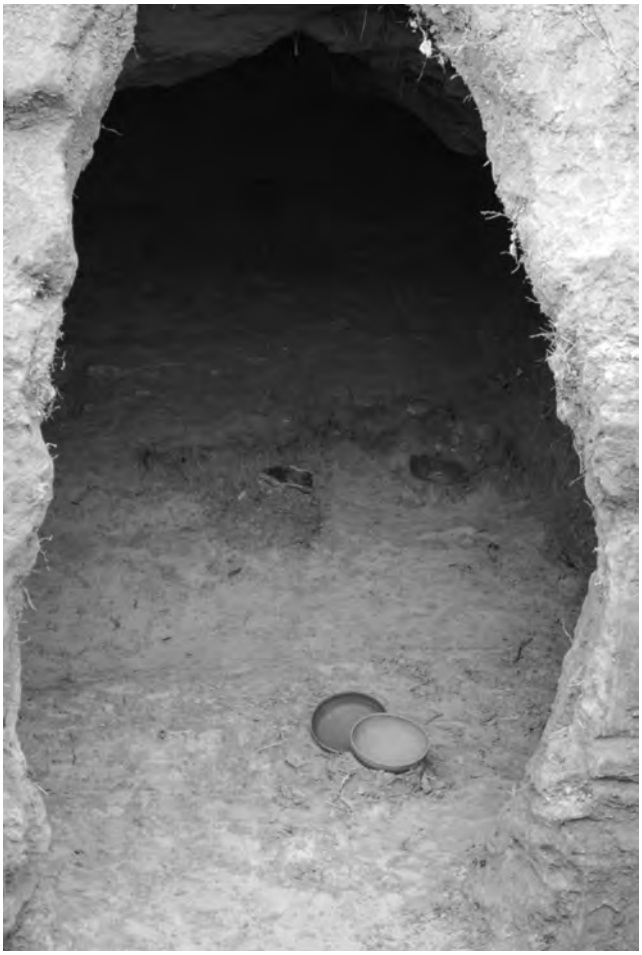
調査前全景（調査地丘陵尾根より西を望む）

図版２

７～34号横穴墓（南西より）

１～６号横穴墓（南より）

1 号横穴墓

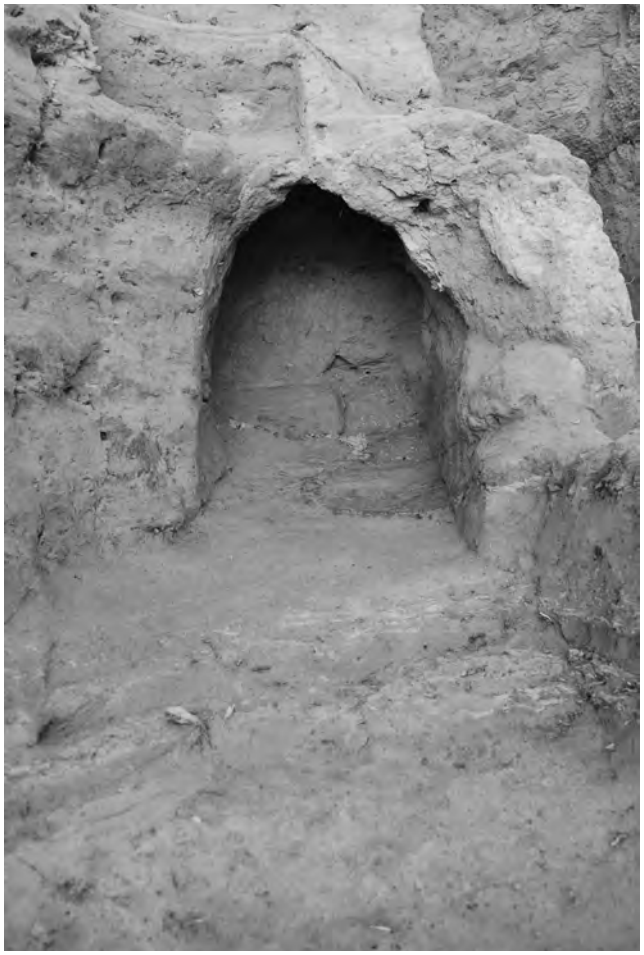


1号横穴墓玄室内遺物出土状況

1 号横穴墓玄室

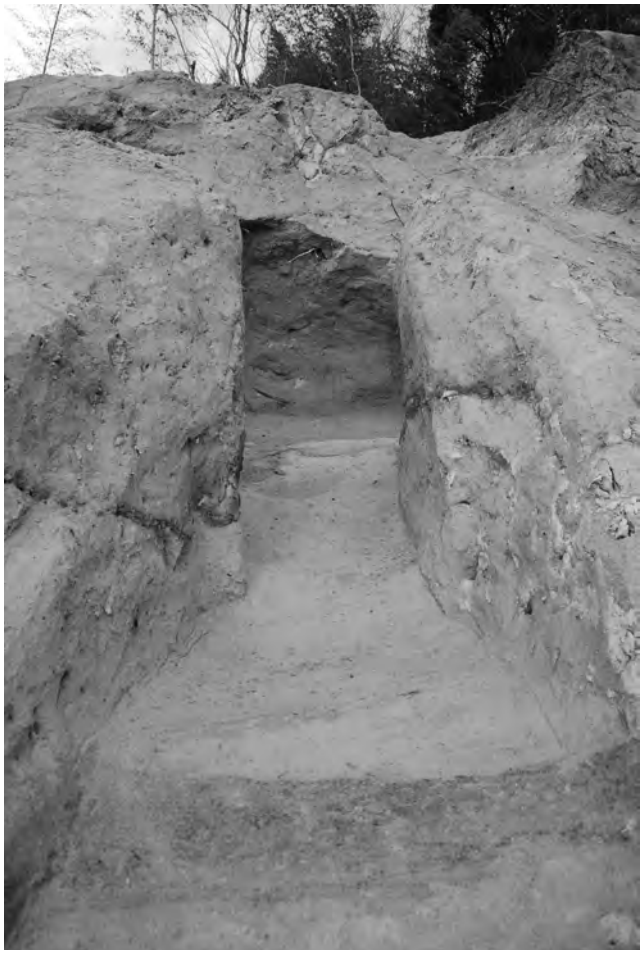
図版４

2号横穴墓

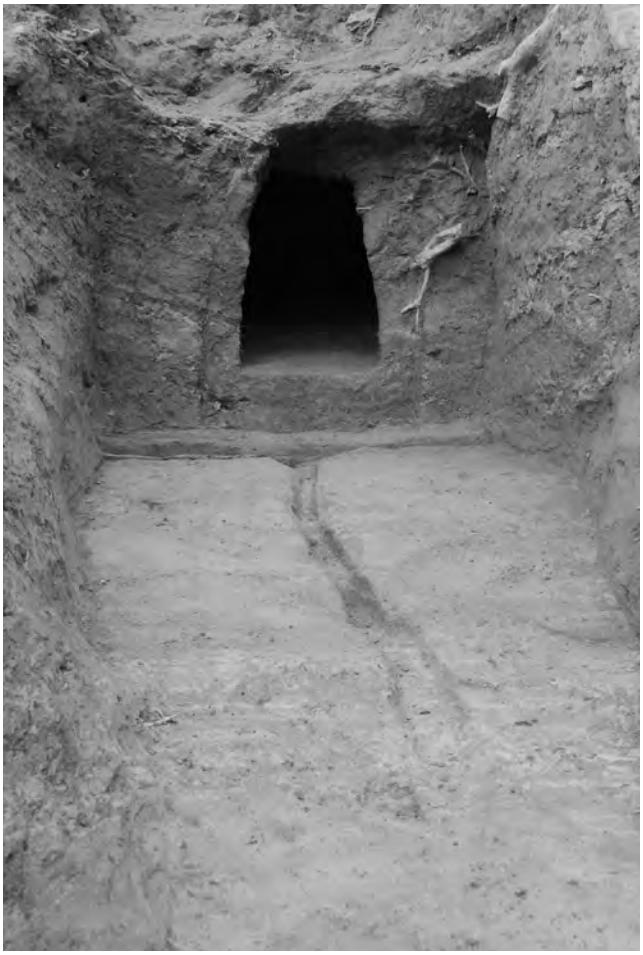


3号横穴墓

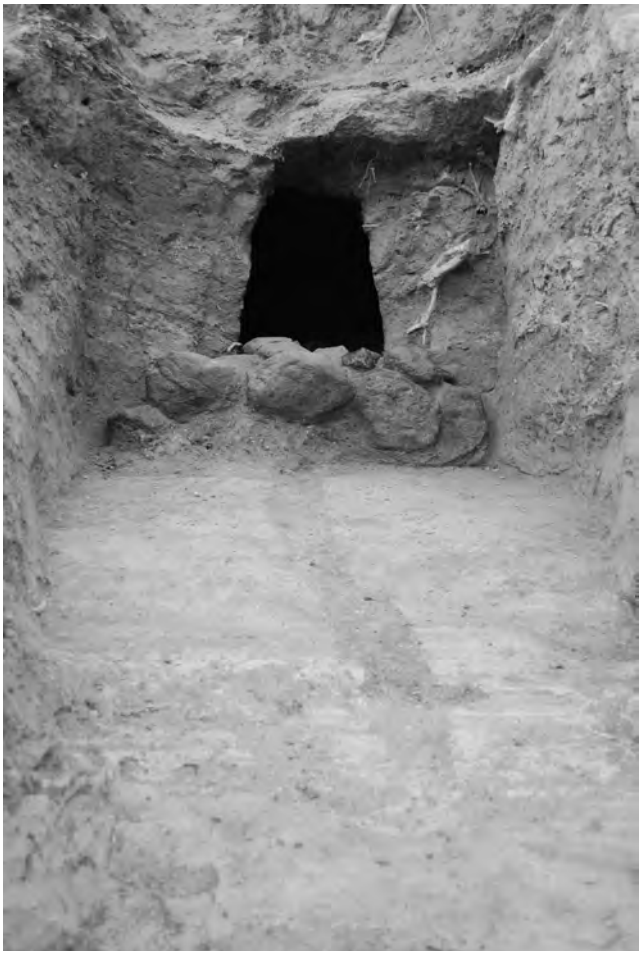
４号横穴墓



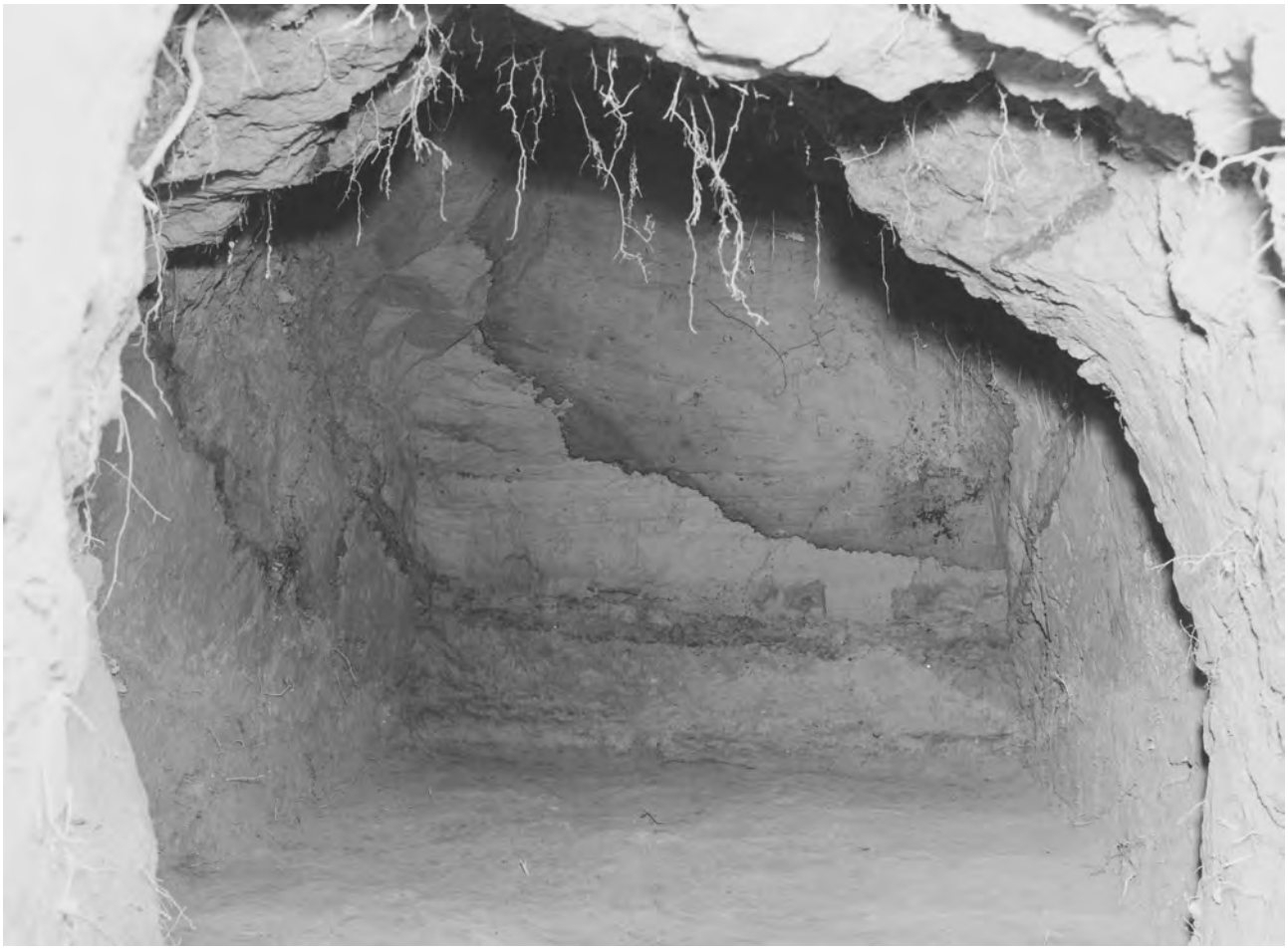
５号横穴墓



6 号横穴墓



6 号横穴墓閉塞状況



6 号横穴墓玄室

7～21号横穴墓（南より）

7号横穴墓

7号横穴墓閉塞状況

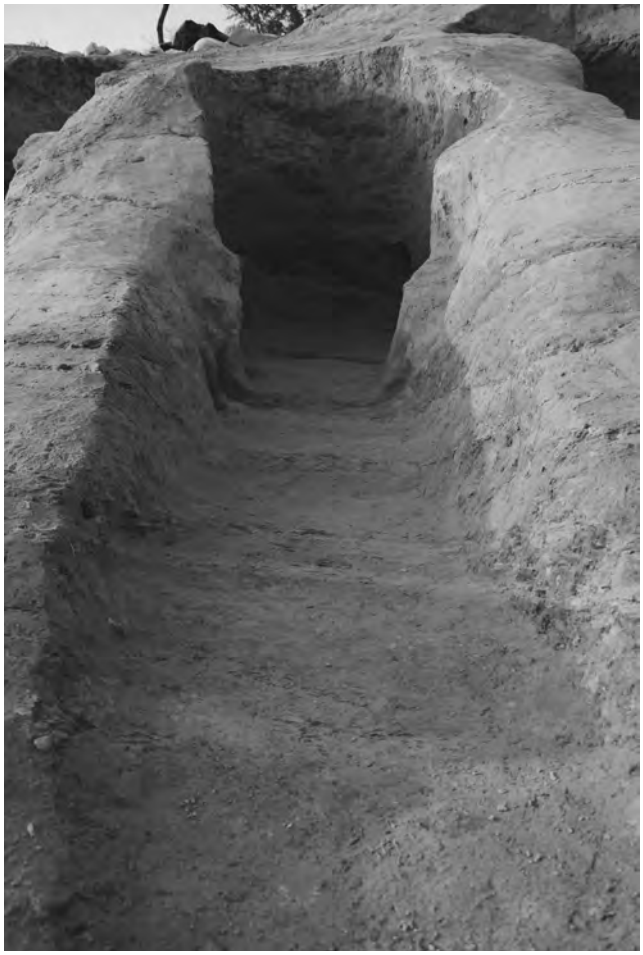
7 号横穴墓玄室

図版８

８号横穴墓

８号横穴墓玄室内遺物出土状況

８号横穴墓玄室



９号横穴墓

９号横穴墓 墓道遺物出土状況・閉塞状況

9号横穴墓玄室

図版10

10号横穴墓

10号横穴墓閉塞状況

10号横穴墓玄室

11号横穴墓

11号横穴墓 墓道遺物出土状況・閉塞状況

11号横穴墓玄室

12号横穴墓

12号横穴墓玄室

13号横穴墓

13号横穴墓 前庭遺物出土状況・閉塞状況

13号横穴墓玄室（左が奥壁）

14・15号横穴墓

15号横穴墓閉塞石検出状況

15号横穴墓玄室

16号横穴墓

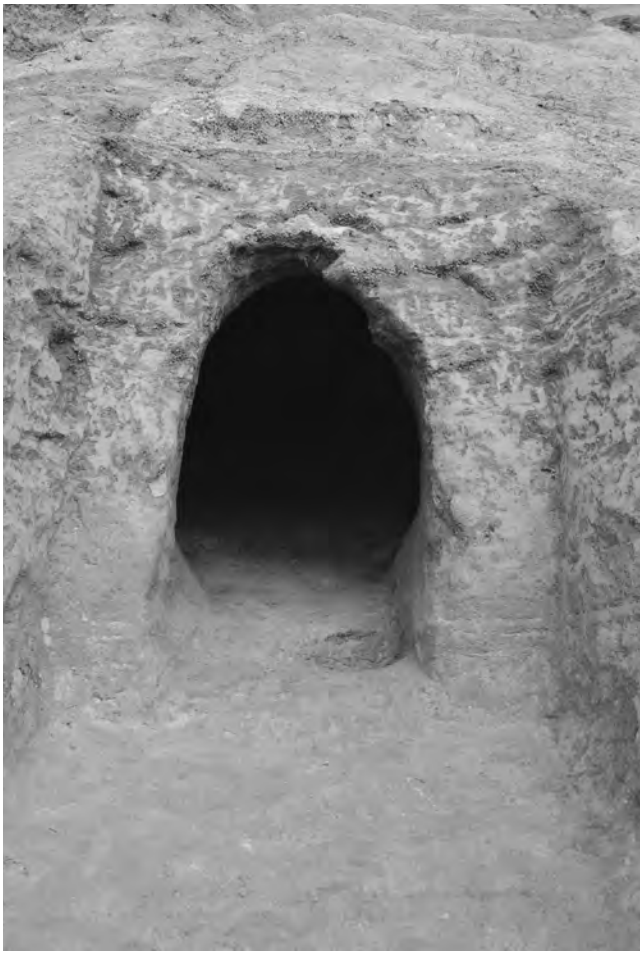
16号横穴墓閉塞石検出状況

16号横穴墓玄室

17号横穴墓

19号横穴墓

18号横穴墓玄室



20号横穴墓

20号横穴墓閉塞状況

20号横穴墓玄室

21号横穴墓

21号横穴墓玄室

22 ～ 34号横穴墓（西より）

22号横穴墓

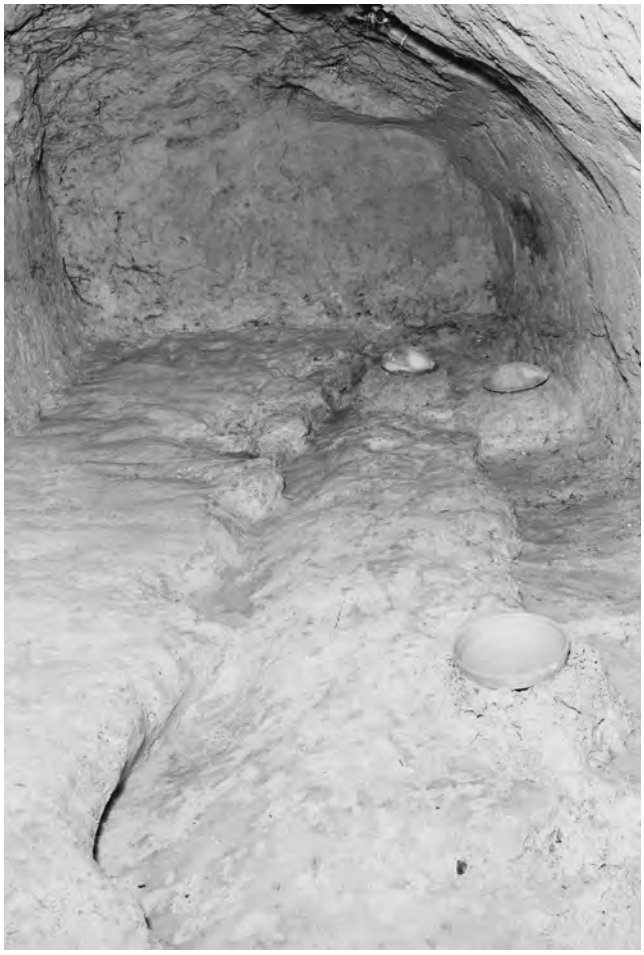
22号横穴墓墓道遺物出土状況

22号横穴墓玄室

23号横穴墓

23号横穴墓玄室

24号横穴墓



24号横穴墓玄室

25号横穴墓

25号横穴墓玄室（左上が奥壁）

26号横穴墓

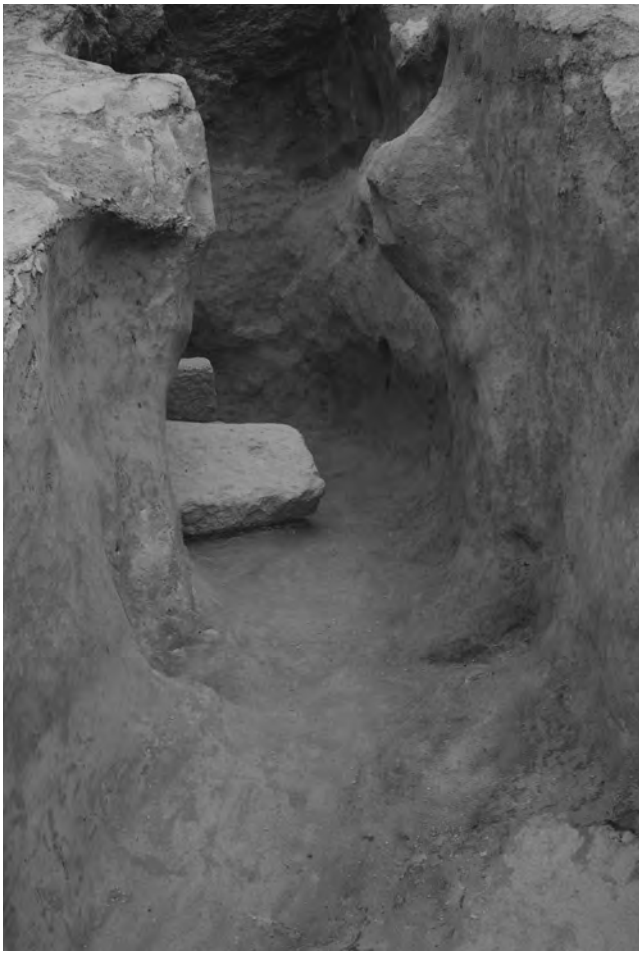
26号横穴墓閉塞状況

26号横穴墓玄室

26号横穴墓閉塞石最下段

26号横穴墓 墓道遺物出土状況

26号横穴墓 墓道上遺物出土状況



27号横穴墓

27号横穴墓閉塞状況

27号横穴墓玄室

28号横穴墓

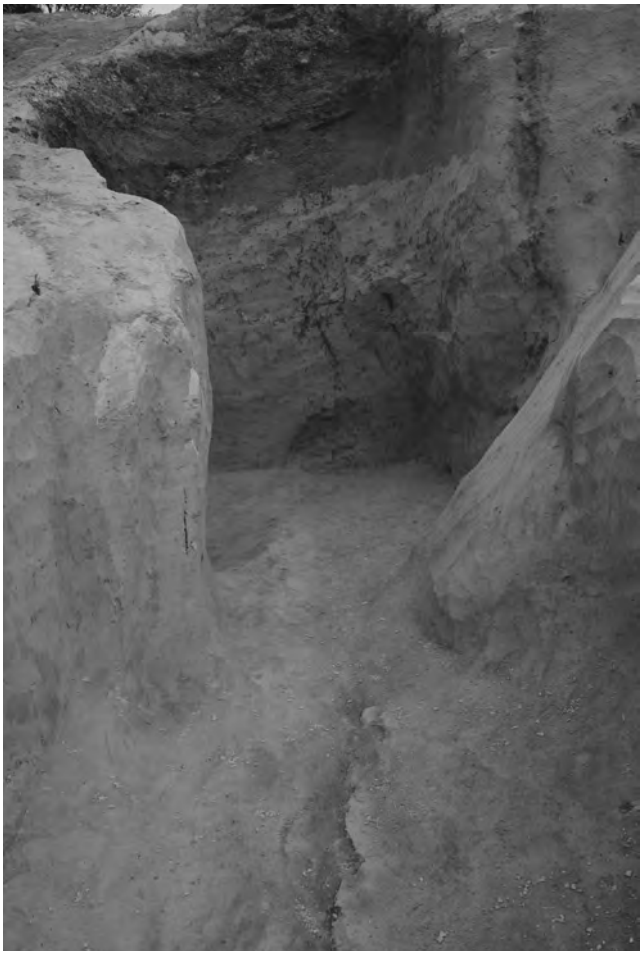
28号横穴墓閉塞石検出状況

28号横穴墓玄室

29号横穴墓

29号横穴墓閉塞石検出状況

29号横穴墓玄室

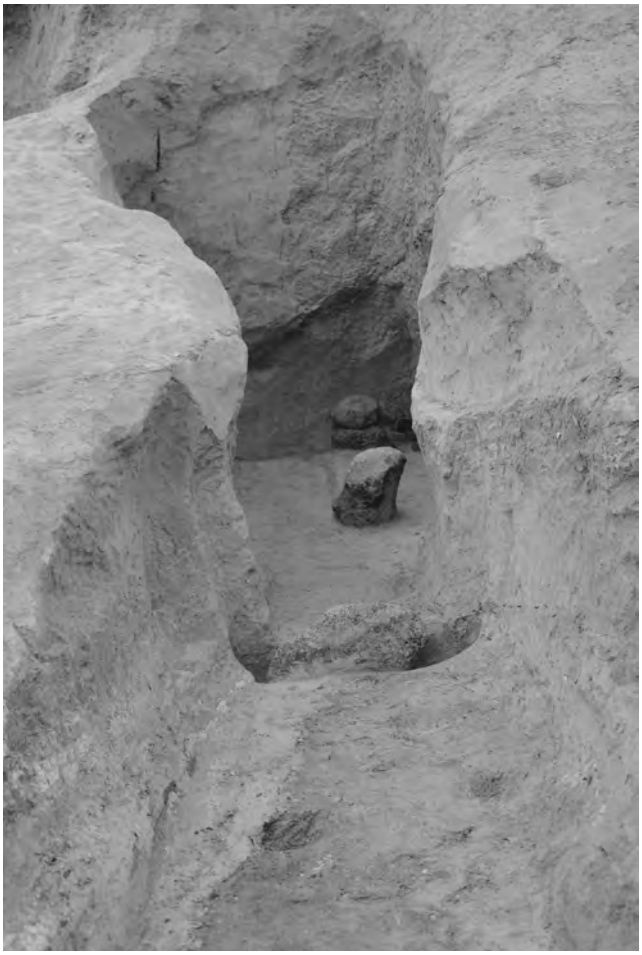


30号横穴墓（玄門右壁崩落）

30号横穴墓 墓道遺物出土状況・閉塞石検出状況

30号横穴墓玄室・玄門閉塞石

30号横穴墓玄室内遺物出土状況

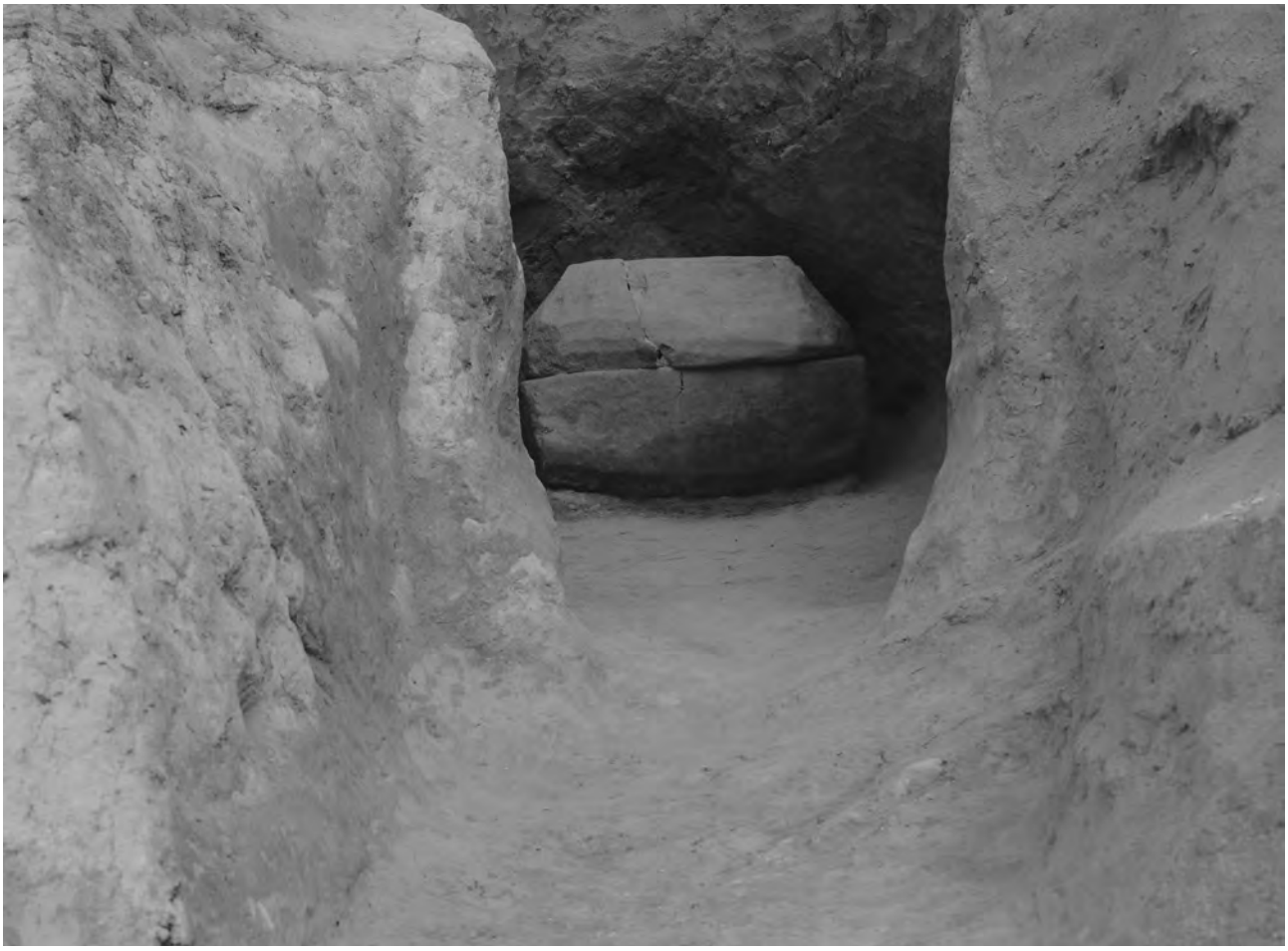


31号横穴墓

31号横穴墓 墓道遺物出土状況（上方が玄門）

31号横穴墓玄室

32号横穴墓



33号横穴墓

33号横穴墓閉塞状況-1

33号横穴墓閉塞状況-2

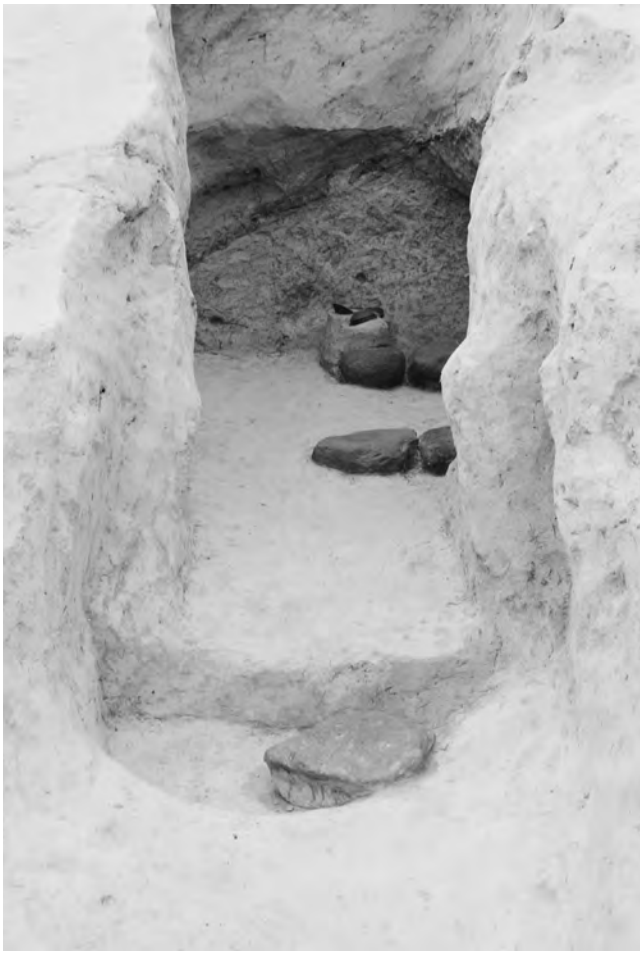
33号横穴墓玄室

33号横穴墓石棺－1

33号横穴墓石棺－2

33号横穴墓石棺背面遺物出土状況

33号横穴墓玄室内土層堆積状況



34号横穴墓

34号横穴墓玄室

35（奥）・36（手前）号横穴墓検出状況（東より）

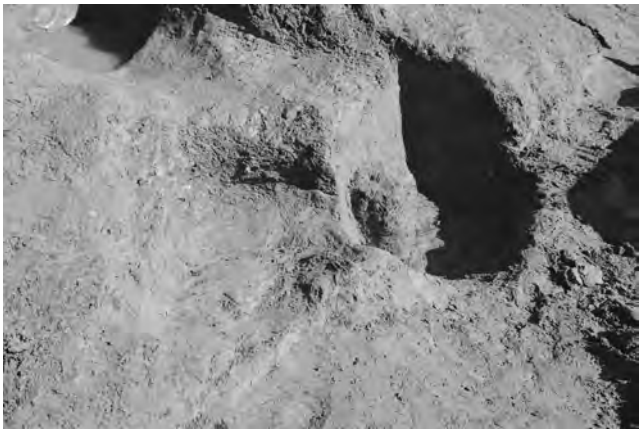
35（手前）・36（奥）号横穴墓検出状況（西より）

ピット群（西より）

ST１（東より）

ST２（左）・３（右）土層堆積状況（西より）

ST４（南より）



ST５（左）・６（右）（南より）

ST７（南西より）

SK８（南西より）

SD９（西より）

SX10（南西より）

SX10溝内遺物出土状況

SX10溝内土層堆積状況

1

2

3

1号横穴墓出土土器

15

16

2号横穴墓出土土器

18

3号横穴墓出土土器

19

21

23

20

22

24

25

27

29

26

28

30

4号横穴墓出土土器

31

32

33

34

5号横穴墓出土土器

37

38

39

6号横穴墓出土土器

41

43

44

42

45

46

49

47

48

7号横穴墓出土土器－1

50

51

52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

7号横穴墓出土土器－2

63

64

67

65

66

8号横穴墓出土土器

69

70

71

9号横穴墓出土土器－1

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

83

9号横穴墓出土土器－2

84

86

88

85

87

89

10号横穴墓出土土器

95

96

97

11号横穴墓出土土器

98

101

104

102

103

105

106

107

108

109

111

112

12・13号横穴墓出土土器（98のみ12号横穴墓）

116

117

118

15号横穴墓出土土器

120

121

124

122

123

16号横穴墓出土土器

127

128

129

130

131

132

18号横穴墓出土土器

133

134

135

136

137

138

139

140

141

142

20号横穴墓出土土器

147

148

151

149

150

152

22号横穴墓出土土器－1

153

154

155

22号横穴墓出土土器－２

156

157

158

23号横穴墓出土土器

161

162

163

164

24号横穴墓出土土器

168

169

170

25号横穴墓出土土器

173

174

179

175

176

177

178

180

182

181

26号横穴墓出土土器－1

26号横穴墓出土土器－2

26号横穴墓出土土器－3

27号横穴墓出土土器

245

246

247

248

249

250

28号横穴墓出土土器

270

271

272

273

276

29号横穴墓出土土器－1

274

275

29号横穴墓出土土器－２

280

281

282

283

284

285

286

S≒1/4
287

S≒1/4
288

30号横穴墓出土土器

289

290

293

291

292

294

295

296

298

297

31号横穴墓出土土器

299

300

301

302

303

304

32号横穴墓出土土器

33号横穴墓出土土器－1

33号横穴墓出土土器－２

34号横穴墓出土土器

327

328

329

330

335

336

337

331

332

333

334

338

339

341

340

342

343

遺構外出土土器－1

344

346

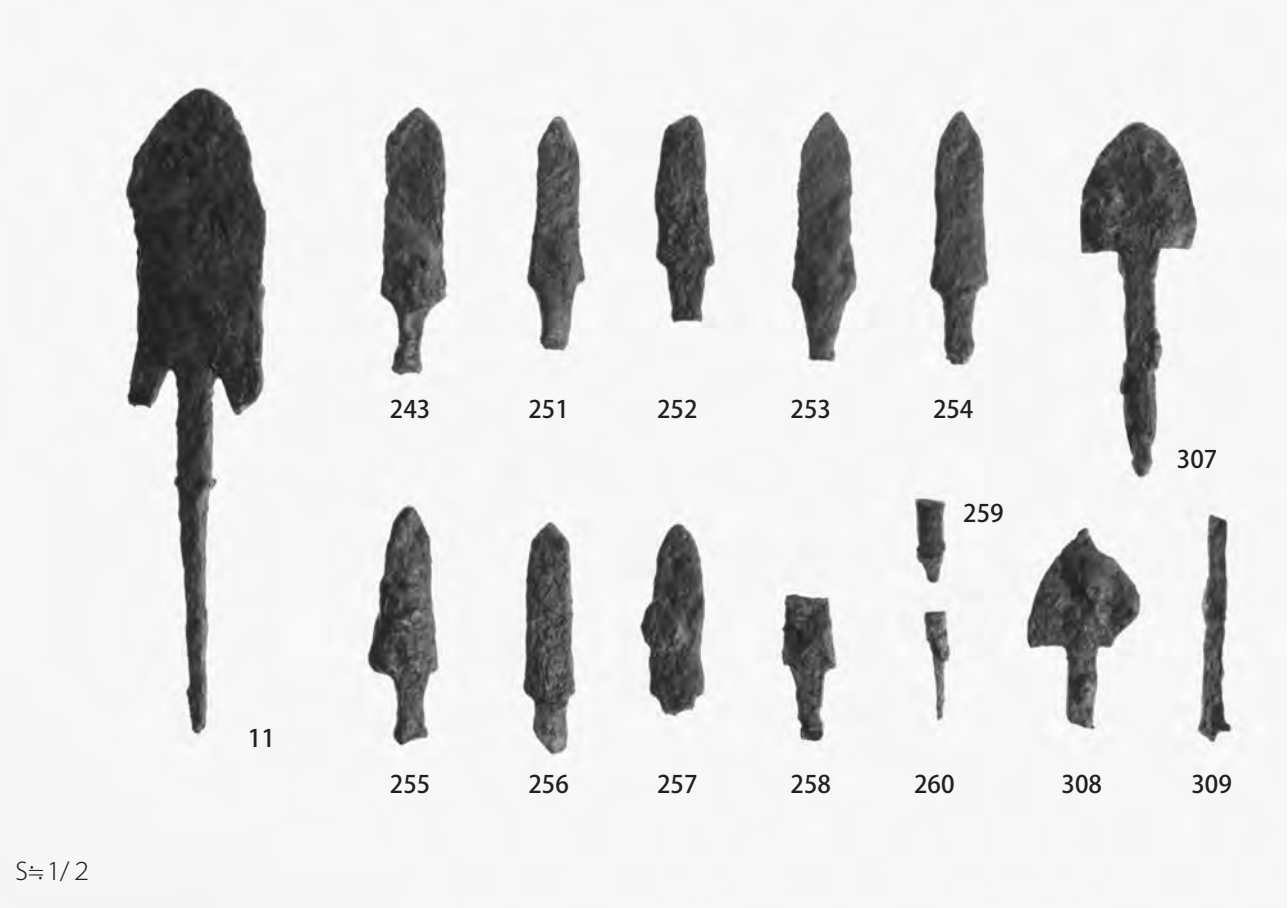
345

349

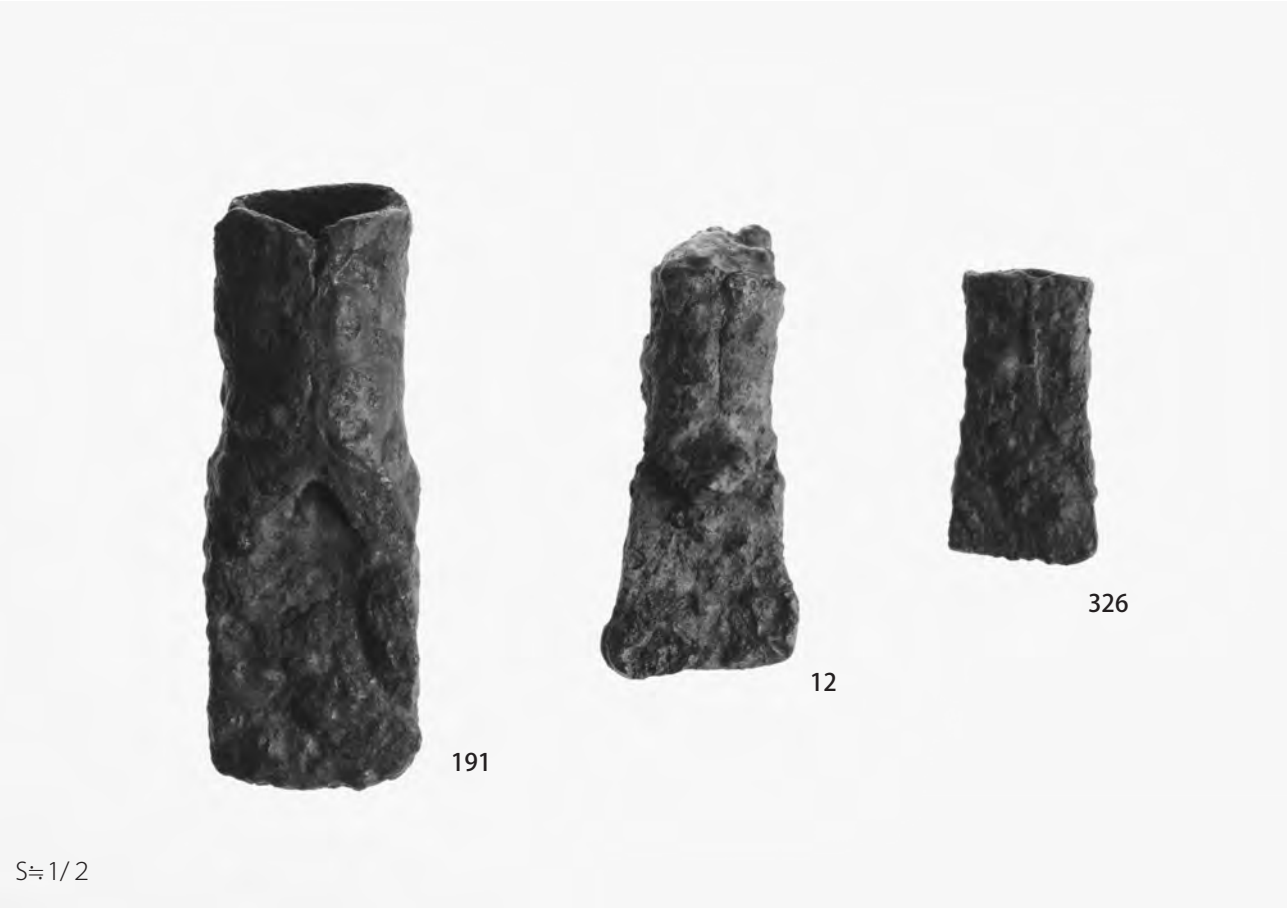
遺構外出土土器－２

出土金属器－1（9・10：1号横穴墓，99・100：12号横穴墓）

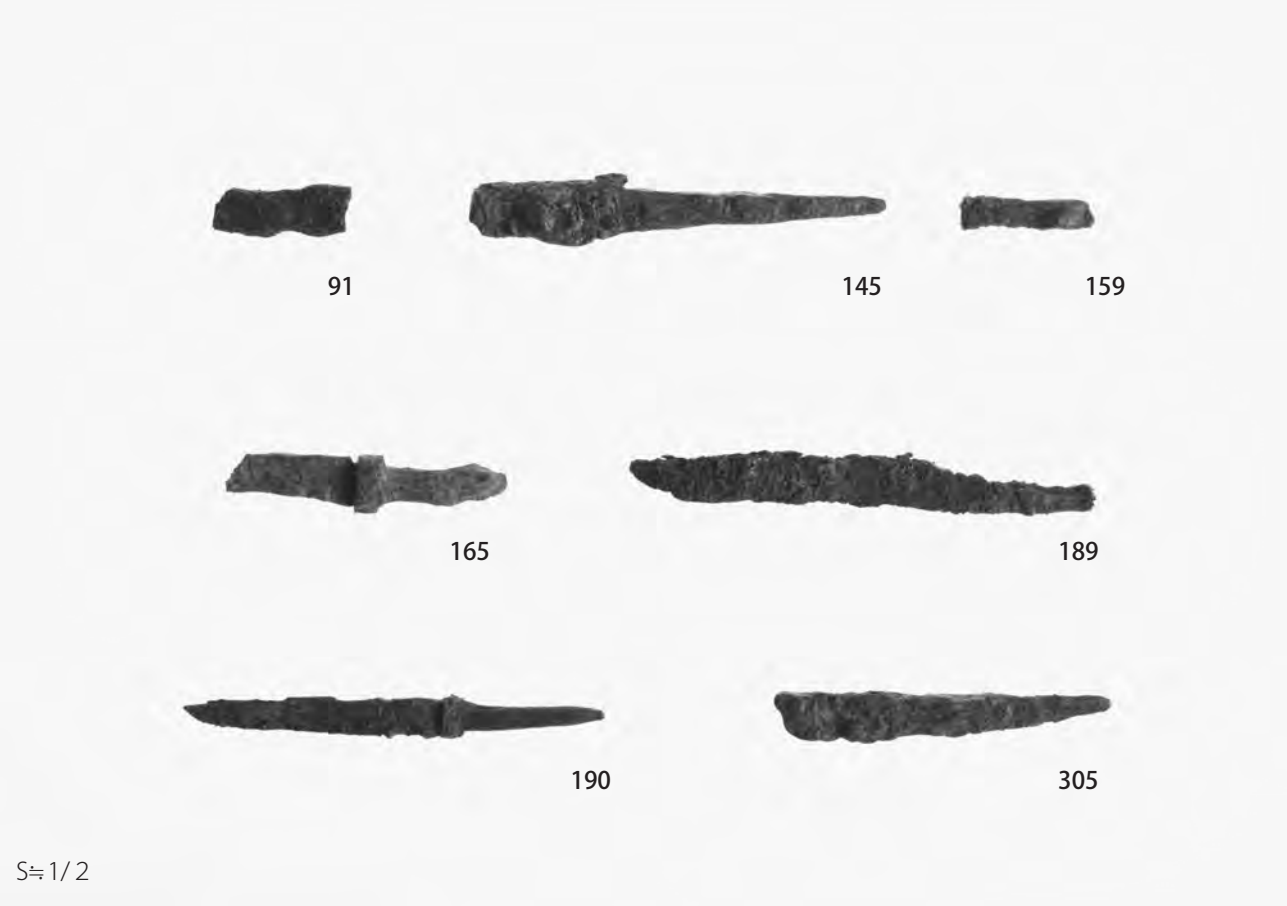
出土金属器－2（171・172：25号横穴墓，188：26号横穴墓，244：27号横穴墓）



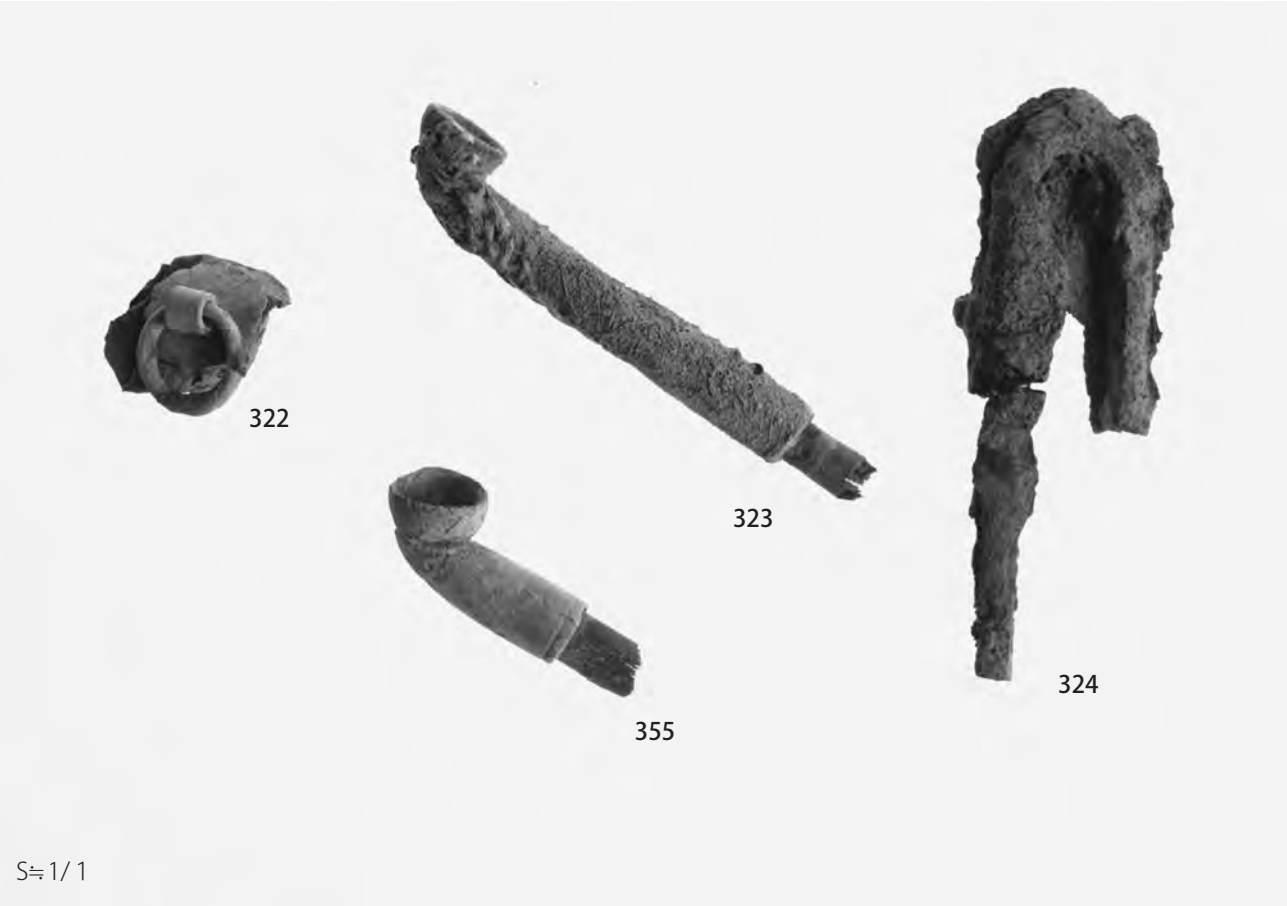
出土金属器－3
（11：1号横穴墓，243：27号横穴墓，251～260：28号横穴墓，307～309：33号横穴墓）



出土金属器－4（191：26号横穴墓，12：1号横穴墓，326：SX10）

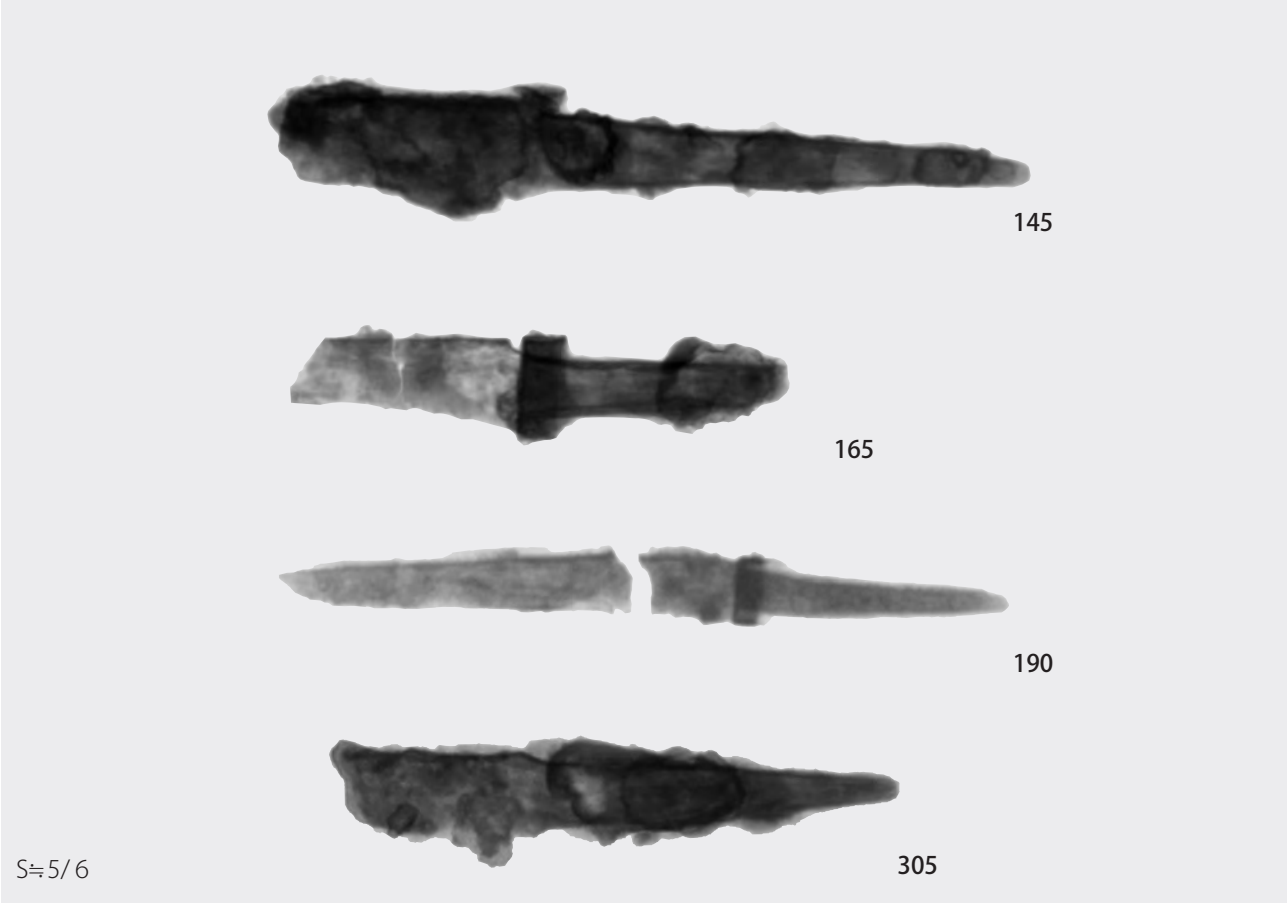


出土金属器－5
（91：10号横穴墓，145：21号横穴墓，259：23号横穴墓，165：24号横穴墓，189・190：26号横穴墓，305：31号横穴墓）



出土金属器－6（322・323：ST 1，324：ST 5，355：遺構外）

金属器X線写真－1



金属器X線写真－2

報告書抄録

フリガナ	カミエンヤヨコアナボグン　ダイ40シグン
書名	上塩冶横穴墓群 第40支群
副書名	県道出雲三刀屋線上塩冶工区道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	1
シリーズ名	出雲市の文化財報告
シリーズ番号	第32号
編著者名	須賀照隆(編)　田村朋美　吉田生物研究所
編集機関	出雲市市民文化部文化財課
所在地	〒699-0011　島根県出雲市大津町2760番地　TEL0853-21-6893
発行年月日	平成28（2016)年9月

フリガナ		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
カミエンヤヨコアナボグン 上塩冶横穴墓群	シマネケンイズモシ 島根県出雲市 カミエンヤチョウ 上塩冶町2958-1外	32403	W138 (島根県遺跡番号)	35° 20′ 59″	132° 45′ 55″	20120801 ～ 20140530	1,650㎡	道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上塩冶横穴墓群 第40支群	横穴墓	古墳時代後期	横穴墓36基 近世墓, ピット群 性格不明遺構	須恵器 土師器 玉類 金属製品 円筒埴輪	刳抜式小型家形石棺 金銅製歩揺

要約

本書は24～26年度に実施した上塩冶横穴墓群の調査成果を収録している。上塩冶横穴墓群は総数230穴を超える横穴墓から成る県内最大の横穴墓群である。

今回の調査では, 上塩冶横穴墓群において新たに発見された第40支群を調査の対象とし, 上塩冶横穴墓群内の支群において過去最多数となる36基の横穴墓を確認した。各横穴墓からは, 刳抜式家形石棺をはじめとする多様な埋葬施設, 武具・馬具・装身具・土器等, 数多くの副葬品も発見された。

また, 副葬品の時期から, 第40支群が上塩冶横穴墓群の中でも最古段階(6世紀後半)から築造開始された支群であることが確認され, 遺跡の初現期の様相を知る上で貴重な資料を得ることができた。

表　紙：レザック66　四六判 215kg
見返し：上質紙　菊判 76.5kg
本　文：マットコート　菊判 48.5kg
図　版：アート紙　菊判 76.5kg

出雲市の文化財報告32
県道出雲三刀屋線上塩冶工区道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書１

上塩冶横穴墓群　第40支群

平成28年（2016）９月

編　　集：出雲市市民文化部文化財課
〒693-0011　島根県出雲市大津町2760
TEL（0853）21-6893

発　　行：島根県出雲県土整備事務所
出 雲 市 教 育 委 員 会

印刷・製本：有限会社　伊藤印刷